

過疎基幹農道整備事業（立山地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

奥ノ仁田遺跡
奥嵐遺跡

1995年3月

鹿児島県西之表市教育委員会



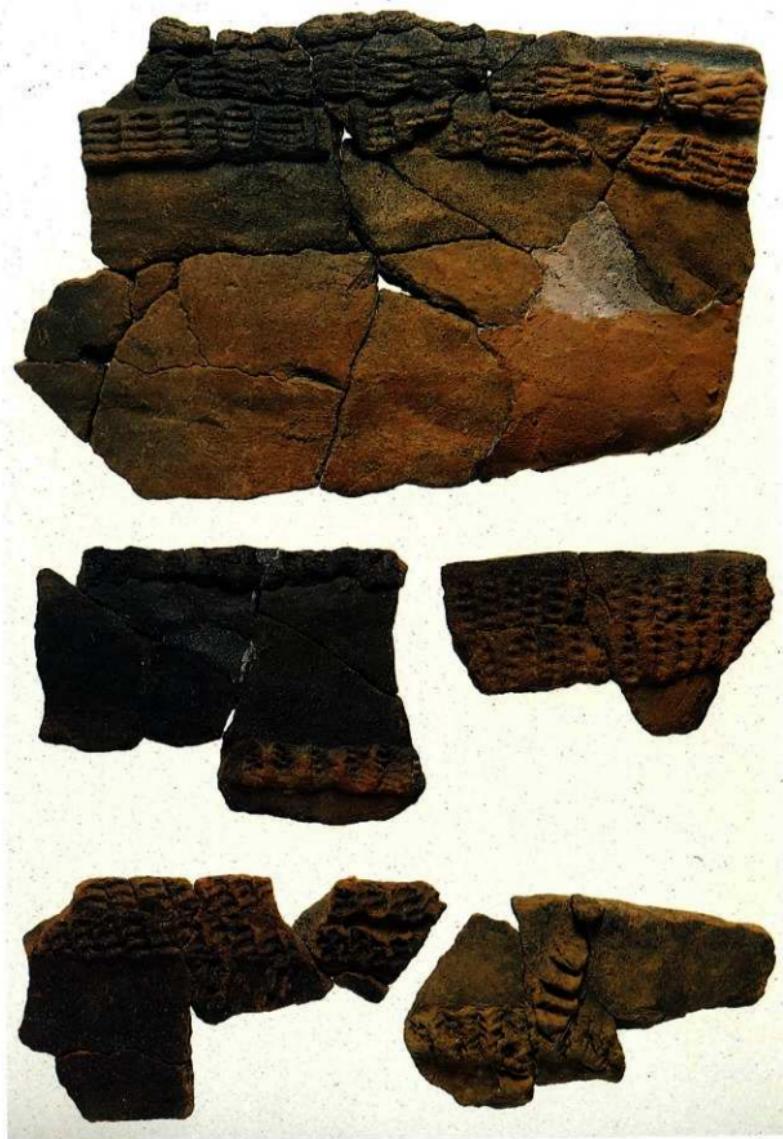
奥ノ仁田遺跡の土層



15号集石



草創期の土器



草創期の土器（1類）



草創期の石器（石斧・石鎌・スクレーバー）

序 文

種子島は、四面海に囲まれ、低平な台地と数多くの小さな川があり、また照葉樹林に恵まれ、四季を通して花々が咲き乱れる温暖な環境にあることから、各所から古代の遺跡が数多く発見されています。

この奥ノ仁田遺跡は鹿児島県農政部農地建設課が平成3年過疎基幹農道整備事業を計画したことにより、西之表市教育委員会が調査主体となり、鹿児島県教育庁文化課及び同県立埋蔵文化財センターの協力を得て、発掘調査を実施したものです。

本報告書に掲載しているように、20数基の集石遺構とほぼ完全な隆帶文土器や狩猟具の石鏃等が発見され、種子島に早くから高度な狩猟文化が存在していたことが明らかになり、多くの考古学関係者から注目を浴びる遺跡となりました。

この遺跡に立つと、眼下に太平洋が望まれ、後背地には豊かな照葉樹林帯が広がり、古代から狩猟生活に好環境であったことが理解できます。

本報告書が学術的文献として活用されることはもとより、市民の文化財保護意識高揚の一助となることを念ずる次第であります。

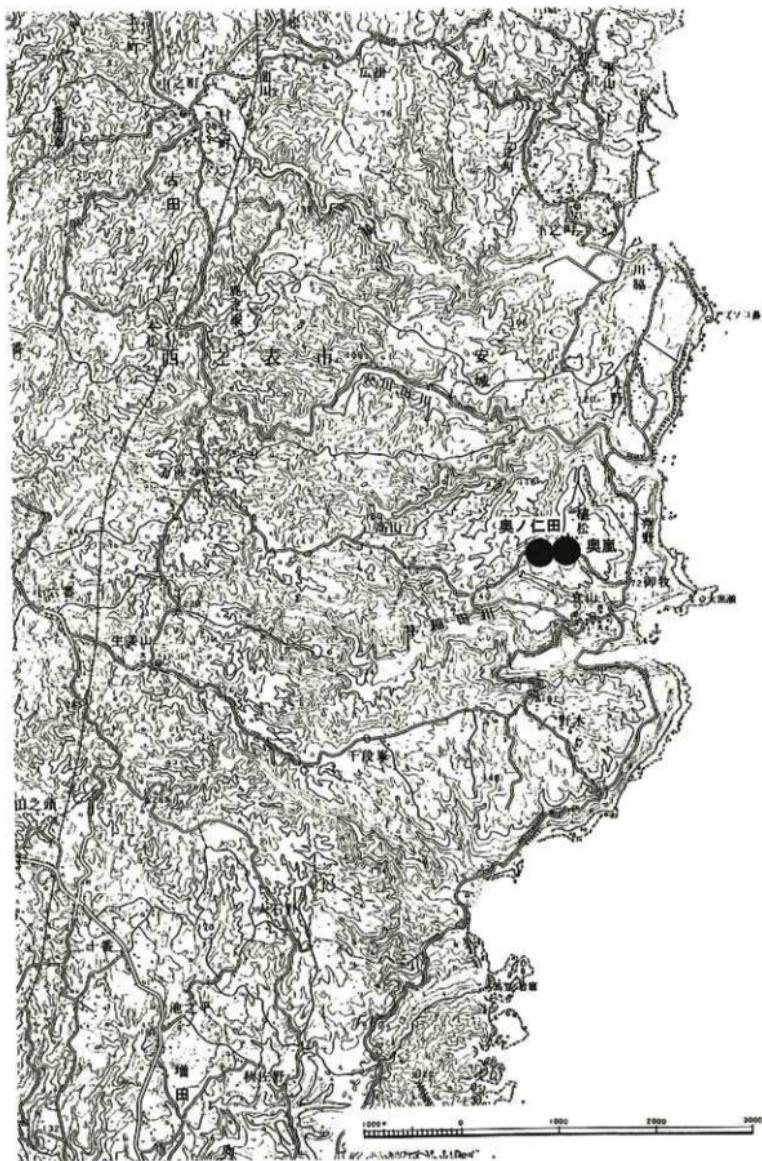
最後に、本報告書を刊行するにあたり、発掘調査に際して全面的にご協力いただいた鹿児島県教育庁文化課及び埋蔵文化財センターはじめ、立山校区及び中割校区の関係者、さらに貴重なご助言等をいただいた諸先生方に対して、ここの厚くお礼を申し上げます。

平成7年3月31日

鹿児島県西之表市教育委員会 教育長 鎌田一正

報告書抄録

| ふりがな 書名 | おくのにたいせき・おくあらしいせき 奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡 | | | | | | | |
|---------------|--|-----------------|-------------------------|--|---------------------------|------------------------|----------------|--|
| 副書名 | 過疎基幹農道整備事業（立山地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 卷次 | 1 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 7 | | | | | | | |
| 編著者名 | 児玉健一郎・中村和美 | | | | | | | |
| 編集機関 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | (〒899-556 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地 TEL.0995-65-8787) | | | | | | | |
| 発行年月日 | 1995年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所取遺跡名 | ふりがな 所在地 | コ一ド 市町村 名 | 北緯 度分秒 | 東経 度分秒 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査起因 | |
| おくのにた 奥ノ仁田 | かこしまけん 鹿児島県 | 7 9 | 30度 36分 54秒 | 131度 2分 30秒 | 1992.11.24～ 1992.12.04 | 1,000 | 過疎基幹農 道整備事業 | |
| おくあら 奥嵐 | にしおおじし 西之表市 | 4621 36 | 30度 36分 54秒 | 131度 2分 40秒 | 1993.09.20～ 1993.11.12 | 600 | に伴う事前 調査 | |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺跡 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 奥ノ仁田 | 散布地 | 縄文早期 | 集石4基 | 貝殻条痕土器 平格式土器・石 鉄・石匙・磨石 | | | | |
| | | 縄文草創期 | 集石19基 配石遺構2基 土坑1基 | 隆蒂文土器・石 鉄・スクレーパ ー・石斧・磨石 石皿・剝片 | | | | |
| | | 後晩期 | | | | | | |
| 奥嵐 | 散布地 | 縄文早期 ・後晩期 | | 若浜式土器・市来式土器 石頭・磨石・石斧 | | | | |



付図 奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡の位置

例　　言

- 1 本報告書は平成4・5年度に西之表市教育委員会が鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）の受託事業として実施した「過疎基幹農道整備事業（立山地区）」に伴う「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査の組織は、第Ⅰ章 調査の経過の中に記した。
- 3 本報告書に用いたレベル数値は、鹿児島県農政部が提示した事業実施計画図面の数値に基づく。
- 4 遺構・遺物の実測図、製図、写真撮影は児玉と中村がおこなった。
- 5 遺物番号は遺跡ごとに通し番号を付し、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
- 6 本報告書の執筆分担は下記のとおりで、編集は児玉がおこなった。

| | |
|---------------|---------------|
| 第Ⅰ章 調査の経過 | 児玉 |
| 第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境 | 児玉 |
| 第Ⅲ章 奥ノ仁田遺跡の調査 | |
| 第1節～第4節 | 児玉 |
| 第5節 1 遺構 | 中村 |
| 2 出土遺物 | 中村（土器）・児玉（石器） |
| 第Ⅳ章 奥嵐遺跡の調査 | 中村 |
| 第Ⅴ章 調査のまとめ | 児玉・中村 |

7 本報告書の題字は森田青径氏の揮毫による。

本文目次

| | |
|------------------|-----|
| 第Ⅰ章 調査の経過 | 1 |
| 第1節 調査に至るまでの経過 | 1 |
| 第2節 調査の組織 | 1 |
| 第3節 確認調査 | 2 |
| 第4節 調査の経過 | 2 |
| 第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境 | 4 |
| 第Ⅲ章 奥ノ仁田遺跡の調査 | 8 |
| 第1節 遺跡の概要 | 8 |
| 第2節 調査の概要 | 9 |
| 第3節 遺跡の層位 | 10 |
| 第4節 縄文時代草創期の調査 | 12 |
| 1 遺構 | 12 |
| (1) 集石 | 12 |
| (2) 配石遺構 | 23 |
| (3) 土坑 | 23 |
| 2 出土遺物 | 27 |
| (1) 土器 | 27 |
| (2) 石器 | 70 |
| 第5節 縄文時代早期の調査 | 109 |
| 1 遺構 | 109 |
| (1) 集石 | 109 |
| 2 出土遺物 | 110 |
| (1) 土器 | 110 |
| (2) III層の遺物・表採資料 | 114 |
| (3) 石器 | 120 |
| 第Ⅳ章 奥嵐遺跡の調査 | 126 |
| 第1節 遺跡の概要 | 126 |
| 第2節 調査の概要 | 126 |
| 第3節 遺跡の層位 | 128 |
| 第4節 出土遺物 | 128 |
| 第Ⅴ章 調査のまとめ | 138 |
| 第1節 奥ノ仁田遺跡 | 138 |
| 第2節 奥嵐遺跡 | 159 |

挿図目次

付図 奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡の位置

| | | | |
|----------------------------------|------|------------------------------|-------|
| 第1図 奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡と周辺遺跡 | … 7 | 第35図 8種・9種・無文の腹部・底部・浅鉢形土器分布図 | … 59 |
| 第2図 奥ノ仁田遺跡グリッド設定図 | … 8 | 第36図 草創期の土器 9 a類・9 b類 | … 63 |
| 第3図 奥ノ仁田遺跡土層断面図 | … 11 | 第37図 草創期の土器 無文の胴部(1) | … 65 |
| 第4図 1号集石 | … 12 | 第38図 草創期の土器 無文の胴部(2) | … 66 |
| 第5図 草創期遺構位置図 | … 13 | 第39図 草創期の土器 底部 | … 67 |
| 第6図 2号集石・3号集石 | … 15 | 第40図 草創期の土器 浅鉢形土器 | … 69 |
| 第7図 4号集石・5号集石 | … 16 | 第41図 草創期の石器分布図 | … 71 |
| 第8図 6号集石～8号集石 | … 17 | 第42図 草創期の石器 石錐・スクレーパー | … 73 |
| 第9図 9号集石 | … 18 | 第43図 草創期の石器 石斧(1) | … 74 |
| 第10図 10号集石～12号集石 | … 19 | 第44図 草創期の石器 石斧(2) | … 75 |
| 第11図 13号集石～15号集石 | … 20 | 第45図 草創期の石器 二次加工のある大型剝片 | … 77 |
| 第12図 16号集石・17号集石 | … 21 | 第46図 草創期の石器 小型剝片・石核 | … 79 |
| 第13図 18号集石・19号集石 | … 22 | 第47図 草創期の石器 剥片 | … 80 |
| 第14図 配石遺構 | … 24 | 第48図 草創期の石器 大型剝片 | … 81 |
| 第15図 土坑 | … 24 | 第49図 草創期の石器 剥片接合資料(1) | … 82 |
| 第16図 草創期遺物分布図 | … 25 | 第50図 草創期の石器 剥片接合資料(2) | … 83 |
| 第17図 1類土器分布図 | … 29 | 第51図 草創期の石器 二次加工のある剝片 | … 84 |
| 第18図 草創期の土器 1 a類 | … 32 | 第52図 草創期の石器 砂岩石核 | … 85 |
| 第19図 草創期の土器 1 b類 | … 33 | 第53図 草創期の石器 砕石 | … 86 |
| 第20図 草創期の土器 1 c類・1 d類(1) | … 34 | 第54図 草創期の石器 石皿(1) | … 88 |
| 第21図 草創期の土器 1 d類(2) | … 35 | 第55図 草創期の石器 石皿(2) | … 89 |
| 第22図 草創期の土器 1 d類(3) | … 36 | 第56図 草創期の石器 棒状敲石(1) | … 90 |
| 第23図 草創期の土器 1 d類(4) | … 37 | 第57図 草創期の石器 棒状敲石(2)・板状敲石 | … 91 |
| 第24図 草創期の土器 1 d類(5)・1 e類 | … 38 | 第58図 草創期の石器 磨石(1) | … 93 |
| 第25図 2類土器分布図 | … 43 | 第59図 草創期の石器 磨石(2) | … 94 |
| 第26図 草創期の土器 2 a類・2 b類(1) | … 46 | 第60図 草創期の石器 磨石(3) | … 95 |
| 第27図 草創期の土器 2 b類(2)・2 c類・2 d類(1) | … 47 | 第61図 草創期の石器 磨石(4) | … 96 |
| 第28図 草創期の土器 2 d類(2) | … 48 | 第62図 草創期の石器 磨石(5) | … 97 |
| 第29図 草創期の土器 2 d類(3) | … 49 | 第63図 草創期の石器 楕円形敲石(1) | … 98 |
| 第30図 草創期の土器 3 a類・3 b類・3 c類 | … 52 | 第64図 草創期の石器 楕円形敲石(2) | … 99 |
| 第31図 3類～7類土器分布図 | … 53 | 第65図 草創期の石器 楕円形敲石(3) | … 100 |
| 第32図 草創期の土器 4類(1) | … 56 | 第66図 草創期の石器 円形敲石 | … 101 |
| 第33図 草創期の土器 4類(2) | … 57 | 第67図 草創期の石器 大型磨石・凹石 | … 102 |
| 第34図 草創期の土器 5類・6類・7類・8類 | … 58 | 第68図 早期遺構位置図 | … 107 |
| | | 第69図 早期の集石 | … 109 |

| | | | |
|------------------------|------|-------------------------|------|
| 第70図 早期遺物分布図 | …111 | 第82図 奥嵐遺跡土層断面図 | …129 |
| 第71図 早期の土器(1) | …113 | 第83図 奥嵐遺跡遺物分布図 | …129 |
| 第72図 早期の土器(2) | …114 | 第84図 土器(1) | …131 |
| 第73図 早期の土器(3) | …115 | 第85図 土器(2) | …132 |
| 第74図 早期の土器(4) | …116 | 第86図 土器(3) | …133 |
| 第75図 早期の土器(5) | …117 | 第87図 石器 石鉄・剥片 | …134 |
| 第76図 早期の土器(6)・その他の土器 | …118 | 第88図 石器 磨石・敲石・石斧 | …136 |
| 第77図 早期の石器 石鉄・剥片 | …121 | 第89図 石器 磨石 | …137 |
| 第78図 早期の石器 石匙 | …122 | 第90図 星久川遺跡・宮田遺跡の縄文草創期土器 | …138 |
| 第79図 早期の石器 石皿 | …123 | 第91図 種子島の縄文草創期遺跡 | …139 |
| 第80図 早期の石器 磨石・敲石・石斧 | …124 | 第92図 1類土器の部位と隆帯の条数 | …146 |
| 第81図 奥嵐遺跡 トレンチ・グリッド設定図 | …127 | 第93図 2類~4類土器の部位と隆帯の条数 | …147 |

表 目 次

| | | | |
|-----------------|------|-----------------|------|
| 付 表 報告書抄録 | | | |
| 第1表 周辺遺跡地名表 | … 6 | 第15表 石器計測表(1) | … 76 |
| 第2表 草創期集石一覧表 | … 23 | 第16表 石器計測表(2) | … 81 |
| 第3表 1類土器観察表(1) | … 39 | 第17表 石器計測表(3) | … 85 |
| 第4表 1類土器観察表(2) | … 40 | 第18表 石器計測表(4) | … 87 |
| 第5表 1類土器観察表(3) | … 41 | 第19表 石器計測表(5) | … 92 |
| 第6表 2類土器観察表(1) | … 50 | 第20表 石器計測表(6) | …103 |
| 第7表 2類土器観察表(2) | … 51 | 第21表 石器計測表(7) | …104 |
| 第8表 3類土器観察表 | … 55 | 第22表 石器計測表(8) | …105 |
| 第9表 4類土器観察表 | … 56 | 第23表 石器計測表(9) | …106 |
| 第10表 5類~8類土器観察表 | … 61 | 第24表 ペットストーン計測表 | …106 |
| 第11表 9類土器観察表 | … 62 | 第25表 早期土器観察表 | …119 |
| 第12表 無文の胴部観察表 | … 64 | 第26表 石器計測表(10) | …125 |
| 第13表 底部観察表 | … 68 | 第27表 奥嵐遺跡土器観察表 | …135 |
| 第14表 浅鉢形土器観察表 | … 69 | 第28表 奥嵐遺跡石器計測表 | …137 |

図版目次

| | | |
|-----------------------------|------------------------------|------|
| 卷頭図版 1 奥ノ仁田遺跡の土層・15号集石 | 図版18 2類土器(4)・3類土器(1) | …180 |
| 卷頭図版 2 草創期の土器 | 図版19 3類土器(2)・4類土器 | …181 |
| 卷頭図版 3 草創期の土器(1類) | 図版20 5類土器～9類土器(1) | …182 |
| 卷頭図版 4 草創期の石器(石斧・石鎌・スクレーパー) | 図版21 9類土器(2)・無文の胴部 | …183 |
| 図版 1 調査風景・奥ノ仁田遺跡の土層 | 図版22 底部(1) | …184 |
| 図版 2 草創期2号集石・草創期4号集石 | 図版23 底部2)・浅鉢形土器・石鎌・スクレーパー | …185 |
| 図版 3 草創期5号集石・草創期7号集石 | 図版24 石皿・ベットストーン | …186 |
| 図版 4 草創期15号集石・草創期1号配石 | 図版25 石斧 | …187 |
| 図版 5 草創期2号配石・草創期遺物出土状況 | 図版26 刺片 | …188 |
| 図版 6 草創期遺物出土状況 | 図版27 土器施文部の拡大(1) | …189 |
| 図版 7 草創期遺物出土状況・土器106(1類) | 図版28 土器施文部の拡大(2) | …190 |
| 図版 8 土器204・205(4類) | 図版29 土器施文部の拡大(3) | …191 |
| 図版 9 1類土器(1) | 図版30 土器施文部の拡大(4) | …192 |
| 図版10 1類土器(2) | 図版31 土器施文部の拡大(5) | …193 |
| 図版11 1類土器(3) | 図版32 土器と石器の拡大 | …194 |
| 図版12 1類土器(4) | 図版33 早期遺物出土状況・早期の石器 | …195 |
| 図版13 1類土器(5) | 図版34 早期の土器(1) | …196 |
| 図版14 1類土器(6) | 図版35 早期の土器(2)・表採石斧 | …197 |
| 図版15 1類土器(7)・2類土器(1) | 図版36 奥風遺跡遺物出土状況・奥風遺跡の出土遺物(1) | …198 |
| 図版16 2類土器(2) | 図版37 奥風遺跡の出土遺物(2)・星久川遺跡の表採資料 | …199 |
| 図版17 2類土器(3) | | |
| | …179 | |

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部農地建設課（熊毛支庁土地改良課・以下県農政部）は、西之表市立山地区において過疎基幹農道備整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会文化課（以下県文化課）に照会した。

これを受け、県文化課と西之表市教育委員会社会教育課（以下市社会教育課）が平成3年4月に埋蔵文化財分布調査を実施したところ、事業区内に遺物散布地として奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡が所在していることが判明した。この分布調査結果をもとに、県農政部・県文化課・市社会教育課は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行なった結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下確認調査）を実施することとなった。

確認調査は調査主体者である西之表市教育委員会の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成4年11月24日～12月4日に実施した。奥ノ仁田遺跡では、約1,000m²にわたる縄文時代草創期・早期の遺物包含層が確認された。また、奥嵐遺跡では、約600m²にわたる縄文時代早期・後期・晩期の遺物包含層が確認された。奥嵐遺跡の一部の約240m²については、確認調査の期間内に試掘トレンチを拡張して緊急発掘調査を実施した。

その後、奥ノ仁田遺跡と奥嵐遺跡の残存部分の取り扱いについて県農政部・県文化課・市社会教育課が再度協議を実施し、事業遂行上現状保存が困難という判断がなされ、平成5年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。緊急発掘調査も調査主体者の西之表市教育委員会の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

第2節 調査の組織

| | | | | |
|-------------|----------------|-------------|-------|-------------|
| 発掘調査主体者 | 西之表市教育委員会 | | | |
| 発掘調査責任者 | 〃 | 教 育 長 | 鎌田一正 | |
| 発掘調査企画担当 | 西之表市教育委員会 | 種子島開発総合センター | 所 長 | 東 洋志(平成4年度) |
| | 〃 | 〃 | 〃 | 森 松雄(平成5年度) |
| | 〃 | 〃 | 〃 | 鯨島安豊(平成6年度) |
| | 〃 | 〃 | 次 長 | 鯨島安豊(平成5年度) |
| | 〃 | 〃 | 〃 | 下江信吉(平成6年度) |
| | 〃 | 〃 | 主 査 | 河野博康(平成4年度) |
| 確 認 調 査 担 当 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 文化財主事 | 池畠耕一 | |
| | 〃 | 文化財研究員 | 湯之前 尚 | |
| 緊急発掘調査担当 | 〃 | 文化財主事 | 児玉健一郎 | |
| | 〃 | 文化財研究員 | 中村和美 | |

調査指導者 鹿児島県考古学会 会長 河口貞徳
財団法人 かながわ考古学財団 調査部調査第一課長 白石浩之
目黒区大橋遺跡調査会 主任調査員 小林謙一

発掘作業員

中村始、武田成男、徳田香、武田テル子、小川タチエ、武田ハツミ、武田勝子、永吉ワカミ
武田トシエ、中村波子、宮野みどり、和田流子、武田美津子、青山エミ子、村井美代子
山口ヒサ子、青山ナヘ、木原美枝子、山 静、西中マサ子、木原フミ、村山フジエ、鮫島優
脇田シゲ子、徳田恵子、古市善哉、西中鈴代、武田ヨシ子、村松乙次郎、小倉美代子
鈴木ミヨ子、松島ツギ、武田国義

整理作業員

白井綾子、田畠みき代、前田秀子

第3節 確認調査

確認調査は平成4年11月24日から12月4日にかけて、9日間実施した。調査対象地区は種子島独特の小さな谷があり組んだ台地上に位置し、現況は農道と畑地であった。

奥嵐遺跡には現道の拡幅部分に1～6トレンチを設定した。調査の結果、1トレンチ・3トレンチ・6トレンチでは縄文時代早期・後期・晩期の遺物が出土し、遺物包含層の存在が認められたが、2トレンチ・4トレンチ・5トレンチの遺物包含層は耕作や旧道の工事により擾乱・削平されていることが判明した。1トレンチと3トレンチを設定した部分は現道の法面の崖上にあり、遺物包含層の残存部分が狭いことから、確認調査期間内にトレンチを拡張して緊急発掘調査を実施することとなった。6トレンチ周辺は平坦地で、遺物包含層が現道部分にわたり広く残存していると認められたので、この部分の取り扱いについては協議を実施することとなった。

奥ノ仁田遺跡には現道の拡幅部分に7～9トレンチを設定した。調査の結果、7トレンチからは縄文時代草創期の遺物や集石が発見され、8トレンチ・9トレンチでは遺物の出土はなかったものの、縄文時代草創期・早期の遺物包含層に相当する層が残存していることが判明した。7トレンチから8トレンチの間は両側が地下げた畑地で、現道のみが堤状に残っている状況であった。道路の通行上支障があることから現道部分にトレンチを設定できなかつたために、現道下の状況は不明であったが、両トレンチの調査結果から遺物包含層は残存しているものと判断した。また、調査中に7トレンチに隣接する部分に市の上水道タンクの設置工事計画があることが判明したので、県農政部と現地で協議し、県農政部の了解を得て、確認調査期間内にタンク建設予定部分の緊急発掘調査を実施した。

なお、確認調査時の遺物や遺構については、平成5年度に実施した緊急発掘調査の遺物や遺構とともに、第Ⅲ章・第Ⅳ章で述べることとした。

第4節 調査の経過

奥ノ仁田遺跡と奥嵐遺跡の残存部分の緊急発掘調査は平成5年9月20日から11月12日にかけて35日間実施した。以下、調査日誌より抄述する。

9月20日(月)～9月22日(火)

種子島開発総合センターにて熊毛支庁土地改良課・市耕地課・市社会教育課と調査に関する打ち合せを実施後、現地でグリッド杭を設置する。

C-11区～C-13区の表土からIII層（アカホヤ層）までを重機で除去。雨が続いたために作業具による包含層掘り下げは中止する。

9月28日(火)～10月1日(金)

C-6区～C-10区の表土除去。C-9区～C-13区のIV層とV層の掘り下げ。IV層から縄文時代早期の土器、石匙、石鎌などの遺物、V層から縄文時代草創期の土器などの遺物が出土する。C-13区の遺物平板実測取り上げ。

10月4日(月)～10月8日(金)

C-5区～C-6区の表土除去。C-9区～C-12区のIV層とV層の掘り下げ。1号集石・2号集石の実測図作成。

10月12日(火)～10月15日(金)

C-9区～C-12区のV層掘り下げ。C-9区～C-12区のIV層・V層の遺物平板実測取り上げ。3号集石の実測図作成。

10月18日(月)～10月22日(金)

B-3区・C-4区～C-6区表土除去。C-7区～C-12区のIV層とV層の掘り下げ。C-9区～C-12区のV層遺物平板実測取り上げ。4号集石～6号集石・8号集石の実測図作成。

10月25日(月)～10月29日(金)

B-3区・B-4区・C-3区・C-4区・C-5区～C-8区のIV層とV層の掘り下げ。B-5区・C-5区～C-8区のV層遺物平板実測取り上げ。7号集石・9号集石～11号集石～18号集石の実測図作成。

11月1日(月)～11月5日(金)

A-1区・A-2区・B-1区・B-2区の表土除去。A-1区・A-2区・B-1区・B-2区のIV層・V層掘り下げ、遺物平板実測取り上げ。B-3区・B-4区・C-3区・C-4区・C-5区～C-8区のV層遺物平板実測取り上げ。18号集石～22号集石の実測図作成。1号配石・2号配石の実測図作成。2区・4区・6区・8区・10区・12区の西側土層断面図作成。土層断面観察用のベルト部分掘り下げ。

11月8日(月)～11月12日(金)

奥嵐遺跡の表土除去。確認調査では縄文後期の遺物が数点出土していたが、包含層が確認されず、III層（アカホヤ層）までを重機で除去した。縄文時代早期の遺物の出土量は少なく、調査対象区の西側では、III層の下は礫層となっていた。縄文時代草創期の遺物包含層は認められなかった。IV層の遺物平板実測取り上げ。奥ノ仁田遺跡のベルト部分の遺物平板実測取り上げ。1号土坑実測図作成。調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡は大隅半島の最南端である佐多岬の東南海上約54kmに位置する種子島の西之表市に所在する。種子島は南北52km、東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高でも282.3mしかない低平な地形の島で、北から西之表市、中種子町、南種子町の1市2町からなる。地形は丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地からなり、西方に位置する屋久島の山岳地形とは対照的である。両遺跡は西之表市の東南部にあって、中種子町との境に近く、太平洋に臨む標高約133mの台地上に立地する。台地の北側には大川田川、南側には早稻田川が東流し、太平洋に注いでいる。

種子島を起点とする南西諸島は考古学的調査から、薩南諸島（種子島・屋久島・トカラ列島）を南島北部文化圏、奄美大島・琉球諸島を南島中部圏、宮古島・八重山諸島を南島南部圏の三域に分けることができる。北部圏はいわゆる南九州文化圏、中部圏は奄美的宇宿上層・下層式と沖縄の伊波・荻堂出土の土器を標準とする南島式土器文化を有する文化圏、南部圏は外耳式土器で代表される八重山式土器を有する文化圏である。

以下、薩南諸島の中でも種子島・屋久島を主とする大隅諸島の様相について時代ごとに概説してみたい。

旧石器時代

この時期の文化については明確ではないが、平成4年度に調査された南種子町の横峯C遺跡ではA T層の下位から2基の砾群が発見され、¹⁴C年代測定の結果、3万年以前の年代が与えられた。遺構に伴うと思われる石器類は出土していないが、この地が旧石器時代研究のフィールドとなり得ることが認識された貴重な発見である。

縄文時代

これまでの調査により、早期の段階から南九州文化圏に属することは認識されていた。奥ノ仁田遺跡の調査により、更に古い草創期段階から同一文化圏に属すること明確となり、これまで位置付けが不明であった数点の資料が草創期の遺物であると認識された。昭和63年に調査された中種子町宮田遺跡では、アカホヤ下位層から数点の土器が出土し、報告書では型式不明とされていた。そのうちの1点には、指頭によると思われる圧痕が施された隆帯が貼り付けられている。この土器は器形や文様の特徴や層位の関係からも隆帯文土器であると判断される。西之表市（二本松）屋久川遺跡は早期の塞ノ神式土器等が採集された遺跡である。蚊島安豊氏が同遺跡から採集した資料中に、隆帯部分に二枚貝の腹縁を用いて施文する型式不明の土器が含まれていた。この土器は本遺跡の主体を成す隆帯文土器と同一のもので、屋久川遺跡にも草創期文化が存在したことが明らかとなった。奥ノ仁田遺跡は島の東海岸、屋久川遺跡は中央部、宮田遺跡は西海岸に位置し、遺跡の偏在性は特に認められないことから、種子島全島にわたり未発見の草創期の遺跡が存在する可能性が大きいものと考えられる。

早期の遺跡は表掲資料や発掘例も多く報告されている。遺跡は種子島に集中しており、屋久島では早期以前の遺物は報告されていないが、屋久島の西海上に位置する口永良部島の本村宮迫遺跡では塞ノ神式の出土が報告されていることから、屋久島でも条件が良いところでは、早期の遺跡が発

見される可能性が残されている。種子島では、早期前葉とされる前平式の出土例はなく、吉田式段階以降のものがほとんどである。吉田式の出土した遺跡としては4遺跡が報告されている。早期中葉に属するとされる土器型式としては下剥峰式（タイプ）、桑ノ丸式（桑ノ丸III類）、押形文土器、手向山式が出土している。種子島で下剥峰式が出土した遺跡は、下剥峰遺跡の例だけであるが、南九州では宮崎県南部や大隅半島で出土例が多く報告されている。このことから、大隅海峡を経由した交流の存在が示唆される。押形文土器・手向山式が報告されたのは、種子島最北端の西之表市久保田遺跡だけである。早期後葉に位置付けられる塞ノ神土器の分布は種子島のほぼ全域にわたり13遺跡が報告されている。

また、平成3年に発掘調査された南種子町横峯C遺跡ではアカホヤ火山灰の下位の層から苦浜式の良好な資料が出土した。苦浜式は從来、轟式系とされ、前期に位置付けられてきたが、早期に属することが明らかとなった。南九州本土のこれまでの発掘資料中にも苦浜式と思われる土器が見られる事から、南九州全域に普遍的に存在していた土器型式であろうとされている。苦浜式は種子島では横峯C遺跡のほかに、7遺跡で報告されている。

前期の土器型式としては、轟式、曾畠式の出土が報告されている。轟式は西之表市下剥峰遺跡、東方ノ平遺跡、中種子町大園遺跡、千草原遺跡、南種子町赤石牟田遺跡、上屋久町一湊松山遺跡で報告されている。曾畠式は西之表市寺ノ門遺跡、小浜貝塚・本城遺跡、柳原遺跡、城ノ浜遺跡、東方ノ平遺跡、指辺遺跡、中種子町二十番遺跡、千草原遺跡、田島遺跡、中田遺跡、南種子町赤石牟田遺跡、上屋久町一湊松山遺跡で報告されている。

中期の様相はほとんど不明である。西之表市大田遺跡で指宿式・市来式などの後期の土器に混じり凹線文土器（阿高式？）が報告されているだけである。

後期の土器型式としては、指宿式、一淡式、市来式、納曾式、御領式の出土が報告されている。指宿式は西之表市大田遺跡、中種子町向町遺跡、原尾遺跡で報告されている。一淡式は西之表市浅川牧遺跡・下之町遺跡、南種子町野大野A遺跡で出土している。平成2年に調査された野大野A遺跡は一淡式の単純遺跡で、良好な資料が出土し注目された。市来式は西之表市寺ノ門遺跡・大田遺跡・浅川牧遺跡、中種子町阿高磯遺跡・向町遺跡・中田遺跡、原尾遺跡で報告されている。

弥生時代

南種子町広田遺跡、中種子町鳥ノ峯遺跡・輪之尾遺跡・阿獄洞穴、西之表市上能野貝塚などが著名な遺跡としてあげられる。

広田遺跡は広田川河口近くの砂丘に立地する中期から後期にかけての埋葬遺跡である。遺体の副葬品として、貝札を始めとする多くの貝製品が出土した。貝札に描かれた文様は古代中国の青銅器に見られるものに酷似していることから、大陸との交流があったことを示すものとされている。

鳥ノ峯遺跡は中期から古墳時代前期にかけての埋葬遺跡である。砂丘に穴を掘り、手足を折り曲げた姿勢で遺体を埋葬し、その上を數十個の自然石で覆った28基の覆石墓が検出された。

輪之尾遺跡は後期の遺跡で、甕形土器を主体に鉢・皿・磨製石斧・柱状石斧・磨製石鎌などが出土した。

阿獄洞穴は阿獄川の河口近くにある洞穴遺跡で、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけて生活が営まれていたとされている。

上能野貝塚では彫形土器・磨製石斧・敲石・貝製腕輪・貝札・貝製垂飾・鉄製釣針などが出土し、後期の貝塚とされている。また、貝塚を中心にこれを取り囲むように埋葬が行なわれていたことも明らかとなっている。同じ埋葬遺跡でも広田遺跡や鳥之峯遺跡とは異なる埋葬形態であることが注目される。出土した彫形土器は胴部以上にスレ線で文様を施すもので、上能野式と呼ばれている。

周辺遺跡

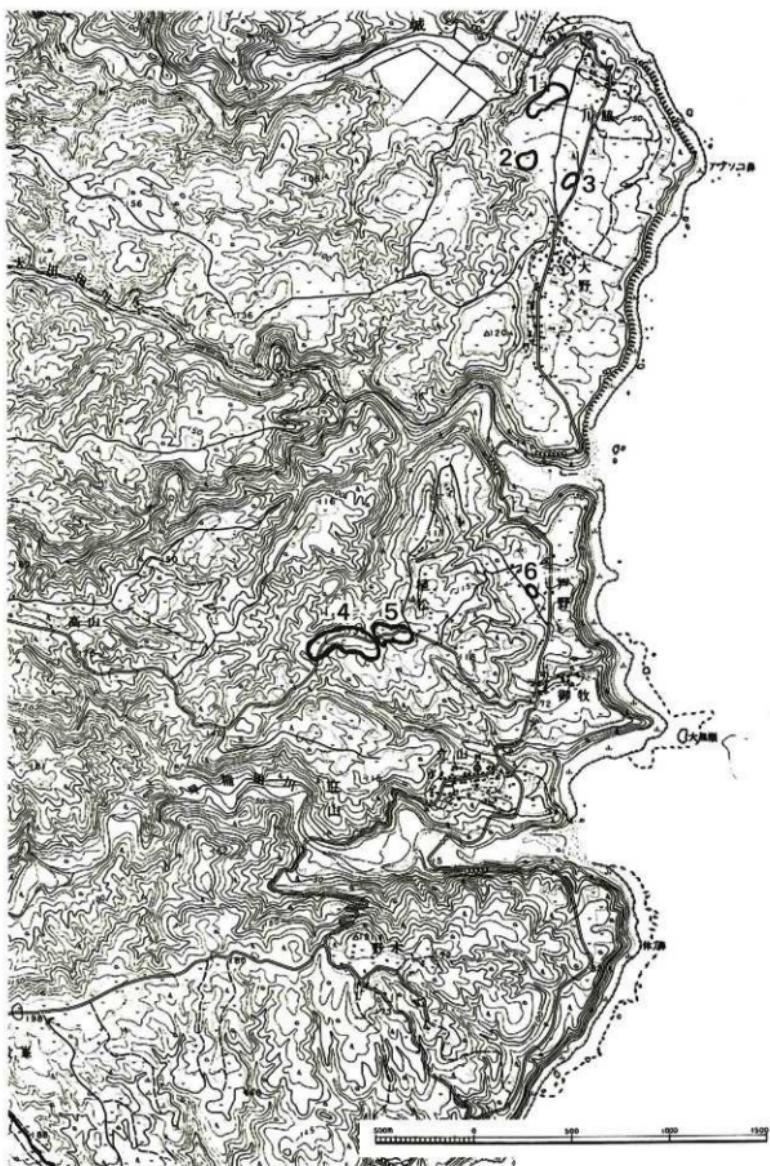
奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡の立地する台地一帯は、小さな谷が入り組んだ山間地が多いため、周辺遺跡としては、日守A遺跡・日守B遺跡・日守C遺跡・九郎三エ門遺跡などわずかな数である。日守遺跡は太平洋に臨む台地上に立地し、縄文時代早期の土器片が採集されている。九郎三エ門遺跡でも土器片が採集されているものの、その時期は不明である。

第1表 周辺遺跡地名表

| 番 | 遺跡名 | 所在地 | 地形 | 時代 | 遺物 | 文献等 |
|---|-------|-------------|-----|------------|-----------------|-----------|
| 1 | 日守 A | 西之表市安城日守 | 台地 | 縄文時代早期 | 土器片 | 平成3年度分布調査 |
| 2 | 日守 B | 西之表市安城日守 | 台地 | 縄文時代早期 | 土器片 | |
| 3 | 日守 C | 西之表市安城日守 | 台地 | 縄文時代早期 | 土器片 | |
| 4 | 奥ノ仁田 | 西之表市安城奥ノ仁田 | 台地 | 縄文時代草創期・早期 | 陰彫文・石斧・石頭・貝製文土器 | 本報告書 |
| 5 | 奥嵐 | 西之表市安城奥嵐 | 台地 | 縄文時代中期・後期 | 苦浜式・市来式 | |
| 6 | 九郎三エ門 | 西之表市安城九郎三エ門 | 微高地 | 不明 | 土器片 | 平成3年度分布調査 |

〈参考文献〉

- 西之表市教育委員会 「赤木遺跡・下剣峰遺跡・大四郎遺跡・内和遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』1978
- 西之表市教育委員会 「俣江遺跡・高峯遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』1985
- 中種子町教育委員会 「蘆取遺跡・平松B遺跡・宮田遺跡・小牧野C遺跡」『中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』1989
- 南種子町教育委員会 「野大野A遺跡・上瀬田A遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』1991
- 南種子町教育委員会 「横峯遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』1993
- 上屋久町教育委員会 「一渓松山遺跡」『上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書』1981
- 中種子町 「中種子町郷土誌」1971
- 旭慶男君著作集刊行会 「種子島における甌生式土器」『旭慶男君著作集』1991



第1図 奥ノ仁田遺跡・奥崖遺跡と周辺の遺跡

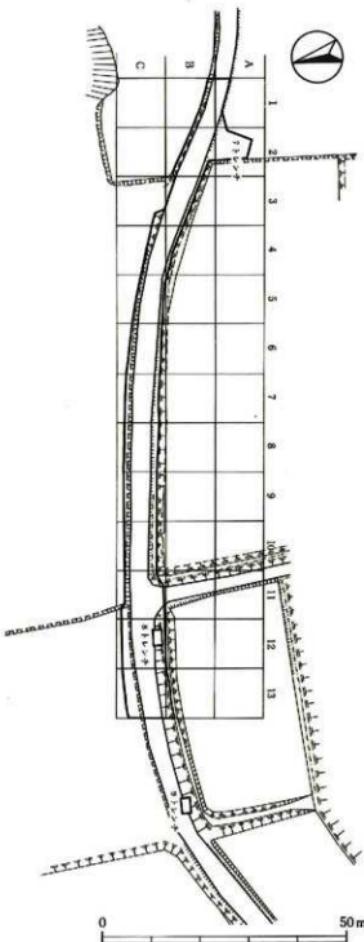
第Ⅲ章 奥ノ仁田遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

奥ノ仁田遺跡は太平洋に向かって張り出した標高約133mの台地上に立地し、遺跡の北側と南側には小さな谷が入り込んでいる。平坦な台地の幅は狭く、遺跡の南側に比較し北側はいくぶん急な傾斜で谷に下降していく。台地の平坦な部分や緩斜面は畑地として利用されている。今回の調査対象は台地上でも最も平坦な部分を、東西方向に走っている拡幅部分を含めた農道部分である。

確認調査は、7トレンチ(A-2区)・8トレンチ(C-12区)・9トレンチの3ヶ所を設定して、実施された。7トレンチは上水道のタンクを設置する部分にあたるため、拡張して調査がなされた。7トレンチからは集石1基が検出され、縄文時代草創期の土器片が出土した。8トレンチでは縄文時代草創期・早期に相当する土層の存在は認められたが、これらの層からの遺物の出土はなかった。ただし、集石を構成すると思われる焼けた礫が数点出土したため、トレンチの外側に集石や遺物の存在が予想された。9トレンチは、縄文時代草創期・早期に相当する土層は認められたが、遺物・遺構とも発見されなかった。確認調査の結果から遺物包含層は現存する農道より下位に位置し、農道部分には遺物包含層が残存することが予測された。

これらの遺物包含層の広がりはかつては周囲の畑地部分にまでおよんでいたと思われるが、地元の人の話から周囲の畑地では、遺物包含層のほとんどが削平されていることが判明した。農道の南側の現況は畑地であり、農道は畑地より1.8~2.4m高い土手状となっていた。農道の北側の畑地も農道より低く、その比高差は0.5~1.3mであった。地元の人によれば、かつては両側の畑地とも現存する農道部分とはほぼ同じ高さであったが、畑地を地下げした結果、現存する農道部分だけが土手状になって残ったということであった。南側の畑地



第2図 奥ノ仁田遺跡グリッド設定図

は2回にわたり地下げされ、地下げ工事中には集石を構成していたと思われる焼けた碟・土器片・石斧などが出土したが、これらの遺物は散逸してしまったらしい。農道の北側の畠地は南側の畠地よりいくぶん高いレベルにあるものの、先述したとおり地下げされているうえに大きな緑化樹が植栽されており、遺物包含層が残存する可能性はほとんどないという状況であった。確認調査の結果からも、遺物包含層が残存するのは農道が走っているために地下げされなかった現道部分のみであるという予測がなされ、緊急発掘調査の結果もそれを裏付けることとなった。

第2節 調査の概要

工事用の道路センター杭を基準に10m×10mのグリッドを設定し、南北方向にA区～C区、東西方向に1区～13区とした。土層観察用のベルトは道路を横断する方向に20mおきに設定した。現道の砂利を重機で水平に除去すると、車の轍部分あたる砂利が現道面よりかなり下位の層まで溝状に食い込んでいる状況であった。そのためにII層（黒色腐植土）は削平や攪乱を受けており、III層（アカホヤ）までを重機で除去することとした。

当初の調査対象面積は現道面で算出した約700m²であったが、表土を除去すると約1,000m²に広がった。そのため、県農政部・市社会教育課と協議し、調査期間を約1週間延長する合意がなされた。また、11区の南側には現道に取り付けられた私道があり、奥には2軒の民家があることからできるだけ民家への通行に支障のないように調査を実施することで、2軒の方々に了承を得た。

廃土搬出の工程上、調査区の一番奥の12・13区から調査を開始した。12区は確認調査の際に8トレンチを設定した部分にあたる。8トレンチからは焼けた碟以外に遺物が出土しなかったので、集石遺構と遺物の有無を再確認するために、12区と13区の境に沿って幅2mのトレンチを設定した。その結果、集石や土器片などの遺物が出土したため、当初設定した調査区全体を調査対象とすることとなった。

遺物包含層はIV層とV層の2枚が確認された。

IV層からは主に縄文時代早期の遺構や遺物が出土した。IV層の堆積は薄い部分もあり、場所によってはV層と分層ができない部分があった。また、IV層の堆積はみられるものの、同層から早期の遺物が出土せず、V層の上位から中位にかけて草創期遺物に混在して、早期遺物が出土する部分もあった。早期の遺物としては、土器、石鎌、石匙、磨石などが出土したが、遺物量は少なかった。遺構としては集石4基が検出された。

V層からは主に縄文時代草創期の遺構や遺物が出土した。V層は調査区全域にわたり層厚25～30cmの良好な堆積状況であり、遺構・遺物ともに多量に出土した。遺物としては土器、石鎌、石斧、磨石、石皿が出土した。遺構としては集石、配石遺構、土坑が検出された。

先述したようにIV層と分層が困難な部分はV層として取り扱い、V層の中位から上は草創期遺物と早期遺物が混在する状況も見られた。これらの混在した遺物は水洗後、草創期遺物と早期遺物を弁別した。弁別には慎重を期し、草創期遺物として疑わしいものは早期遺物としてこれを取り扱った。ただし、混在のみられないV層中位以下の遺物はすべて草創期遺物として取り扱った。これらの遺物の出土層位については、土器観察表中に明示した。集石遺構の時期決定は集石基盤面のレベルと周辺の遺物レベルを比較し、現場で判断した。

遺物は草創期・早期の遺物共に調査区全体にわたり出土する状況であった。ただし、調査区の東端と西端では遺物の分布は比較的少なく、8区から10区にかけた部分に集中する傾向が見られた。

草創期の集石遺構は調査区全体にわたり検出されたが、早期の集石遺構は9区から12区に集中して検出された。

遺物や遺構の分布状況の詳細については個別に後述する。

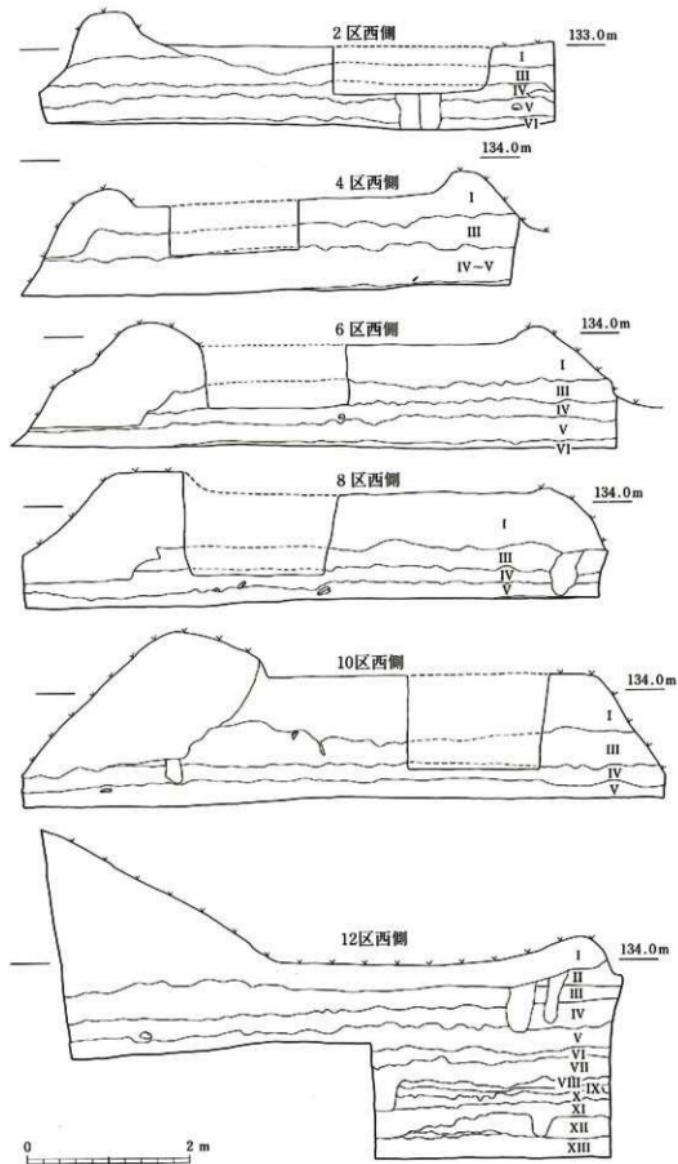
第3節 遺跡の層位

場所により多少の相違はあるが、基本的には次のとおりである。

| | |
|----------------|--|
| I層 表土 | 腐植質土の堆積層。道路部分ではこのうえに砂利が載っている。 |
| II層 黒色腐植土 | 車の轍による擾乱やグレーダーによる削平を受けている。 |
| III層 黄橙色火山灰層 | アカホヤ火山灰層。上部が二次堆積でやや軟質。下部は降下軽石の一次堆積で硬質。無遺物層である。約6,300年前の鬼界カルデラの噴出物である。 |
| IV層 乳灰色弱粘質土 | 縄文時代早期の遺物を包含する。 |
| V層 暗褐色土 | IV層との境界は不鮮明な部分もある。中位以下から縄文時代草創期の遺物が出土するが、中位以上では縄文時代早期遺物と草創期遺物が混在する部分がある。 |
| VI層 暗黄色ローム層 | 上部はやや軟質であるが、下部は硬質である。 |
| VII層 暗茶褐色粘質土 | 硬質である。 |
| VIII層 淡桃白色ローム層 | 無遺物層。 |
| IX層 淡桃白色ローム層 | 部分的にX層のオレンジ色軽石混入。 |
| X層 入戸火碎流 | オレンジ色の軽石層。10cm程度の堆積。約22,000年前の姶良カルデラからの火山噴出物。 |
| XI層 白肌色ローム層 | 弱粘質。 |
| XII層 肌色ローム層 | やや粗い粘質土 |
| XIII層 肌色ローム層 | 上位より粘質が強く、密である。 |

III層のアカホヤ火山灰は縄文時代早期と前期以後を区切る鍵層として重要な層である。本遺跡においても、アカホヤ火山灰は良好な堆積状況を示し、早期以前の遺物包含層を完全にバッ克していた。南九州本土において、早期以後と草創期以前を区切る鍵層である、サツマ火山灰層(11,000y.B.P.)は本遺跡の所在する種子島には堆積していない。

C-12区には下層確認のためのトレチを設定し、XIII層まで掘り下げたが、VI層以下からは遺物が出土しないことから、VI層を基盤層として扱った。



第3図 奥ノ仁田遺跡土層断面図

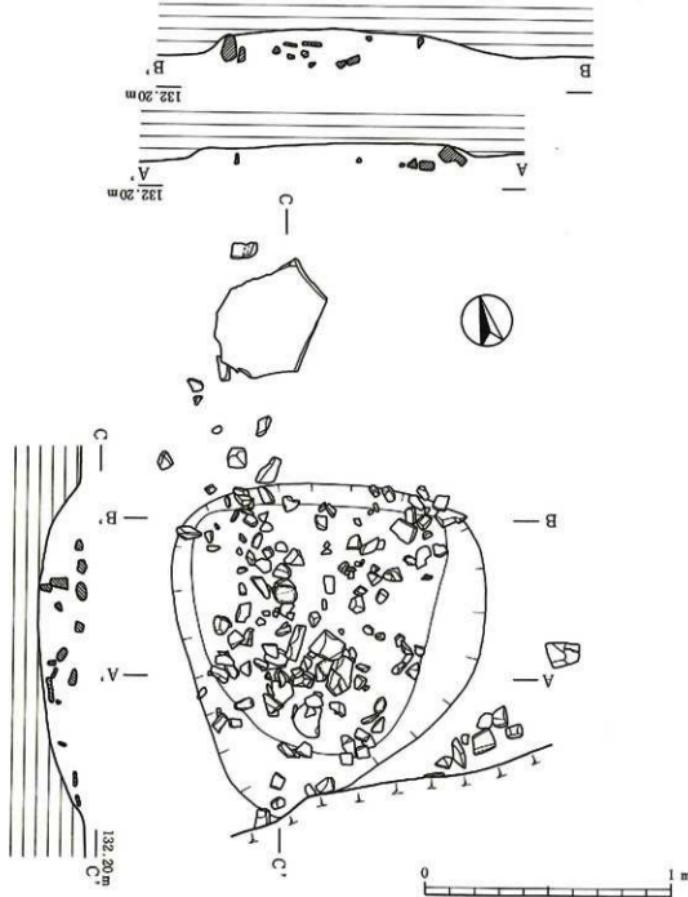
第4節 繩文時代草創期の調査

1 遺構

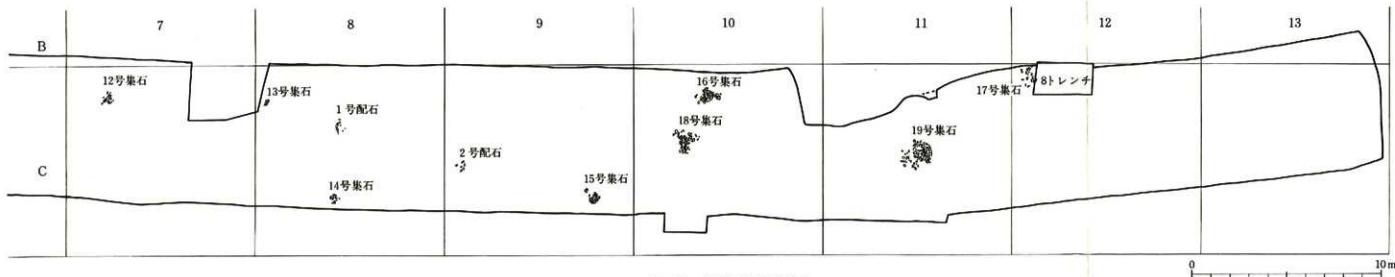
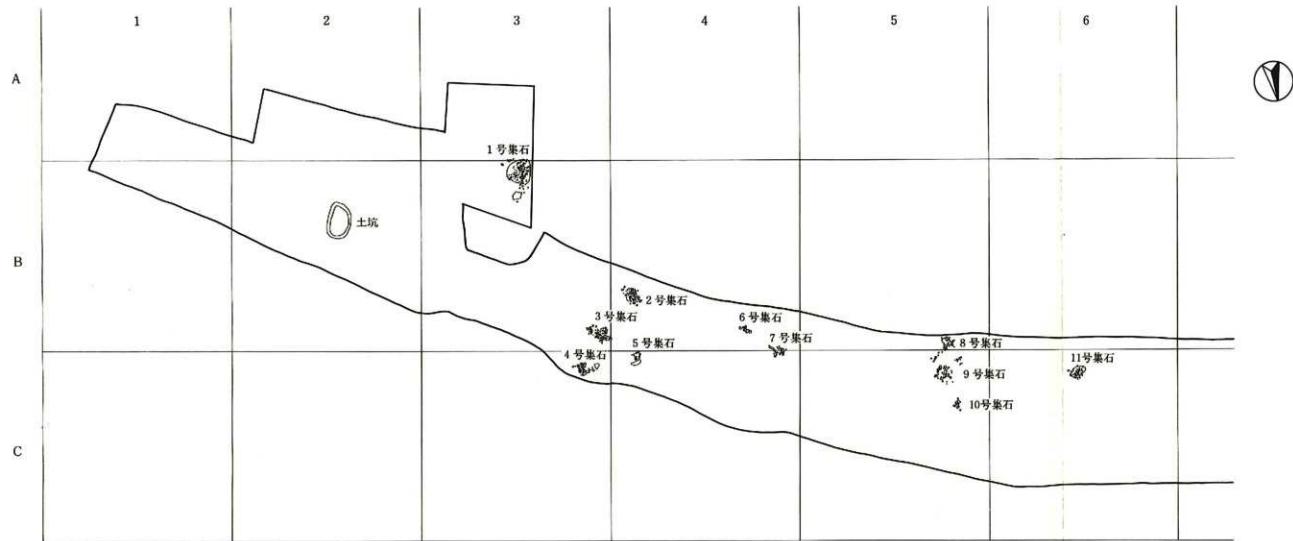
集石19基、配石遺構2基、土坑1基が検出された。集石は調査区の全域にわたり散在し、特に集中する部分はみられなかった。

(1) 集石

19基の集石のうち、下部に掘り込みを持つタイプ（1号、2号、6号、11号、16号、18号、19号）と掘り込みを持たないタイプに大別される。集石を構成する礫の石材は拳大の砂岩礫が中心であるが、数個の扁平な大型の砂岩礫が含まれるもの（4号、5号、7号）もある。



第4図 1号集石



第5図 草創期造構位置図

礫のほとんどが炎熱により赤変し、熱破碎を受けていた。破碎前の礫は角の取れた角礫に近い形状が復元される。

1号集石 (第4図)

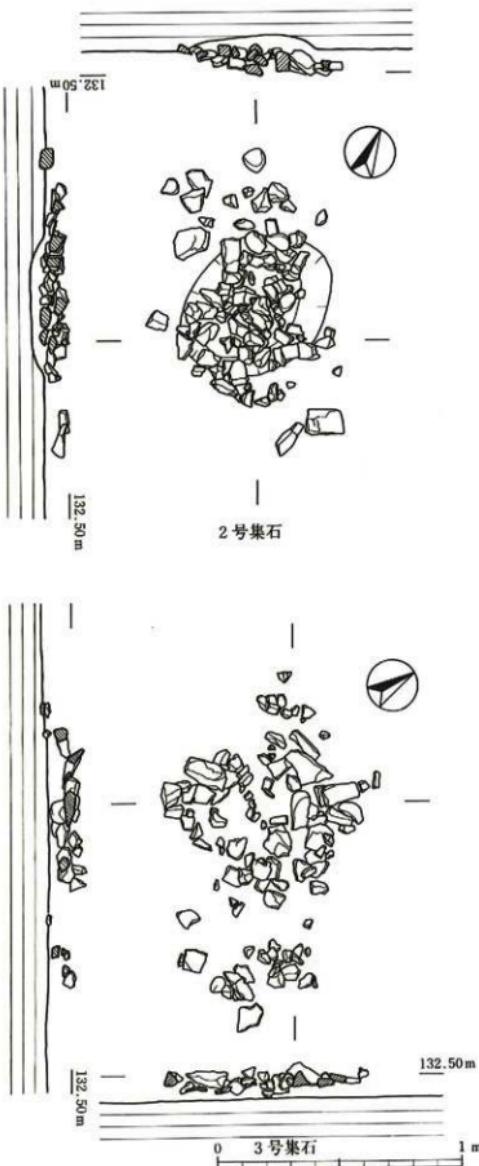
確認調査時の7トレンチで検出され、B-3区に相当する部分で検出された。240cm×173cmの範囲に礫が集中する。下部に掘り込みが認められ、140cm×114cmの方形に近い形状を呈している。掘り込みの深さは約21cmである。礫の石材は砂岩であり、礫のほとんどが炎熱により赤変している。礫は熱破碎を受けており、小片となっているものが多い。

2号集石 (第6図)

B-4区で検出された。125cm×81cmの範囲に礫が集中する。下部に69cm×53cmの楕円形の掘り込みが認められる。掘り込みの深さは約6cmである。掘り込み部分の埋土には炭化物粒子が認められる。礫は掘り込み部分に集中して検出された。礫の石材は砂岩である。これらの礫は炎熱により赤変している。熱破碎によりびび割れている礫が多く認められる。

3号集石 (第6図)

B-3区で検出された。146cm×114cmの楕円形を呈する。下部に掘り込みは認められなかった。礫の石材は砂岩である。20cmに近いや大型の礫を中心として構成される。礫のほとんどが炎熱により赤変し、熱破碎を受けているものが多く認められた。



第6図 2号集石・3号集石

4号集石 (第7図)

C-3区で検出された。140cm×82cmの楕円形を呈する。下部に掘り込みは認められなかった。礫の素材は砂岩である。15cmを超す大きな礫を中心に構成される。礫のほとんどが炎熱により赤変している。集められた礫は20個程度で、比較的少ない個数で構成される。これらの礫のほとんどが熱によりひび割れていた。集石の西端には大型の扁平な礫が検出された。この礫が集石と直接関係があるかどうか不明である。火を受けた形跡は認められないが、磨面が認められ、砥石として利用されたようである。実測図は第53図337に示した。

5号集石 (第7図)

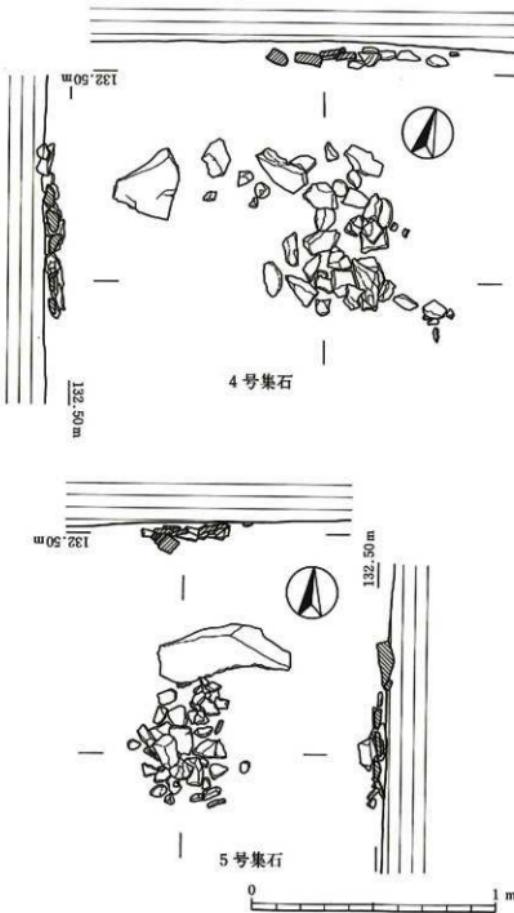
C-4区で検出された。

75cm×66cmの狭い範囲に礫が集中する。下部に掘り込みは認められなかった。礫の素材は砂岩である。礫のほとんどが、炎熱により赤変し、熱破碎を受けてひび割れている状況であった。礫の大きさの中心は拳大以下であるが、これらの礫の北端に長さ55cm×幅24cmの扁平な大型礫が隣接して検出された。この礫には火を受けた痕跡が見られないことから集石の機能には直接関係がないように思われる。また、この礫には、自然面と異なる磨面が観察され、砥石として使用された可能性がある。実測図は第53図335に示した。

6号集石 (第8図)

B-4区で検出された。

73cm×35cmの狭い範囲に礫が集中する。礫の素材は砂岩である。礫の並び方は直線的で、15個程度の少量の礫で構成される。扁平な礫と円形の礫が混在し、その



第7図 4号集石・5号集石

ほとんどが熱により赤褐色を呈し、熱破碎を受けていた。礫の素材は砂岩である。下部には55cm×53cmのほぼ円形の掘り込みが認められ、その深さは約8cmであった。掘り込み部分には礫は検出されなかった。掘り込みの埋土は暗褐色を呈し、炭化物粒子が認められた。

7号集石 (第8図)

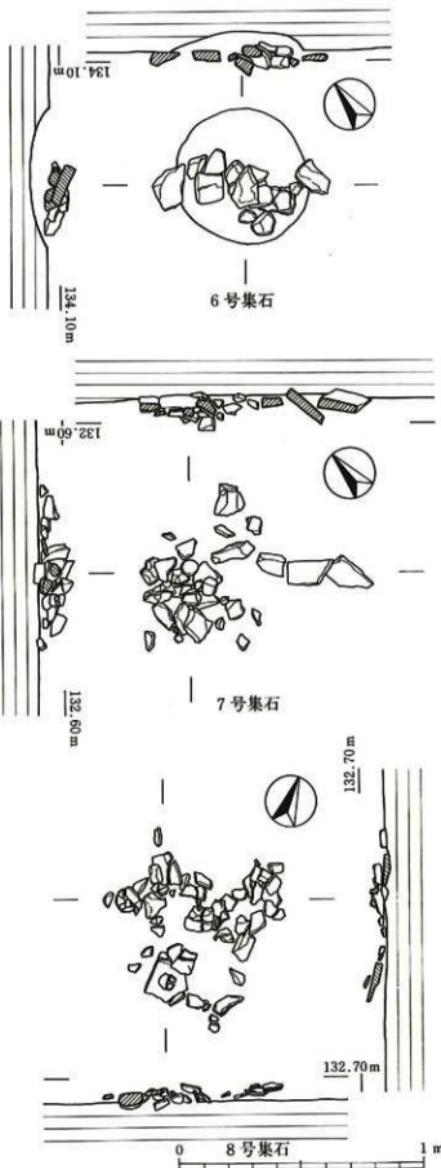
C-4区で検出された。96cm×69cmの範囲に礫が集中する。礫の素材は砂岩である。扁平な礫が中心で、そのほとんどが熱により赤褐色を呈し、熱破碎を受けていた。南側には扁平な板状の礫が検出された。下部には掘り込みは認められなかった。

8号集石 (第8図)

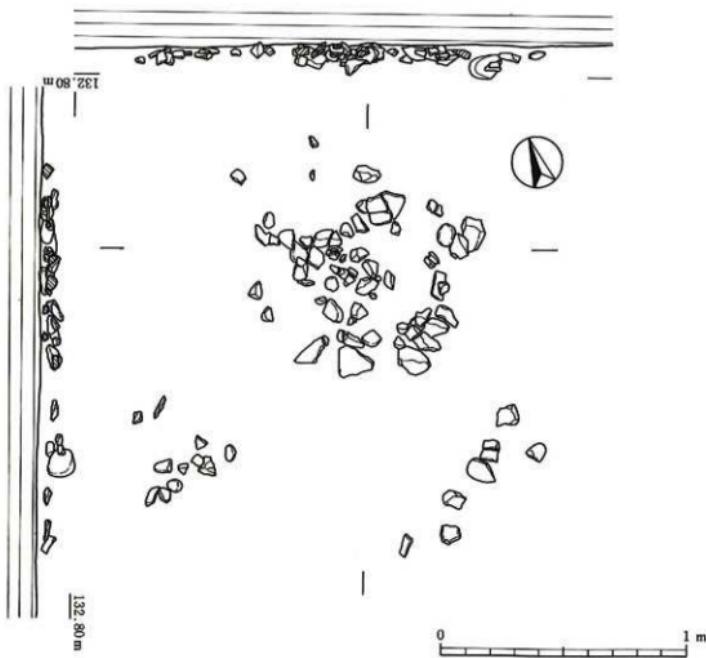
C-5区で検出された。84cm×73cmの範囲に礫が集中する。礫の素材は砂岩である。扁平な礫が中心で、そのほとんどが熱により赤褐色を呈し、熱破碎により板状に割れていた。下部に掘り込みは認められなかった。

9号集石 (第9図)

C-5区で検出された。171cm×170cmの広い範囲にばらけた状態で礫が検出された。礫の素材は砂岩である。礫が特に集中するのは、約1m四方の範囲で、その南東側と南西側に数個ずつの礫のまとまりが認められた。15cm以下の礫を中心に構成され、円礫や扁平礫が混在する。ほとんどが炎熱により赤変し、熱破碎を受けていた。熱により割れる以前の礫には、20cm程度のやや大型の礫も含まれていたようである。下部に掘り込みは認められなかった。



第8図 6号集石～8号集石



第9図 9号集石

10号集石 (第10図)

C-5区で検出された。70cm×43cmの狭い範囲に礫が集中する。10個程度の少量の礫で構成され、15cm~20cmの大型の砂岩礫が大半である。これらの礫は炎熱により赤変し、熱破碎を受け、ひび割れていた。下部に掘り込みは認められなかった。

11号集石 (第10図)

C-6区で検出された。84cm×76cmの範囲に礫が集中する。10cm程度の砂岩礫で構成され、礫の大半が炎熱により赤変し、熱破碎を受けていた。下部に82cm×49cmの長楕円形の掘り込みが確認された。掘り込みの深さは約14cmで、他の集石の掘り込みよりは深かった。掘り込み部分には礫は検出されなかった。埋土には炭化物粒子が含まれていた。

12号集石 (第10図)

C-7区で検出された。礫の頭はV層中位で検出された。67cm×68cmの範囲に礫が集中し、よくまとまった状態の集石である。礫の素材は砂岩である。礫の大半は炎熱により赤変し、熱破碎を受けていた。熱破碎を受けて割れる以前は10cm程度の礫であったと思われる。下部に掘り込みは認められなかった。

13号集石 (第11図)

C-8区で検出された。38cm×35cmの範囲に礫が集中する小型の集石である。礫の素材は砂岩である。10個程度の礫で構成される。礫の大半が炎熱により赤変し、熱破碎を受け、割れていた。下部には掘り込みは認められなかった。

14号集石 (第11図)

C-8区で検出された。53cm×53cmの範囲に礫が集中する。礫の素材は砂岩である。15個程度の礫で構成される。礫の大半が炎熱により赤変し、熱破碎を受け、割れていた。下部に掘り込みは認められなかった。

15号集石 (第11図)

C-9区で検出された。85cm×80cmの範囲に礫が集中する。礫の素材は砂岩である。ほかの集石では、扁平な礫や角礫に近い礫が多く見られるのに対しても、15号集石は拳大の円礫を中心構成され、礫の大きさも揃っている。礫は炎熱により赤化し、熱破碎を受けて割れているものの、他の集石ほど小片に破碎されている礫は少なく、ほとんどがもとの形状を保ったままであった。下部に掘り込みは認められなかった。

16号集石 (第12図)

C-10区で検出された。131cm×91cmの範囲に礫が集中する。礫の素材は砂岩である。礫は拳大から20cm位までの大きさで、円礫はほとんど見られず、扁平な板状の礫と角礫により構成される。炎熱により赤変し、割れている礫が集石の中心部分に多く見られた。下部に58cm×54cmのほぼ円形の掘り込みが検出された。掘り込みの深さは約10cmで、掘り込み部分にも礫が検出された。



第10図 10号集石～12号集石

17号集石 (第12図)

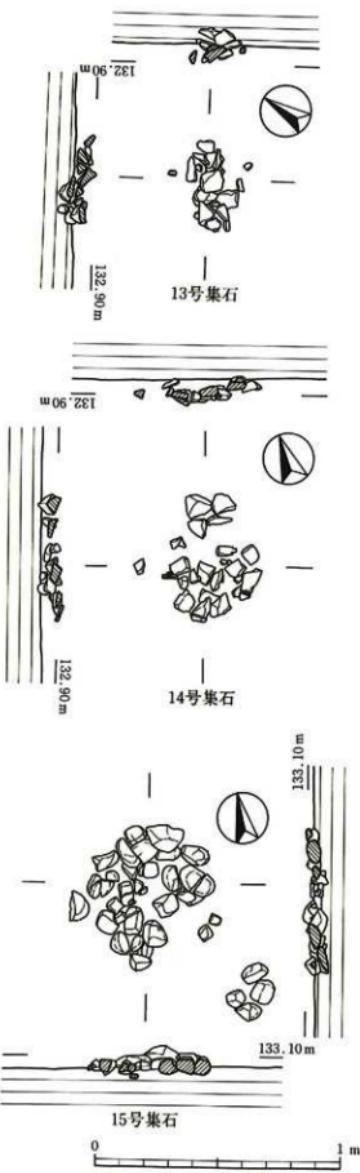
C-12区で検出された。礫は102cm×74cmの範囲にややばらけた状態で検出された。この集石の礫の一部は確認調査の際に検出されている。礫の素材は砂岩である。礫の形状は扁平礫や角礫がほとんどである。炎熱により赤変し、熱破碎を受けているもののが多かった。下部に掘り込みは認められなかった。

18号集石 (第13図)

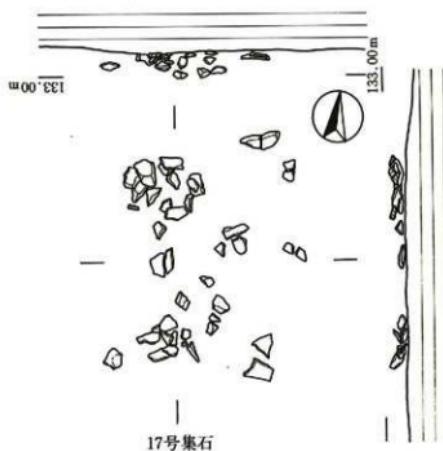
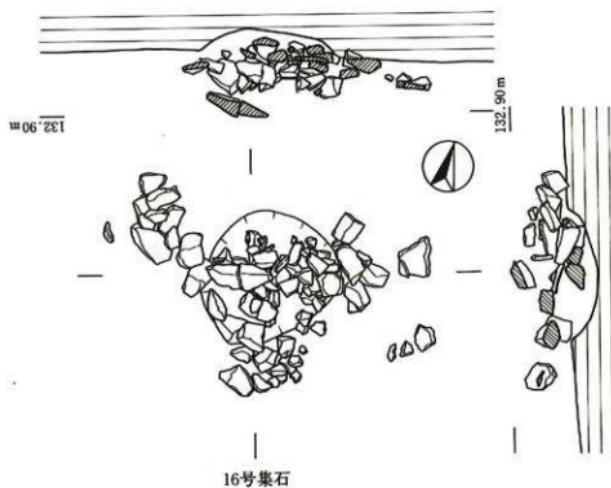
C-10区で検出された。礫は121cm×144cmの範囲で検出されたが、礫が特に集中するのは中心部分の径60cmの範囲である。礫の素材は砂岩である。扁平礫や角礫に混じり、円礫も比較的多く見られた。炎熱により赤変したり、黒変したりしている礫が多く、熱により破碎されたものがほとんどである。中心部には炭化物粒子と灰が検出され、その下部には67cm×61cmのほぼ円形を呈する掘り込みが認められた。掘り込みの深さは約7cmほどである。

19号集石 (第13図)

C-11区で検出された。203cm×162cmというやや広い範囲で礫が検出されるが、礫のほとんどは中心部100cm四方に集中する。礫の素材は砂岩である。角礫と円礫により構成され、そのほとんどが炎熱により赤変し、熱破碎を受けている。中心部の下部には109cm×92cmの楕円形の掘り込みが確認された。掘り込みの埋土は黒褐色を呈し、炭化物粒子を含んでいる。掘り込みの深さは約13cmである。礫の一部は掘り込み部分に落ち込んで検出されたが、底面より浮いた状態であった。

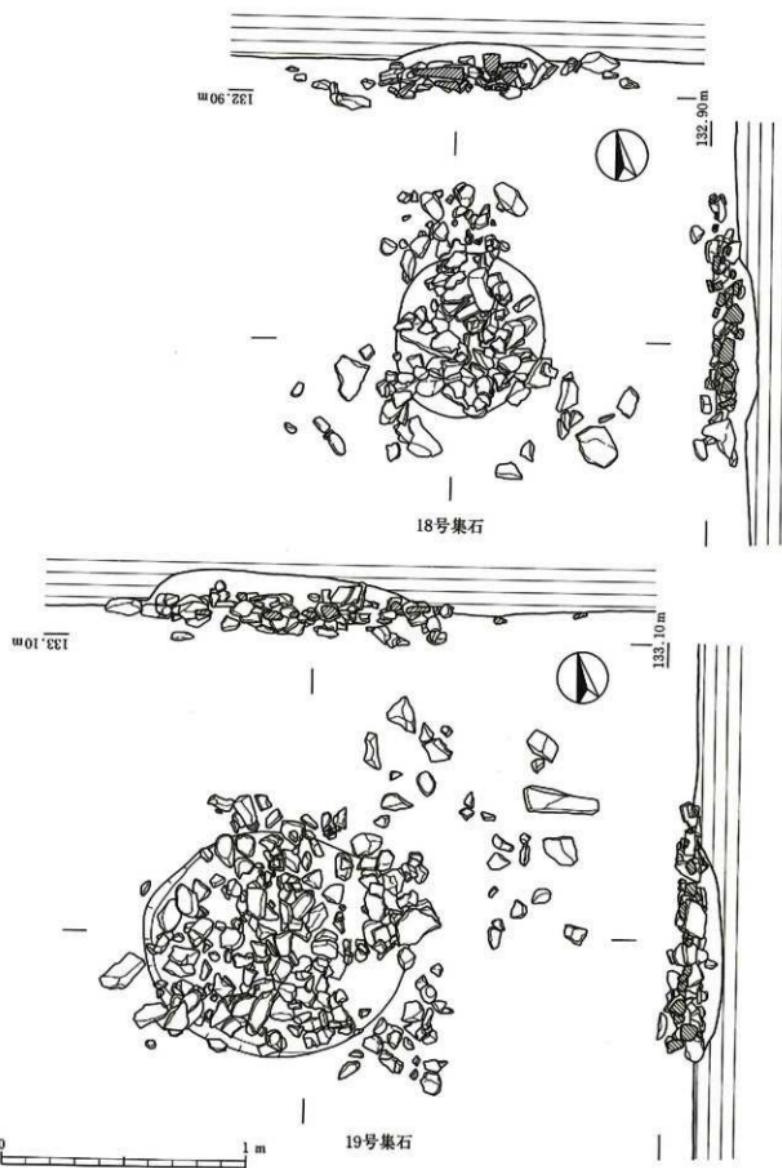


第11図 13号集石～15号集石



0 1 m

第12図 16号集石・17号集石



第13図 18号集石・19号集石

第2表 草創期集石一覧表

| 番号 | 検出区 | 実測番号 | 床面レベル(cm) | 大きさ(cm) | 掘り込みの有無 | 掘り込みの大きさ(cm) | 掘り込みの深さ(cm) |
|----|------|------|-----------|---------|---------|--------------|-------------|
| 1 | B-3 | 23 | 132.16 | 240×173 | 有 | 140×114 | 21 |
| 2 | B-4 | 20 | 132.40 | 125×81 | 有 | 69×53 | 6 |
| 3 | B-3 | 22 | 132.40 | 146×90 | 無 | | |
| 4 | B-4 | 21 | 132.37 | 140×82 | 無 | | |
| 5 | C-4 | 19 | 132.47 | 75×66 | 無 | | |
| 6 | B-4 | 18 | 133.04 | 73×35 | 有 | 55×53 | 8 |
| 7 | C-4 | 17 | 132.48 | 96×69 | 無 | | |
| 8 | C-5 | 16 | 132.59 | 84×73 | 無 | | |
| 9 | C-5 | 15 | 132.69 | 171×170 | 無 | | |
| 10 | C-5 | 13 | 132.84 | 70×43 | 無 | | |
| 11 | C-6 | 12 | 132.70 | 84×76 | 有 | 82×49 | 14 |
| 12 | C-7 | 11 | 132.76 | 67×68 | 無 | | |
| 13 | C-8 | 10 | 132.72 | 38×35 | 無 | | |
| 14 | C-8 | 9 | 132.74 | 53×53 | 無 | | |
| 15 | C-9 | 8 | 132.96 | 85×80 | 無 | | |
| 16 | C-10 | 6 | 132.72 | 136×91 | 有 | 58×54 | 10 |
| 17 | C-12 | 4 | 132.87 | 102×74 | 無 | | |
| 18 | C-10 | 7 | 132.76 | 144×121 | 有 | 67×61 | 7 |
| 19 | C-11 | 3 | 132.96 | 203×162 | 有 | 109×92 | 13 |

(2) 配石遺構

C-8区で1基、C-9区で1基検出された。曲線状に扁平礫を配するもので、集石遺構とは異なる形態の遺構である。

1号配石遺構 (第14図)

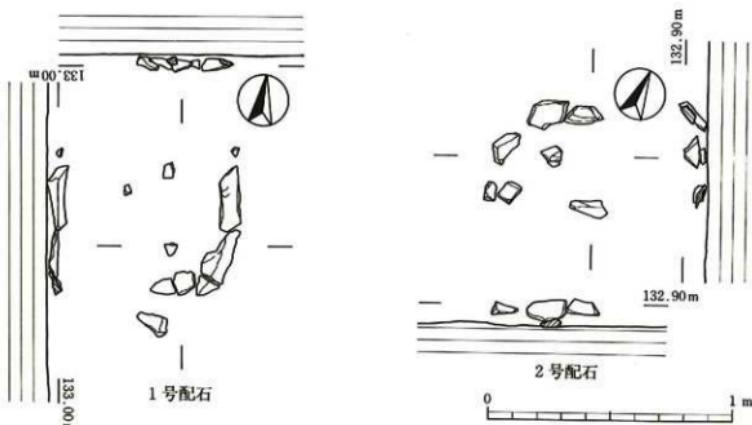
C-8区で検出された。71cm×48cmの半馬蹄状に扁平礫が配置される。礫の素材は砂岩である。一部に赤変している礫が見られる。ただし、配石の内部には焼土や炭化物は検出されず、下部に掘り込みも認められなかった。

2号配石遺構 (第14図)

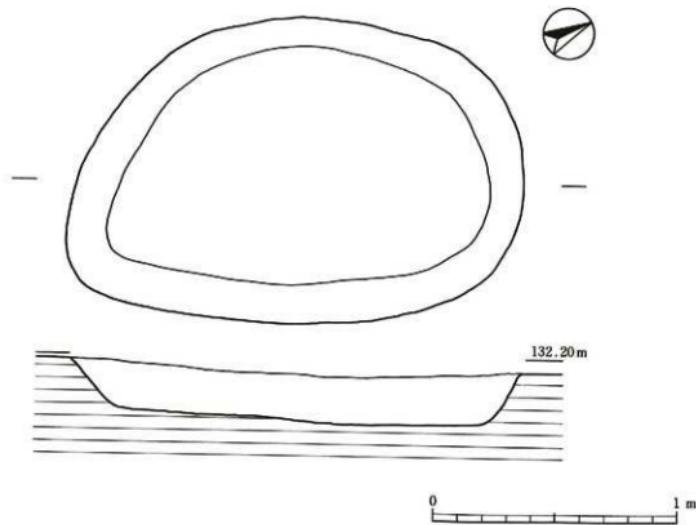
C-9区で検出された。47cm×47cmの馬蹄状に礫が配置される。礫の素材は砂岩である。火を受けた状況は認められず、配石の内部にも焼土や炭化物は確認されなかった。また、下部に掘り込みも検出されなかった。

(3) 土坑 (第15図)

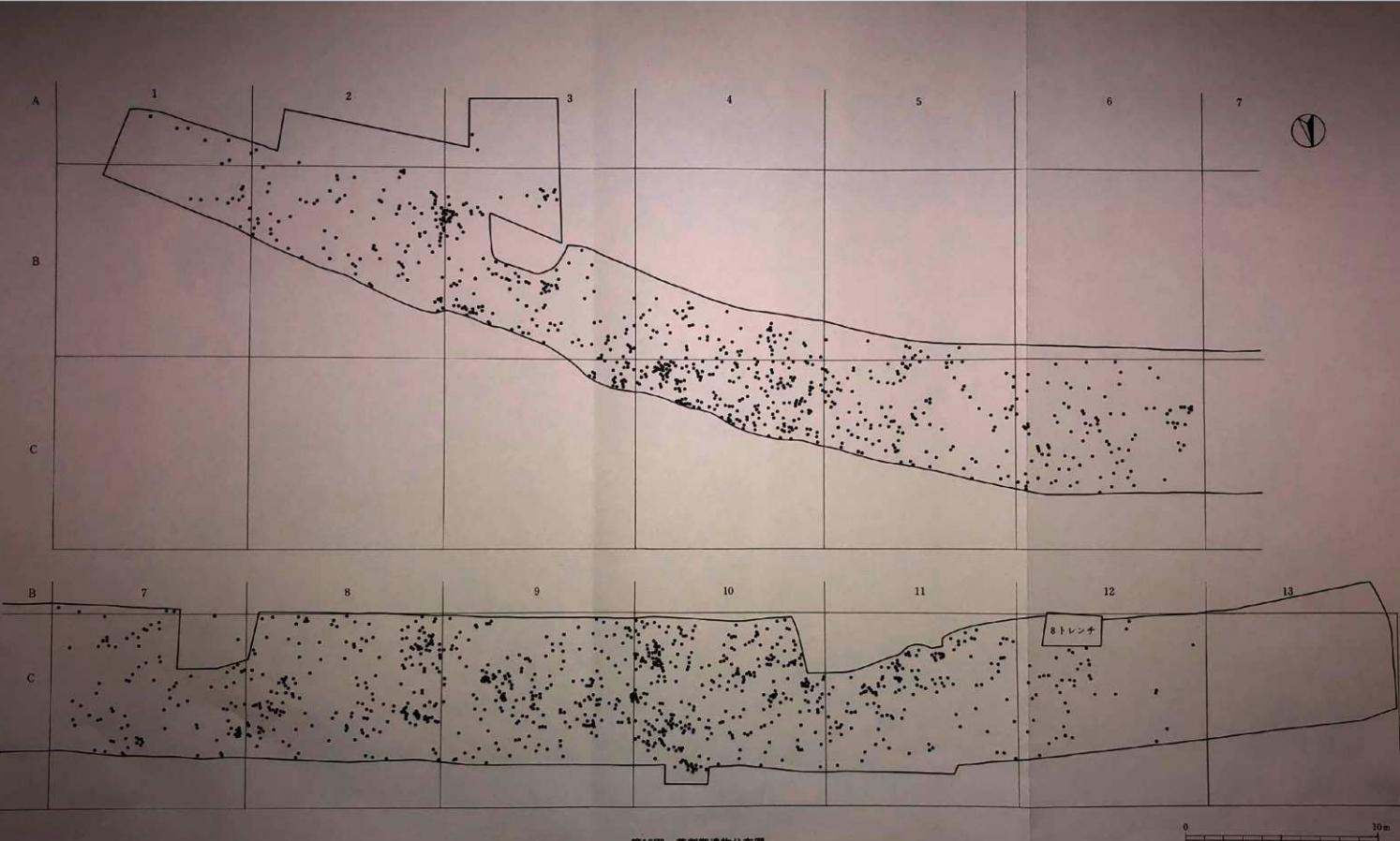
B-2区で検出された。187cm×124cmの長楕円形を呈する。VI層上面から掘り込まれ、深さは約20cmである。埋土は暗褐色を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。



第14図 配石遺構



第15図 土坑



第16図 草創期遺物分布図

0 10m

2 出土遺物

草創期の遺物としては土器片、石鎌、石斧、敲石、磨石、石皿、砥石、スクレーパー、石核、剥片類が出土した。遺物の出土は調査区のはば全域にわたるが、3区～4区と8～10区では比較的多くの遺物が出土した。調査区の端部にあたる1区と13区での遺物の出土は少ない。

(1) 土器

確認調査時の遺物も含めて、約1,500点の土器が出土し、接合を実施した結果、資料数としては1,333点になった。土器の器種としては、深鉢形土器と浅鉢形土器に大別される。

深鉢形土器は、いわゆる隆帯文土器と呼ばれる土器がほとんどで、少量の無文土器も伴っている。隆帯文土器は口縁部や胴部上位に太い粘土紐による隆帯を貼り付け、隆帯上に貝殻や指頭で文様を施す。器形は、比較的小さな平底の底部から外に開きながら緩やかに立ち上がり、胴部中位で若干内側に屈曲し、直線のあるいは内湾しながら口縁部にいたるものが多い。底部形態は、平底がほとんどであるが、尖底も1点出土している。深鉢形土器の破片には外面に煤が付着したものや内面にも炭化物が付着したものが見られる。

浅鉢形土器は、器形の全容がわかる資料が出土していないが、底部から直線的に大きく開きながら口縁部に至る器形が想定される。口縁部は、直線的に開くもの、内湾するもの、口縁端部が内側に屈曲するものなどがある。口縁部直下の屈曲部に隆帯を貼り付けるものと隆帯を貼り付かない無文土器がある。

草創期の土器の特徴としては、次のような点が挙げられる。

①器面調整には指ナデが多用され、貝殻条痕、ヘラケズリ、ミガキが見られない。内面は比較的丁寧に調整されるが、外面は内面より粗雑である。指ナデだけで調整した結果、指頭痕が残され、器壁の厚さが均一でなく、でこぼこが目立つ。器壁が厚いものが多い。

②胎土に混和材を混入したものが、ほとんど見られない。石英粒を多く含むものがわずかに見られる。島内では、火成岩はきわめて狭い範囲に3種類分布している。石英を含む火成岩としては、石英斑岩が南種子町島間付近に分布する。このような状況から胎土に石英を多く含む土器は極めて特異である。

③胎土に2～3mmの鉄分の凝着した粒子を含むものがある。鉄分の凝着は水田など水分を多く含む低湿地の土壤で見られる。土器製作用の粘土は低湿地で採取されたもの可能性がある。

④隆帯文土器の隆帯は、すべて太い粘土紐の貼り付けであり、器面の粘土を盛り上げて隆帯としたものは皆無である。

なお、個々の土器の詳細については土器観察表を参照されたい。

① 深鉢形土器

深鉢形土器は施文具や部位により1類～9類、無文の胴部、底部に類別した。

1類は、放射状の肋を持つ二枚貝を用いて隆帯上に文様を施す土器である。

2類は、指頭と思われる圧痕を隆帯上に施す土器で、指頭圧痕内に浅い爪痕を残すものもある。

3類は、指頭圧痕と明瞭な爪痕を隆帶上に施す土器である。

4類は、口縁部に1条の隆帶を貼り付けて、口縁部を外側に拡張し、胴部には左下がりの短隆帶が間隔をおいて貼り付けられる土器である。隆帶の下部に爪痕が観察される。

5類は、指頭圧痕のみを連鎖状に隆帶上に施す土器である。

6類は、棒状工具による刺突文を隆帶上に施す土器である。

7類は、ヘラ状工具によるキザミを隆帶上に施す土器である。

8類は、貝殻と指頭、貝殻とヘラ状工具など、複数の施文具を用いて隆帶上に施文する土器である。

9類は、無文土器である。

無文の胴部は、1類～9類の胴部である。

底部は、1類～9類の底部である。

ア 1類土器 (第17図～第24図)

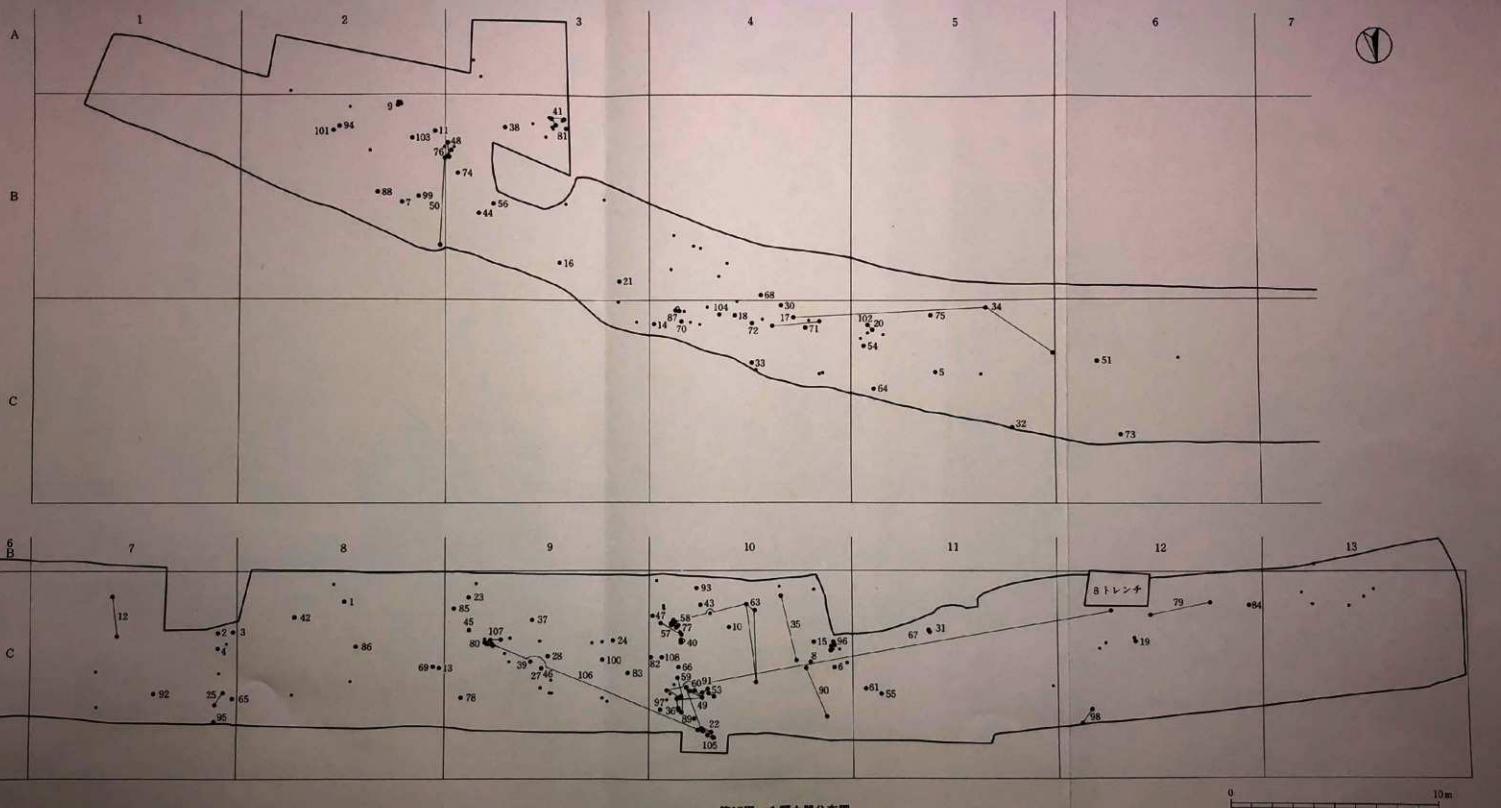
接合後、資料数は184点となった。実測可能な108点を図示した。分布は調査区のほぼ全域にわたり、特定の部分に集中する傾向は見られないが、9区と10区ではやや多く出土した。約23m離れた破片が接合した資料もあり、一つの個体がかなり広い範囲にわたって散布する状況がうかがえる。

隆帶の貼付される部位は口縁部と胴部である。隆帶は横位に貼り付けられるものがほとんどであるが、横位の隆帶に密接して縦位あるいは斜位に垂下する隆帶を貼り付けるものもある。また、隆帶を口縁部内に貼り付けた資料が2点出土した。隆帶を器壁に丁寧に貼り付けたものは少なく、隆帶の剥落した資料も多く見られる。隆帶には、主に二枚貝の腹縁部から背面かけた部分を用いて押圧文が施される。なお、殻頂部を押圧した資料も1点出土している。横位の隆帶へは、殻頂部を左に、腹縁部を右にして貝殻を保持し、右から左に施文される。縦位の隆帶は、横位の隆帶を貼付後に貼付される。隆帶へは、殻頂部を下に、腹縁部を上にして貝殻を保持し、上から下に施文される。

1類は隆帶の数や方向により1a類～1e類に細分した。

1a類 (第18図1～21)

1～15は、口唇部直下に1条の隆帶を貼付する。2・3は隣接して出土し、胎土や色調から同一個体と思われる。12には、隆帶部分と同様に口唇部にも貝殻背面による押圧文が施される。13の隆帶の上位には横位の、その下位には縦位の押圧文が施される。14・15の口唇部には貝殻腹縁部の刺突文が施される。16は口縁部内面にも隆帶を貼り付けるもので、外面の隆帶と同様に貝殻により施文される。17・18は口縁部の横位の隆帶に密接して縦位の垂下する隆帶を貼り付けている。19は、口唇部よりやや下がった位置に1条の隆帶を貼付する。20・21は口縁部と胴部にそれぞれ1条ずつの隆帶を貼付する。21の口縁部内面にも隆帶が貼付され、貝殻により施文される。



第17図 1 磁土器分布図

-29~30-

1 b 類 (第19図22~34)

口縁部に複数の隆帯を貼付する資料である。22~24は口縁部に複数の隆帯を貼付する。22は口縁部に3条の隆帯を貼付し、隆帯の剥落した部分が見られる。23の隆帯は低い。24の隆帯はやや斜めに貼付され、口縁部は内湾する。25~34は横位の2条の隆帯を貼付するもので、2条は密接しているため1条の幅広の隆帯のように見える。貝殻によりそれぞれの隆帯に施文される。25は貝殻を器壁に対して直角に近く保持して施文したため、あたかも押し引き文状に見える。27・28は斜位に貝殻の背面を押圧している。施文・胎土・色調から同一個体と判断される。32は口縁部内面にも隆帯を貼付する。ただし、内面の隆帯に施文は見られない。33・34は横位の隆帯に密接して2条のやや斜位に垂下する隆帯を近接して貼付する。施文・胎土・色調から同一個体と判断される。

1 c 類 (第20図35)

内湾する口縁部に粘土を1段積み上げ、その部分を外側に摘み出し、外面に貝殻で施文する。

1 d 類 (第20図36~56・第21図57~76・第22図77~92・第23図93~104・第24図105~107)

1 a 類・1 b 類の胴部から底部に至る破片である。直線的に外方へ開くものや、やや内湾するものが見られる。89・91では屈曲部位に隆帯を貼付する。

36~94には、横位に1条の隆帯が貼付される。36~48・80・85・86・88・90~94は貝殻の腹縁部から背面中位までの部分を用いて、押圧気味に施文する。その他の破片の隆帯へは、貝殻を器壁に対して直角に近く保持して、右から左へ連続して施文する。施文は横位に1段のものがほとんどだが、44では斜位に不規則な施文がなされる。

96~98には、1条の横位の隆帯に密着して縦位の垂下する隆帯が貼付される。96・98には横位の隆帯の上下に縦位の隆帯が貼付される。縦位の隆帯の位置が上と下で食い違っており、別々に貼付されたことがわかる。98の外面には偶然付いたと思われる木葉痕が観察される。

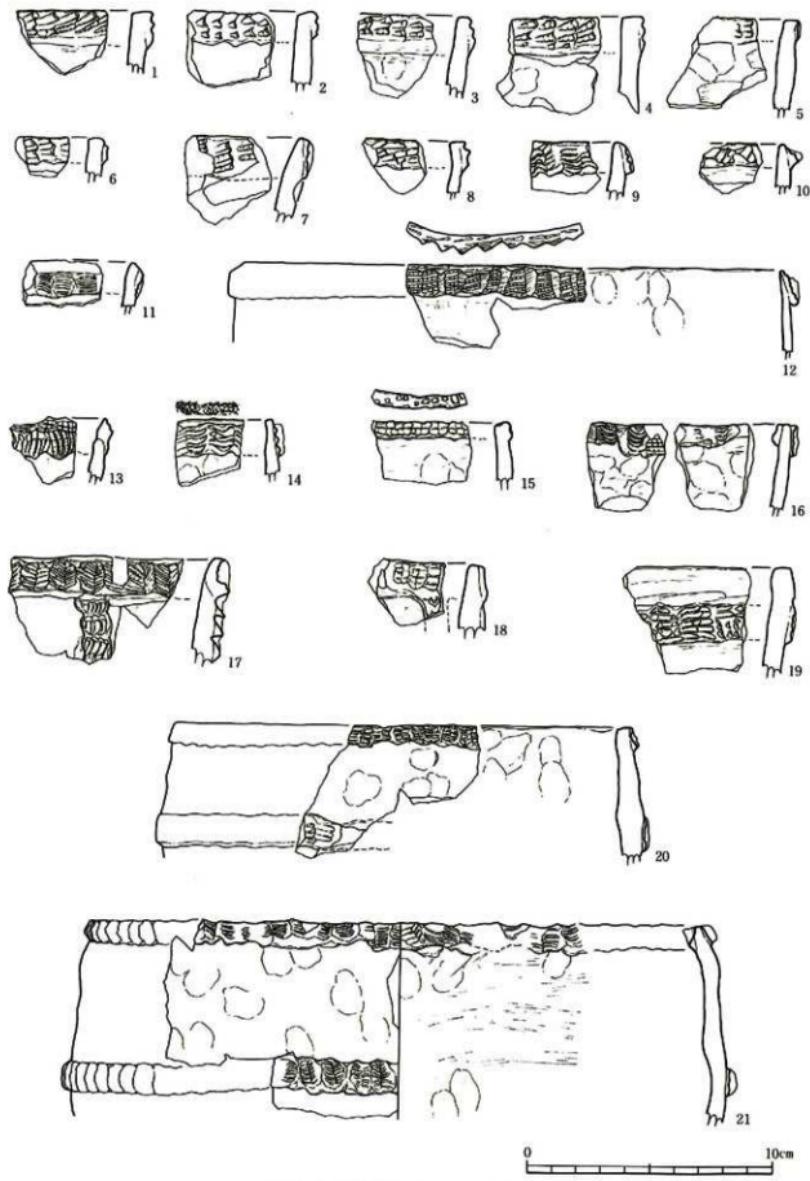
95・99・100には、縦位に1条の隆帯が貼付され、96~98の縦位の隆帯部分と思われる。

101~104には、複数の斜位あるいは横位の隆帯が貼付される。101には、斜位と横位の2条の隆帯が貼付される。102には、間隔をあけて2条の隆帯が貼付される。103には、わずかに間隔を開けて、4条の隆帯が貼付され、隆帯の左端部ではやや下降する。104には、上位に密接した2条の隆帯と、間隔を開けた下位に1条の隆帯が貼付される。

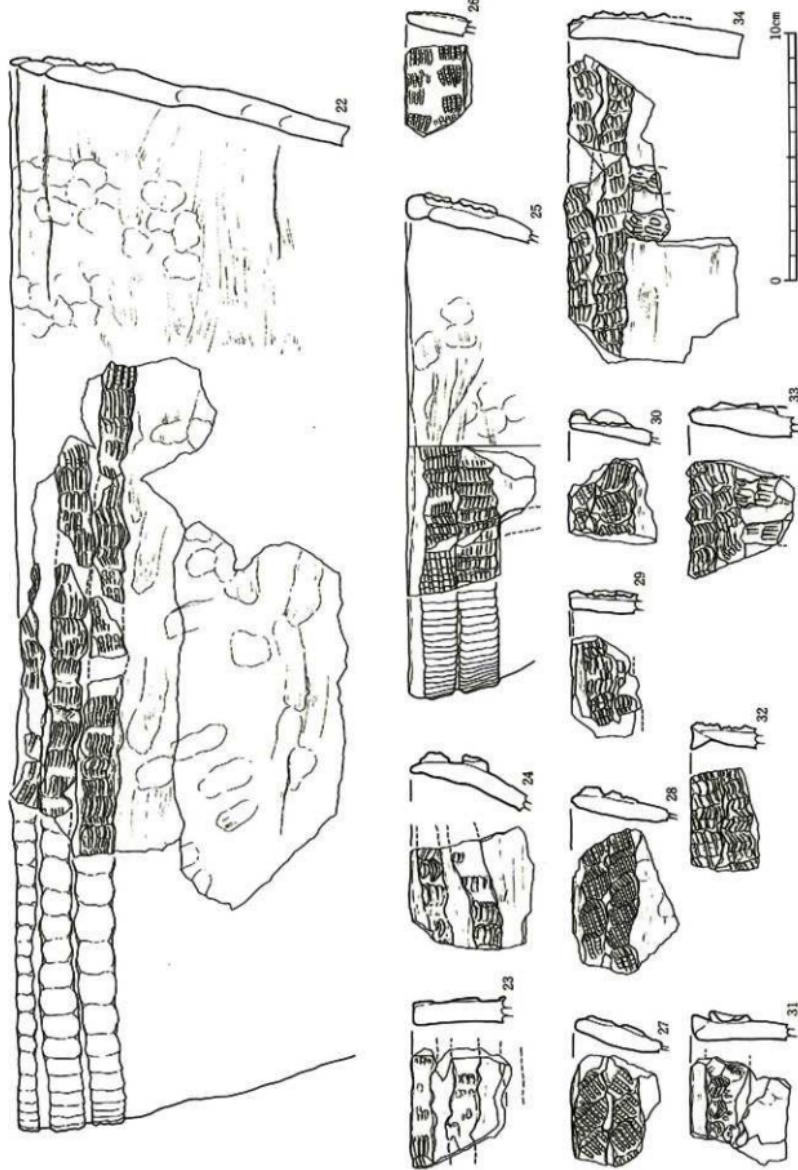
104~107は胴部から底部に至る破片である。105・106は施文・胎土・色調から同一個体と判断される。隆帯は、ほぼ横方向へ貼付されるが、106の左端部では下降している。また、106の裏側には、底部の接地面から右上方に向かう隆帯が貼付されている。隆帯への施文は押圧気味である。底部はやや上げ底で、胴部は緩やかに外方に開きながら立ち上がる。口縁部を欠くために器形の全容は不明だが、胴部中位くらいで内側に屈曲するものと思われる。土器製作時の粘土は、やや固めだったと推定され、上段と下段の接合部分で水平に、ほぼ等間隔で剥離している。製作手法としては幅広の輪積みあるいは、板状の積み上げだと思われる。器面調整は指ナデで、指頭痕が残され、器面の凹凸が目立つ。107は、小型の底部で縦位に2条の隆帯が貼付される。

1 e 類 (第24図108)

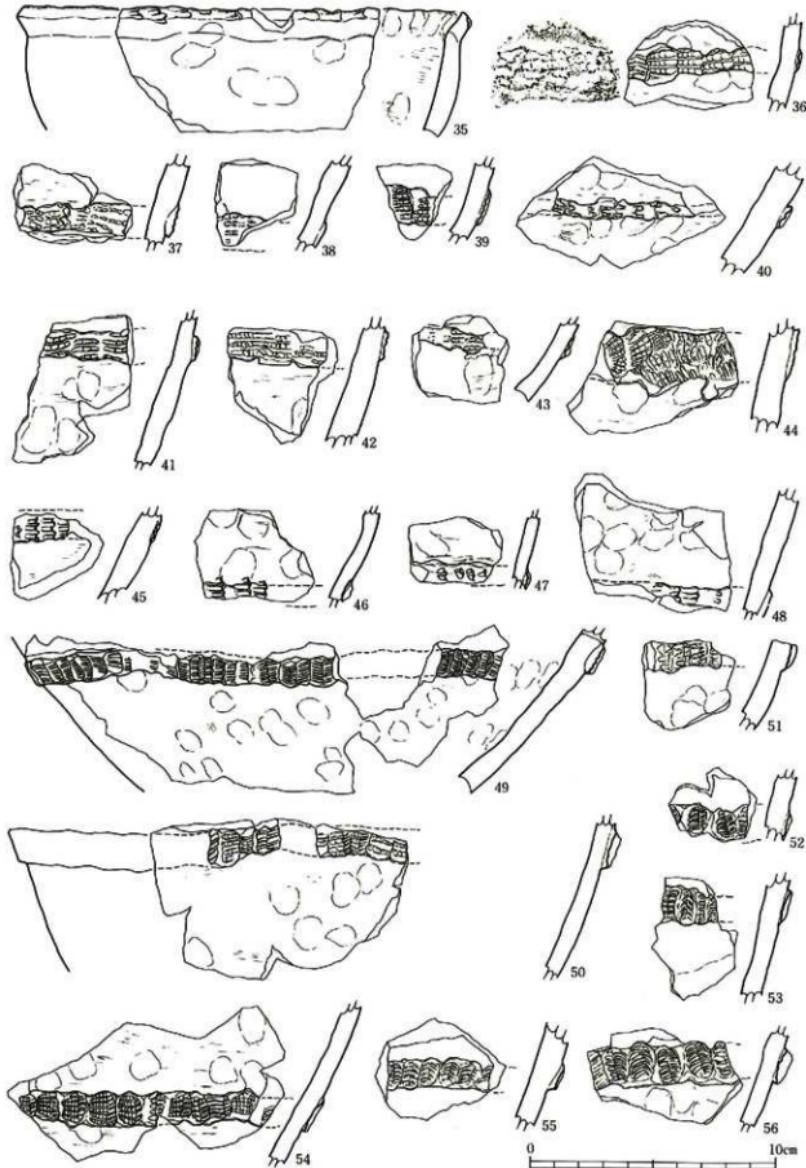
1条の横位の隆帯を貼付するもので、隆帯へは上下2段に貝殻の殻頂部を押圧する。殻頂部を用いて施文した資料は1点だけである。



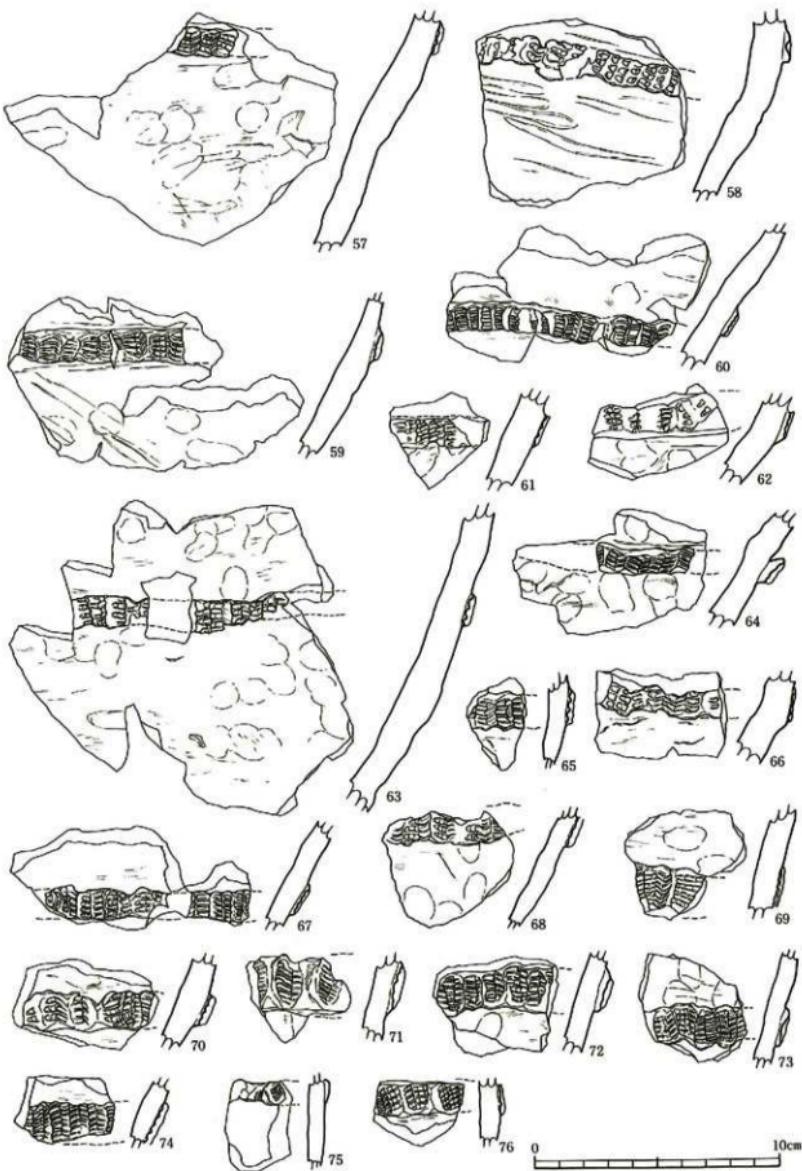
第18図 草創期の土器 1a類



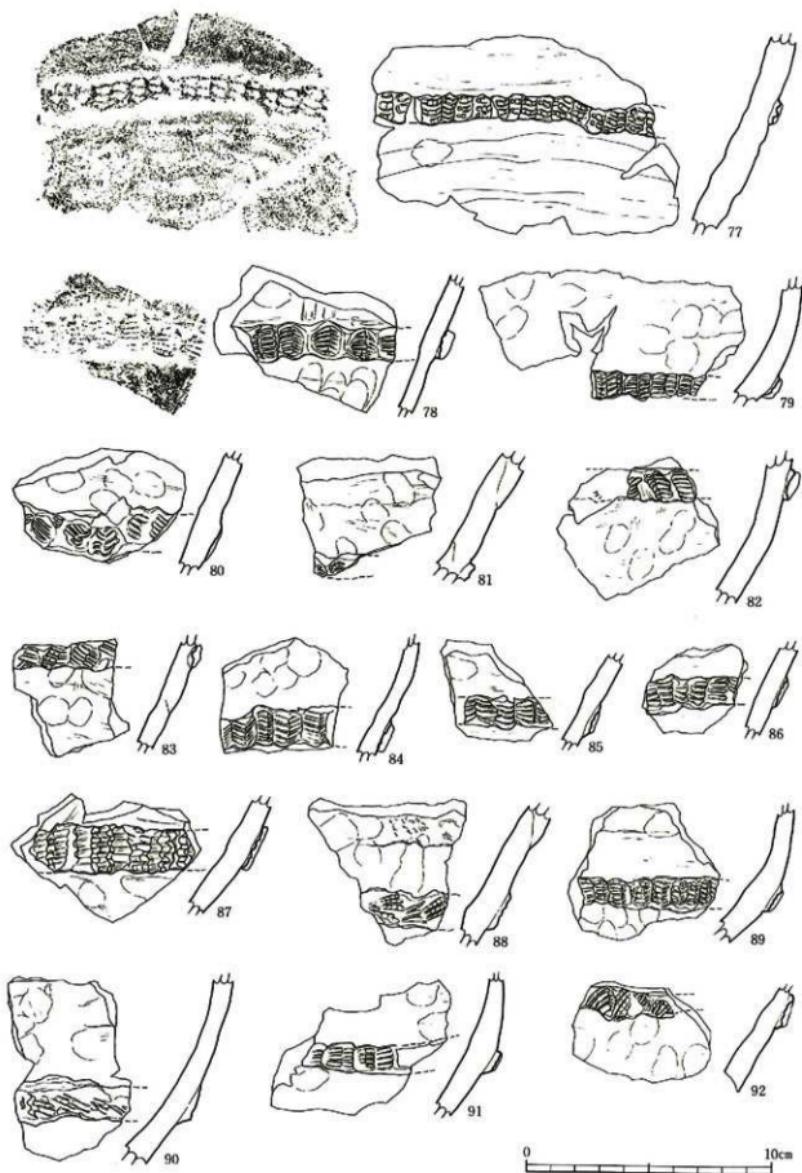
第19図 草創期の土器 1 b 類



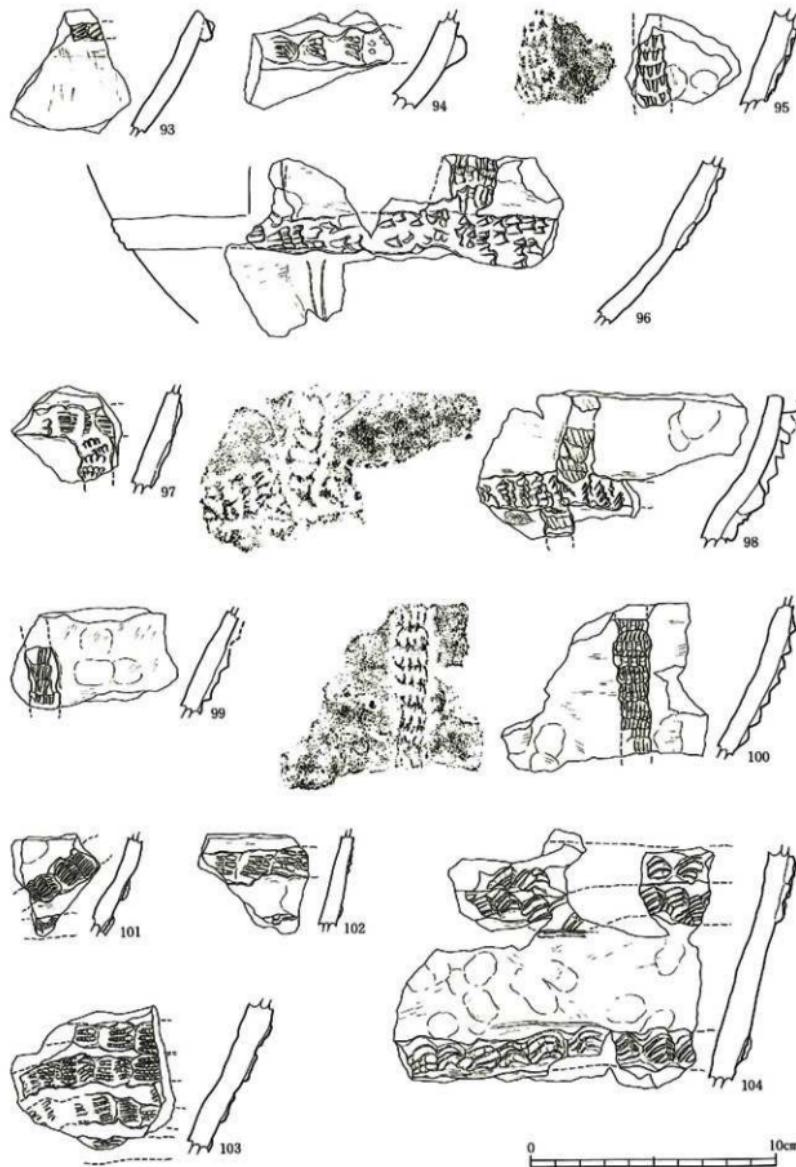
第20図 草創期の土器 1c類・1d類 (1)



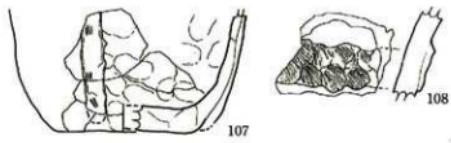
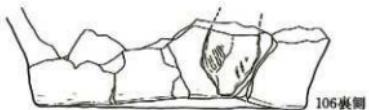
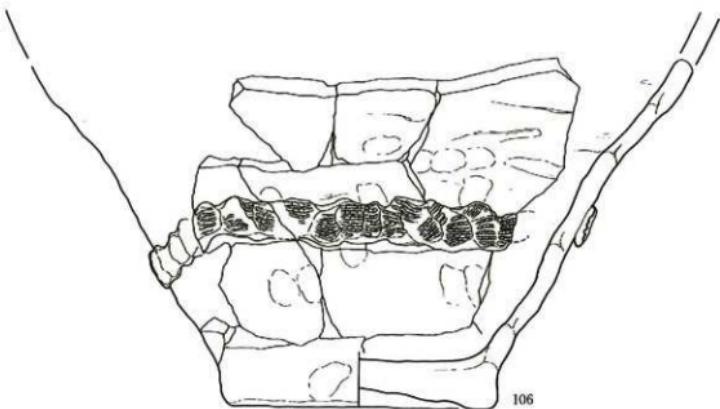
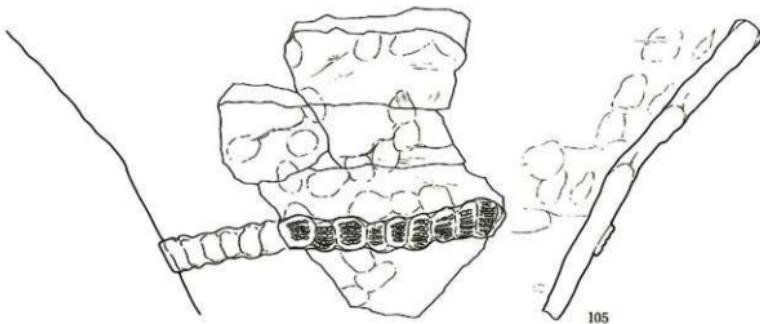
第21図 草創期の土器 1d類 (2)



第22図 草創期の土器 1 d類 (3)



第23図 草創期の土器 1d類 (4)



第24図 草創期の土器 1d類(5)・1e類

第3表 1類土器觀察表(1)

| 鉢 | 番号 | 割合番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部 位 | 走査(往高順)cm | 胎 土 | 焼成 | 調整・文様 | 色 調 | 施文方向 | 備 考 |
|----|------|------|-----|--------|-----|--------|-----------|-----------|------------------|------------|------------|-----------------|------------|------------------|
| 1 | 743 | C-8 | V | 132.98 | a | 口 緑 | 厚 | 0.7cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右? |
| 2 | 871 | C-7 | V | 132.95 | a | 口 緑 | 厚 | 0.9cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 不明 |
| 3 | 869 | C-7 | V | 132.87 | a | 口 緑 | 厚 | 0.9cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 不明 |
| 4 | 872 | C-7 | V | 132.94 | a | 口 緑 | 厚 | 0.95cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右? |
| 5 | 1081 | C-5 | V | 132.74 | a | 口 緑 | 厚 | 0.8cm | 砂 粒 多い | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 不明 |
| 6 | 492 | C-10 | V | 132.84 | a | 口 緑 | 厚 | 0.9cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右? |
| 7 | 1538 | B-2 | V | 132.37 | a | 口 緑 | 厚 | 1.0cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 不明 |
| 8 | 530 | C-10 | V | 132.85 | a | 口 緑 | 厚 | 0.85cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 9 | 1795 | B-2 | V | 132.10 | a | 口 緑 | 厚 | 0.95cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 10 | 312 | C-10 | V | 132.90 | a | 口 緑 | 厚 | 1.0cm | 精 選 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 不明 |
| 11 | 1797 | B-3 | V | 132.21 | a | 口 緑 | 厚 | 0.8cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 不明 |
| 12 | 1300 | C-7 | V | 132.77 | a | 口 緑 | 径 | 22.1cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 13 | 1680 | C-8 | V | 132.08 | a | 口 緑 | 厚 | 0.6cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 14 | 1204 | C-4 | V | 132.42 | a | 口 緑 | 厚 | 0.8cm | 砂粒やや多い | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 15 | 179 | C-10 | V | 132.95 | a | 口 緑 | 厚 | 0.7cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 16 | 1464 | B-3 | V | 132.41 | a | 口 緑 | 厚 | 1.1cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 17 | 1556 | C-4 | V | 132.59 | a | 口 緑 | 厚 | 1.2cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 上→下 |
| 18 | 1389 | C-4 | V | 132.65 | a | 口 緑 | 厚 | 1.0cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 19 | 424 | C-12 | V | 131.10 | a | 口 緑 | 厚 | 1.10cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 上→下 |
| 20 | 1043 | C-5 | V | 132.58 | a | 口 緑 | 径 | 13.8cm | 砂 粒 多い | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 21 | 1275 | B-3 | V | 132.47 | a | 口 緑 | 径 | 25.4cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 22 | 1995 | C-10 | b | 口 緑 | 径 | 43.4cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 | | |
| 23 | 314 | C-9 | V | 132.98 | b | 口 緑 | 厚 | 1.0cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 24 | 342 | C-9 | V | 132.90 | b | 口 緑 | 厚 | 1.2cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 25 | 853 | C-7 | V | 132.92 | b | 口 緑 | 径 | 20.2cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 26 | -14 | C-8 | V | | b | 口 緑 | 厚 | 0.8cm | 石英・角閃石 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 27 | 383 | C-9 | V | 132.98 | b | 口 緑 | 厚 | 1.0cm | 石英・角閃石 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 28 | 389 | C-9 | V | 132.98 | b | 口 緑 | 厚 | 1.05cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 29 | -14 | C-7 | V | | b | 口 緑 | 厚 | 1.0cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 30 | 1227 | C-4 | V | 132.54 | b | 口 緑 | 厚 | 1.0cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 31 | 158 | C-11 | V | 132.95 | b | 口 緑 | 厚 | 1.2cm | 石英・長石・ 角閃石が多い | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 32 | 1058 | C-5 | V | 132.66 | b | 口 緑 | 厚 | 1.1cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 上→下 |
| 33 | 1171 | C-4 | V | 132.59 | b | 口 緑 | 厚 | 1.3cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |
| 34 | 1036 | C-5 | V | 132.82 | b | 口 緑 | 厚 | 1.3cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 上→下 |
| 35 | 265 | C-10 | c | 口 緑 | 径 | 18.5cm | 5%・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 | | |
| 36 | 666 | C-10 | V | 132.89 | d | 胴 部 | 厚 | 0.85cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ デ ナ デ | 内・暗 外・暗 | 褐色 褐色 左←右 |

第4表 1類土器観察表(2)

| 測定番号 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部位 | 主張(参考等) | 胎土 | 焼成 | 調整・文様 | 色調 | 造文方向 | 備考 |
|------|--|------------|---|--|----|----|----------|-----|----|------------|----|---------------------|---------------|
| 37 | 679 | C-9 | V | 132.87 | d | 胴部 | 厚 1.1cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 38 | 4 | B-3 | N | 132.49 | d | 胴部 | 厚 0.85cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ | 内・黄褐色 外・黄褐色 | 左←右 |
| 39 | 382 | C-9 | V | 132.99 | d | 胴部 | 厚 1.0cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗褐色 外・暗褐色 | 左←右 |
| 40 | 280 | C-10 | V | 132.98 132.91 | d | 胴部 | 厚 1.5cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃灰色 外・黑褐色 | 左→右 |
| 41 | 12 15 16 | B-3 | N | 132.97 131.18 132.20 | d | 胴部 | 厚 1.0cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・茶褐色 | 左←右 外面煤付着 |
| 42 | 811 | C-8 | V | 132.97 | d | 胴部 | 厚 1.15cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 43 | 547 | C-10 | V | 132.81 | d | 胴部 | 厚 0.7cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃灰色 外・黑褐色 | 左←右 |
| 44 | 1487 | B-3 | V | 132.24 | d | 胴部 | 厚 1.2cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 不定 |
| 45 | 496 | C-9 | V | 132.94 | d | 胴部 | 厚 1.0cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗褐色 外・黑褐色 | 左←右 |
| 46 | 383 | C-9 | V | 132.99 | d | 胴部 | 厚 0.75cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・赤褐色 外・暗黃色 | 左←右 内面焦げ付着 |
| 47 | 292 | C-10 | V | 132.99 | d | 胴部 | 厚 0.7cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 48 | 1885 1812 | B-3 | V | 132.29 | d | 胴部 | 厚 0.95cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・淡褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 49 | 682 648 287 | C-10 | V | 132.69 132.87 132.95 132.20 | d | 胴部 | 厚 1.4cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・黑褐色 外・暗黃灰色 | 左←右 |
| 50 | 1810 1810 1813 | B-2 B-3 | V | 132.28 132.28 132.22 | d | 胴部 | 厚 1.1cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗褐色 外・暗黃色 | 左←右 |
| 51 | 993 | C-6 | V | 132.80 | d | 口縁 | 厚 1.1cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 52 | 1494 | B-3 | V | 132.26 | d | 胴部 | 厚 1.0cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・黄褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 53 | 586 239 | C-10 | V | 132.91 | d | 胴部 | 厚 1.05cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗褐色 外・茶褐色 | 左←右 内面焦げ付着 |
| 54 | 3640 | C-5 | V | 132.00 | d | 胴部 | 厚 0.9cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 55 | 362 | C-11 | V | 132.98 | d | 胴部 | 厚 1.25cm | 粗砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 内面焦げ付着 |
| 56 | 1486 | B-3 | V | 132.80 | d | 胴部 | 厚 1.2cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 57 | 291 392 | C-10 | V | 132.31 | d | 胴部 | 厚 1.45cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 58 | 382 | C-10 | V | 132.99 | d | 胴部 | 厚 1.65cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・有質感、無光澤 | 左←右 |
| 59 | 382 382 605 | C-10 | V | 132.95 132.95 132.90 | d | 胴部 | 厚 1.3cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 60 | 287 | C-10 | V | 132.95 | d | 胴部 | 厚 1.3cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 内面焦げ付着 |
| 61 | 1753 | C-11 | V | 132.85 | d | 胴部 | 厚 1.35cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃灰色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 62 | 1436 | B-4 | V | 132.44 | d | 胴部 | 厚 1.5cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 63 | 289 251 283 295 181 262 181 262 181 262 181 262 | C-10 | V | 132.81 132.81 132.81 132.81 132.81 132.81 | d | 胴部 | 厚 1.55cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 64 | 1070 | C-5 | V | 132.74 | d | 胴部 | 厚 1.7cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 65 | 936 | C-7 | V | 132.92 | d | 胴部 | 厚 1.1cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 66 | 583 | C-10 | V | 132.84 | d | 胴部 | 厚 1.4cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 67 | 256 620 44 | C-10 | V | 132.96 132.88 132.94 | d | 胴部 | 厚 1.15cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・茶褐色 | 左←右 内面焦げ付着 |
| 68 | 1249 | B-4 | V | 132.87 | d | 胴部 | 厚 1.05cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 69 | 1681 | C-8 | V | 132.81 | d | 胴部 | 厚 1.25cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ | 内・茶褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 70 | 1440 | C-4 | V | 132.41 | d | 胴部 | 厚 1.5cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 71 | 1148 | C-4 | V | 132.32 | d | 胴部 | 厚 1.2cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・茶褐色 | 左←右 |
| 72 | 1584 | C-4 | V | 132.64 | d | 胴部 | 厚 1.3cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ | 内・暗黃褐色 外・茶褐色 | 左←右 |

第5表 1類土器観察表(3)

| 測区 | 番号 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部 位 | 剖面(各層)cm | 胎 土 | 焼成 | 調整・文様 | 色 調 | 施文方向 | 備 考 | |
|------|-----|-----------------------|------|---|--------------------------------------|----|-----|----------|-----------------|----|------------|--------|------------|-----|------------|
| 第21回 | 73 | 945 | C-6 | V | 132.87 | d | 胴 部 | 厚 1.0cm | 石英・長石 角閃石・小品 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 74 | 1726 | B-3 | V | 132.33 | d | 胴 部 | 厚 1.1cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 茶褐色 | 左←右 |
| | 75 | 1346 | C-5 | V | 132.44 | d | 胴 部 | 厚 0.85cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 不明 |
| | 76 | 1612 | B-3 | V | 132.31 | d | 胴 部 | 厚 1.05cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 |
| 第22回 | 77 | 559 | C-10 | V | 132.86 | d | 胴 部 | 厚 1.35cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 暗褐色 | 左←右 |
| | 78 | 405 | C-9 | V | 132.06 | d | 胴 部 | 厚 1.2cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 茶褐色 | 左←右 |
| | 79 | 31 | C-12 | N | 132.09 | d | 胴 部 | 厚 1.4cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 暗褐色 | 左←右 |
| | 80 | 317 | C-9 | V | 132.99 | d | 胴 部 | 厚 1.2cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 81 | 8 | B-3 | N | 132.29 | d | 胴 部 | 厚 1.3cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 不明 |
| | 82 | 576 | C-10 | V | 132.88 | d | 胴 部 | 厚 1.4cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 83 | 426 | C-9 | V | 132.84 | d | 胴 部 | 厚 0.95cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 茶褐色 | 左←右 |
| | 84 | 417 | C-12 | V | 132.95 | d | 胴 部 | 厚 1.0cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 |
| | 85 | 1706 | C-9 | V | 132.08 | d | 胴 部 | 厚 0.95cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 86 | 747 | C-8 | V | 132.08 | d | 胴 部 | 厚 1.0cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| 第23回 | 87 | 1230 1211 | C-4 | V | 132.51 132.64 | d | 胴 部 | 厚 1.1cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 88 | 351 | B-2 | V | 132.22 | d | 胴 部 | 厚 1.4cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 |
| | 89 | 250 | C-10 | V | 132.99 | d | 胴 部 | 厚 1.4cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 |
| | 90 | 486 | C-10 | V | 132.91 132.96 | d | 胴 部 | 厚 1.3cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 |
| | 91 | 256 | C-10 | V | 132.93 132.12 | d | 胴 部 | 厚 1.4cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 |
| | 92 | 3316 | C-7 | V | 132.83 | d | 胴 部 | 厚 1.15cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 |
| | 93 | 1727 | C-10 | V | 132.78 | d | 口 線 | 厚 1.15cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 |
| | 94 | 352 | B-2 | V | 132.20 | d | 胴 部 | 厚 1.5cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 95 | 858 | C-7 | V | 132.95 | d | 胴 部 | 厚 1.2cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 上→下 |
| | 96 | 499 495 391 497 | C-10 | V | 132.90 132.91 132.87 132.95 | d | 胴 部 | 厚 1.2cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 上→下 |
| 第24回 | 97 | 613 | C-10 | V | 132.96 | d | 胴 部 | 厚 1.0cm | 6粒・長石・斜長石 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 上→下 |
| | 98 | 430 431 | C-12 | V | 132.44 132.18 | d | 胴 部 | 厚 1.55cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左→右 上→下 |
| | 99 | 1883 | B-2 | V | 132.20 | d | 胴 部 | 厚 1.65cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 上→下 |
| | 100 | 639 | C-9 | V | 132.89 | d | 胴 部 | 厚 1.05cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 上→下 |
| | 101 | 1554 | B-2 | V | 132.17 | d | 胴 部 | 厚 0.9cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 上→下 |
| | 102 | 1644 | C-5 | V | 132.60 | d | 胴 部 | 厚 0.8cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 103 | 1542 | B-2 | V | 132.29 | d | 胴 部 | 厚 1.2cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 104 | 1400 | C-4 | V | 132.15 | d | 胴 部 | 厚 1.45cm | 石英・角閃石 長石・小品 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 105 | 585 593 | C-10 | V | 132.94 132.01 132.01 | d | 胴 部 | 厚 1.1cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| | 106 | 682 585 596 | C-9 | V | 132.94 132.94 132.97 | d | 底 部 | 径 11.3cm | 柱状花崗岩 花崗岩片岩 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |
| 第25回 | 107 | 687 689 686 710 | C-9 | V | 132.90 132.90 132.89 | d | 底 部 | 径 5.5cm | 石英・角閃石 長石 | 不良 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 不明 |
| | 108 | 579 | C-10 | V | 132.90 | c | 胴 部 | 厚 1.15cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・胎 外・胎 | ナ ナ | 内・暗 外・暗 | 褐色 | 左←右 |

イ 2類土器 (第25図～第29図)

接合後、資料数は111点となった。実測可能な71点を図示した。分布は調査区の3～12区わたり、特定の部分に集中する傾向は見られない。約32m離れた破片が接合した資料もあり、1類と同様に一つの個体がかなり広い範囲にわたって散布する状況がうかがえる。隆帯の貼付される部位は、口縁部と胴部である。隆帯は横位に貼付されるものが、ほとんどであるが、横位の隆帯に密接して縱位の隆帯を貼付する資料が2点出土した。また、縱の隆帯が貼付される資料には、口縁内部にも横位の隆帯が貼付されている。隆帯を器壁に丁寧に貼付したものは少なく、指頭で隆帯を押し潰すことによって、器壁への密着を図った資料が多く見られる。隆帯には主に指頭により、連続した圧痕が残され、浅い爪痕が観察される資料もある。爪痕は施文として意識されておらず、指頭を押圧したことにより指頭圧痕内に押圧されたものである。指頭押圧は指を隆帯と平行に位置させ、右から左に順次施文するものが多く、左から右に施文するものは少ない。また、175～179のように指を隆帯と直角に近い角度において施文するものも見られる。

2類は、隆帯の数や部位により2a類～2d類に細分した。

2a類 (第26図109～116)

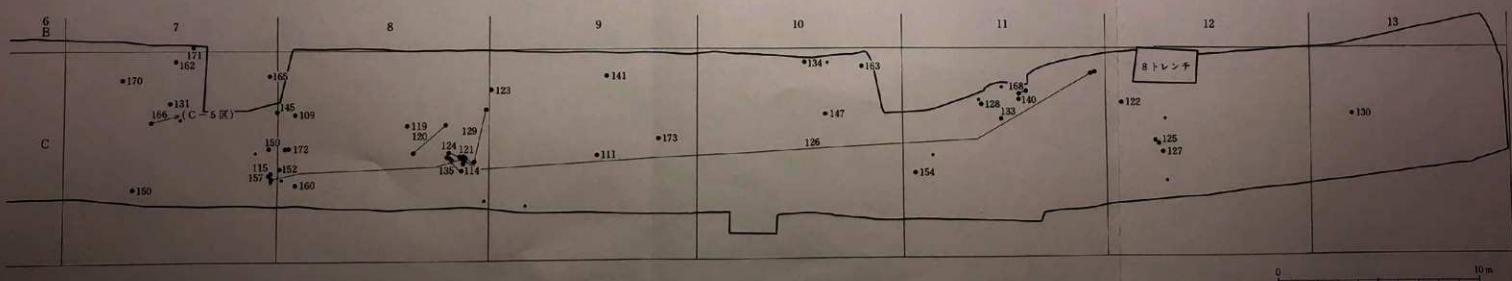
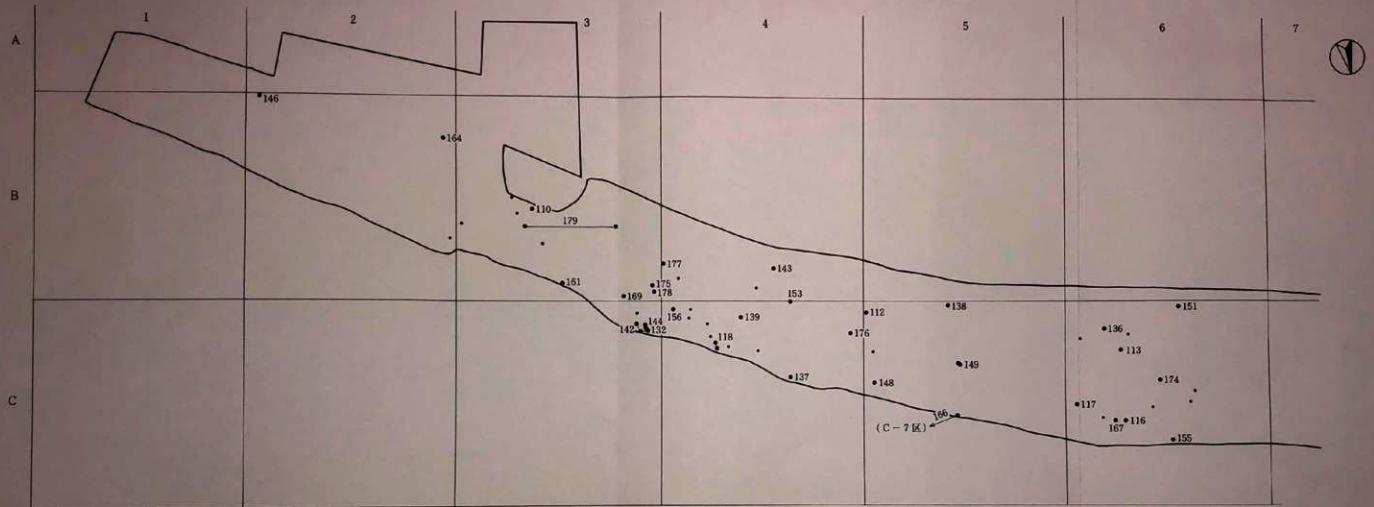
109～116は口唇部直下に1条の隆帯を貼付する。109は口唇部外側に1段粘土を貼り付けて隆帯とする。113・114・116は口唇部よりやや下がった位置に隆帯を貼付する。115は隆帯を貼り付けて、口唇部を外側に拡張し、平坦な口唇部とする。口唇部を外側に拡張する特徴は、後述する4類にも見られるものである。113の圧痕部には横方向の細かい筋が観察される。指頭にチガヤなどのような平行な葉脈を持つ植物の葉を巻き付けて押圧した可能性がある。

2b類 (第26図117～124・第27図125～128)

口縁部に2条の平行する隆帯を貼付する。117の下段の隆帯は左下がりに貼付される。120～128は胎土・色調・焼成から同一個体と思われる。口縁部はやや内湾し、胴部に最大径がある器形で、最大径の部分で丸く内側に屈曲し、屈曲部分に隆帯が貼付される。口縁部に2条の平行する隆帯、胴部に1条の右下がりの隆帯が貼付される。ただし、125のように胴部の隆帯には、蛇行が見られることから、直線的に隆帯が貼付されていないことも考えられる。また、126には2条の隆帯が貼付されるが、上段の隆帯は途中で途切れしており、必ずしも胴部を一周するとは言えないようである。120～128の胎土には石英・長石・角閃石などの鉱物や砂粒が混入される。隆帯は親指と人差し指で挟んで、撫で付けて丁寧に器壁に密着させている。124・126の胴部隆帯の上部には、隆帯を撫で付けたときの親指の爪による条痕が観察される。器面調整は指ナデによるが、丁寧に調整される。125・126の器壁には爪の圧痕が観察される。126は、C-8区とC-12区で出土した破片が接合した資料である。直線距離にして約32m離れていることから、遺物が広い範囲で動いていることを示している。

2c類 (第27図136・137)

口縁部に2条の密接した隆帯を貼り付け、その下位に口縁部隆帯と間隔をおいて口縁部に平行する1条の隆帯を貼付する。口縁部の隆帯と下位の隆帯は、縱位の垂下する隆帯により繋がれる。口縁内面にも隆帯が貼付され、指頭による押圧文が施される。器面調整は指ナデで、器壁にはナデの痕と指頭痕が観察される。136の口縁部は平口縁であるが、137は口縁部の上位隆帯に指頭圧



第25図 2種土器分布図

0 10m

痕文が施された結果、口縁部は小さな波状となる。

2 d 類 (第27図129~135・第28図138~160・第29図161~179)

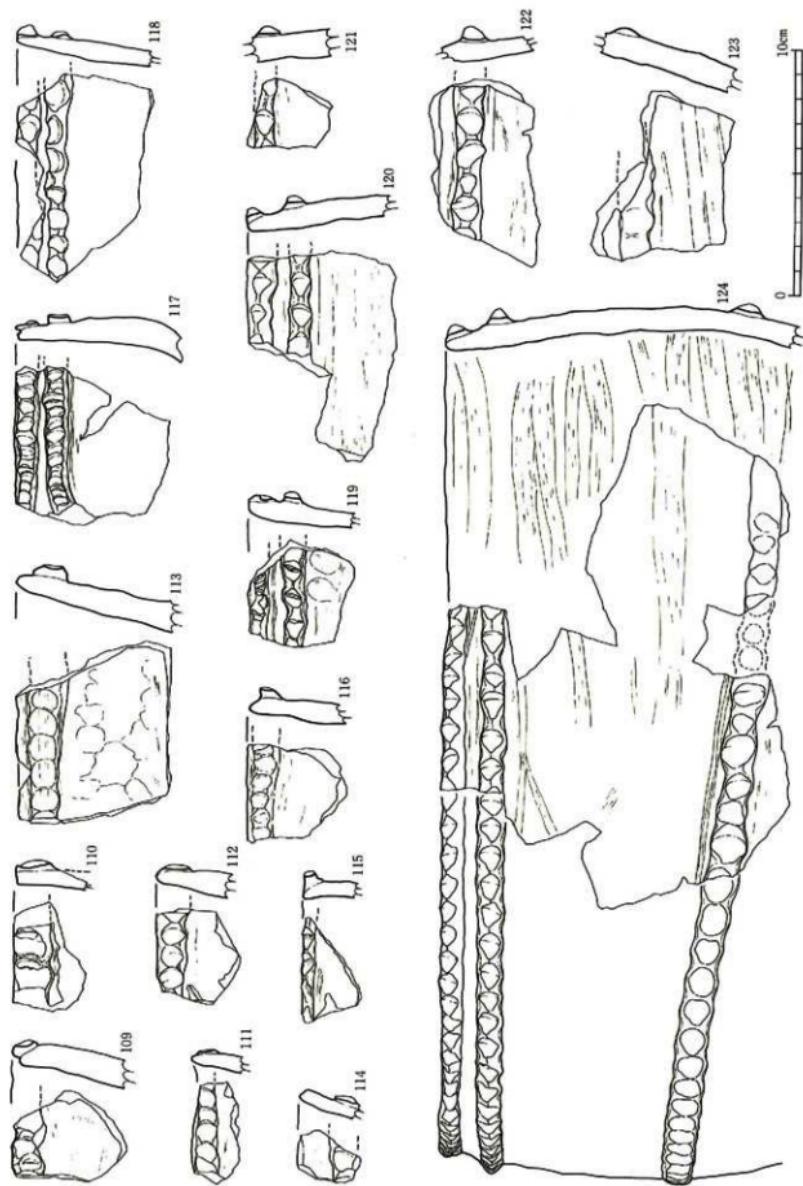
2 a 類~2 c 類の胸部である。基本的には横位の隆帯が貼付される。

130~135・138~168は横位の隆帯が1条貼付される。隆帯は必ずしも口縁部と平行にならず、蛇行し、途中で斜めに貼付されるものもある。130の隆帯は、右側で下降する。135の隆帯は、指ナデにより丁寧に器壁に密着させている。隆帯の上部には、隆帶貼り付けの際に、爪によって付いたと思われる条痕が観察される。140の隆帯は、指頭で押し潰したように器壁に貼付される。142は底部に近い破片である。隆帯はやや蛇行し、押し潰したように貼付される。器壁は18mmと、かなり厚くなっている。143も底部に近い破片である。下端にやや幅の狭い隆帯が貼付される。隆帯より上位で内側に屈曲する。146は屈曲部に隆帯を貼付するもので、隆帯の貼り付けは丁寧である。149の隆帯への施文は一応、指頭によると判断したが、ヘラ状工具による可能性もある。150の隆帯は蛇行し、押し潰したように器壁に貼付される。151の隆帯は厚く、断面は三角形を呈する。153は隆帯の押圧文内に筋が観察され、113と同様に平行な葉脈を持つ植物の葉を指頭に巻き付けて、押圧した可能性がある。154の隆帯の幅は一定せず、指頭で押し潰されている。155は隆帯上に短い間隔で、指頭を押圧している。隆帯は比較的丁寧に貼付される。158~160は、焼成・胎土・色調から同一個体と判断され、3点とも近接して出土している。隆帯の幅は狭く、丁寧に貼付されている。隆帯への指頭による圧痕は横長に規則的に施される。161は隆帯の貼付された部分で屈曲して外反する。163・164では、隆帯の指頭圧痕内に爪痕が比較的明瞭に残される。165の隆帯は幅が広く、断面観察では2条の隆帯が1条の隆帯となったものかどうか判断できなかった。上下2段にわたり指頭による押圧文が施される。166~168は指頭圧痕内に部分的に爪痕が観察される。爪痕は右側の指頭圧痕により変形する。

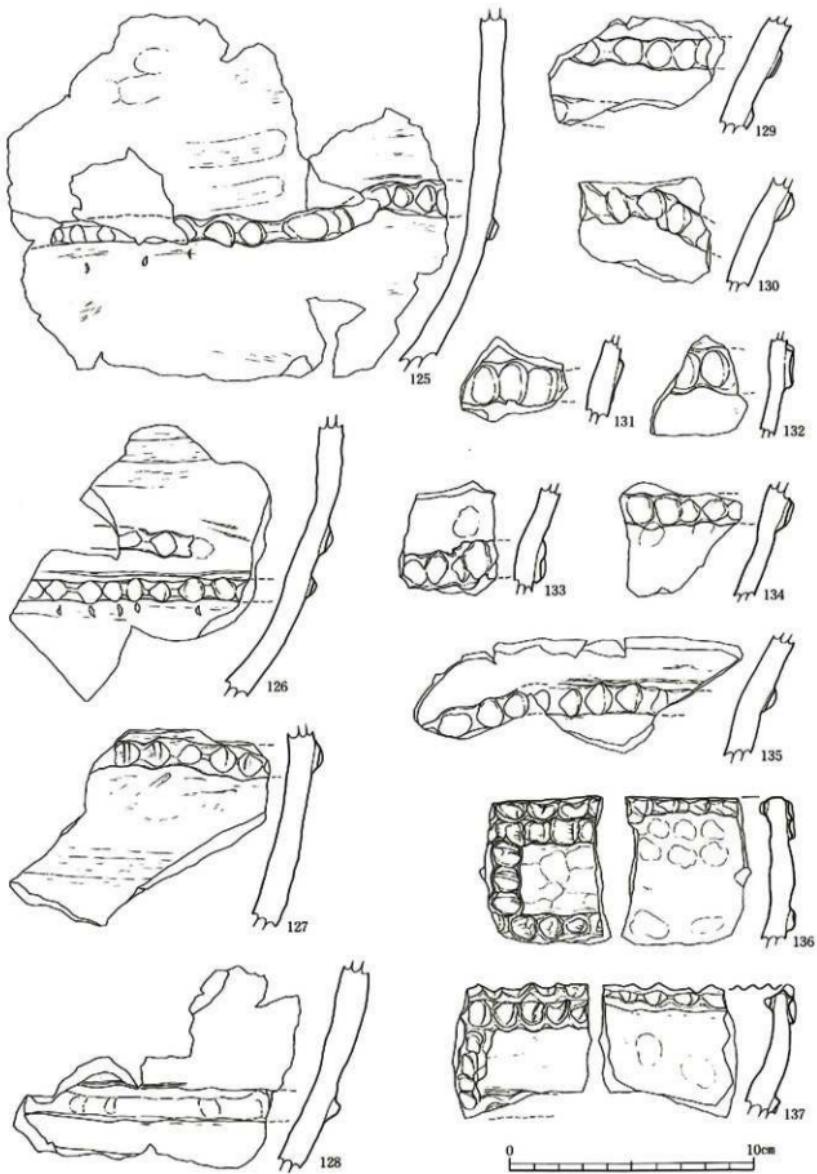
169では、1条の横位の隆帯に密接して、上方に縦位に隆帯が貼付される。2 c 類の胸部破片と思われる。指頭圧痕内の一一部には爪痕が観察される。

129・170~174では、2条の横位の隆帯が貼付される。129・174の2条の隆帯の間隔は広いが、170~173の隆帯は密接している。171・172は焼成・胎土・色調から同一個体と判断される。隆帯上の施文は指頭圧痕のみにより、爪痕は観察されない。他の個体と異なり、指頭による押圧は右から左に施される。

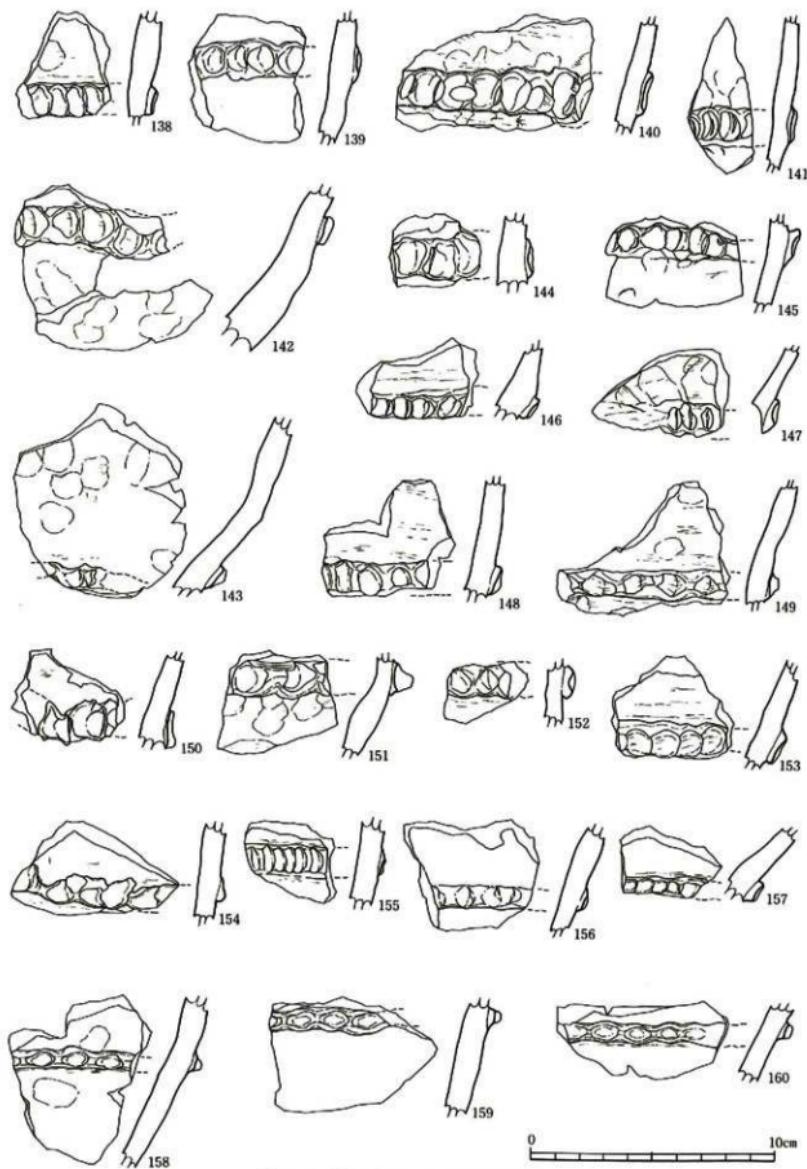
175~179は隆帯に直交あるいは斜めに指を位置し、指頭を押圧する。指頭圧痕はキザミ状となり、指頭圧痕内には縦位あるいは斜位の擦痕が認められる。隆帯の断面は三角形を呈する。



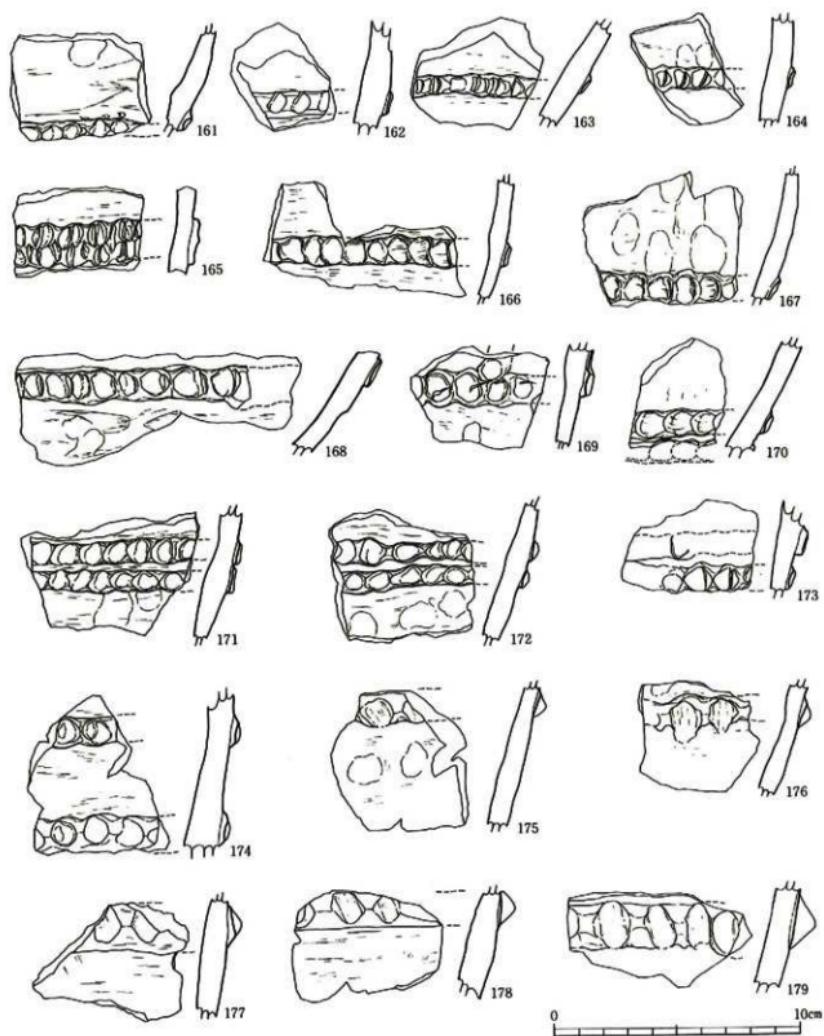
第26図 草創期の土器 2a類・2b類 (1)



第27図 草創期の土器 2b類(2)・2c類・2d類(1)



第28図 草創期の土器 2 d類 (2)



第29図 草創期の土器 2 d類 (3)

第6表 2類土器観察表(1)

| 測区 | 番号 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部位 | 法面番号等 | 胎 土 | 焼成 | 調整・文様 | 色 調 | 造文方向 | 備 考 |
|------|-----|---------|------|----|--------|----|-------|--------|-----------|------|-------|-----|---------|------|
| 第26回 | 109 | 1321 | C-8 | V | 132.36 | a | 口 緑 厚 | 1.01cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 指 | ナ | 内・赤 黄褐色 | 不明 |
| | 110 | 1480 | B-3 | V | 132.27 | a | 口 緑 厚 | 1.0cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・指 指 | ナ | 内・黄 黄褐色 | 左→右 |
| | 111 | 657 | C-9 | V | 132.39 | a | 口 緑 厚 | 0.7cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 内・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 112 | 3624 | C-5 | V | 132.54 | a | 口 緑 厚 | 1.0cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右? |
| | 113 | 905 | C-6 | V | 132.35 | a | 口 緑 厚 | 1.06cm | (小網) | 中子不詳 | 内・指 指 | ナ | 内・灰 黄褐色 | 左←右 |
| | 114 | 836 | C-8 | V | 132.38 | a | 口 緑 厚 | 0.8cm | (角閃石・長石) | 良好 | 内・指 指 | ナ | 内・灰 黄褐色 | 不明 |
| | 115 | 847 | C-7 | V | 132.33 | a | 口 緑 厚 | 1.02cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 不明 |
| | 116 | 971 | C-6 | V | 132.35 | a | 口 緑 厚 | 1.01cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 不明 |
| | 117 | 1011 | C-6 | V | 132.40 | b | 口 緑 厚 | 1.02cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 指 | ナ | 内・灰 黄褐色 | 左←右 |
| | 118 | 1395 | C-4 | V | 132.48 | b | 口 緑 厚 | 0.9cm | (小網) | 中子不詳 | 内・指 指 | ナ | 内・灰 黄褐色 | 不明 |
| 第27回 | 119 | 748 | C-8 | V | 132.36 | b | 口 緑 厚 | 1.03cm | 細 砂 粒 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・茶 黄褐色 | 左←右 |
| | 120 | 288 | C-8 | V | 132.38 | b | 口 緑 厚 | 1.04cm | (砂粒多) | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・暗黃褐色 | 左←右 |
| | 121 | 827 | C-8 | V | 132.39 | b | 胴 部 厚 | 1.04cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・暗黃褐色 | 左←右 |
| | 122 | 91 | C-12 | V | 133.37 | b | 胴 部 厚 | 1.05cm | (小網) | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・淡黃褐色 | 左←右 |
| | 123 | 1681 | C-9 | V | 133.35 | b | 胴 部 厚 | 1.03cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・淡黃褐色 | 不明 |
| | 124 | 287 918 | C-7 | V | 132.35 | b | 口 緑 怪 | 34.0cm | (砂粒多) | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・茶 黄褐色 | 左←右 |
| | 125 | 435 | C-12 | V | 133.45 | b | 胴 部 厚 | 1.03cm | (砂粒多) | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 126 | 288 | C-11 | V | 132.35 | b | 胴 部 厚 | 1.03cm | (砂粒多) | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 127 | 434 | C-12 | V | 133.36 | b | 胴 部 厚 | 1.05cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・暗黃褐色 | 左←右 |
| | 128 | 116 | C-11 | V | 132.36 | b | 胴 部 厚 | 1.04cm | (砂粒多) | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・暗黃褐色 | 不明 |
| 第28回 | 129 | 1085 | C-8 | V | 133.07 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 不明 |
| | 130 | 39 | C-13 | IV | 133.13 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 不明 |
| | 131 | 886 | C-7 | V | 132.95 | d | 胴 部 厚 | 1.0cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 132 | 1760 | C-3 | V | 132.28 | d | 胴 部 厚 | 1.0cm | 細 砂 粒 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 133 | 111 | C-11 | V | 132.88 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | 細 砂 粒 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 不明 |
| | 134 | 1779 | C-10 | V | 132.75 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | 細 砂 粒 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 不明 |
| | 135 | 1390 | C-8 | V | 132.48 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | (砂粒多) | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 右上→下 |
| | 136 | 1681 | C-6 | V | 132.81 | c | 口 緑 厚 | 1.04cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 右上→下 |
| | 137 | 1128 | C-4 | V | 132.75 | c | 口 緑 厚 | 1.04cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 右上→下 |
| | 138 | 1897 | C-5 | V | 132.40 | d | 胴 部 厚 | 1.02cm | (砂粒多) | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・暗黃褐色 | 左←右 |
| 第29回 | 139 | 1890 | C-4 | V | 132.39 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | (砂粒多) | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・暗黃褐色 | 左←右 |
| | 140 | 125 | C-11 | V | 132.91 | d | 胴 部 厚 | 1.01cm | 細 砂 粒 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 141 | 329 | C-9 | V | 132.58 | d | 胴 部 厚 | 1.0cm | 細 砂 粒 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 142 | 1766 | C-3 | V | 132.34 | d | 胴 部 厚 | 1.07cm | 細 砂 粒 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 143 | 1390 | B-4 | V | 132.47 | d | 胴 部 厚 | 1.05cm | 細 砂 粒 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 不明 |
| | 144 | 1264 | C-3 | V | 132.45 | d | 胴 部 厚 | 1.04cm | 細 砂 粒 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・淡黃褐色 | 左←右 |
| | 145 | 886 | C-7 | V | 132.88 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | 細 砂 粒 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・暗黃褐色 | 左←右 |
| | 146 | 1662 | C-2 | V | 132.33 | d | 胴 部 厚 | 1.05cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 147 | 1865 | C-10 | V | 132.39 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | 細 砂 粒 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・白 黄褐色 | 左←右 |
| | 148 | 1636 | C-5 | V | 132.05 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | (砂粒多) | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・赤 黄褐色 | 左→右 |
| 第30回 | 149 | 1642 | C-5 | V | 132.32 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 外・指 指 | ナ | 内・暗黃褐色 | 左←右 |
| | 150 | 1314 | C-7 | V | 132.82 | d | 胴 部 厚 | 1.03cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 外・指 指 | ナ | 内・茶 黄褐色 | 左→右 |

第7表 2類土器観察表(2)

| 施設 | 番号 | 監査号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部位 | 法量(径・高・厚)cm | 粘 土 | 焼成 | 調整・文様 | 色 調 | 施文炳 | 備 考 | |
|--------------|-----|--------------|------------|---|------------------|----|-----|-------------|----------------|----|-------|-----|-----|---------|------------|
| 第 28 回 | 151 | 941 | C-6 | V | 132.74 | d | 胴 部 | 厚 1.06cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左←右 |
| | 152 | 769 | C-8 | V | 132.83 | d | 胴 部 | 厚 1.01cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・外・指 | マ | ツ | 内・淡 黄褐色 | 不 明 |
| | 153 | 1209 | B-4 | V | 132.45 | d | 胴 部 | 厚 1.02cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・赤 橙褐色 | 左←右 |
| | 154 | 1750 | C-11 | V | 132.80 | d | 胴 部 | 厚 1.02cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左→右 内面焦げ付着 |
| | 155 | 960 | C-6 | V | 132.92 | d | 胴 部 | 厚 1.01cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・黑 暗褐色 | 左←右 |
| | 156 | 1215 | C-4 | V | 132.49 | d | 胴 部 | 厚 1.00cm | 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・外・指 | マ | ツ | 内・淡 黄褐色 | 不 明 |
| | 157 | 1646 | C-7 | V | 132.71 | d | 胴 部 | 厚 1.04cm | (小環) 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左←右 |
| | 158 | 789 | C-8 | V | 132.95 | d | 胴 部 | 厚 1.04cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・灰 黄褐色 | 不 明 |
| | 159 | 863 | C-7 | V | 132.95 | d | 胴 部 | 厚 1.05cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・外・指 | マ | ツ | 内・灰 黄褐色 | 不 明 |
| | 160 | 782 | C-8 | V | 133.09 | d | 胴 部 | 厚 1.04cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・灰 黄褐色 | 不 明 |
| 第 29 回 | 161 | 1466 | B-3 | V | 132.39 | d | 胴 部 | 厚 1.00cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・黑 暗褐色 | 左←右 内面焦げ付着 |
| | 162 | 1397 | C-7 | V | 132.82 | d | 胴 部 | 厚 1.02cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 不 明 |
| | 163 | 1774 | C-10 | V | 132.30 | d | 胴 部 | 厚 1.01cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・黑 暗褐色 | 左←右 |
| | 164 | 1798 | B-2 | V | 132.36 | d | 胴 部 | 厚 1.01cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左←右 |
| | 165 | 1659 | C-7 | V | 132.85 | d | 胴 部 | 厚 1.00cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・黑 暗褐色 | 左←右 |
| | 166 | 1037 1333 | C-5 C-7 | V | 132.81 132.78 | d | 胴 部 | 厚 0.9cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・黑 暗褐色 | 左←右 内面焦げ付着 |
| | 167 | 970 | C-6 | V | 132.86 | d | 胴 部 | 厚 0.9cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左←右 |
| | 168 | 1212 | C-11 | V | 132.84 132.75 | d | 胴 部 | 厚 1.02cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左←右 |
| | 169 | 1436 | B-3 | V | 132.35 | d | 胴 部 | 厚 1.02cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左←右 |
| | 170 | 889 | C-7 | V | 132.00 | d | 胴 部 | 厚 1.01cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左←右 |
| 第 30 回 | 171 | 1653 | C-7 | V | 132.72 | d | 胴 部 | 厚 1.03cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左←右 |
| | 172 | 1647 | C-8 | V | 132.83 | d | 胴 部 | 厚 1.02cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 左←右 |
| | 173 | 680 | C-9 | V | 132.90 | d | 胴 部 | 厚 1.02cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・茶 棕褐色 | 左←右 |
| | 174 | 984 | C-6 | V | 132.79 | d | 胴 部 | 厚 1.07cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 不 明 |
| | 175 | 1431 | B-3 | V | 132.81 | d | 胴 部 | 厚 1.01cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・赤 橙褐色 | 不 明 |
| | 176 | 1138 | C-4 | V | 132.61 | d | 胴 部 | 厚 1.01cm | 小 硬 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・黑 暗褐色 | 不 明 内面焦げ付着 |
| | 177 | 1279 | B-4 | V | 132.52 | d | 胴 部 | 厚 1.05cm | (小環) 細 砂 粒 | 不良 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 不 明 |
| | 178 | 1430 | B-3 | V | 132.46 | d | 胴 部 | 厚 1.05cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・茶 棕褐色 | 不 明 |
| | 179 | 1477 1441 | B-3 | V | 132.32 132.45 | d | 胴 部 | 厚 1.09cm | (小環) 細 砂 粒 | 良好 | 内・外・指 | ナ | デ | 内・暗 黄褐色 | 不 明 |

ウ 3類土器 (第30回・180~197)

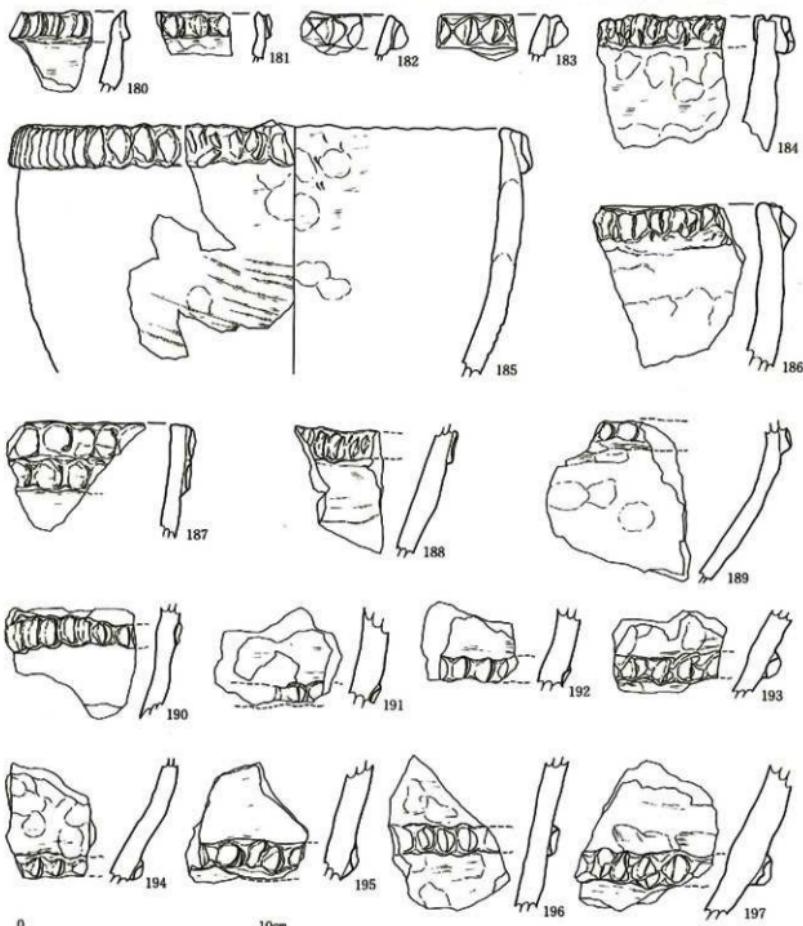
接合後、資料数は23点となった。実測可能な18点を図示した。2区~11区にかけた部分に疎らに分布する。隆帯が貼付される部位は口縁部と胴部である。隆帯は横位に貼付される。施文は隆帯上に指頭によって連続して施される。2類は指頭押圧による施文であるのに対して、3類は指頭刺突による施文である。刺突されたくほみの中には爪痕が明瞭に観察される。指頭を器壁には

ば垂直な角度で刺突して施文されたものが多い。施文は左から右に行なわれるものと、右から左へ行われるもの両方が見られる。

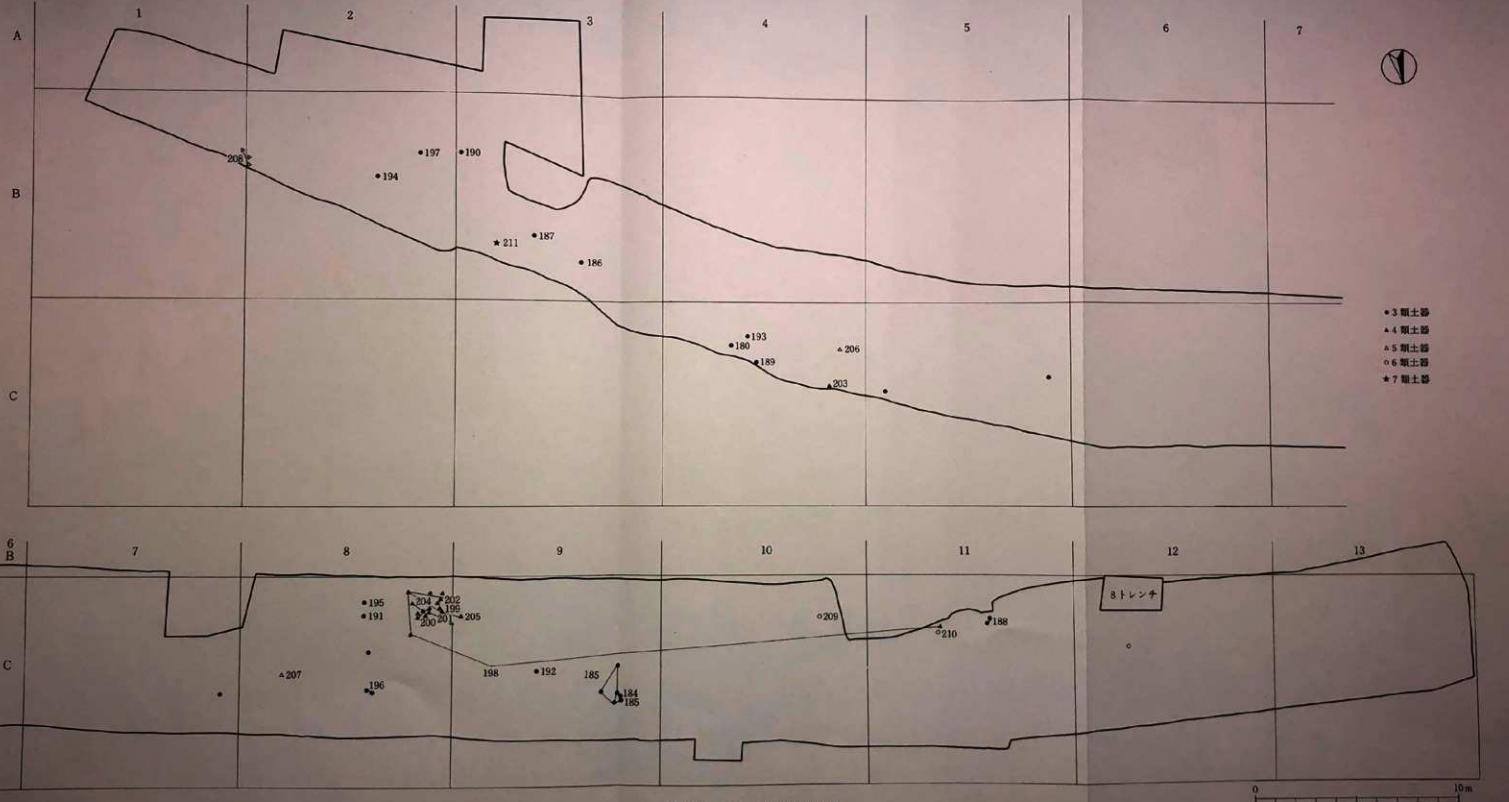
3類は隆帯の位置や数、部位により3a類～3c類に細分した。

3a類 (第31図180～186)

口縁部上端に1条の隆帯を貼付する。180～183の施文は整然としているが、184～186の施文は不規則である。184～186は指頭ではなく、ヘラ状工具による可能性もある。刺突は1段の部分と上下2段に施される部分がある。184・185は焼成・胎土・色調から同一個体と判断される。185の



第30図 草創期の土器 3a類・3b類・3c類



第31図 3種～7種土器分布図

隆帯は口縁部に1条貼付されるだけで、胴部には貼付されない。器面調整は主に指ナデによるが、185の胴部にはヘラ状工具によると思われる条痕が観察される。底部から内清しながら立ち上がった胴部が、そのまま口縁部に至る器形が想定される。

3 b類 (第31図187)

口縁部上端に2条の密接した隆帯を貼付する。3 a類が指先全体で刺突して施文するのに対して、3 b類は、指の腹を押圧した後、指を起こし、爪をほぼ垂直に刺突する。これらの施文作業は一連の動作として実施され、規則的な施文がなされる。先に刺突され、左位置にある爪の刺突は、次の指頭押圧が、右側になされることによって潰れて変形している。

3 c類 (第31図188~197)

3 a類・3 b類の胴部である。188は直線的な断面である。口縁部に近い部分と思われる。189は屈曲部分に隆帯が貼付される。焼成は悪い。190は3 b類の胴部と思われ、指頭圧痕の右端に爪が刺突される。191~197は指頭を刺突後、指先を右側に傾けるという施文作業を行なっている。191・192は器壁の厚い胴部に、やや幅の狭い隆帯が貼付される。193の隆帯の断面は蒲鉾状となる。197は指頭の刺突が2段になる部分がある。

第8表 3類土器観察表

| 辨別 | 年号 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部 位 | 法則性(参考) | 胎 土 | 焼成 | 調整・文様 | 色 調 | 造文方向 | 備 考 | |
|--------------|-----|--------------------------|--------------|---|--------------------------------------|----|-------|----------|----------------------|--------------------|--------------------|-----------------------|--------------------|------|--|
| | 180 | 1183 | C-4 | V | 132.59 | a | 口 縁 | 厚 0.9cm | 石英・長石・角閃石 不良 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・黒 外・褐 色 | 左←右 | | |
| | 181 | —括 | C-5 | V | | a | 口 縁 | 厚 0.7cm | 石英・長石・角閃石 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗黄褐色 外・暗黄褐色 | 左←右 | | |
| | 182 | —括 | C-5 | V | | a | 口 縁 | 厚 1.01cm | (小窓) 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・淡茶褐色 | 左←右 | |
| | 183 | —括 | C-4 | V | | a | 口 縁 | 厚 1.03cm | 石英・長石・角閃石 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗黄褐色 外・暗黄褐色 | 左←右 | | |
| | 184 | 647 | C-9 | V | 132.50 | a | 口 縁 | 厚 1.07cm | 石英・長石・角閃石 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗黄褐色 外・暗黄褐色 | 左→右 | | |
| | 185 | 629 595 605 623 | C-9 | V | 132.89 132.21 132.83 132.89 | a | 口 縁 径 | 21.0cm | 細 砂 級 良好 | 内・ヨコナマ 外・瓶狀工具ナマ | ア 内・暗 外・暗黃褐色 | 左→右 | | | |
| | 186 | 1462 | B-3 | V | 132.34 | a | 口 縁 | 厚 1.06cm | 石英・長石・角閃石 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗 外・暗黃褐色 | 左←右 | | |
| | 187 | 1475 | B-3 | V | 132.42 | b | 口 縁 | 厚 1.0cm | 石英・長石・角閃石 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗黃褐色 | 左→右 | | |
| 第 31 回 | 188 | 130 131 | C-11 C-11 | V | 132.82 132.82 | c | 胴 部 | 厚 1.0cm | 細 砂 粒 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗 外・暗黃褐色 | 不 明 | | |
| | 189 | 1172 | C-4 | V | 132.55 | c | 胴 部 | 厚 1.01cm | (小窓) 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗 外・暗黃褐色 | 左→右? | |
| | 190 | 1811 | B-2 | V | 132.25 | c | 胴 部 | 厚 1.0cm | 石英・長石・角閃石 不良 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗茶褐色 | 左→右? | | |
| | 191 | 745 | C-8 | V | 132.63 | c | 胴 部 | 厚 1.02cm | 長 石 多 い 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗 外・暗黃褐色 | 左→右? | |
| | 192 | 671 | C-9 | V | 132.66 | c | 胴 部 | 厚 1.01cm | 長 石 多 い 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗 外・暗黃褐色 | 左←右 | |
| | 193 | 1182 | C-4 | V | 132.66 | c | 胴 部 | 厚 1.04cm | (小窓) 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗 外・暗黃褐色 | 左→右? | |
| | 194 | 1597 | B-2 | V | 132.22 | c | 胴 部 | 厚 1.02cm | (小窓) 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗 外・暗黃褐色 | 左→右 | |
| | 195 | 741 | C-8 | V | 132.02 | c | 胴 部 | 厚 1.04cm | 石英・角閃石・長石 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・暗 外・暗黃褐色 | 左→右 | | |
| | 196 | 766 767 | C-8 | V | 132.99 132.98 | c | 胴 部 | 厚 1.02cm | 石英・角閃石・長石 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・淡 外・淡黃灰褐色 | 左→右 | | |
| | 197 | 1540 | B-2 | V | 132.91 | c | 胴 部 | 厚 1.09cm | 細 砂 粒 良好 | 内・普 外・普 | 十子 | ア 内・淡 外・淡黃灰褐色 | 左→右? | | |

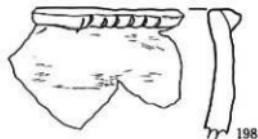
工 4類土器 (第32図198~203・第33図204~205)

接合後、資料数は10点となった。実測可能な8点を図示した。分布はC-8区に集中する。約26m離れた破片が接合した資料(198)もある。底部の形態は平底が想定される。胴部は底部から直線的あるいは、いくぶん内湾気味に外方へ開きながら立ち上がり、口縁部に近い部分で内湾する器形である。土器の最大径は口縁部よりやや下がった位置にある。口縁上端部に1条の隆帯が貼付され、口唇部は平坦となり、外に拡張される。胴部には左下がりの短い隆帯が間隔をおいて貼付される。隆帯の貼り付けは丁寧で、親指と人差し指で挟んで撫で付けられたものと思われる。隆帯の下縁には、隆帯貼り付けの際にについた人差し指の爪痕が連続して残される。

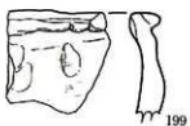
198・199は口縁部である。198は204と同一個体であると思われる。口唇部は平坦で、丁寧に撫でられる。200~203は胴部である。204と205は同一個体の可能性もあるが、爪痕の付き方や胴部隆帯の長さが異なるために別個体とした。204の内面には黒色の炭化物が付着していた。器面調整は丁寧な指ナデである。205の口縁部内面には器面調整時の指頭痕が観察される。

第9表 4類土器観察表

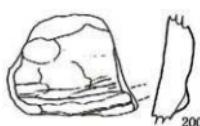
| 編 号 | 番 号 | 出 土 区 | 層 高 m | 類 別 | 部 位 | 法 量(径高厚)cm | 胎 土 | 燒 成 | 調 整・文 様 | 色 調 | 施 文 向 方 | 備 考 |
|--------------|--------|-----------------------------------|-------------|--------|--------|---------------|-----------|--------|------------------------|------------|------------------|--------|
| 第 32 図 | 198 | 736 117 | C-8 C-11 | V | 口 縁 | 厚 1.40cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ 外・指 ナ | 内・黃 外・黑 | 褐色(左~右) | |
| | 199 | 3676 | C-8 | V | 口 縁 | 厚 1.25cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ 外・指 ナ | 内・黃 外・黑 | 褐色(左~右) | |
| | 200 | 728 | C-8 | V | 胴 部 | 厚 1.35cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 ナ 外・指 ナ | 内・黃 外・黑 | 褐色(左~右) | |
| | 201 | 2477 3676 | C-8 | V | 胴 部 | 厚 1.20cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ 外・指 ナ | 内・黃 外・黑 | 褐色(左~右) | 内面捺付脊 |
| | 202 | 1672 1674 | C-8 | V | 胴 部 | 厚 1.10cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 ナ 外・指 ナ | 内・黃 外・黑 | 褐色(左~右) | |
| | 203 | 1104 | C-4 | V | 胴 部 | 厚 1.05cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・指 ナ 外・指 ナ | 内・黃 外・黑 | 褐色(左~右) | |
| 第 33 図 | 204 | 730 731 836 912 1705 | C-8 C-9 | V | 口 縁 | 径 23.5cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・指 ナ 外・指 ナ | 内・黃 外・黑 | 褐色(左~右) | 内面捺付脊 |
| | 205 | 432 729 840 1675 1676 | C-8 | V | 口 縁 | 径 24.2cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 外・指ナデ(ヨコ) 内・指ナデ(ヨコ) | 内・暗 内・暗 | 褐色(左~右) 赤褐色 | |



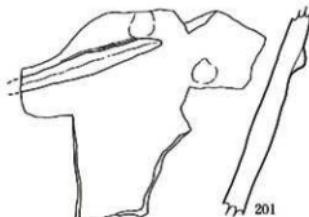
198



199



200



201



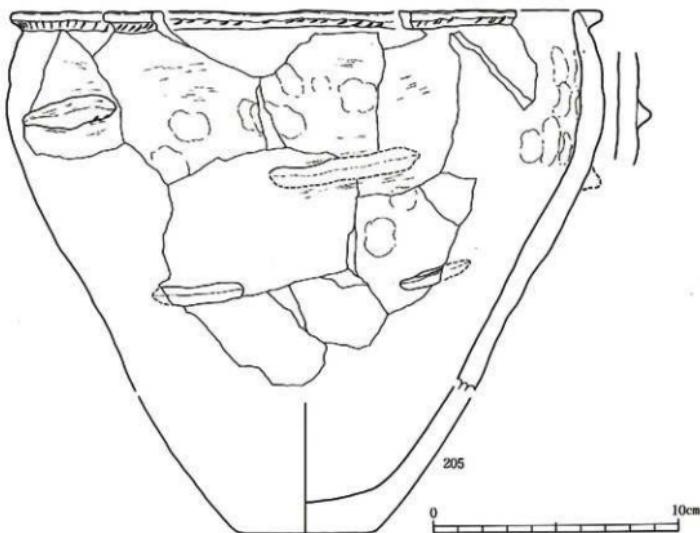
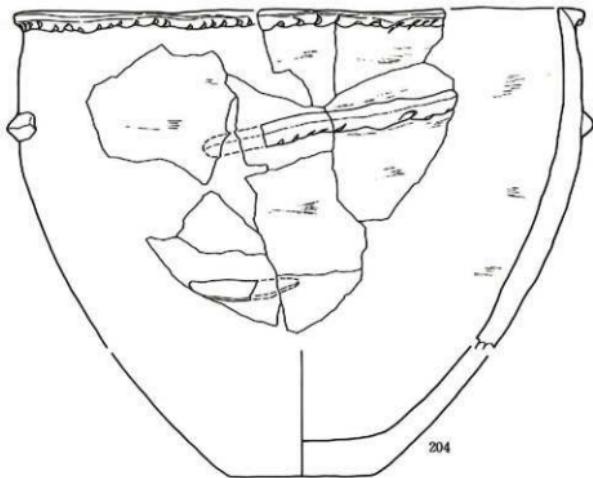
202



203



第32図 草創期の土器 4類 (1)



第33図 草創期の土器 4類 (2)

オ 5類土器 (第34図206~208)

隆帯上に指の腹で連続した押圧を左から右へ施す。押圧の痕は「C」の字状となる。

カ 6類土器 (第34図209・210)

隆帯上に棒状工具による連続した刺突を施す。2点とも胎土に石英が多量に含まれる。

キ 7類土器 (第34図211)

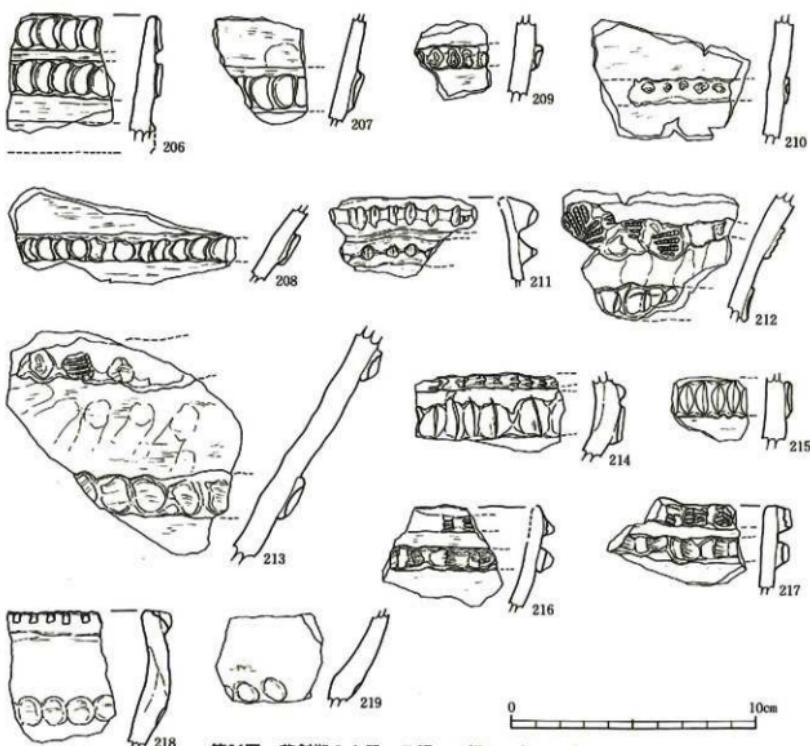
口縁部に2条の隆帯が貼付され、隆帯をヘラで刻んでいる。器壁は薄く、隆帯断面は三角形を呈する。

ク 8類土器 (第34図212~219)

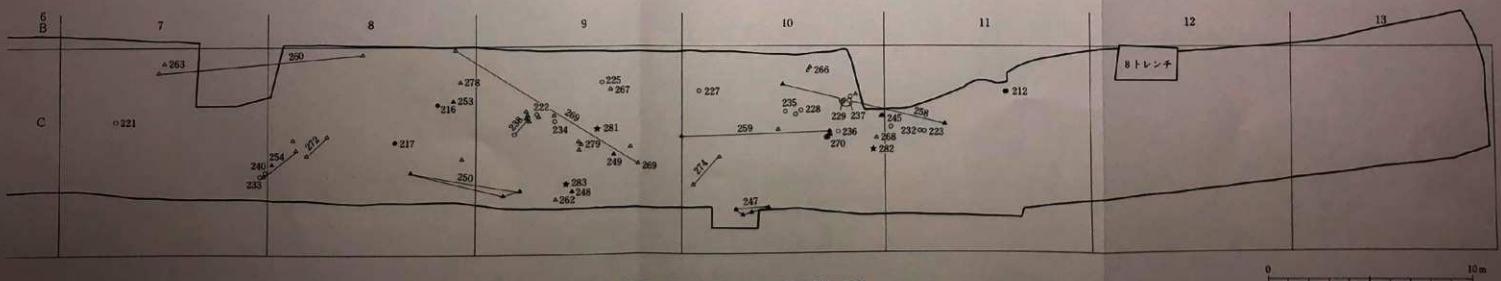
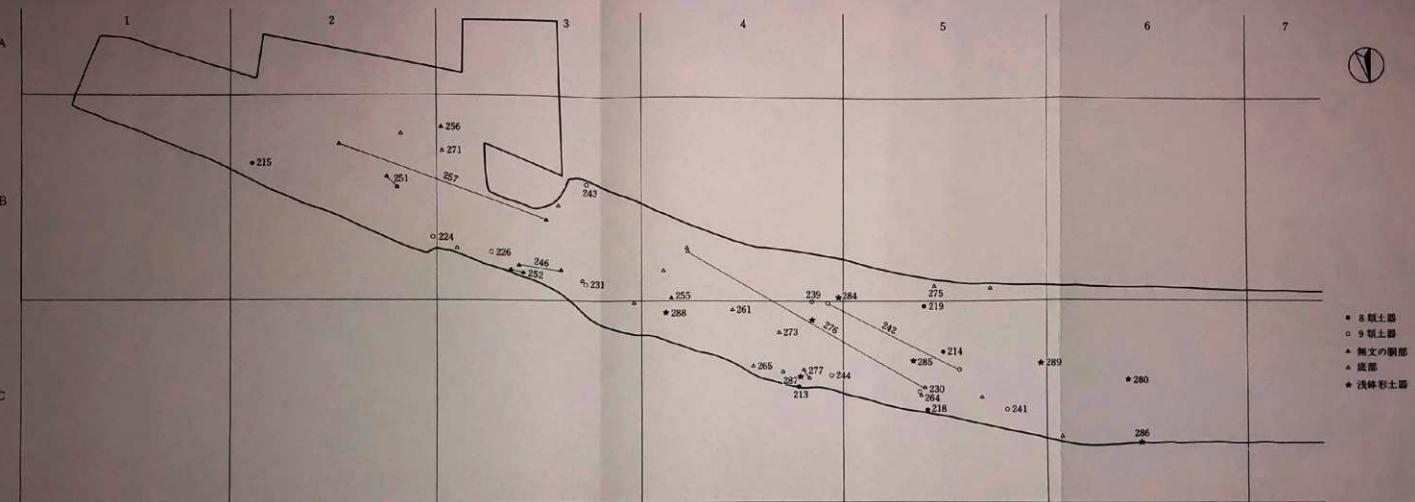
複数の施文具を用いて、隆帯に施文するものを一括した。施文具の組合せにより、8a類~8d類に細分した。

8a類 (第34図212・213)

2条の隆帯を貼付した胸部破片である。上段の隆帯には、貝殻の背面を押圧して施文し、下段の隆帯には指頭を刺突する。指頭の刺突部には爪の圧痕が観察される。



第34図 草創期の土器 5類・6類・7類・8類



第35図 8類・9類 無文の觸部・底部・浅縁

8 b類 (第34図214・215)

215は2条の隆帯が貼付される湾曲した胴部破片である。上段の隆帯には貝殻腹縁部付近を用いた刺突文、下段の隆帯には大きな指頭圧痕文が施される。指頭圧痕内には爪痕が残される。指頭圧痕の大きさから親指によるものと推測される。215の隆帯は1条であるが、214と同様なものと思われる。

8 c類 (第34図216・217)

2条の隆帯が貼付され、上段は貝殻により、下段はヘラ状工具により施文される。

8 d類 (第34図218・219)

218は口縁端部に1条の隆帯を貼付し、口唇部を外側に拡張し、平坦な口唇部とする。口唇部には上方からヘラ状工具によるキザミが施される。隆帯より下がった位置では、器壁に直接、指頭押圧が横位に連続して施される。219は胴部に指頭のみを押圧した破片で、外面には煤が付着する。

第10表 5類～8類土器観察表

| 海図 | 番号 | 断面番号 | 出土区 | 層 | 標高 | 類別 | 部位 | 法線(径高)厚cm | 胎 土 | 焼成 | 調整・文様 | 色 調 | 進文方向 | 備 考 |
|--------------|-----|--------------|------|---|------------------|-----|-----|------------------------------|-----|----------------------|-------------------|-----|--------|-----|
| 第 34 図 | 206 | 1114 | C-4 | V | 132.73 | 5 | 口 縁 | 厚 1.0cm (小窓) 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・指 ナ 外・指 ナ | デ 内・茶 外・暗褐色 | 左→右 | | |
| | 207 | 875 | C-8 | V | 132.98 | 5 | 胴 部 | 厚 1.0cm 石英・角閃石・長石 | 不良 | 内・指 ナ 外・指 ナ | デ 内・暗褐色 | 左→右 | | |
| | 208 | 1567 1568 | B-2 | V | 132.00 132.79 | 5 | 胴 部 | 厚 1.0cm 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・指 ナ 外・指 ナ | デ 内・茶 外・茶褐色 | 左→右 | 内面焦げ付着 | |
| | 209 | 811 | C-10 | V | 132.75 | 6 | 胴 部 | 厚 1.01cm 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 ナ 外・指 ナ | デ 内・赤茶褐色 | 不 明 | | |
| | 210 | 666 | C-11 | V | 132.88 | 6 | 胴 部 | 厚 0.9cm 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・指 ナ 外・指 ナ | デ 内・淡赤褐色 | 不 明 | 風化が激しい | |
| | 211 | 1499 | B-3 | V | 132.33 | 7 | 胴 部 | 厚 1.05cm 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 ナ 外・指 ナ | デ 内・茶褐色 | 不 明 | | |
| | 212 | 130 131 | C-11 | V | 132.82 132.85 | 8 a | 胴 部 | 厚 1.0cm 細 砂 粒 | 良好 | 内・粗いヨコナナ 外・粗いヨコナナ | 内・暗茶褐色 外・淡赤褐色 | 不 明 | | |
| | 213 | 1125 1117 | C-4 | V | 132.77 132.89 | 8 a | 胴 部 | 厚 1.03cm 細 砂 粒 | 不良 | 内・粗いヨコナナ 外・粗いヨコナナ | 内・淡灰茶褐色 外・淡赤褐色 | 左←右 | | |
| | 214 | 2049 | C-5 | V | 132.74 | 8 b | 胴 部 | 厚 1.03cm 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ 外・指 ナ | デ 内・茶褐色 | 左←右 | | |
| | 215 | 1606 | B-2 | V | 132.82 | 8 b | 胴 部 | 厚 1.01cm 石英・角閃石・長石 | 不良 | 内・マ・ツ 外・粗いヨコナナ | 内・暗褐色 | 不 明 | | |
| | 216 | 725 | C-8 | V | 132.91 | 8 c | 胴 部 | 厚 1.02cm 細 砂 粒 | 良好 | 内・ヨコナナ 外・粗いヨコナナ | 内・暗茶褐色 外・暗褐色 | 左←右 | | |
| | 217 | 770 | C-8 | V | 132.98 | 8 c | 胴 部 | 厚 1.02cm 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 ナ 外・指 ナ | デ 内・茶褐色 | 左←右 | | |
| | 218 | 1588 | C-5 | V | 132.79 | 8 d | 口 縁 | 厚 1.03cm 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 ナ 外・指 ナ | デ 内・茶褐色 | 左←右 | | |
| | 219 | 1597 | C-5 | V | 132.80 | 8 d | 胴 部 | 厚 1.01cm 細 砂 粒 | 良好 | 内・マ・ツ 外・指 ナ | 内・茶褐色 外・暗褐色 | 不 明 | 外面煤付着 | |

ケ 9類土器 (第36図220～244)

無文の口縁部を一括した。接合後、資料数は30点となった。実測可能な25点を図示した。3区から11区にかけて疎らに分布する。小破片が多いため、器形の全容がわかる資料は皆無である。器面は指ナデにより調整される。

隆帯の有無により9 a類と9 b類に細分した。

9 a類 (第36図220～241)

隆帯が貼付されない無文の口縁部である。口唇部の形態には、口唇部が丸くなるもの(220・

223・225・229・230・232・233・238~240)、口唇部が細くとがるもの(221・222・227・228・234~236)、口唇部が平坦なものの(224・226・231・237・241)がある。直行する口縁と内湾する口縁がほとんどだが、235のように屈曲して外反するものも見られる。

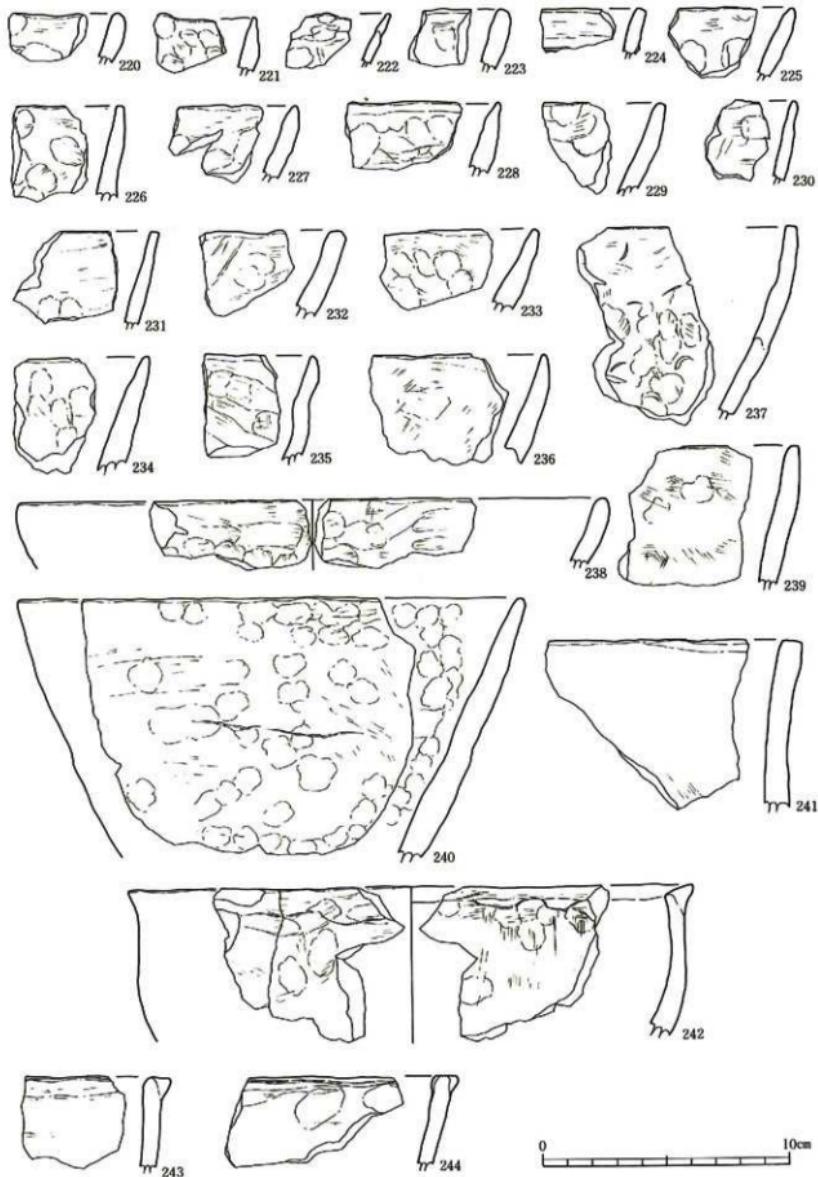
230の内面には炭化物が付着している。237の外面には器面調整の際についたと思われる爪痕が観察される。238は浅鉢形土器の可能性もある。240は底部から口縁部に向かって直線的に開く器形が想定される。241は胎土に石英・角閃石・長石が目立ち、器面調整も丁寧で、ほかの土器とは少し異なっている。

9 b 類 (第36図242~243)

口縁部上端に1条の隆帯を貼付することによって口唇部を外側に拡張し、平坦な口唇部とする。このような口唇部の拡張は4類・8d類にも共通している。隆帯の貼り付けは丁寧で、器面調整は指ナデである。242の口唇部は内傾し、口縁部は内湾する。外面には煤が付着している。4類・8d類の器形に類似している。

第11表 9類土器観察表

| 種別 | 番号 | 型別番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部 位 | 法量(径・高・厚)cm | 胎 土 | 地成 | 調整・文様 | 色 調 | 備 考 |
|----|-----|------|------|---|--------|----|-----|-------------|-----------|----|--------|---------|-----|
| | 220 | 新石器 | C-10 | V | | a | 口 縁 | 厚 0.8cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ | デ 内・黒 種 | 色 |
| | 221 | 303 | C-7 | V | 132.87 | a | 口 縁 | 厚 0.7cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 ナ | デ 内・暗 黄 | 色 |
| | 222 | 407 | C-9 | V | 132.90 | a | 口 縁 | 厚 0.4cm | 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 223 | 476 | C-11 | V | 132.92 | a | 口 縁 | 厚 0.8cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 224 | 1827 | B-2 | V | 132.23 | a | 口 縁 | 厚 0.65cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 225 | 1821 | C-9 | V | 132.48 | a | 口 縁 | 厚 0.7cm | 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 226 | 1476 | B-3 | V | 132.31 | a | 口 縁 | 厚 0.9cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ | デ 内・黒 種 | 色 |
| | 227 | 566 | C-10 | V | 132.41 | a | 口 縁 | 厚 0.75cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ | デ 外・黒 種 | 色 |
| | 228 | 182 | C-10 | V | 132.93 | a | 口 縁 | 厚 0.9cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 ナ | デ 内・黒 種 | 色 |
| | 229 | 509 | C-10 | V | 132.90 | a | 口 縁 | 厚 0.75cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 230 | 1662 | C-5 | V | 132.63 | a | 口 縁 | 厚 0.5cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 ナ | デ 内・黒 種 | 色 |
| 第 | 231 | 1222 | B-3 | V | 132.52 | a | 口 縁 | 厚 0.6cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 ナ | デ 外・黄 種 | 色 |
| 36 | 232 | 477 | C-11 | V | 132.88 | a | 口 縁 | 厚 0.9cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| 図 | 233 | 918 | C-7 | V | 132.98 | a | 口 縁 | 厚 0.9cm | 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 234 | 322 | C-9 | V | 132.02 | a | 口 縁 | 厚 1.0cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ | デ 外・茶 種 | 色 |
| | 235 | 194 | C-10 | V | 132.83 | a | 口 縁 | 厚 0.65cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 236 | 169 | C-10 | V | 132.94 | a | 口 縁 | 厚 0.95cm | 石英・長石・角閃石 | 良好 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 237 | 505 | C-10 | V | 132.79 | a | 口 縁 | 厚 0.8cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 238 | 680 | C-9 | V | 132.93 | a | 口 縁 | 径 12.0cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 ナ | デ 外・暗 黄 | 色 |
| | 239 | 1374 | B-4 | V | 132.41 | a | 口 縁 | 厚 0.8cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 ナ | デ 内・暗 黄 | 色 |
| | 240 | 848 | C-7 | V | 132.95 | a | 口 縁 | 径 20.7cm | 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・指 ナ | デ 内・暗 黄 | 色 |
| | 241 | 1659 | C-5 | V | 132.88 | a | 口 縁 | 厚 1.0cm | 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・工具ナデ | ナ | 色 |
| | 242 | 1045 | C-5 | V | 132.75 | b | 口 縁 | 径 23.0cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 ナ | デ 外・茶 種 | 色 |
| | 243 | 1570 | B-3 | V | 132.18 | b | 口 縁 | 厚 1.1cm | 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・指 ナ | デ 内・黒 種 | 色 |
| | 244 | 1083 | C-4 | V | 132.62 | b | 口 縁 | 厚 1.0cm | 石英・長石・角閃石 | 不良 | 内・指 ナ | デ 内・暗 黄 | 色 |



第36図 草創期の土器 9 a類・9 b類

コ 無文の胸部 (第37図245~254・第38図255~259)

無文の胸部破片を一括した。1類~9類の胸部である。接合後、資料数は896点となった。無文であるために、接合して大きな破片となったものは少ない。そのうち、大きな破片15点を図示した。遺物分布図には図示した15点だけをドットで示した。

器面は指ナデ調整であり、指痕痕や擦痕が観察される。隆帯を持つ土器の胸部であるとすれば、底部から隆帯に至る部分の破片であろう。器壁が厚く、傾きは外傾するものがほとんどである。直線的に外側に開くものや内湾しながら外側に開くものが見られる。

247はC-10区で出土した4点が接合した資料である。焼成・胎土・色調から1類105・106と同一個体であると判断される。土器製作時の粘土の接合部分から水平に剥離している。

249は粘土の接合部分の肥厚が顕著である。

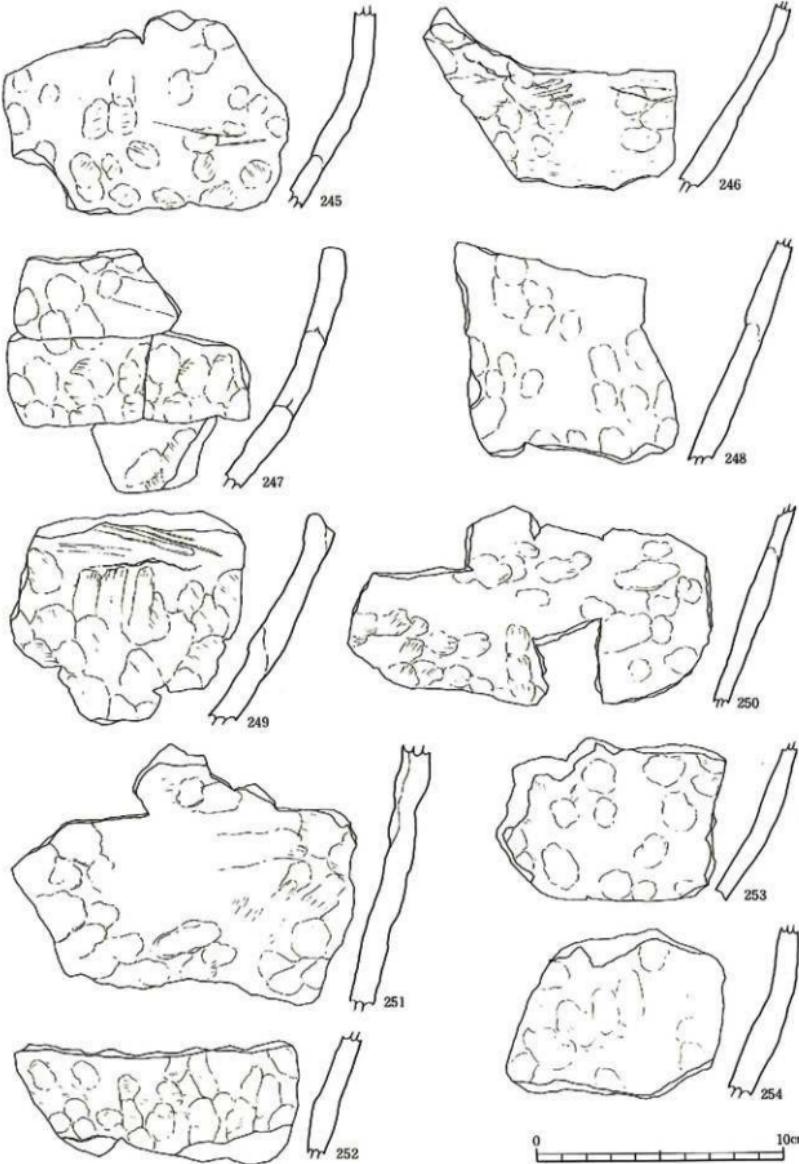
251の器壁は凹凸が著しい。

252の内面には炭化物が付着している。

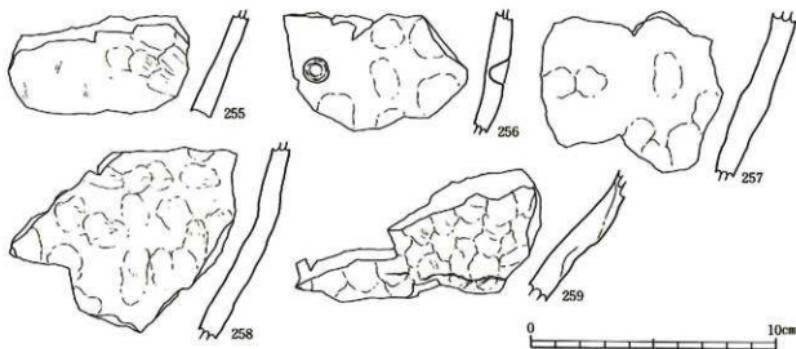
256の外面には焼成後に円形の穿孔がなされる。補修孔の穿孔を途中で中止したものと思われる。

第12表 胸部観察表

| 群別 | 番号 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部位 | 計量(全高×厚) | 胎 土 | 燒 成 | 調整・文様 | 色 調 | 備 考 |
|--------------|-----|--------------------|-------------|---|------------------|-----|----------|----------|-----|------------|--------|------------|-----|
| 第 37 回 | 245 | 1752 1756 | C-11 | V | 132.94 132.94 | 胴 部 | 厚 0.9cm | 横長輪削輪 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・暗 外・指 | 褐色 |
| | 246 | 1472 1571 | B-3 | V | 132.34 132.32 | 胴 部 | 厚 1.0cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・暗 外・指 | 褐色 |
| | 247 | 245 508 591 597 | C-10 | V | 132.13 132.08 | 胴 部 | 厚 1.1cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・暗 外・指 | 褐色 |
| | 248 | 376 | C-9 | V | 132.93 | 胴 部 | 厚 1.05cm | 横長輪削輪 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・暗 外・指 | 褐色 |
| | 249 | 367 | C-9 | V | 132.93 | 胴 部 | 厚 1.3cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・暗 外・指 | 褐色 |
| | 250 | 794 454 | C-8 | V | 133.01 133.02 | 胴 部 | 厚 0.9cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・暗 外・指 | 褐色 |
| | 251 | 1538 1539 | B-2 | V | 132.22 132.21 | 胴 部 | 厚 1.4cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・淡 外・指 | 褐色 |
| | 252 | 1471 1472 | B-3 | V | 132.30 132.43 | 胴 部 | 厚 0.85cm | 横長輪削輪 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・暗 外・指 | 褐色 |
| | 253 | 720 | C-8 | V | 132.98 | 胴 部 | 厚 0.85cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・淡 外・指 | 褐色 |
| | 254 | 915 | C-8 | V | 132.98 | 胴 部 | 厚 1.2cm | 細 砂 粒 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・黄 外・指 | 褐色 |
| 第 38 回 | 255 | 3418 | B-4 | V | 132.51 | 胴 部 | 厚 0.9cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・黑 外・指 | 褐色 |
| | 256 | 1791 | B-3 | V | 132.34 | 胴 部 | 厚 1.0cm | 横長輪削輪 | 不良 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・暗 外・指 | 褐色 |
| | 257 | 1551 1558 | B-2 B-3 | V | 132.18 132.25 | 胴 部 | 厚 1.0cm | 横長輪削輪 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・黑 外・指 | 褐色 |
| | 258 | 211 | C-10 | V | 132.43 132.46 | 胴 部 | 厚 0.9cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・暗 外・指 | 褐色 |
| | 259 | 352 358 | C-9 C-10 | V | 132.92 133.00 | 胴 部 | 厚 1.05cm | 細 砂 粒 | 良好 | 内・指 外・指 | ナ ナ | 内・黄 外・指 | 褐色 |



第37図 草創期の土器 無文の胴部（1）



第38図 草創期の土器 無文の胴部（2）

キ 底部 （第39図260～279）

1類～10類のいずれの底部か不明なものを一括した。接合後、資料数は41点となった。20点を図示した。器面は指ナデ調整である。底部はa類～d類に細分した。

a類 （第39図260～272）

平底である。底部から胴部への立ち上がりは、緩やかなものが多いが、263・266は急な角度で立ち上がる。底部の立ち上がりが緩やかなことから、底部径は小さいが、口縁部径は大きな器形が想定される。

264・269～272は胴部の厚さに比較し、底部の器壁は厚い。特に271・272の底部は粘土を層状に貼りつけて厚くなっている。底部径が小さいので土器の安定性を目的としたものかも知れない。

266は破片上端に横位の隆帯が貼付されている。隆帯上への施文は指頭によるものと思われるが、明瞭でない。接地面付近には、器面調整の際に付いたと思われる爪痕が観察される。

269の接地面にも爪痕が観察される。

b類 （第39図277・278）

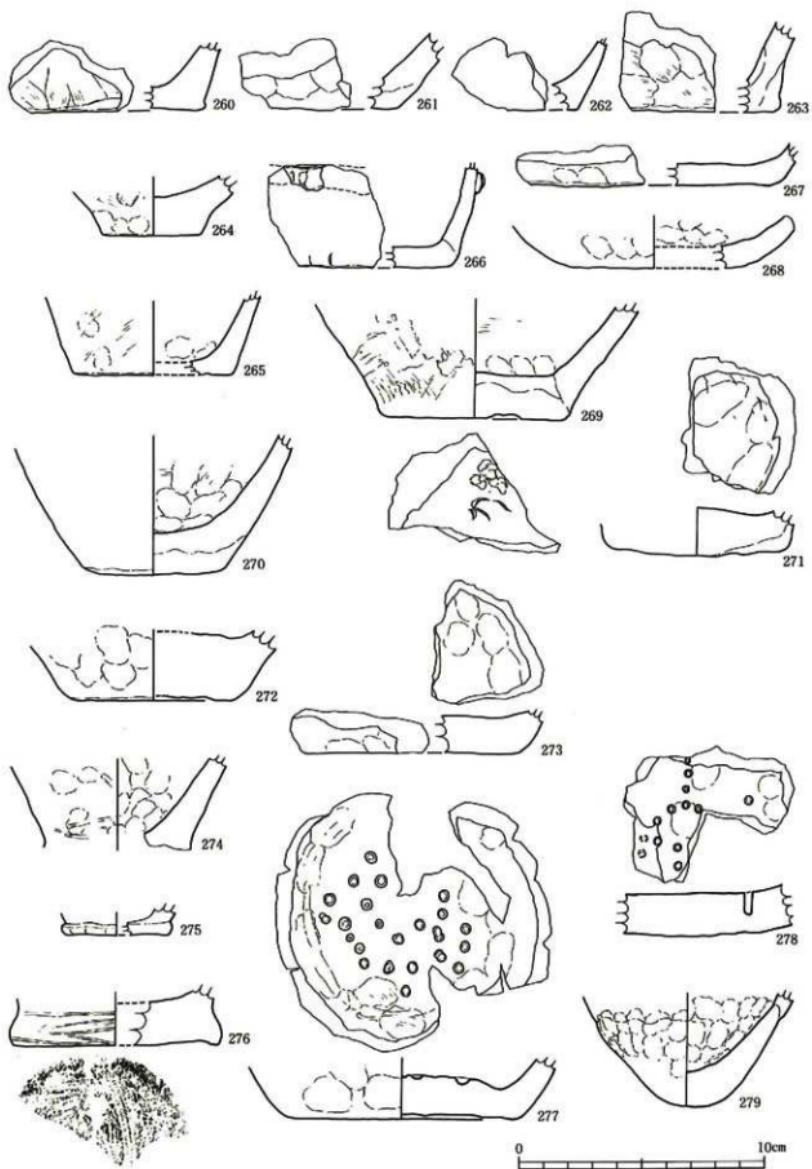
平底で、内面に刺突が施される。断面が丸い棒か竹管を施文具としている。刺突は不規則で、モチーフも不明である。277の刺突は浅い（2～4mm）が、278では深く（8～9mm）刺突されている。器面や隆帯に同様な刺突を施すのは、6類の2点だけである。刺突を単なる文様としてとらえると、目に触れない内面に施文する意図が不明である。また、何らかの機能を持つものとしでとらえると、土器の使用に際してどのような機能をもつかも不明である。

c類 （第39図274～276）

平底で、接地面が外へ広がる。274は接地面を欠くが、外へ広がるものと思われる。275は円盤の上に粘土を積み上げた様子が観察される。276の接地面には、貝殻によると思われる条痕が観察される。

d類 （第39図279）

1点だけ出土した尖底である。てづくねで整形され、指頭痕が明瞭である。



第39図 草創期の土器 底部

第13表 底部観察表

| 測定 | 番号 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部位 | 土壤(基・高層)cm | 胎土 | 焼成 | 調整・文様 | 色調 | 備考 |
|--------------|-----|----------------------|------------|---|----------------------------|----|----|---------------------------------|-----------|----|-----------------|-------------------|-------|
| 第 39 回 | 260 | 885 | C-7 | V | 132.93 | a | 底部 | 厚 0.9cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・淡黄褐色 外・暗褐色 | |
| | 261 | 1191 | C-4 | V | 132.56 | a | 底部 | 厚 1.03cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指ナ 外・マ | 内・淡黄褐色 外・暗黃褐色 | |
| | 262 | 661 | C-9 | V | 132.91 | a | 底部 | 厚 1.02cm | 細砂粒 | 不良 | 内・マ 外・マ | ツ内・赤褐色 ツ外・暗黃褐色 | |
| | 263 | 1288 | C-7 | V | 132.80 | a | 底部 | 厚 1.03cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・淡黄褐色 外・黃褐色 | |
| | 264 | 1061 | C-5 | V | 132.65 | a | 底部 | 厚 1.0cm 径 4.0cm 石英・角閃石・長石 | 良好 | | 内・指ナ 外・指ナ | 内・黑褐色 外・茶褐色 | |
| | 265 | 1136 | C-4 | V | 132.56 | a | 底部 | 径 6.4cm | 石英・角閃石・長石 | 良好 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・赤褐色 外・黑褐色 | |
| | 266 | 518 | C-10 | V | 132.76 | a | 底部 | 厚 0.85cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指ナ 外・マ | 内・暗黃褐色 ツ外・赤褐色 | 隆帶有 |
| | 267 | 662 | C-9 | V | 132.84 | a | 底部 | 厚 0.9cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・黃褐色 外・暗褐色 | |
| | 268 | 1738 | C-10 | V | 132.81 | a | 底部 | 径 6.5cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・黑褐色 外・暗黃褐色 | |
| | 269 | 6689 644 | C-8 C-9 | V | 132.07 132.21 | a | 底部 | 厚 1.9cm 径 8.0cm | 細砂粒 | 不良 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・暗黃褐色 外・赤褐色 | 外面に爪痕 |
| | 270 | 286 297 699 531 | C-10 | V | 132.97 132.94 132.97 | a | 底部 | 径 5.9cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・暗褐色 外・暗褐色 | |
| | 271 | 1810 | B-3 | V | 132.28 | a | 底部 | 逐 7.7cm 厚 1.95cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・淡黃褐色 外・暗褐色 | |
| | 272 | 755 824 | C-8 | V | 132.93 132.96 | a | 底部 | 厚 2.7cm 径 6.5cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・黃褐色 外・赤褐色 | |
| | 273 | 1183 | C-4 | V | 132.57 | a | 底部 | 径 10.0cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・淡黃褐色 外・淡黃褐色 | |
| | 274 | 273 642 | C-10 | V | 132.90 132.96 | c | 底部 | 厚 1.8cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・淡黃褐色 外・黃褐色 | |
| | 275 | 1649 | B-5 | V | 132.48 | c | 底部 | 径 4.4cm | 細砂粒 | 不良 | 内・制落 外・制落 | 内・黒褐色 外・黃褐色 | |
| | 276 | 1227 1266 1253 | H-4 C-5 | V | 132.63 132.57 | c | 底部 | 径 8.6cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 内・マ 外・指ナ(貝葉) | 内・暗黃褐色 外・黃褐色 | |
| | 277 | 1105 1194 | C-4 | V | 132.62 132.66 | b | 底部 | 径 9.4cm | 石英・角閃石・長石 | 不良 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・暗黃褐色 外・暗黃褐色 | 内面に刺突 |
| | 278 | 726 | C-8 | V | 132.90 | b | 底部 | 厚 1.7cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・暗灰褐色 外・黃灰色 | 内面に刺突 |
| | 279 | 383 655 | C-9 | V | 132.90 132.91 132.91 | d | 底部 | 厚 1.04cm | 細砂粒 | 良好 | 内・指ナ 外・指ナ | 内・暗黃褐色 外・暗黃褐色 | 尖底 |

② 浅鉢形土器 (第40図280~289)

浅鉢形土器と判断したものは10点である。小破片のため、器形の全容は不明である。器壁の薄いものが多い。点数が少ないため、類別はしなかったが、隆帯のない口縁部(280~283)、隆帯のある口縁部(284~286)、底部(287~288)に大別できる。

280~282は隆帯のない口縁部で、器面は指ナデ調整される。280・281は内溝するが、282は直線的に外側に開いている。

283は口縁上端部の内面に1段の粘土を貼り付ける。粘土を張り付けた部分で強く内側に屈曲している。

284は口縁上端より少し下がった位置に隆帯を貼り付け、指頭圧痕を施す。

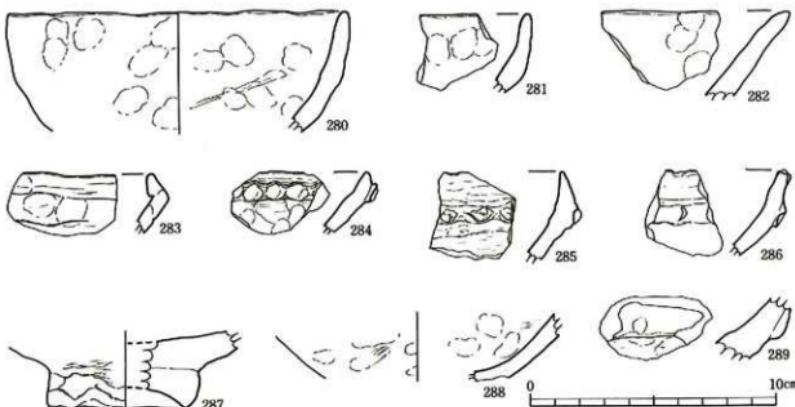
285は隆帯を丁寧に貼り付け、断面三角形の肥厚した口縁部とし、稜の部分を指頭で押圧する。口唇部は尖り、指による押さえらしきものが観察される。

286は口縁上端より下がった位置に隆帯を貼付し、指頭で浅く刺突する。刺突された部分には爪痕が観察される。口唇部には指による押さえらしきものが観察される。

287は上げ底の底部である。

288も底部だが、接地部分が剥落する。

289は底部に近い部分で、横位に隆帯が貼付される。隆帶上は無文である。



第40図 草創期の土器 浅鉢形土器

第14表 浅鉢形土器観察表

| 編號 | 番号 | 鑑定番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 類別 | 部 位 | 測量(高さ)cm | 胎 土 | 焼 成 | 色 調 | 施文方向 | 備 考 |
|--------------|-----|------|------|---|--------|-------|----------|----------------|--------|-----|-----------------|------|--------|
| 第 40 図 | 280 | 983 | C-6 | Y | 132.76 | 口 線 | 径 14.0cm | 石英・角閃石・長石 不良 | 内・指 接地 | ナ | 内・黒暗 外・暗褐色 | 接地 | 内面焦げ付着 |
| | 281 | 286 | C-9 | Y | 132.98 | 口 線 厚 | 0.9cm | 細 砂 粒 不良 | 内・指 接地 | ナ | 内・黒暗 外・暗褐色 | 接地 | |
| | 282 | 1741 | C-10 | Y | 132.92 | 口 線 厚 | 0.9cm | 石英・角閃石・長石 良好 | 内・指 接地 | ナ | 内・暗褐色 外・茶褐色 | 接地 | |
| | 283 | 412 | C-9 | Y | 132.95 | 口 線 厚 | 0.7cm | 細 砂 粒 良好 | 内・指 接地 | ナ | 内・暗褐色 外・黒褐色 | 接地 | |
| | 284 | 1622 | B-4 | Y | 132.57 | 口 線 厚 | 0.9cm | 石英・角閃石・長石多い 良好 | 内・指 接地 | ナ | 内・黄褐色 外・暗褐色 | 接地 | |
| | 285 | 1064 | C-5 | Y | 132.75 | 口 線 厚 | 1.2cm | 細 砂 粒 良好 | 内・指 接地 | ナ | 内・黄褐色 外・暗褐色 | 接地 | |
| | 286 | 138 | C-6 | Y | 132.88 | 口 線 厚 | 0.9cm | 石英・角閃石・長石多い 良好 | 内・指 接地 | ナ | 内・淡灰褐色 外・暗褐色 | 接地 | |
| | 287 | 1173 | C-4 | Y | 132.68 | 底 部 径 | 5.6cm | 細 砂 粒 不良 | 内・指 接地 | ナ | 内・黄褐色 外・暗褐色 | 接地 | |
| | 288 | 1213 | C-4 | Y | 132.47 | 底 部 厚 | 0.4cm | 細 砂 粒 良好 | 内・指 接地 | ナ | 内・赤褐色 外・暗褐色 | 接地 | |
| | 289 | 1624 | C-5 | Y | 132.85 | 副 部 厚 | 1.35cm | 石英・長石・角閃石 不良 | 内・指 接地 | ナ | 内・黒褐色 外・赤褐色 | 接地 | |

(2) 石器

確認調査時の遺物も含めて、約320点の石器が出土した。石器の器種としては石鎌5点、石斧10点、スクレーパー2点、石皿14点、磨石・敲石・凹石類242点、剥片類32点が見られる。石器は調査地区のはば全域に分布するが、調査地区の端部にあたる1区や13区では分布が疎らで、土器の分布状況と同じ傾向である。器種の違いによる分布の偏りは、特に見られないが、磨石・敲石類は4区と5区に比較的多く分布している。

石器の石材には、島内で産出する砂岩と粘板岩が多用されている。小型の剥片石器の石材には、鉄石英、粘板岩、チャートが見られる。島内で産出しない黒曜石や安山岩などの火成岩を素材とする石器は出土していない。これまでの発掘成果によれば、本土から種子島に黒曜石等の火成岩が石器の素材として供給されるのは、縄文時代早期以後であるといえるようである。石器組成をみると、狩猟具である石鎌に比較し、調理加工具である石皿・磨石類が多く出土している。

① 石鎌 (第42図290~293)

石鎌は5点出土したが、1点は取り上げ前に粉失してしまった。参考のために記憶の範囲内で形状と材質について述べたい。粉失した石鎌は粘板岩製の磨製石鎌未製品で、基部が欠損していた。表裏面は平坦に研磨されているが、刃部は未研磨で、表裏面からの刃部調整剝離面が残されたままの状態であった。

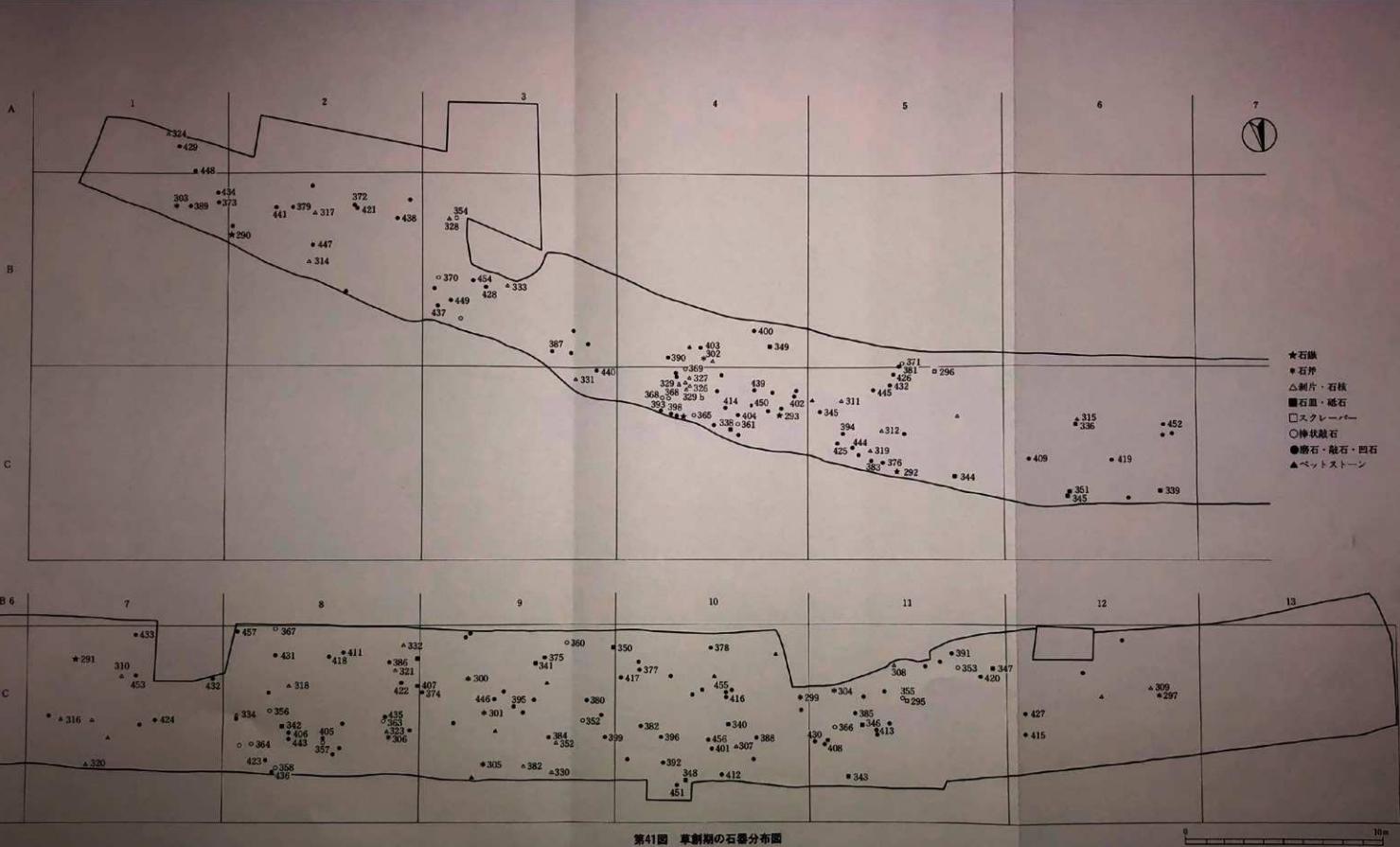
290は、B-2区で出土した鉄石英の剥片を素材とする打製石鎌で、基部は緩やかに湾曲する。長さ2.0cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.72gである。291は、C-7区で出土した鉄石英の剥片を素材とする打製石鎌である。290よりも石質は粗悪である。基部の抉りは浅い。長さ1.1cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重さ0.78gである。292は、C-5区で出土したシルト質頁岩の剥片を素材とする打製石鎌である。基部から側縁部は直角に近い角度で立ち上がる。長さ2.4cm、幅1.1cm、厚さ0.6cm、重さ1.63gである。293は、C-4区で出土した粘板岩の剥片を素材とする磨製石鎌である。発掘時に基部を若干欠損したが、完形品である。両側縁部は先端部から湾曲しながら基部に向かい、裾部が広がる。長さ3.2cm、幅1.9cm、厚さ0.2cm、重さ1.03gである。

② 研磨痕のある剥片 (第42図294)

C-4区で出土した粘板岩の剥片で、表面に研磨痕が観察される。石材は293の磨製石鎌と同質である。磨製石鎌の製作途中の欠損品と思われる。長さ1.6cm、幅3.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.70gである。

③ スクレーパー (第42図295・296)

2点出土した。295は、C-11区で出土したチャートの剥片を素材とするスクレーパーである。節理面の平坦面を打面とし、素材剥片の下縁に施された急角度の剝離で刃部を作出する。長さ1.8cm、幅2.7cm、厚さ0.7cm、重さ5.0gである。296は、C-5区で出土した横長の粘板岩剥片を素材とするスクレーパーである。石材は293の磨製石鎌等と同様である。打点と打面は、表面から裏面方向への剝離により取り去られているが、素材剥片の形状をほぼそのまま残している。表裏面共に使用痕とは異なる擦痕が観察される。素材剥片の湾曲した下縁に浅い剝離を施すことにより刃部を作出する。長さ4.2cm、幅8.4cm、厚さ0.75cm、重さ25gである。

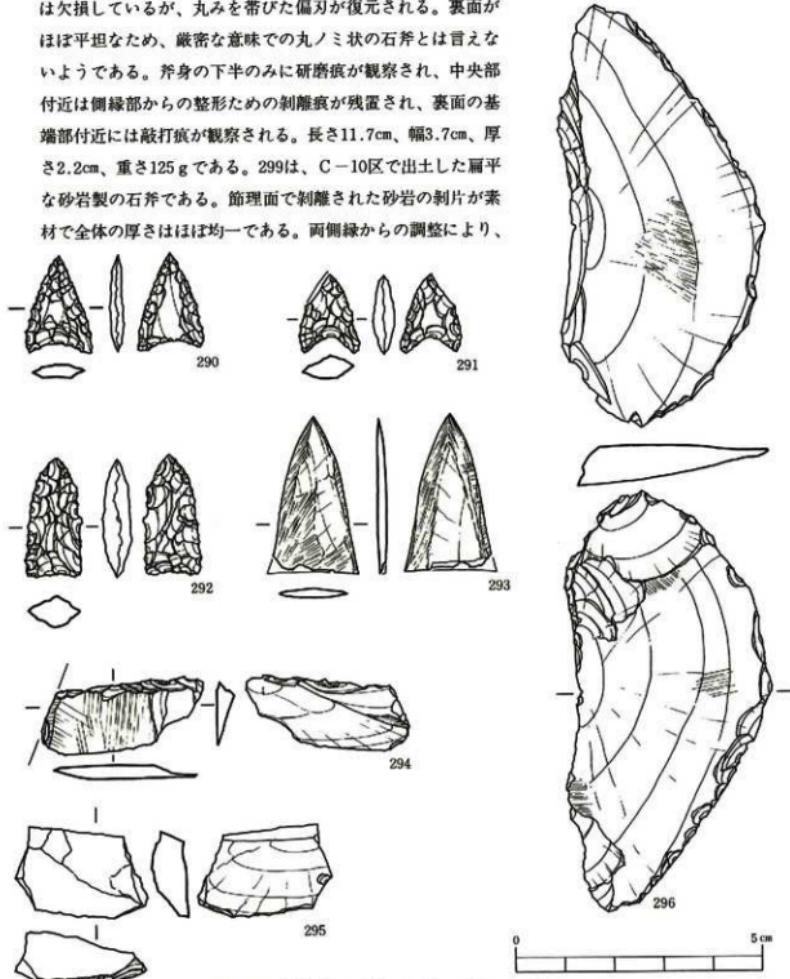


第41図 車刺期の石器分布図

④ 石斧 (第43図297~300・第44図301~306)

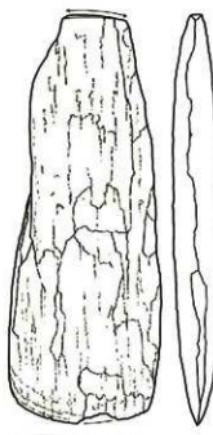
10点出土した。297は、C-12区で出土した粘板岩製の石斧である。表面の風化が著しく、縱方向のひび割れが観察される。研磨痕は剥落しているが、刃部と器面の大部分に研磨が施されていたものと推定される。基端面に横方向の研磨痕が観察される。長さ16.5cm、幅6.2cm、厚さ1.8cm、重さ260gである。298は、B-3区で出土した粘板岩製の片刃石斧である。刃部の一部は欠損しているが、丸みを帯びた偏刃が復元される。裏面が

ほぼ平坦なため、厳密な意味での丸ノミ状の石斧とは言えないようである。斧身の下半のみに研磨痕が観察され、中央部付近は側縁部からの整形ための剝離痕が残置され、裏面の基端部付近には敲打痕が観察される。長さ11.7cm、幅3.7cm、厚さ2.2cm、重さ125gである。299は、C-10区で出土した扁平な砂岩製の石斧である。節理面で剝離された砂岩の剥片が素材で全体の厚さはほぼ均一である。両側縁からの調整により、

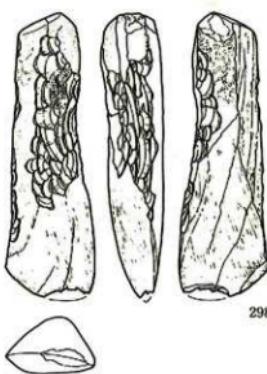


第42図 草創期の石器 石鎌・スクレーバー

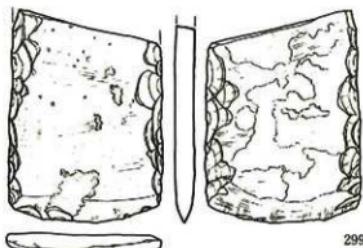
長方形に整形され、表裏面にわずかな研磨痕が観察される。刃部はやや丸みを帯び、風化しているものの横方向と縦方向の研磨痕が観察される。長さ7.95cm、幅6.3cm、厚さ0.8cm、重さ85gである。300は、C-9区で出土した粘板岩製の磨製石斧である。基端部と左側縁部を欠損する。刃部はやや丸みを帯び、刃部形態は片刃に近い。器面全体が研磨により調整されていたと思われる。右側縁部には抉りが認められ、斧身を柄に装着するための加工であると推定される。長さ7.5cm、幅4.0cm、厚さ1.2cm、重さ55gである。301は、C-9区で出土した砂岩製の石斧である。表面の風化が著しいため、明確な調整痕は観察されないが、敲打と研磨により整形されたものと思われる。刃部の一部を欠損するが、刃部断面は両刃の形状を呈する。両側縁部の基端部付近にわずかな抉りが認められる。長さ11.9cm、幅4.7cm、厚さ2.4cm、重さ235gである。302は、B-4区で出土した砂岩製の石斧である。刃部を欠損するが、断面形から刃部形態は片刃が復元できる。素材は自然砾と思われ、表面の風化が著しいために明確な研磨痕などは観察



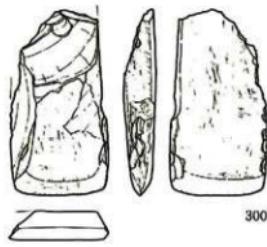
297



298



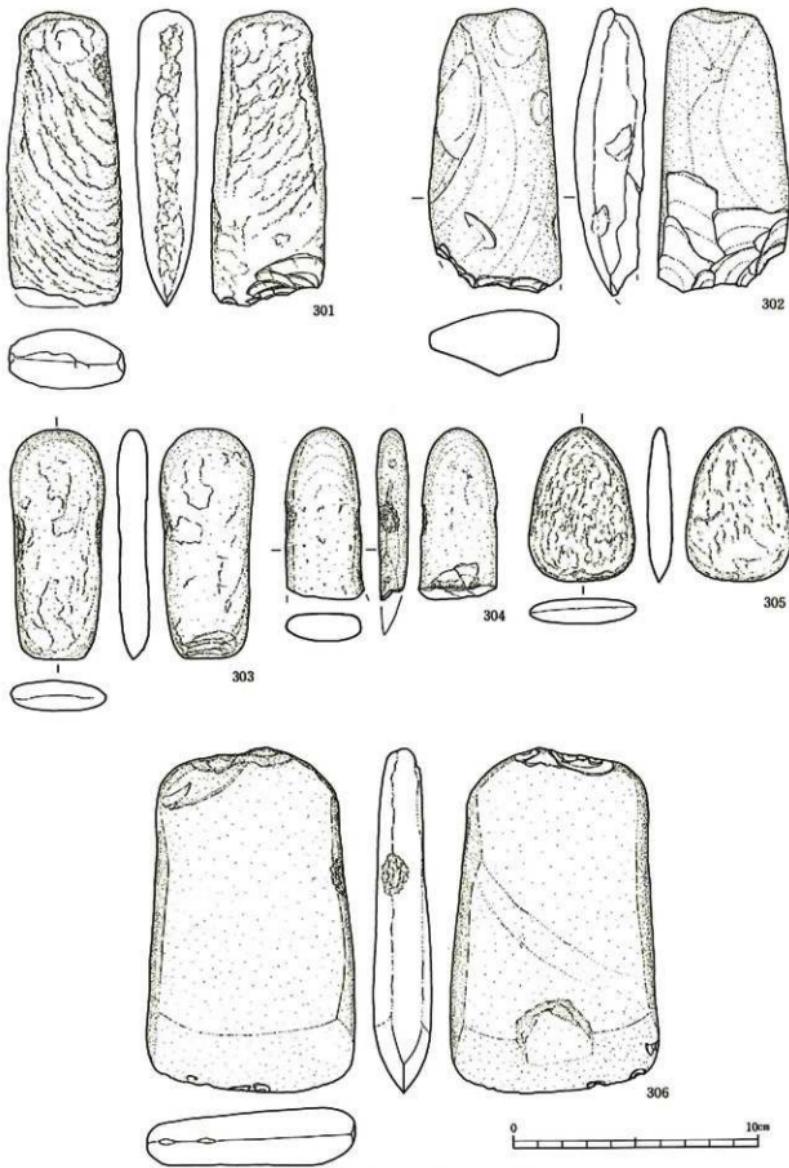
299



300



第43図 草創期の石器 石斧(1)



第44図 草創期の石器 石斧（2）

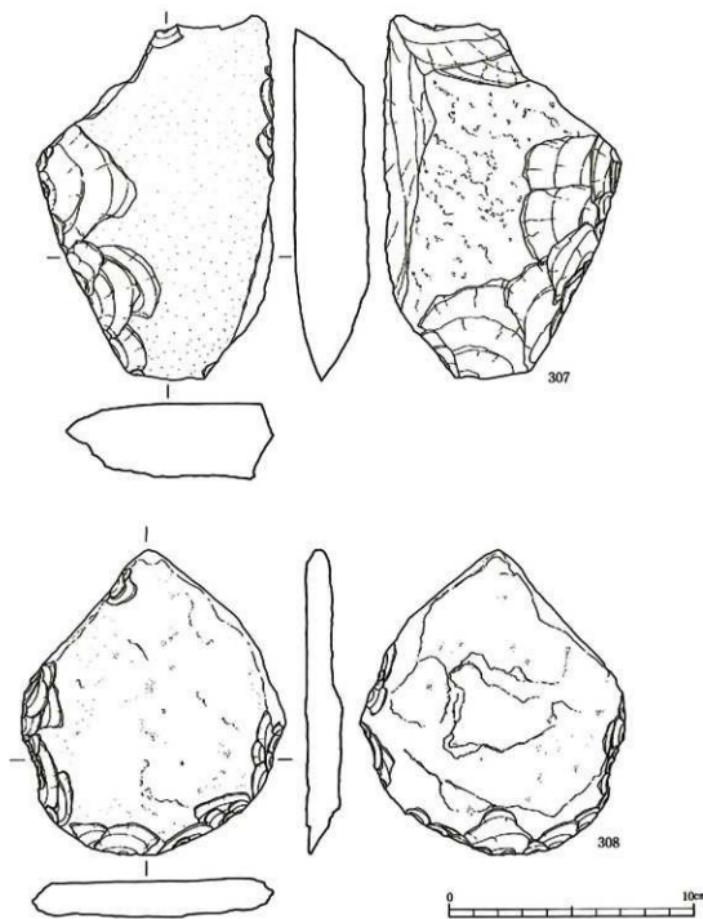
されない。長さ11.5cm、幅5.2cm、厚さ2.6cm、重さ240gである。303は、B-2区で出土した砂岩の自然縞を素材とする扁平な局部磨製石斧である。器面の風化が著しいため、研磨痕は観察されない。表面から裏面方向への加熱により刃部が作出され、刃部形態は片刃に近い。両側縁部に敲打による浅い抉りが認められる。長さ9.3cm、幅3.8cm、厚さ1.25cm、重さ69gである。304は、C-11区で出土した。刃部を欠損しているが、303と同様に砂岩の自然縞を素材とする扁平な局部磨製石斧と思われる。裏面に刃部方向からの剥離面と研磨痕等が観察されることから、片刃の局部磨製石斧と推定される。両側縁部には敲打による浅い抉りが認められる。長さ6.9cm、幅3.1cm、厚さ1.15cm、重さ45.5gである。305は、C-9区で出土した小型の扁平石斧である。素材は自然縞と推定されるが、器面の風化が著しいために、研磨痕等は剥落している。刃部は丸みを帯び、断面形態は両刃である。長さ6.25cm、幅4.3cm、厚さ1.0cm、重さ40gである。306はC-8区で出土した砂岩製の石斧である。素材は扁平な自然縞と推定される。器面が風化しているために、明確な研磨痕は観察されない。両側縁部に敲打によると思われる浅い抉りが観察される。刃部はやや丸みを帯び、断面形態は両刃である。長さ13.9cm、幅8.4cm、厚さ2.3cm、重さ445gである。

第15表 石器計測表(1)

| 編 号 | 番 号 | 器 種 | 調 査 | 出土区 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量g | 観察所見 | |
|--------------|--------|--------|--------|------|------|-----|--------|-------|---------|------|------|-------|---------------------|
| 第 42 回 | 290 | 石 鎌 | | 1566 | B-2 | V | 132.06 | 鐵 石 英 | 2.0 | 1.4 | 0.3 | 0.72 | 石質は良好で、主要剥離面が大きく残る。 |
| | 291 | | | 892 | C-7 | V | 132.99 | 鐵 石 英 | 1.6 | 1.3 | 0.5 | 0.78 | 石質は不良。不純物を含む。 |
| | 292 | | | 1056 | C-5 | V | 132.61 | シルト質岩 | 2.4 | 1.1 | 0.6 | 1.63 | 身が厚い。 |
| | 293 | | | 1111 | C-4 | V | 132.64 | 粘板 岩 | 3.2 | 1.9 | 0.2 | 1.03 | 主要剥離面が残る。 |
| | 294 | 石頭未製品 | | 1177 | C-4 | V | 132.62 | 粘板 岩 | 1.6 | 3.3 | 0.3 | 1.70 | 大型の石鎌か? |
| | 295 | | スレーブ | 134 | C-11 | V | 133.10 | チャート | 1.8 | 2.7 | 0.7 | 5.0 | |
| | 296 | | | 1035 | C-5 | N | 132.80 | 粘板 岩 | 4.2 | 8.4 | 0.75 | 25.0 | 表面に3ヶ所、裏面に1ヶ所の擦痕有。 |
| 第 43 回 | 297 | 石 斧 | | 26 | C-12 | V | 133.25 | 粘板 岩 | 16.5 | 6.2 | 1.8 | 260.0 | 器面の風化が著しい。 |
| | 298 | | 一括 | B-3 | V | | | 粘板 岩 | 11.7 | 3.7 | 2.2 | 125.0 | 風化によりひび割れている。 |
| | 299 | | | 1734 | C-10 | V | 132.94 | 砂 岩 | 7.95 | 6.3 | 0.8 | 85.0 | 身が薄い。 |
| | 300 | | | 685 | C-9 | V | 132.87 | 粘板 岩 | 7.5 | 4.0 | 1.2 | 55.0 | 右側縁部に研磨による抉りが有る。 |
| | 301 | | | 673 | C-9 | V | 133.03 | 砂 岩 | 11.9 | 4.7 | 2.4 | 235.0 | 風化が著しい。 |
| 第 44 回 | 302 | 斧 | | 1256 | B-4 | V | 132.61 | 砂 岩 | 11.5 | 5.2 | 2.6 | 240.0 | 風化が著しい。片刃? |
| | 303 | | | 1569 | B-2 | V | 132.04 | 砂 岩 | 9.3 | 3.8 | 1.25 | 69.0 | 局部磨製と思われるが、研磨痕は風化。 |
| | 304 | | | 479 | C-11 | V | 132.89 | 砂 岩 | 6.9 | 3.1 | 1.15 | 45.5 | 刃部を欠損。両側縁に敲打による抉り有。 |
| | 305 | | | 662 | C-9 | V | 133.08 | 粘板 岩 | 6.25 | 4.3 | 1.0 | 40.0 | 風化が著しい。 |
| | 306 | | | 716 | C-8 | V | 133.04 | 砂 岩 | 13.9 | 8.4 | 2.3 | 445.0 | 風化しているため、研磨痕は不明。 |

⑤ 二次加工のある大型剥片 (第45図307・308)

二次的な加工があるものの、定型石器にあたらない大型の剥片2点を、二次加工のある大型剥片として分類した。307はC-10区で出土した。節理面で剥離した砂岩の剥片で、表面には自然面が大きく残される。石質は硬質であるが、きめは粗い。左側縁部には表面と裏面からの剥離、下端には裏面から表面方向への大きな剥離が観察される。長さ14.2cm、幅9.6cm、厚さ3.0cm、重さ565gである。308はC-10区で出土した。節理面で剥離した粘板岩に二次的剥離を施す。長さ12.3cm、幅10.8cm、厚さ1.5cm、重さ236gである。



第45図 草創期の石器 二次加工のある大型剥片

⑥ 小型剥片 (第46図309~313)

小型剥片として分類したものは8点で、5点を図示した。剥片の石材は、粘板岩(309・310)と白色を呈するシルト質頁岩(311~313)である。粘板岩の石核は出土していないが、粘板岩の剥片を素材とした石器としては磨製石鎌(293)が出土している。シルト質頁岩の石核は1点(314)出土している。同質の剥片を素材とした石器としては打製石鎌(292)が出土している。309は節理面を打面とする横長剥片である。310も横長剥片で、剥片のはば真ん中で折断している。311はやや大きめの横長剥片で、剥片のはば中央で折断している。312は剥片素材の石核の可能性も考えられる。313は縦長剥片で、頭部を折断している。裏面には側縁部からの剥離が観察される。

⑦ 小型石核 (第46図314)

シルト質頁岩の石核である。剥片剥離作業面は表面と裏面に見られ、周縁部から求心的に幅広の剥片を剥離した状況が残される。

⑧ 剥片 (第47図315~324)

319がシルト質頁岩である以外は、すべて硬質砂岩の剥片である。硬質砂岩の剥片は、礫の自然面を打面とする石核から剥離された剥片がほとんどであり、打面は緩やかな曲面あるいは平坦面となっている。315・317・318・320・323・324が礫の自然面を打面とし、316・322は剥片剥離によって生じた平坦面を打面とする剥片である。これらの剥片を素材とする石器は出土していないことから、剥片の周縁部あるいは下縁部をそのまま刃部として使用した可能性も存在するが、石質の関係から使用痕の有無は明確でない。硬質砂岩剥片を素材とする石器としては、石斧(299)が挙げられるが、石斧の素材は板状の節理を持つ剥片であり、ここで取り挙げた剥片とは石核の形態が異なっている。

⑨ 大型剥片 (第48図325~327)

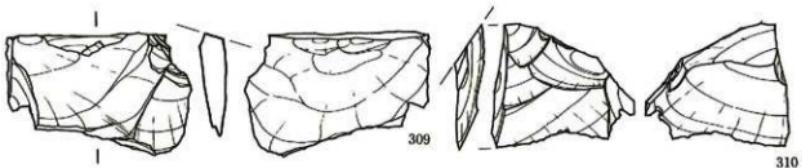
325は粘板岩の横長の剥片である。326・327は軟質砂岩の剥片であり、いずれも節理面を打面とし、表面には自然面が残される。326は横長の剥片で、327は表面に自然の稜を持った縦長剥片である。

⑩ 剥片接合資料 (第49図328・第50図329)

328は自然面を打面とする硬質砂岩の剥片である。328aは石核から剥離された第1剥片であり、表面は自然面である。328bは第2剥片であり、打点は第1剥片の打点より左後方へ移動している。いずれも使用痕の有無は明確でない。329は節理面を打面とする軟質砂岩の剥片で、326・327・331と同一母岩の剥片と考えられる。329bの表面に残された剥離面から、329aを剥離したのちに打点は右側に移動し、少なくとも二枚の剥片が剥離され、さらに329bが剥離された状況が観察される。これらの剥片の使用痕は明確でない。

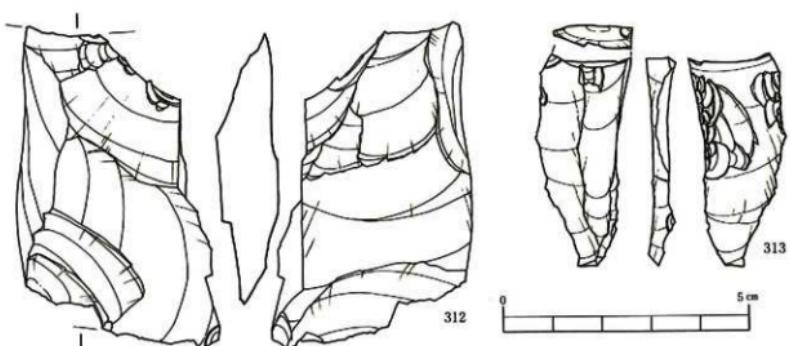
⑪ 二次加工のある剥片 (第51図330~332)

330は硬質砂岩の剥片で、表面には自然面が大きく残される。二次加工の剥離は頭部に観察されるが、刃部として機能するほどの鋭さはない。剥片周縁部に刃こぼれ状の潰れが観察されるものの、使用痕であるか明確に判断し得ない。331は軟質砂岩の剥片で、平坦な節理面を打面



310

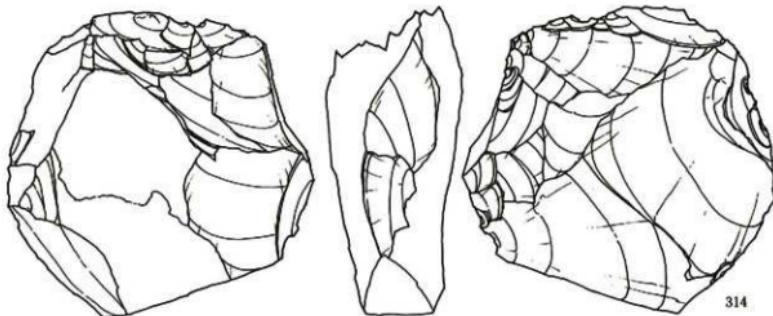
311



312

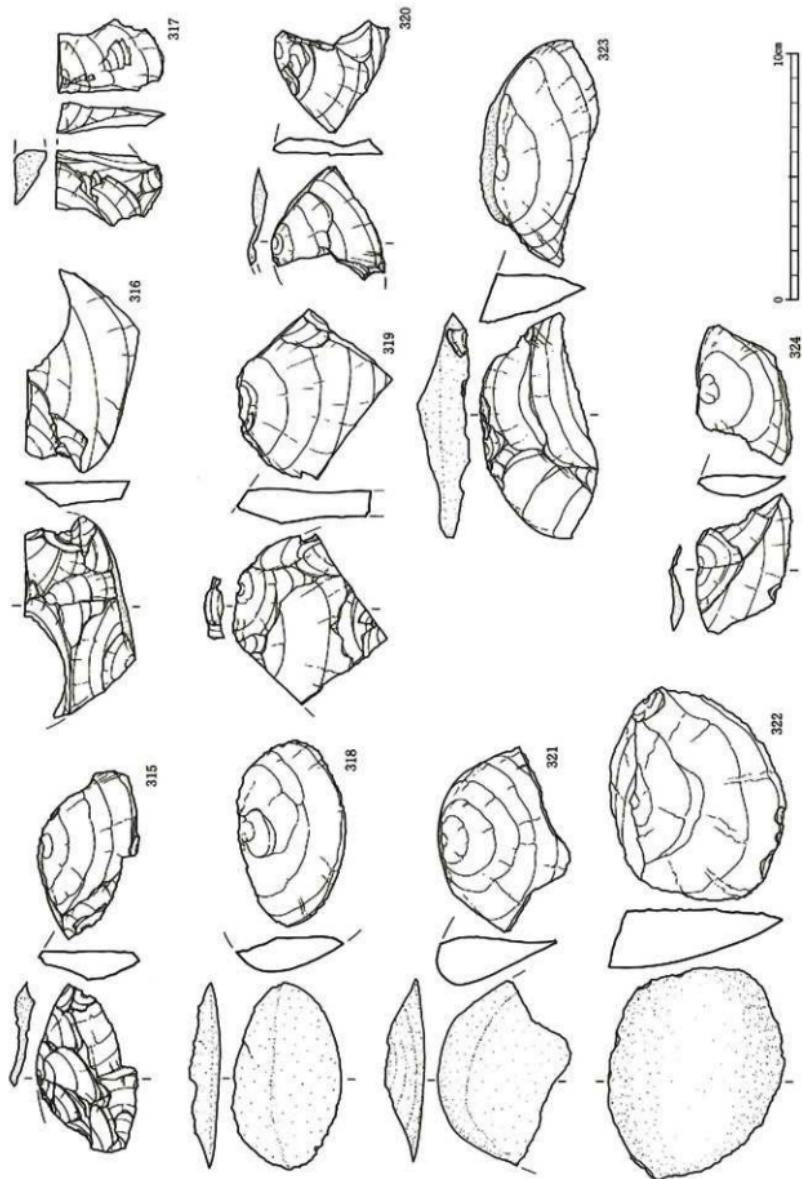
313

5 cm



314

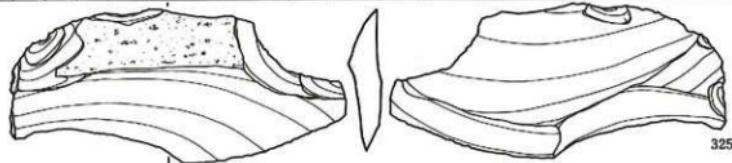
第46図 草創期の石器 小型剥片・石核



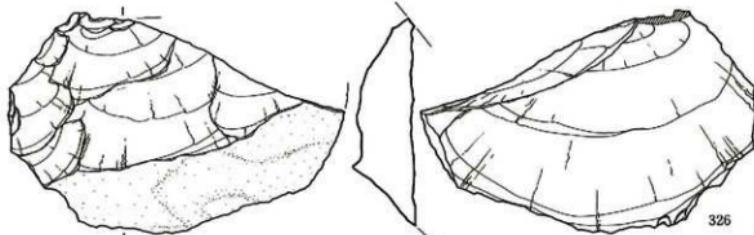
第47図 草創期の石器 剥片

第16表 石器計測表(2)

| 査区 | 番号 | 器種 | 出土地 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量 g | 観察所見 | |
|--------------|-----|----|------|------|-----|--------|--------|------|------|------|-------|------------------|
| 第 45 図 | 307 | 剥 | 216 | C-10 | V | 133.9 | 硬質砂岩 | 14.2 | 9.6 | 3.0 | 565.0 | 炎熱のためか黒変している部分有。 |
| | 308 | | 120 | C-10 | V | 132.98 | 粘板岩 | 12.3 | 10.8 | 1.5 | 236.0 | 石質は軟質である。 |
| | 309 | 剥 | 28 | C-12 | V | 133.27 | 粘板岩 | 2.4 | 3.8 | 0.5 | 5.0 | 打面は平坦な節理面。 |
| 第 46 図 | 310 | 片 | 886 | C-7 | V | 133.06 | 粘板岩 | 2.0 | 2.9 | 6.5 | 4.0 | 横長剥片を折断。 |
| | 311 | | 1087 | C-5 | V | 132.65 | シルト質頁岩 | 4.7 | 5.5 | 1.1 | 17.0 | " |
| | 312 | 一括 | 1083 | C-5 | V | 132.63 | シルト質頁岩 | 6.6 | 4.1 | 1.3 | 35.0 | 剥片素材の石核の可能性有。 |
| | 313 | | A-3 | V | | | シルト質頁岩 | 4.3 | 2.0 | 0.6 | 4.2 | 頭部折断。二次加工痕有。 |
| | 314 | 石核 | 1527 | B-2 | V | 132.13 | シルト質頁岩 | 6.2 | 6.8 | 2.8 | 110.0 | 表面と裏面に作業面有。 |



325



326



327

第48図 草創期の石器 大型剥片

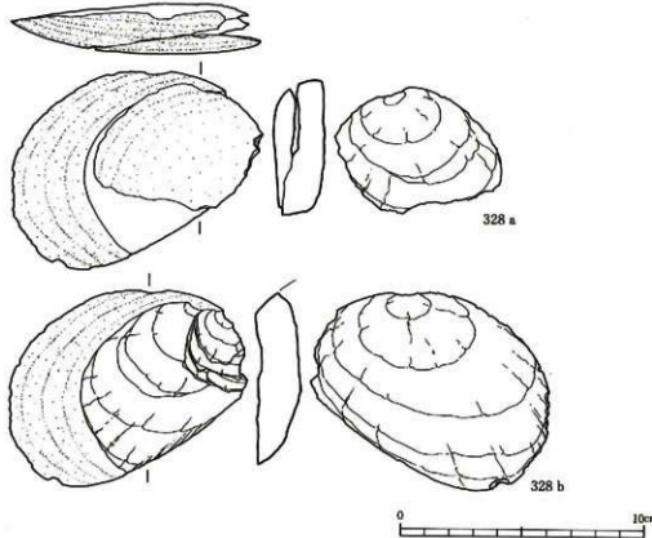
とする。表面には剥片剥離に先立つ、上方からの加熱による2枚の大きな剥離面が観察される。二次加工の剥離は表面右側縁部に、裏面から2枚の剥離面が観察される。332は硬質砂岩の剥片で、表面には自然面が大きく残される。頭部は折断されている。周縁部に表面から裏面方向への二次加工剥離が施される。

⑫ 砂岩石核 (第52図333・334)

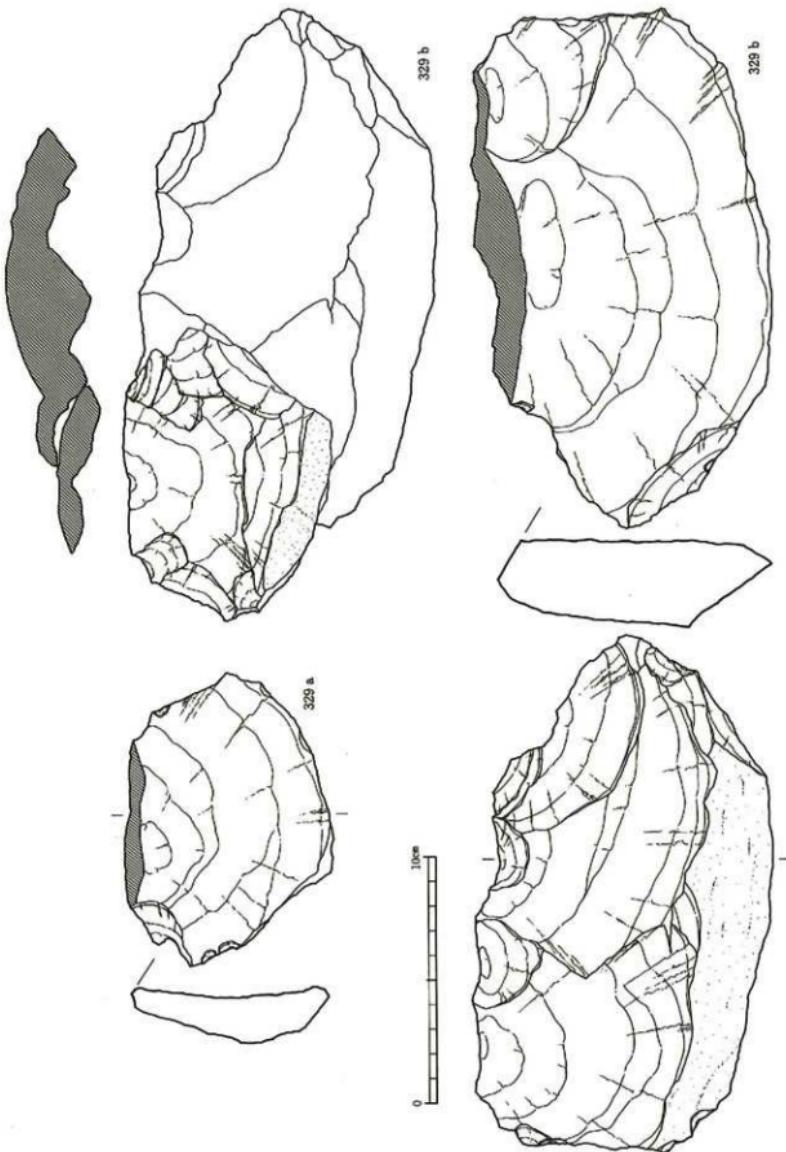
333は緩やかな曲面を成す自然面を打面とする石核である。右側面は節理面である。作業面に残っているのは1枚の大きな剥離面である。この剥離面には、平滑な部分が観察され、石皿あるいは砥石的な用途で使用されたものと思われる。石核の母岩は円柱状あるいは長楕円形の自然礫であり、何らの調整をすることなく、長軸の一端から剥片剥離作業を行なったものであろう。334も硬質砂岩の石核で、自然面を打面とし、求心的な剥片剥離作業を行なっている。長楕円形の自然礫をそのまま石核として使用したものである。礫を二分割し、分割面を剥片剥離作業面あるいは、打面とした石核形態があつてもよいが、出土している硬質砂岩の剥片からは、そのような石核の存在は見えない。剥片剥離作業は自然礫の長軸の一端から開始しているようである。

⑬ 砥石 (第53図335～338)

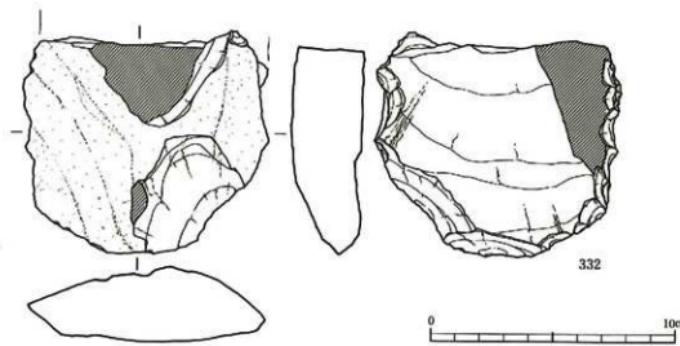
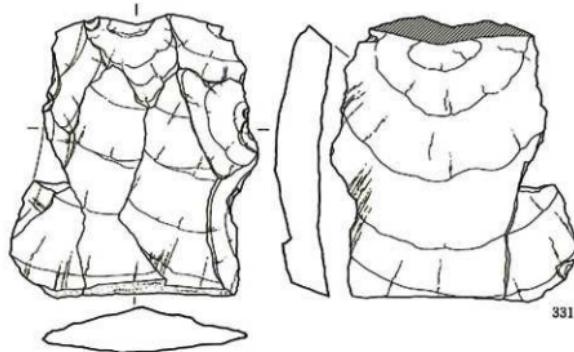
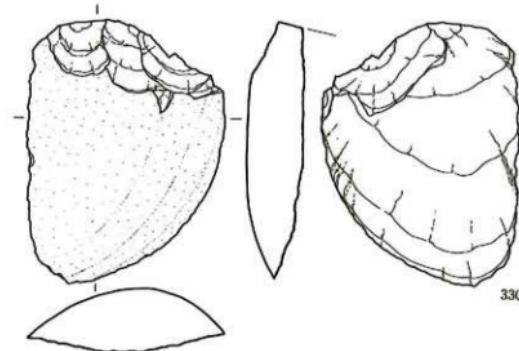
砥石として分類したものは4点あり、すべて砂岩が素材である。335は5号集石内から出土した。磨面は大きな平坦面の一部に観察される。336は角柱状の自然礫を節理面で分割したものが素材である。337は4号集石付近で出土した。磨面は幅の狭い曲面である。338も幅の狭い平坦面が磨面として使用されている。



第49図 草創期の石器 剥片接合資料(1)



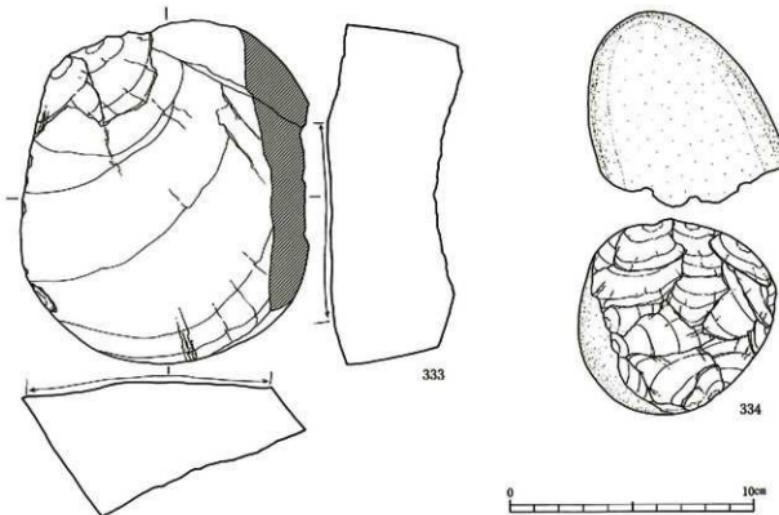
第50図 草創期の石器 剥片接合資料（2）



第51図 草創期の石器 二次加工のある剥片

第17表 石器計測表(3)

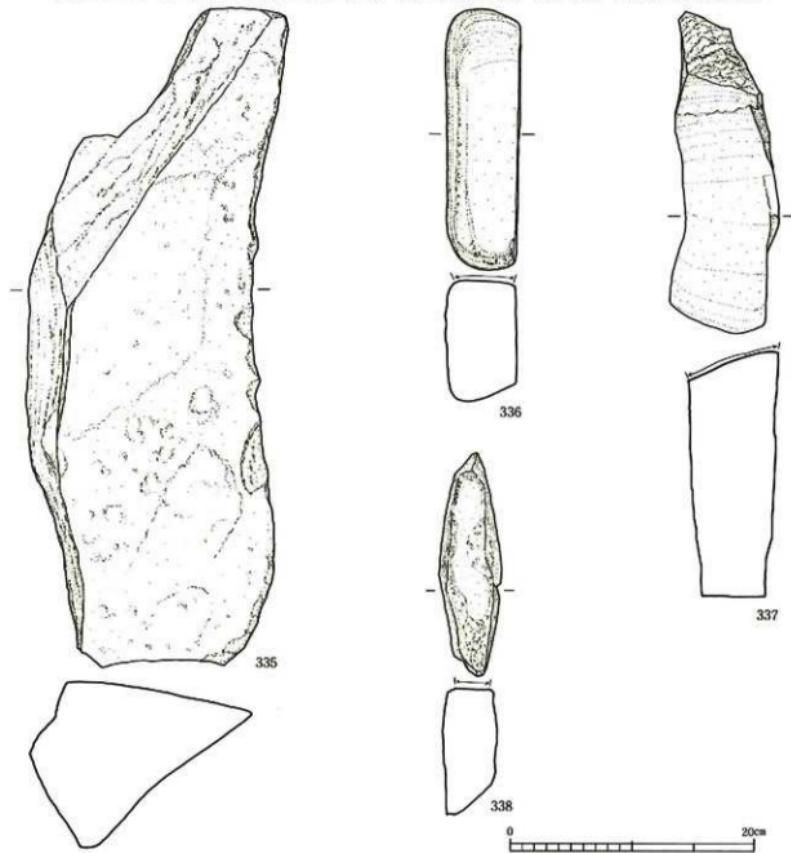
| 箇 | 番号 | 器種 | 鉛錠 | 出土区 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量 g | 観察所見 |
|----------|-------|------|-----|--------|--------|--------|------|------|-------|--------------------|-----------------|-------------------|
| 第 315 | 991 | C-6 | V | 132.89 | 硬質砂岩 | 4.1 | 6.8 | 1.2 | 26.36 | 打面は自然面である。 | | |
| | 316 | C-7 | V | 132.78 | 硬質砂岩 | 4.5 | 8.2 | 1.0 | 40.0 | 打点は剥離により欠損。 | | |
| | 317 | B-2 | V | 132.16 | 硬質砂岩 | 4.3 | 3.0 | 1.2 | 10.0 | 打面は自然面。半分に折断。 | | |
| | 318 | 制 | 812 | C-8 | V | 132.92 | 硬質砂岩 | 4.4 | 7.1 | 1.4 | 45.0 | 表面は自然面。石核からの第一制片。 |
| | 319 | C-5 | V | 132.65 | シルト質岩 | 6.4 | 6.9 | 1.5 | 55.67 | 下端を欠損。 | | |
| | 47 | 1064 | C-5 | V | 132.65 | 硬質砂岩 | 4.6 | 4.6 | 0.6 | 15.0 | 表面は自然面。 | |
| 回 320 | 1313 | C-7 | V | 132.81 | 硬質砂岩 | 5.5 | 7.5 | 1.9 | 60.0 | 表面は自然面。第一制片。 | | |
| | 321 | C-8 | V | 132.95 | 硬質砂岩 | 7.2 | 8.6 | 2.3 | 125.0 | 表面は自然面。細かい刃こぼれの痕跡？ | | |
| | 322 | C-9 | V | 133.11 | 硬質砂岩 | 4.7 | 9.2 | 1.9 | 75.0 | 打面は自然面。 | | |
| | 323 | C-8 | V | 133.03 | 硬質砂岩 | 3.8 | 5.7 | 0.9 | 15.0 | 打面は自然面。 | | |
| | 324 | B-2 | V | 132.12 | 硬質砂岩 | 5.7 | 13.7 | 1.2 | 120.0 | 風化が著しい。 | | |
| | 325 | C-9 | V | 133.03 | 粘板岩 | 14.0 | 7.9 | 3.1 | 320.0 | 打面は節理面。 | | |
| 回 326 | 1193 | C-4 | V | 132.67 | 軟質砂岩 | 8.9 | 13.7 | 2.5 | 315.0 | 打面は節理面。 | | |
| | 327 | C-4 | V | 132.66 | 軟質砂岩 | 8.0 | 11.9 | 1.9 | 230.0 | 打面は節理面。表面に自然面有。 | | |
| | 328 a | B-3 | V | 132.30 | 硬質砂岩 | 5.1 | 7.0 | 0.9 | | 打面は自然面。第一制片。 | | |
| | 328 b | B-3 | V | 132.30 | 硬質砂岩 | 8.0 | 9.8 | 2.0 | 155.5 | 打面は自然面。細かい刃こぼれの痕跡？ | | |
| | 329 a | C-4 | V | 132.66 | 硬質砂岩 | 12.0 | 21.1 | 3.5 | 990.0 | 打面は節理面。表面に自然面有。 | | |
| | 329 b | C-4 | V | 132.68 | 硬質砂岩 | 10.6 | 8.1 | 2.6 | 240.0 | 細かい刃こぼれ状の使用痕？ | | |
| 回 330 | 372 | C-9 | V | 133.06 | 硬質砂岩 | 10.9 | 10.1 | 1.8 | 220.0 | 329と同一母岩。 | | |
| | 331 | C-3 | V | 132.51 | 軟質砂岩 | 21.0 | 6.2 | 9.8 | 2,000 | 打面は節理面。329と同一母岩。 | | |
| | 332 | C-8 | V | 133.02 | 硬質砂岩 | 26.0 | 8.9 | 19.9 | 5,800 | 節理のある砂岩素材。 | | |
| | 333 | B-3 | V | 132.51 | 硬質砂岩 | 13.7 | 10.3 | 5.4 | 1,950 | 擦面をもつ。 | | |
| | 334 | 1320 | C-8 | V | 132.94 | 硬質砂岩 | 52.9 | 21.5 | 13.5 | 11,000 | 自然面を打面に求心的剥離作業。 | |
| | 335 | C-4 | V | 5号集石 | 砂岩 | 21.0 | 6.2 | 9.8 | 2,000 | 部分的な研磨痕。やや軟質の砂岩。 | | |
| 回 336 | 990 | C-6 | V | 132.89 | 砂岩 | 26.0 | 8.9 | 19.9 | 1,000 | 硬質の砂岩。 | | |
| | 337 | C-3 | V | 4号集石 | 砂岩 | 18.1 | 5.1 | 10.3 | 1,000 | 使用面は曲線的。 | | |
| | 338 | C-4 | V | 132.61 | 砂岩 | 0 | | | | 硬質の砂岩。 | | |



第52図 草創期の石器 砂岩石核

⑩ 石皿 (第54図339~345・第55図346~351)

石皿として分類したものは14点あり、13点を図示した。349だけが礫素材である以外は、大きくて扁平な砂岩剥片を素材とする。344・347・350・351の周縁部には、形状調整の痕跡がわずかに観察されるが、特定の形状を目的とした調整はみられず、素材剥片の形状をほぼそのまま残している。339~345・348・351の断面を観察すると、使用面と裏面が同様なカーブを描いており、球状の大きな砂岩岩塊から素材剥片を獲得したものと推定される。球状の砂岩岩塊から得られた剥片以外に、346・347・350のように、板状の節理をもつ岩塊から素材剥片を得たと思われる資料も見られる。また、343・345・351の一部分に赤変したり黒変したりした部分が観察されることから、素材剥片獲得に際しては、物理的な加熱だけではなく、熱による破碎作用を



第53図 草創期の石器 磨石

利用したことが窺える。断面が曲線状となる石皿は素材剥片の持つ自然のくぼみをそのまま使用面としているため、片面だけが使用面となり、板状の剥片素材の350だけが両面を使用している。使用面のくぼみは顕著でなく、断面が曲線状となる石皿では、素材剥片剥離時のあばた状の凹凸が目立つ。石皿として使用された期間が短かった結果であろう。

第18表 石器計測表(4)

| 編 | 番号 | 器種 | 出土地 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量 g | 観察所見 |
|----------|-----|----|------|------|-----|--------|------|------|------|------|----------------------|
| 第 54 | 339 | 石 | 920 | C-6 | V | 133.02 | 砂岩 | 33.7 | 23.7 | 4.8 | 3,800 |
| | 340 | | 533 | C-10 | V | 132.91 | 砂岩 | 30.7 | 22.7 | 4.9 | 4,800 使用面は、かなり凸凹する。 |
| | 341 | | 680 | C-9 | V | 133.00 | 砂岩 | 31.5 | 14.4 | 3.7 | 2,000 小型の石皿。 |
| | 342 | | 778 | C-8 | V | 132.94 | 砂岩 | 20.0 | 18.8 | 5.6 | 2,000 |
| | 343 | | 486 | C-11 | V | 133.06 | 砂岩 | 38.4 | 22.6 | 6.1 | 4,000 使用面は、かなり凸凹する。 |
| | 344 | | 1051 | C-5 | V | 132.90 | 砂岩 | 37.5 | 36.2 | 9.7 | 6,500 敲打痕が部分的に観察される。 |
| 第 55 | 345 | 皿 | 964 | C-6 | V | 132.93 | 砂岩 | 52.9 | 41.1 | 9.9 | 17,500 |
| | 346 | | 151 | C-11 | V | 133.11 | 砂岩 | 22.6 | 18.0 | 3.7 | 1,500 使用面は、平面的。 |
| | 347 | | 456 | C-11 | V | 133.04 | 砂岩 | 24.3 | 20.3 | 3.1 | 2,000 使用面は、平面的。 |
| | 348 | | 589 | C-10 | V | 132.99 | 砂岩 | 27.6 | 31.0 | 6.8 | 4,000 |
| | 349 | | 1375 | B-4 | V | 132.59 | 砂岩 | 20.5 | 17.3 | 10.5 | 4,000 自然縫を素材とする。 |
| | 350 | | 697 | C-9 | V | 133.14 | 砂岩 | 48.8 | 30.3 | 8.3 | 17,000 両面を使用する。 |
| 図 351 | 964 | | 1679 | C-6 | V | 132.93 | 砂岩 | 51.0 | 50.6 | 6.9 | 28,000 |
| | | | | C-8 | V | 133.07 | 砂岩 | 13.0 | 10.8 | 3.1 | 450 |

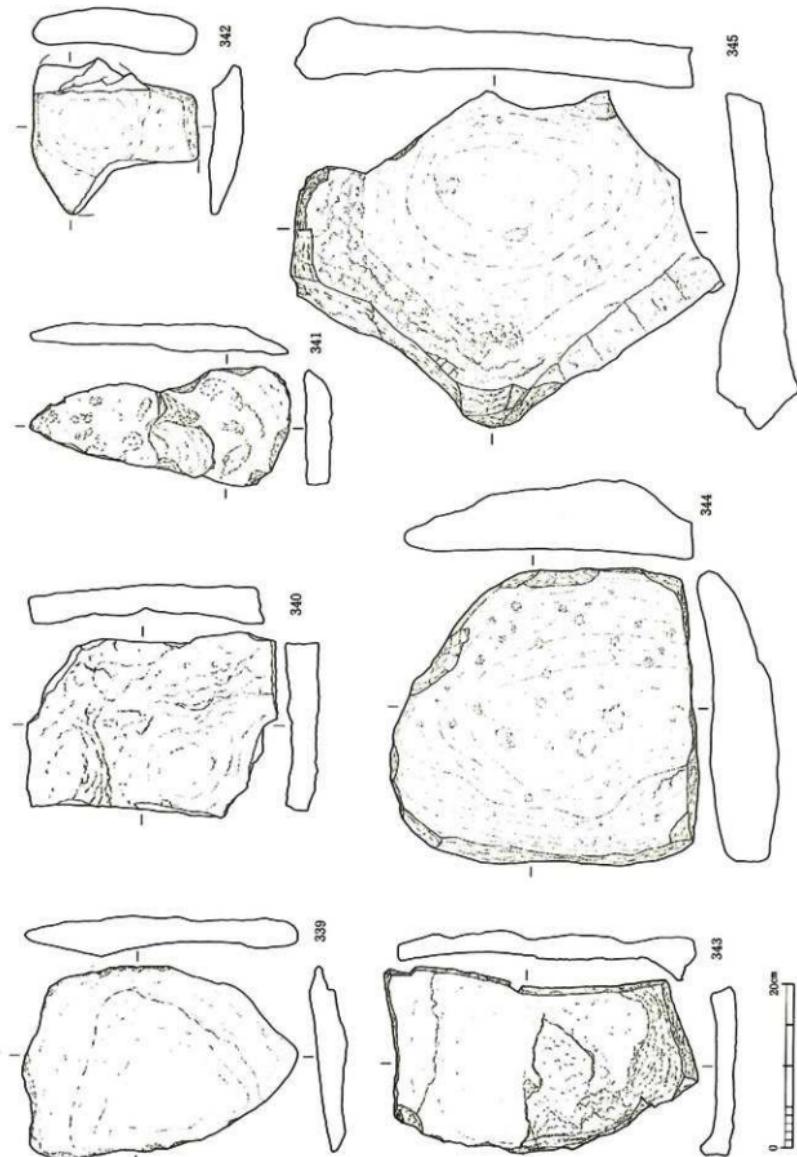
⑯ 棒状敲石 (第56図352~362・第57図363~368)

棒状の砾を素材とする敲石を棒状敲石として分類した。素材はすべて砂岩の自然砾を用いている。出土した17点を図示した。敲打痕の存する部位により1類から3類に分類し、さらに必要に応じて細分類を行なった。

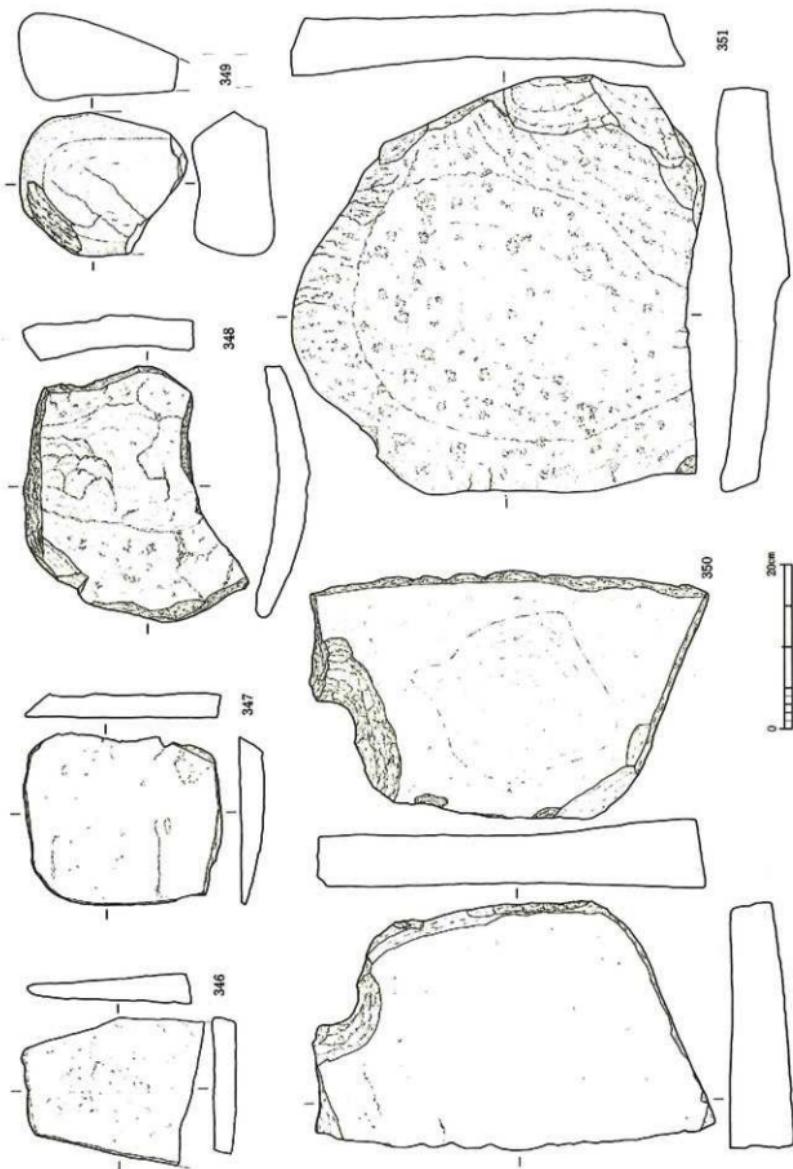
- ア 1a類 (352・353) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が長軸の一端にあるもの。
- イ 1b類 (354~362) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が長軸の両端にあるもの。
- ウ 2類 (363~366) 角柱状の砾が素材で「つぶれ」状の使用痕が長軸の両端と稜線部分にあるもの。363・366の稜線部分には「つぶれ」状の使用痕以外に、横方向に短く引っ搔いたような使用痕が観察される。
- エ 3a類 (367) 剥離状の「割れ」の使用痕が長軸の一端にあるもの。
- オ 3b類 (368) 剥離状の「割れ」の使用痕が長軸の両端にあるもの。

⑰ 板状敲石 (第57図369~371)

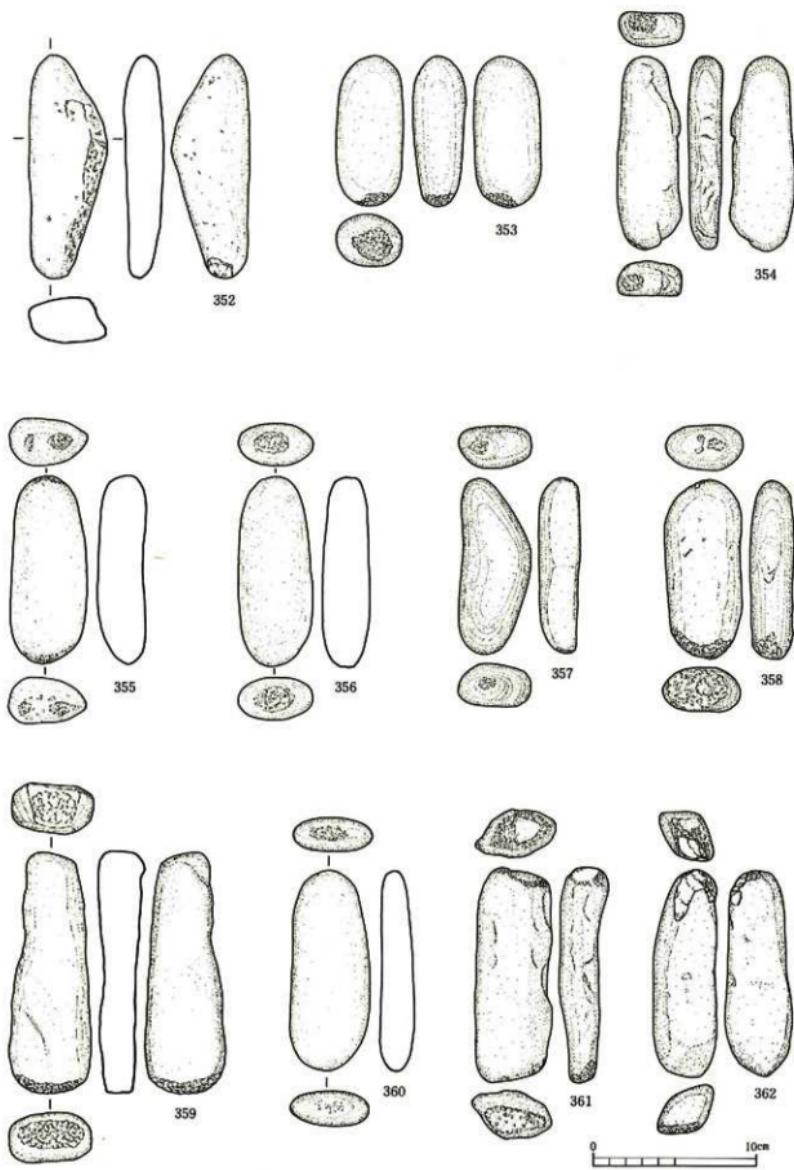
棒状敲石に比較し、扁平な板状の素材を用いた敲石を板状敲石として分類した。出土した3点を図示した。369・370は砂岩の自然砾を素材とする。369は両端と右側縁部に敲打による使用痕が観察される。370も両端に使用痕が観察される。特に下端部の使用痕は明瞭で、使用痕は両側縁部の下部にまで及んでいる。371の石材は、やや硬質の粘板岩である。下端部の使用痕が明瞭である。石材が粘板岩であることと、側縁部に敲打による抉りが見られることから、石斧からの転用品と思われる。したがって、側縁部の敲打痕は、石斧製作時の敲打痕として捉えたい。



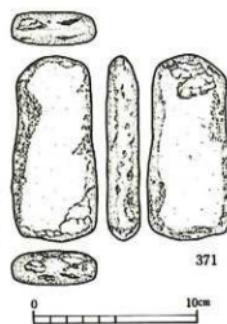
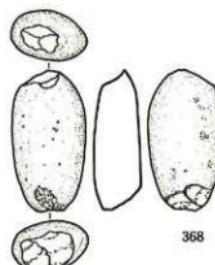
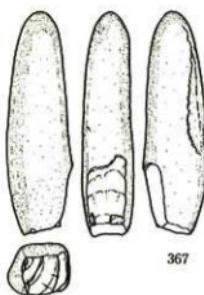
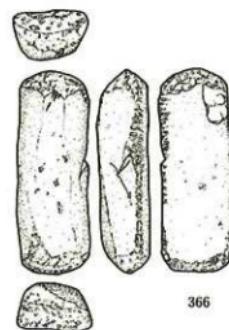
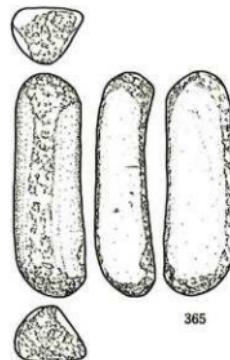
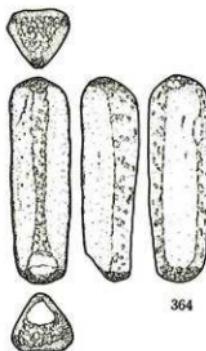
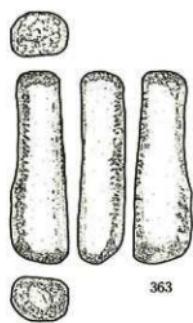
第54図 草創期の石器 石皿 (1)



第55図 草創期の石器 石皿(2)



第56図 草創期の石器 棒状敲石（1）



0 10cm

第57図 草創期の石器 棒状敲石（2）・板状敲石

第19表 石器計測表(5)

| 測定番号 | 器種 | 測定番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量 g | 観察所見 | |
|--------------|-----------------------|------|-----|------|--------|-----|--------|------|------|------|------|--------------------------|
| 第 56 回 | 棒 状 敲 打 石 | 352 | | 643 | C - 9 | V | 132.91 | 砂岩 | 13.5 | 4.9 | 2.8 | 180 |
| | | 353 | | 97 | C - 11 | V | 133.03 | 砂岩 | 9.1 | 4.1 | 3.7 | 193 軟質の砂岩 |
| | | 354 | | 1786 | B - 3 | V | 132.31 | 砂岩 | 11.7 | 4.0 | 2.0 | 155 |
| | | 355 | | 135 | C - 11 | V | 133.08 | 砂岩 | 11.4 | 4.7 | 2.85 | 224 |
| | | 356 | | 823 | C - 8 | V | 133.00 | 砂岩 | 11.4 | 4.4 | 2.6 | 200 |
| | | 357 | | 845 | C - 8 | V | 133.01 | 砂岩 | 10.6 | 4.2 | 2.5 | 175 |
| | | 358 | | 779 | C - 8 | V | 132.96 | 砂岩 | 10.8 | 4.8 | 2.7 | 186 |
| | | 359 | | 1399 | C - 4 | V | 132.38 | 砂岩 | 12.1 | 6.0 | 3.1 | 285 |
| | | 360 | | 635 | C - 9 | V | 132.85 | 砂岩 | 12.1 | 4.8 | 2.1 | 185 |
| | | 361 | | 1131 | C - 4 | V | 132.54 | 砂岩 | 13.0 | 4.7 | 3.0 | 228 |
| | | 362 | | 784 | C - 8 | V | 132.98 | 砂岩 | 12.6 | 3.7 | 3.1 | 230 |
| 第 57 回 | 板 状 敲 打 石 | 363 | | 829 | C - 8 | V | 133.07 | 砂岩 | 11.6 | 3.6 | 2.7 | 176 側縁部に横方向に引っかいたような使用痕。 |
| | | 364 | | 783 | C - 8 | V | 133.03 | 砂岩 | 12.5 | 3.7 | 3.6 | 252 |
| | | 365 | | 1176 | C - 4 | V | 132.59 | 砂岩 | 13.5 | 4.2 | 3.4 | 244 |
| | | 366 | | 481 | C - 11 | V | 132.96 | 砂岩 | 12.3 | 4.5 | 2.9 | 252 側縁部に横方向に引っかいたような使用痕。 |
| | | 367 | | 1160 | C - 8 | V | 132.88 | 砂岩 | 13.5 | 3.8 | 3.2 | 245 |
| | | 368 | | 1199 | C - 4 | V | 132.71 | 砂岩 | 8.4 | 4.6 | 2.9 | 155 |
| | | 369 | | 1399 | C - 4 | V | 132.38 | 砂岩 | 12.1 | 6.0 | 3.1 | 285 |
| | | 370 | | 1489 | B - 3 | V | 132.26 | 砂岩 | 12.1 | 6.1 | 2.1 | 256 |
| | | 371 | | 1100 | B - 5 | V | 132.61 | 粘板岩 | 11.2 | 5.2 | 2.1 | 209 石斧の軸用品 |

⑦ 磨石 (第58図～第62図・372～418)

磨石として分類したものは、167点出土した。完形品が97点、欠損品が70点という内訳である。紙数の関係から完形品のうち、48点を図示した。使用された石材は、すべて砂岩である。使用部位と形状により1類から3類に分類し、必要に応じてさらに細分類を行なった。

ア 1 a類 (372～374) 片面に磨面を持ち、扁平な円盤を素材とするもの。7点出土したが、3点を図示した。

イ 1 b類 (375～377) 片面に磨面を持ち、橢円形碟を素材とするもの。6点出土したが、3点を図示した。

ウ 1 c類 (378～383) 片面に磨面を持ち、横断面が橢円形を呈する肉厚の碟を素材とするもの。11点出土したが、6点を図示した。

エ 1 d類 (384・385) 表面上に2面の磨面を持ち、かつ裏面にも磨面をもつもの。縦断面は山形を呈する。4点出土したが、2点を図示した。384には、下端と表面中央部に敲打痕も観察される。

オ 2 a類 (386～396) 両面に磨面を持ち、扁平な円盤を素材とするもの。23点出土したが、11点を図示した。390は炎熱により赤変し、ひび割れが観察される。

カ 2 b類 (397～411) 両面に磨面を持ち、橢円形碟を素材とするもの。円形に近い碟を素材とするものも若干含まれる。27点出土したが、15点を図示した。406には、下端と左側縁部にわずかな敲打痕が観察されるが、磨石として分類した。

キ 2c類 (412~417) 両面に磨面を持ち、横断面が楕円形を呈する肉厚の礫を素材とするもの。16点出土したが、6点を図示した。

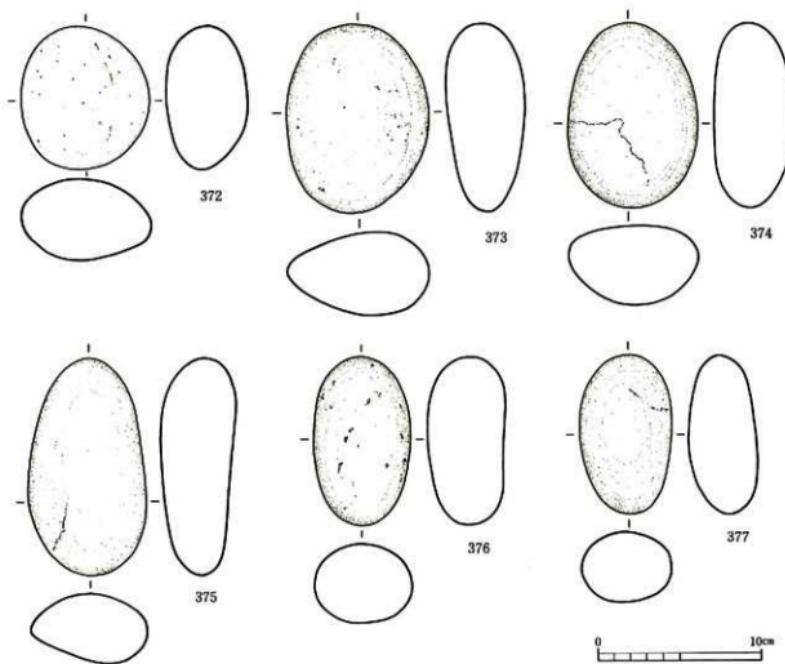
ク 3類 (418) ほぼ全面を磨面として使用した、円柱状の礫を素材とするもの。1点だけ出土した。

⑩ 楕円形敲石 (第63図~第65図・419~444)

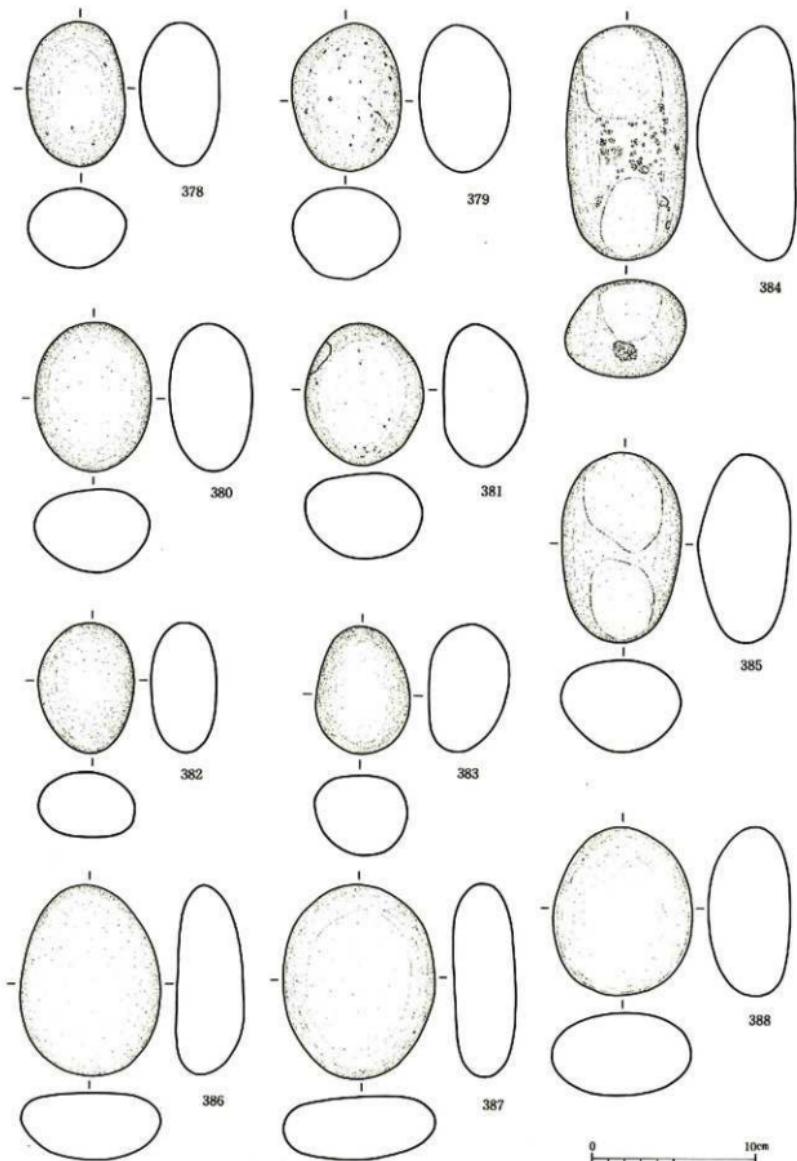
平面形態が楕円形を呈するものを楕円形敲石として分類した。石材のすべてが砂岩である。これらの中には、磨面を持つものも含まれ、磨石としての機能を持つものが見られる。出土した26点を図示した。敲打痕の位置と磨面の有無により、1類から4類に分類し、必要によりさらに細分類を行なった。

ア 1a類 (419~425) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が長軸の一端にあるもの。出土した7点を図示した。421には右側縁部にも使用痕が観察される。425の使用痕は、下端だけでなく、両側縁の下部にまで及んでいる。

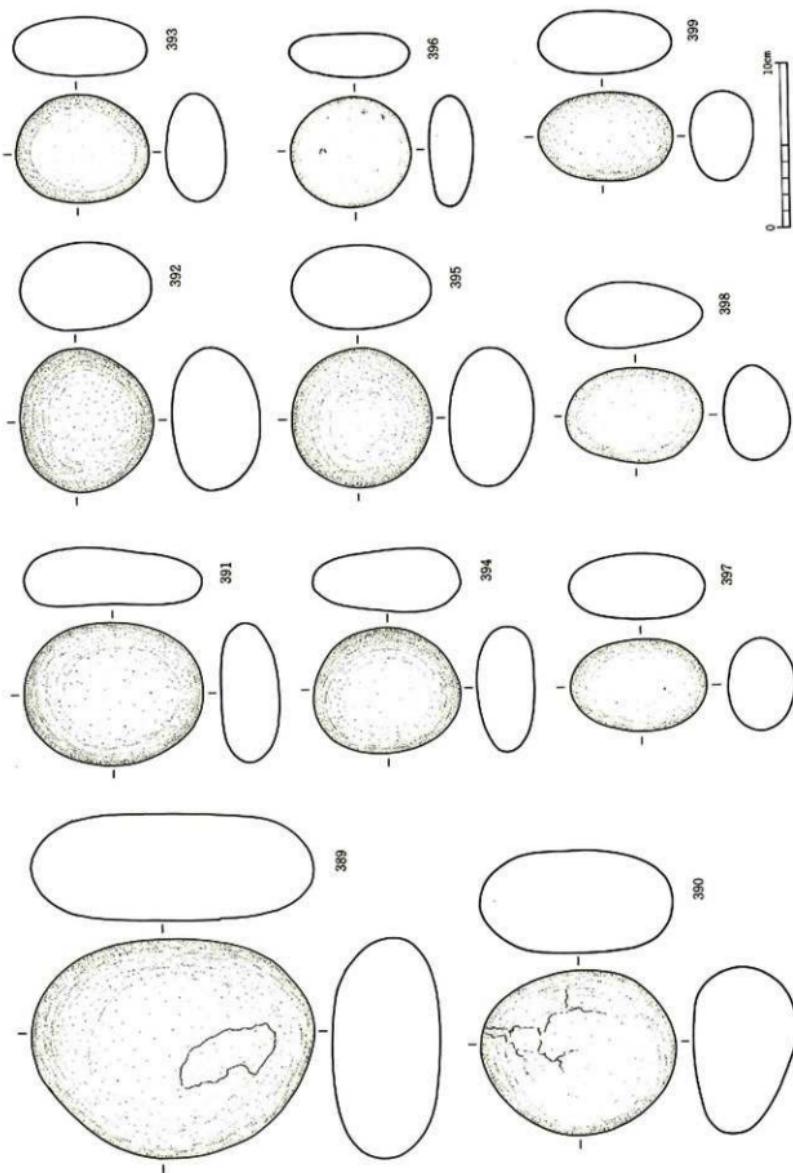
イ 1b類 (426~430) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が長軸の一端にあり、磨面を併せ持つもの。出土した5点を図示した。



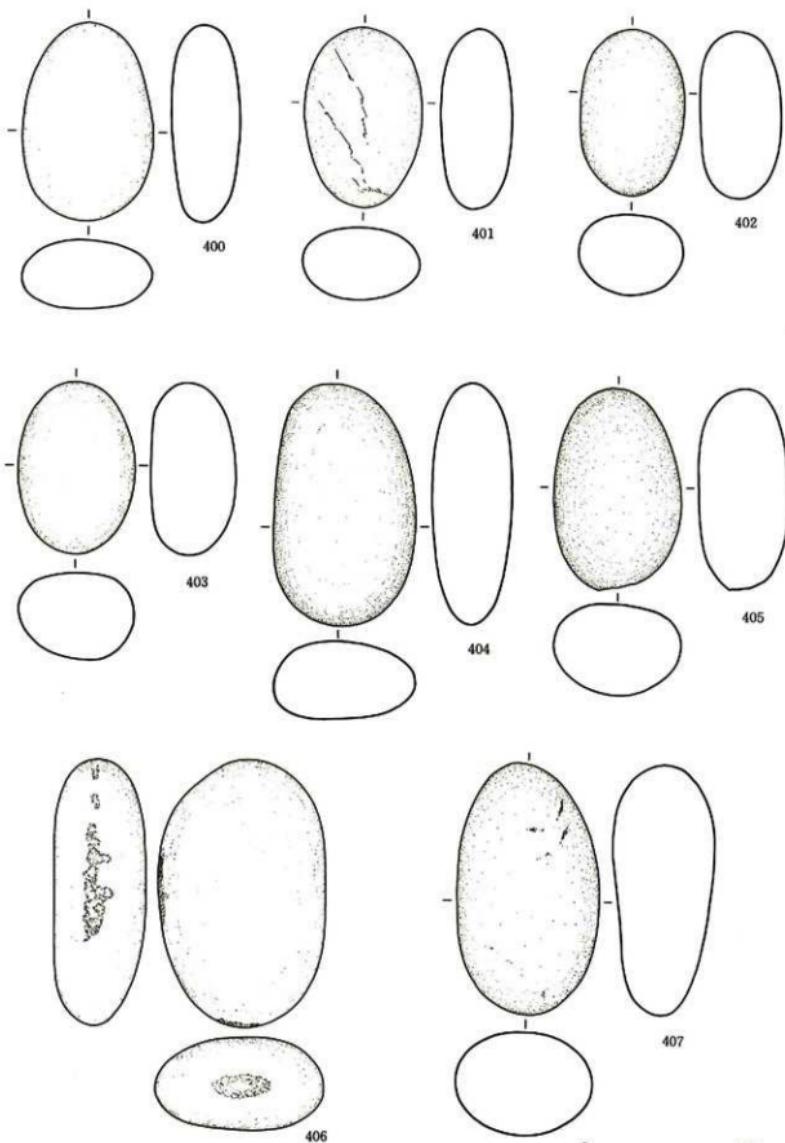
第58図 草創期の石器 磨石 (1)



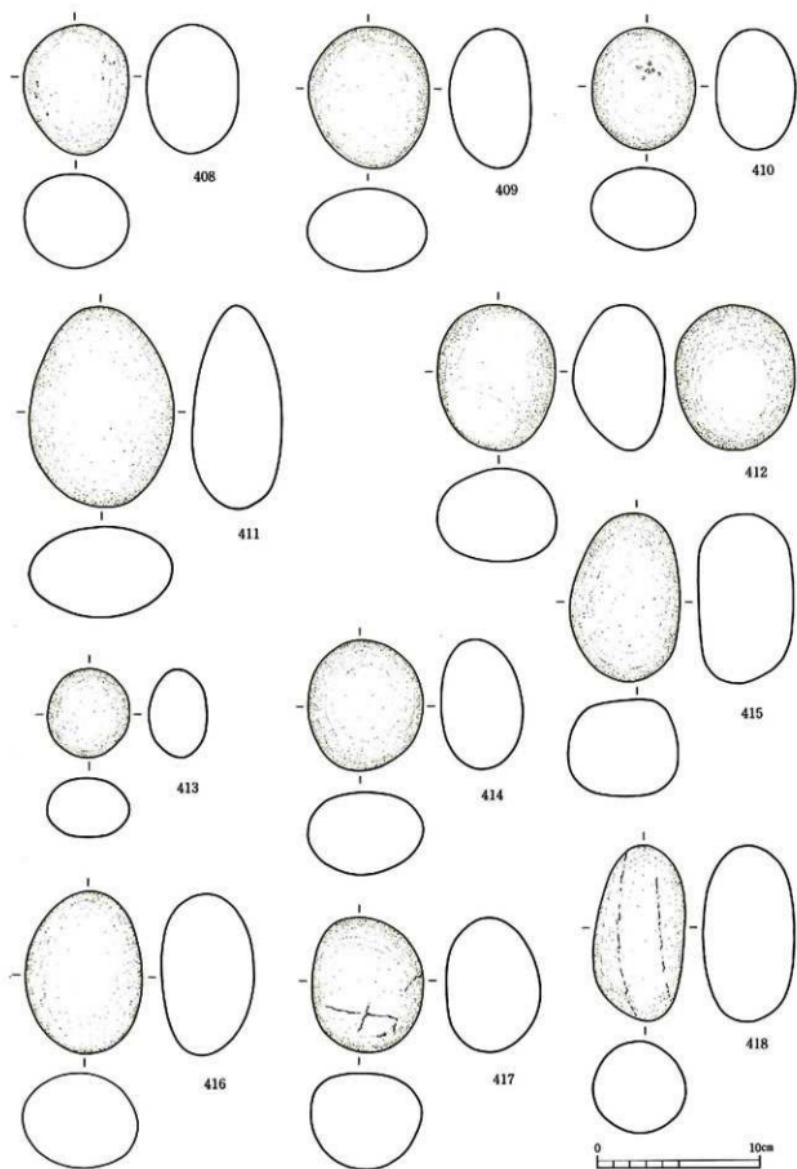
第59図 草創期の石器 磨石 (2)



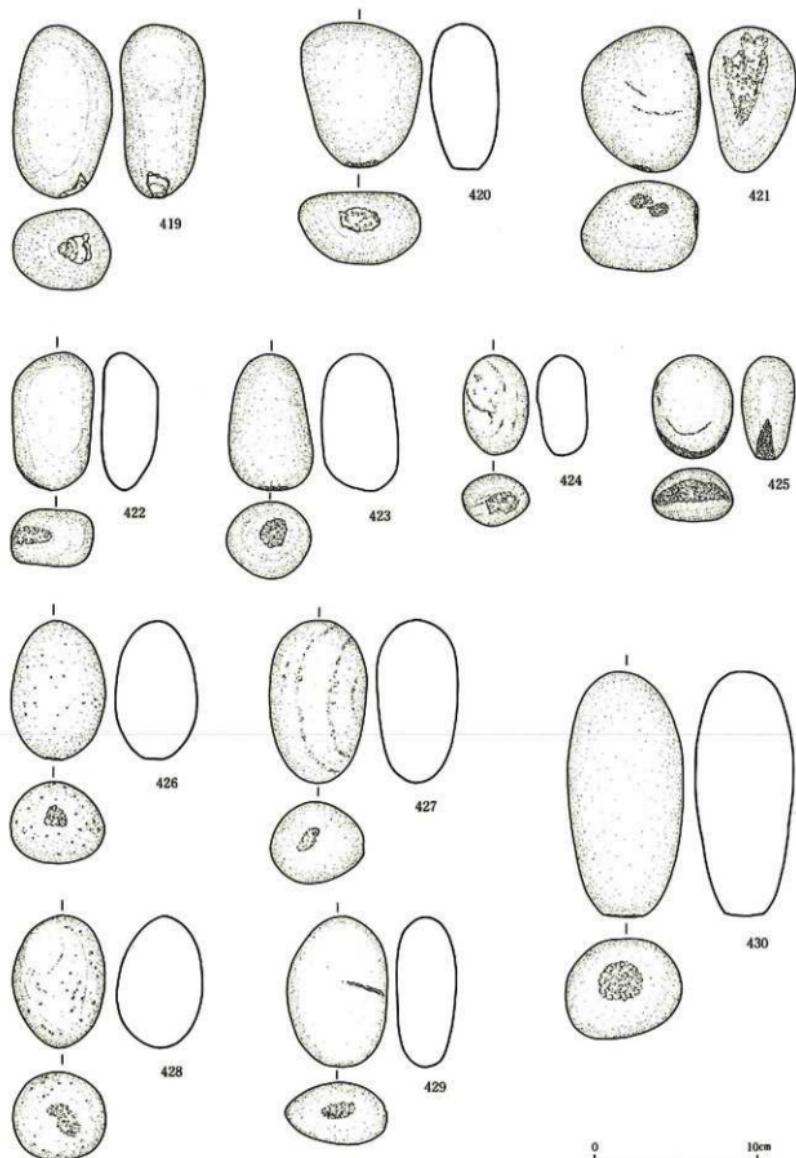
第60図 草創期の石器 磨石（3）



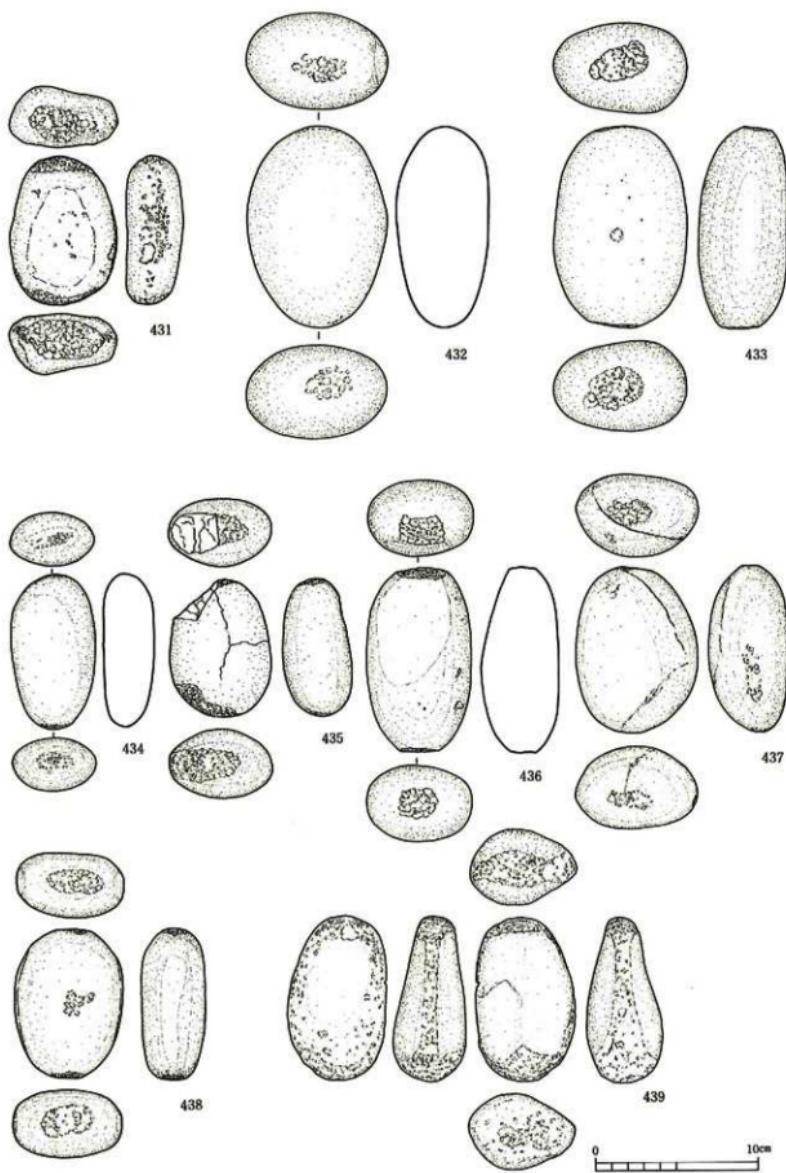
第61図 草創期の石器 磨石 (4)



第62図 草創期の石器 磨石（5）



第63図 草創期の石器 楕円形敲石（1）



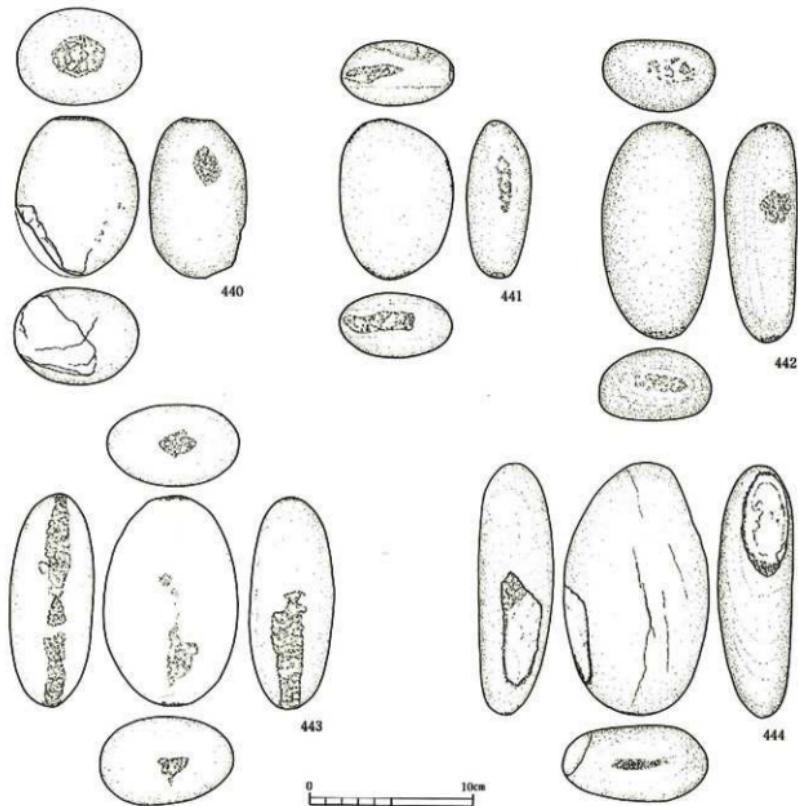
第64図 草創期の石器 横円形敲石（2）

ウ 2a類 (431・432) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が長軸の両端にあるもの。出土した2点を図示した。

エ 2b類 (433~438) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が長軸の両端にあり、磨面を併せ持つもの。出土した6点を図示した。

オ 3類 (439~443) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が長軸の両端にあり、側縁部にも使用痕が認められ、磨面も併せ持つもの。出土した5点を図示した。442は片面にのみ磨面を持ち、439~441・443は両面に磨面を持つ。443には、表面にも敲打による使用痕が観察される。

カ 4類 (444) 1点のみの出土である。下端寄りと上端寄りの両側縁部に剝離状の「われ」の使用痕と「つぶれ」状の使用痕が認められ、表裏面とも磨面となる。



第65図 草創期の石器 楠円形敲石 (3)

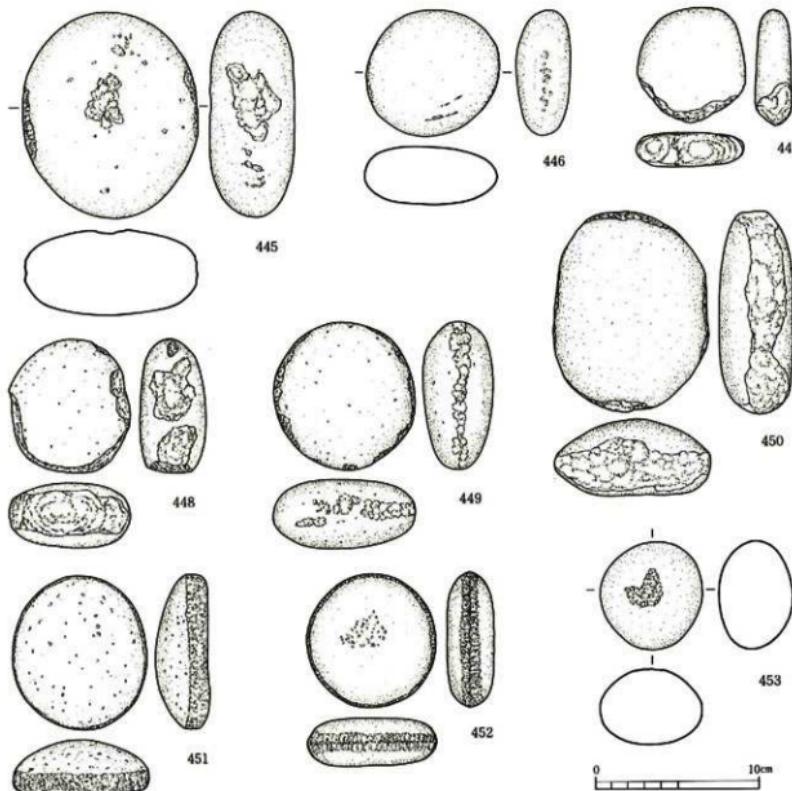
⑯ 円形敲石 (第66図 445~453)

平面形態が円形を呈するものを円形敲石として分類した。石材は、451だけが凝灰岩質である以外は、すべて砂岩である。これらの中には、磨面を持つものも含まれ、磨石としての機能を持つものが見られる。15点出土したが、9点を図示した。敲打痕の位置と磨面の有無により、1類から4類に分類した。

ア 1類 (445・446) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が側縁部にあり、両面に磨面を持つもの。2点出土した。445は表面中央部にやや窪んだ部分が認められ、凹石の機能を併せ持つものである。

イ 2類 (447~450) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が下端と周縁部にあり、両面に磨面を持つもの。8点出土したが、4点を図示した。

ウ 3類 (451・452) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が周縁部全体にあり、両面に磨面



第66図 草創期の石器 円形敲石

を併せ持つもの。3点出土したが、2点を図示した。451の表面は曲線的に盛り上がり、裏面は逆に曲線的に窪んでいる。452の表面には敲打痕がわずかに観察される。周縁部を敲打作業に使用する際には、対象物に対して、垂直に使用せず、いくぶん寝かせ気味に使用したものと思われ、裏面からの敲打痕と表面からの敲打痕が周縁部中央で稜線を形成している。

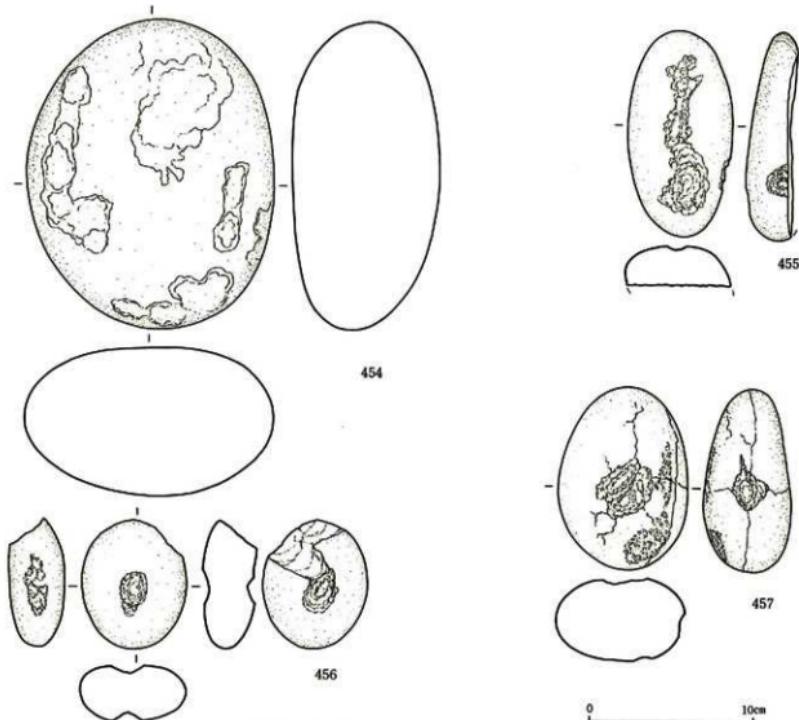
エ 4類 (453) 敲打による「つぶれ」状の使用痕が片面の中央部に集中するもの。2点出土したが、1点を図示した。

⑩ 大型磨石 (第67図 454)

片手では操作が困難と思われる大型の磨石を分類した。石材は砂岩だけである。3点出土したが、1点のみを図示した。表裏面ともに磨面として使用される。

⑪ 凹石 (第67図 455~457)

石材は砂岩である。4点出土したが、3点を図示した。455は裏面を欠損する。表面と側縁部にくぼみが認められる。456は表裏面ともにくぼみが観察され、左側縁部には敲打痕も認められる。457は表面と右側縁部にくぼみが認められる。炎熱により赤変し、ひび割れている。



第67図 草創期の石器 大型磨石・凹石

第20表 石器計測表 (6)

| 持因 | 番号 | 器種 | 分類 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量g |
|--------------|-----|--------|-----|------|--------|---|--------|-----|-------|-------|------|-------|
| 第 58 因 | 372 | 磨 石 | 1 a | 1549 | B - 2 | V | 132.29 | 砂 岩 | 8.8 | 7.9 | 4.9 | 452 |
| | 373 | | 1 a | 1578 | B - 1 | V | 132.12 | " | 11.4 | 8.7 | 5.0 | 634 |
| | 374 | | 1 a | 1687 | C - 9 | V | 133.03 | " | 11.2 | 8.0 | 4.9 | 586 |
| | | | 1 a | 421 | C - 12 | V | 133.15 | " | 9.5 | 7.3 | 3.9 | 315 |
| | | | 1 a | 254 | C - 10 | V | 133.14 | " | 13.9 | 11.8 | 6.75 | 1,392 |
| | | | 1 a | 1557 | B - 2 | V | 132.16 | " | 7.35 | 5.9 | 3.4 | 208 |
| | | | 1 a | 1402 | C - 4 | V | 132.54 | " | 9.0 | 7.75 | 4.9 | 440 |
| | 375 | | 1 b | 331 | C - 9 | V | 133.04 | " | 13.2 | 7.2 | 4.2 | 610 |
| | 376 | | 1 b | 1060 | C - 5 | V | 132.85 | " | 10.2 | 5.9 | 4.8 | 420 |
| | 377 | | 1 b | 564 | C - 10 | V | 132.84 | " | 9.6 | 5.1 | 4.3 | 319 |
| | | | 1 b | 629 | C - 9 | V | 132.83 | " | 14.0 | 8.2 | 5.35 | 873 |
| | | | 1 b | 1140 | C - 4 | V | 132.61 | " | 12.1 | 7.7 | 5.6 | 695 |
| | | | 1 b | 542 | C - 10 | V | 132.84 | " | 9.6 | 5.9 | 5.3 | 418 |
| 第 59 因 | 378 | 磨 石 | 1 c | 522 | C - 10 | V | 132.85 | 砂 岩 | 8.7 | 5.9 | 4.85 | 336 |
| | 379 | | 1 c | 1599 | B - 2 | V | 132.25 | " | 8.9 | 6.6 | 5.5 | 435 |
| | 380 | | 1 c | 341 | C - 9 | V | 132.97 | " | 8.9 | 7.0 | 5.05 | 433 |
| | 381 | | 1 c | 1101 | B - 5 | V | 132.80 | " | 8.1 | 7.2 | 5.1 | 426 |
| | 382 | | 1 c | 274 | C - 10 | V | 133.15 | " | 8.9 | 5.9 | 4.0 | 250 |
| | 383 | | 1 c | 1063 | C - 5 | V | 132.64 | " | 7.7 | 5.8 | 4.9 | 305 |
| | | | 1 c | 127 | C - 11 | V | 132.97 | " | 10.2 | 8.2 | 7.25 | 788 |
| | | | 1 c | 300 | C - 10 | V | 132.96 | " | 9.2 | 6.2 | 6.65 | 507 |
| | | | 1 c | 1145 | C - 4 | V | 132.62 | " | 8.2 | 6.4 | 4.95 | 328 |
| | | | 1 c | 1429 | B - 3 | V | 132.42 | " | 6.6 | 5.9 | 5.85 | 300 |
| | | | 1 c | 1065 | C - 5 | V | 132.69 | " | 7.2 | 7.0 | 4.45 | 291 |
| | 384 | | 1 d | 653 | C - 9 | V | 132.97 | " | 14.2 | 7.3 | 6.0 | 800 |
| | 385 | | 1 d | 161 | C - 11 | V | 133.00 | " | 11.5 | 7.3 | 5.65 | 615 |
| | | | 1 d | 1440 | B - 3 | V | 132.49 | " | 13.85 | 7.1 | 6.5 | 916 |
| | | | 1 d | | | | | " | 11.5 | 7.5 | 5.55 | 650 |
| | 386 | | 2 a | 837 | C - 8 | V | 132.95 | " | 11.55 | 8.55 | 4.05 | 837 |
| | 387 | | 2 a | 1274 | B - 3 | V | 132.54 | " | 11.2 | 9.2 | 3.7 | 608 |
| | 388 | | 2 a | 213 | C - 10 | V | 133.14 | " | 10.2 | 8.9 | 5.0 | 585 |
| 第 60 因 | 389 | 磨 石 | 2 a | 1584 | B - 1 | V | 132.08 | 砂 岩 | 17.25 | 13.35 | 6.5 | 2,200 |
| | 390 | | 2 a | 1575 | B - 4 | V | 132.52 | " | 11.85 | 10.1 | 6.4 | 958 |
| | 391 | | 2 a | 100 | C - 11 | V | 133.04 | " | 11.0 | 8.7 | 3.5 | 505 |
| | 392 | | 2 a | 603 | C - 10 | V | 132.96 | " | 8.1 | 8.7 | 5.35 | 595 |
| | 393 | | 2 a | 1398 | C - 4 | V | 132.55 | " | 8.1 | 6.5 | 3.6 | 281 |
| | 394 | | 2 a | 1073 | C - 5 | V | 132.69 | " | 8.8 | 7.6 | 3.4 | 327 |
| | 395 | | 2 a | 1639 | C - 5 | V | 132.74 | " | 8.5 | 8.4 | 5.15 | 488 |
| | 396 | | 2 a | 392 | C - 9 | V | 133.00 | " | 8.3 | 5.6 | 4.1 | 264 |
| | | | 2 a | 1185 | C - 4 | V | 132.58 | " | 10.5 | 8.6 | 5.55 | 700 |
| | | | 2 a | 928 | C - 6 | V | 132.96 | " | 8.95 | 7.1 | 4.35 | 405 |
| | | | 2 a | 926 | C - 6 | V | 132.94 | " | 7.1 | 6.3 | 3.9 | 240 |

第21表 石器計測表 (7)

| 掉図 | 番号 | 器種 | 分類 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量g |
|--------------|-----|--------|-----|------|------|---|--------|-----|-------|------|------|-------|
| 第 60 図 | | 磨 石 | 2 a | 761 | C-8 | V | 133.16 | 砂 岩 | 12.2 | 10.2 | 5.3 | 903 |
| | | | 2 a | 894 | C-7 | V | 133.07 | " | 10.9 | 9.7 | 4.1 | 540 |
| | | | 2 a | 1119 | C-4 | V | 132.63 | " | 12.6 | 10.0 | 5.6 | 960 |
| | | | 2 a | 1277 | B-3 | V | 132.52 | " | 11.6 | 8.8 | 5.9 | 824 |
| | | | 2 a | 1044 | C-5 | V | 132.82 | " | 7.9 | 5.3 | 3.1 | 200 |
| | | | 2 a | 155 | C-11 | V | 133.05 | " | 6.9 | 4.9 | 2.5 | 120 |
| | | | 2 a | 485 | C-11 | V | 133.03 | " | 6.4 | 5.0 | 3.2 | 135 |
| | | | 2 a | 1610 | B-2 | V | 132.11 | " | 7.7 | 6.2 | 3.2 | 215 |
| | | | 2 a | 1392 | C-4 | V | 132.50 | " | 8.0 | 6.5 | 3.1 | 240 |
| | 397 | | 2 b | 269 | C-10 | V | 132.98 | 砂 岩 | 8.3 | 5.9 | 4.1 | 275 |
| | 398 | | 2 b | 1391 | C-4 | V | 132.47 | " | 7.45 | 6.7 | 2.7 | 198 |
| | 399 | | 2 b | 624 | C-9 | V | 132.91 | " | 8.1 | 5.4 | 3.8 | 228 |
| 第 61 図 | 400 | 磨 石 | 2 b | 1376 | B-4 | V | 132.41 | 砂 岩 | 11.9 | 8.0 | 4.2 | 560 |
| | 401 | | 2 b | 225 | C-10 | V | 133.10 | " | 10.8 | 7.2 | 4.4 | 458 |
| | 402 | | 2 b | 1139 | C-4 | V | 132.57 | " | 10.0 | 6.3 | 4.9 | 458 |
| | 403 | | 2 b | 1258 | B-4 | V | 132.56 | " | 10.4 | 7.1 | 5.2 | 535 |
| | 404 | | 2 b | 1371 | C-4 | V | 132.58 | " | 14.7 | 8.8 | 4.8 | 940 |
| | 405 | | 2 b | 763 | C-8 | V | 133.03 | " | 12.2 | 7.8 | 5.5 | 735 |
| | 406 | | 2 b | 777 | C-8 | V | 132.87 | " | 15.3 | 10.2 | 5.7 | 1,275 |
| | 407 | | 2 b | 1686 | C-8 | V | 133.04 | " | 15.2 | 8.7 | 6.3 | 1,122 |
| 第 62 図 | 408 | 磨 石 | 2 b | 1751 | C-11 | V | 132.78 | 砂 岩 | 7.8 | 6.4 | 5.7 | 398 |
| | 409 | | 2 b | 977 | C-6 | V | 132.85 | " | 8.5 | 7.4 | 5.0 | 430 |
| | 410 | | 2 b | 一括 | C-7 | V | | " | 7.3 | 6.35 | 4.95 | 310 |
| | 411 | | 2 b | 843 | C-8 | V | 132.89 | " | 12.1 | 8.8 | 5.5 | 810 |
| | | | 2 b | 1752 | C-11 | V | 132.78 | " | 16.4 | 7.8 | 5.75 | 1,157 |
| | | | 2 b | 880 | C-7 | V | 133.05 | " | 18.1 | 8.5 | 5.7 | 1,265 |
| | | | 2 b | 1595 | B-2 | V | 131.96 | " | 13.0 | 8.85 | 4.45 | 725 |
| | | | 2 b | 1129 | C-4 | V | 132.62 | " | 13.05 | 8.0 | 5.8 | 842 |
| | | | 2 b | 764 | C-8 | V | 132.96 | " | 13.2 | 6.4 | 5.45 | 775 |
| | | | 2 b | 403 | C-9 | V | 132.98 | " | 10.4 | 6.2 | 5.0 | 540 |
| | | | 2 b | 397 | C-9 | V | 133.00 | " | 11.35 | 7.5 | 6.05 | 805 |
| | | | 2 b | 1488 | B-3 | V | 132.41 | " | 10.1 | 6.1 | 4.3 | 368 |
| | | | 2 b | 1388 | C-4 | V | 132.58 | " | 9.8 | 5.3 | 4.7 | 415 |
| | | | 2 b | 1401 | C-4 | V | 132.53 | " | 9.3 | 5.95 | 3.95 | 285 |
| | | | 2 b | 543 | C-10 | V | 132.79 | " | 9.4 | 5.1 | 4.6 | 382 |
| | | | 2 b | 400 | C-9 | V | 133.09 | " | 8.0 | 4.5 | 3.95 | 232 |
| | 412 | | 2 c | 484 | C-11 | V | 133.01 | " | 8.75 | 7.25 | 5.65 | 490 |
| | 413 | | 2 c | 220 | C-10 | V | 133.10 | " | 5.4 | 5.0 | 3.1 | 128 |
| | 414 | | 2 c | 1164 | C-4 | V | 132.56 | " | 7.9 | 7.1 | 5.0 | 355 |
| | 415 | | 2 c | 432 | C-12 | V | 133.17 | " | 10.0 | 6.7 | 5.8 | 620 |
| | 416 | | 2 c | 190 | C-10 | V | 132.89 | " | 9.8 | 7.1 | 5.7 | 535 |
| | 417 | | 2 c | 289 | C-10 | V | 133.05 | " | 8.1 | 6.9 | 5.8 | 470 |

第22表 石器計測表(8)

| 排図 | 番号 | 器種 | 分類 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量 g |
|--------------|-----|------------------|-----|------|------|---|--------|--------|-------|------|------|-------|
| 第 62 図 | 418 | 磨 石 | 2 c | 544 | C-10 | V | 132.86 | 砂 岩 | 8.15 | 6.3 | 4.55 | 335 |
| | | | 2 c | 473 | C-11 | V | 132.89 | # | 5.2 | 4.9 | 3.4 | 116 |
| | | | 2 c | 388 | C- 9 | V | 133.00 | # | 8.35 | 6.7 | 4.5 | 388 |
| | | | 2 c | 419 | C-12 | V | 133.03 | # | 8.0 | 7.2 | 5.95 | 419 |
| | | | 2 c | 401 | C-11 | V | 133.04 | # | 7.6 | 6.0 | 4.9 | 401 |
| | | | 2 c | 1792 | B- 2 | V | 132.25 | # | 8.9 | 7.4 | 6.05 | 480 |
| | | | 2 c | 769 | C- 8 | V | 133.16 | # | 7.0 | 6.4 | 5.5 | 333 |
| | | | 2 c | 813 | C- 8 | V | 132.90 | # | 10.0 | 8.45 | 5.0 | 625 |
| | | | 2 c | 1739 | C-10 | V | 132.81 | # | 9.3 | 5.9 | 6.0 | 465 |
| | | | 2 c | 1711 | C- 9 | V | 132.96 | # | 7.9 | 7.15 | 5.4 | 430 |
| 第 63 図 | 419 | 楕 円 | 3 | 742 | C- 8 | V | 133.04 | 砂 岩 | 10.7 | 5.55 | 5.6 | 458 |
| | | | 1 a | 950 | C- 6 | V | 132.84 | 砂 岩 | 10.45 | 6.0 | 5.3 | 429 |
| | | | 1 a | 455 | C-11 | V | 132.95 | # | 8.8 | 7.4 | 4.3 | 343 |
| | | | 1 a | 1548 | B- 2 | V | 132.19 | # | 8.8 | 7.2 | 5.4 | 446 |
| | | | 1 a | 833 | C- 8 | V | 132.99 | # | 2.3 | 4.95 | 3.5 | 219 |
| | | | 1 a | 781 | C- 8 | V | 133.06 | # | 8.3 | 5.2 | 4.8 | 290 |
| | | | 1 a | 879 | C- 7 | V | 133.06 | # | 6.1 | 4.05 | 3.1 | 95 |
| | | | 1 a | 1072 | C- 5 | V | 132.66 | # | 6.3 | 5.0 | 3.3 | 131 |
| | | | 1 b | 1098 | C- 5 | V | 132.63 | # | 8.4 | 5.8 | 5.0 | 315 |
| | | | 1 b | 452 | C-12 | V | 133.08 | # | 9.8 | 5.9 | 5.0 | 432 |
| | | | 1 b | 1481 | B- 3 | V | 132.27 | # | 8.05 | 3.65 | 5.3 | 320 |
| | | | 1 b | 1589 | A- 1 | V | 132.19 | # | 9.2 | 6.2 | 3.7 | 305 |
| | | | 1 b | 1749 | C-11 | V | 132.80 | # | 14.8 | 7.0 | 6.0 | 898 |
| 第 64 図 | 431 | 形 敲 石 | 2 a | 808 | C- 8 | V | 132.87 | 砂 岩 | 9.0 | 6.1 | 3.6 | 300 |
| | | | 2 a | 1649 | C- 7 | V | 132.87 | # | 16.4 | 11.6 | 7.0 | 1,718 |
| | | | 2 b | 884 | C- 7 | V | 132.89 | # | 12.2 | 8.2 | 5.5 | 782 |
| | | | 2 b | 1583 | B- 1 | V | 132.19 | # | 9.4 | 5.4 | 3.2 | 215 |
| | | | 2 b | 830 | C- 8 | V | 132.97 | # | 8.3 | 6.2 | 4.15 | 286 |
| | | | 2 b | 780 | C- 8 | V | 133.00 | # | 11.2 | 6.3 | 4.7 | 442 |
| | | | 2 b | 1513 | B- 3 | V | 132.39 | # | 10.0 | 7.4 | 5.0 | 470 |
| | | | 2 b | 1541 | B- 2 | V | 132.37 | # | 9.1 | 6.6 | 4.1 | 365 |
| | | | 3 | 1160 | C- 4 | V | 132.60 | # | 10.0 | 6.0 | 4.6 | 300 |
| | | | 3 | 1425 | C- 3 | V | 132.43 | 砂 岩 | 9.7 | 7.1 | 5.85 | 508 |
| 第 65 図 | 440 | 円 形 敲 石 | 3 | 1602 | B- 2 | V | 132.23 | # | 9.6 | 6.9 | 4.0 | 345 |
| | | | 3 | 1541 | B- 2 | V | 132.37 | # | 12.7 | 8.2 | 5.1 | 710 |
| | | | 3 | 776 | C- 8 | V | 132.88 | # | 13.1 | 6.9 | 4.3 | 565 |
| | | | 4 | 1066 | C- 5 | V | 132.69 | # | 15.3 | 8.9 | 4.6 | 837 |
| | | | 1 | 1093 | C- 5 | V | 132.91 | 砂 岩 | 12.5 | 10.8 | 5.2 | 1,008 |
| 第 66 図 | 445 | 円 形 敲 石 | 1 | 677 | C- 9 | V | 132.97 | # | 7.6 | 8.1 | 3.5 | 300 |
| | | | 2 | 1530 | B- 2 | V | 132.28 | # | 7.0 | 6.7 | 2.1 | 138 |
| | | | 2 | 1587 | A- 1 | V | 132.19 | # | 8.1 | 7.5 | 4.0 | 335 |
| | | | 2 | 1498 | B- 3 | V | 132.36 | # | 9.0 | 8.8 | 4.2 | 460 |

第23表 石器計測表 (9)

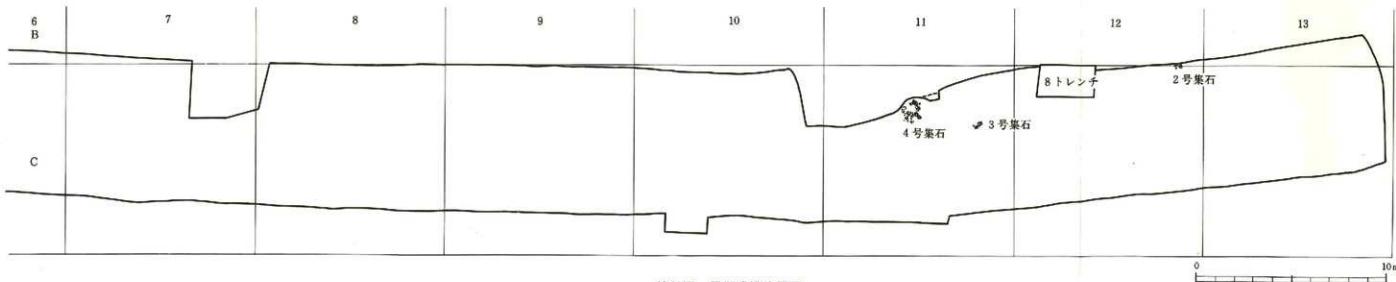
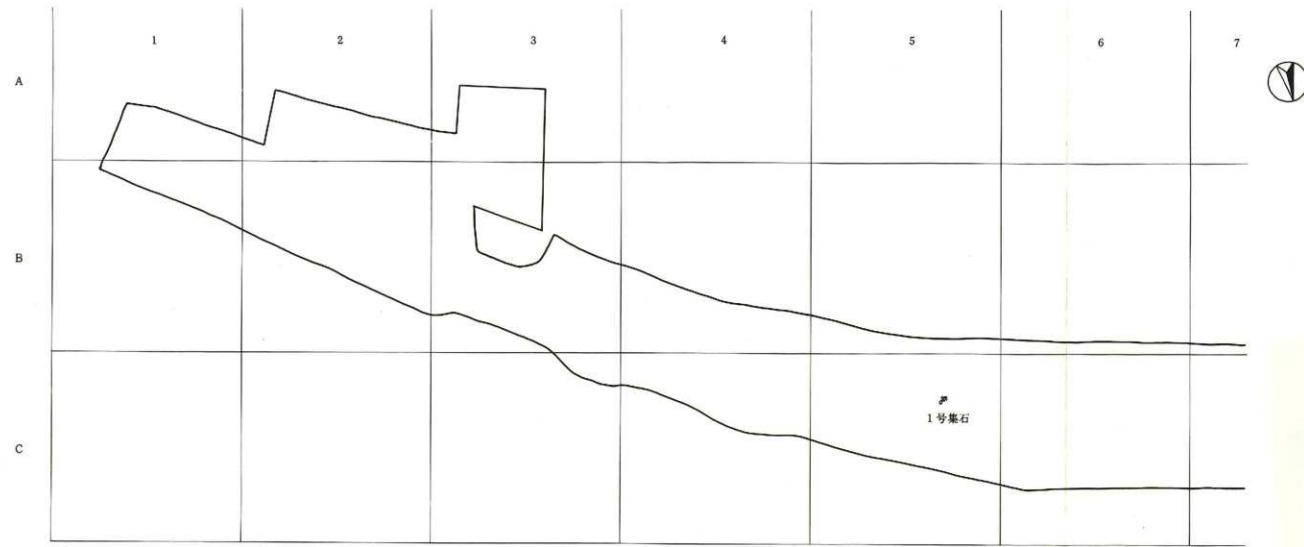
| 地図 | 番号 | 器種 | 分類 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量 g |
|--------------|-----|------------------|------|------|------|--------|--------|------|------|-------|-------|-------|
| 第 66 図 | 450 | 円 形 敲 石 | 2 | 1368 | C-4 | V | 132.57 | 砂 岩 | 12.2 | 9.5 | 4.6 | 665 |
| | | | 2 | 1693 | C-8 | V | 133.15 | " | 7.8 | 7.4 | 4.65 | 340 |
| | | | 2 | 1175 | C-4 | V | 132.63 | " | 9.8 | 9.1 | 3.25 | 430 |
| | | | 2 | 399 | C-9 | V | 133.00 | " | 9.2 | 7.9 | 3.75 | 365 |
| | | | 2 | 186 | C-10 | V | 133.06 | " | 11.3 | 11.2 | 6.4 | 1,170 |
| | 451 | | 3 | 590 | C-10 | V | 132.88 | 礫灰岩? | 9.3 | 8.3 | 3.2 | 320 |
| | 452 | | 3 | 936 | C-6 | V | 132.96 | 砂 岩 | 8.1 | 7.9 | 2.9 | 266 |
| | | | 3 | 1117 | C-4 | V | 132.64 | " | 9.0 | 6.9 | 3.85 | 290 |
| | 453 | | 4 | 882 | C-7 | V | 133.01 | " | 6.5 | 6.3 | 4.6 | 232 |
| | | | 4 | 959 | C-6 | V | 132.90 | " | 7.5 | 6.0 | 4.7 | 264 |
| 第 67 図 | 454 | 大型 磨 石 | 1484 | B-3 | V | 132.30 | 砂 岩 | 18.7 | 15.1 | 9.0 | 3,540 | |
| | | | 1709 | C-9 | V | 132.97 | 砂 岩 | 13.9 | 11.2 | 10.45 | 2,380 | |
| | | | 791 | C-8 | V | 133.01 | 砂 岩 | 14.4 | 13.3 | 9.5 | 2,340 | |
| | 455 | 四 石 | 188 | C-10 | V | 132.89 | 砂 岩 | 12.5 | 6.4 | 2.4 | 242 | |
| | 456 | | 186 | C-10 | V | 133.06 | 砂 岩 | 7.8 | 6.4 | 5.4 | 186 | |
| | 457 | | 1657 | C-8 | V | 132.76 | 砂 岩 | 11.1 | 7.9 | 5.1 | 560 | |
| | | | 217 | C-10 | V | 132.99 | 砂 岩 | 11.6 | 10.3 | 5.95 | 1,210 | |

② ベットストーン（愛玩石）

ベットストーン（愛玩石）として分類したものは、7点出土した。一般の石器のような実用性ではなく、美しい色彩と滑らかな石質のゆえに、意図的に遺跡内に持ち込まれたものと思われる。実測図は提示していないので、第24表の計測表と図版を参照されたい。石材の同定は行なっていないが、表面観察では、石英質の石材のもの（5点）と頁岩質の石材のもの（2点）の二種類が見られる。包含層から出土した砾のほとんどが砂岩である中で、これらの2種類の石材は明らかに異質な存在である。平面形は円形・梢円形で、大きさが3~6cmの小円砾である。石英質のものは、玉髓の転石だと思われ、黄灰色~淡黄褐色を呈し、表面は滑らかである。C-9区とC-10区の半径6mの円内に分布している。頁岩質ものは、黒色を呈し、人為的な加工が行なわれていると思われるが、明瞭な研磨痕は観察されない。C-5区とB-4区で1点ずつ出土した。

第24表 ベットストーン計測表

| 番号 | 登録番号 | 出土区 | 層 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量g | 観察所見 |
|-----|------|------|---|--------|--------|------|------|------|--------|-------------------|
| 458 | 379 | C-9 | V | 132.98 | 石英質の岩石 | 3.05 | 2.0 | 1.65 | 14.97 | 淡茶褐色。長梢円形。 |
| 459 | 409 | C-9 | V | 133.04 | " | 4.5 | 2.7 | 2.8 | 50.97 | 黄白色。 |
| 460 | 333 | C-9 | V | 132.92 | " | 3.6 | 2.5 | 2.1 | 26.45 | 淡黃褐色。 |
| 461 | 173 | C-10 | V | 132.96 | " | 2.8 | 1.9 | 1.9 | 14.28 | 茶褐色。梢円形。 |
| 462 | 195 | C-10 | V | 133.09 | " | 3.4 | 2.3 | 2.15 | 24.89 | 黄白色。 |
| 463 | 1629 | C-5 | V | 132.54 | 頁 岩? | 5.9 | 4.2 | 3.1 | 109.33 | 黒色。長梢円形。部分的に研磨痕有。 |
| 464 | 1386 | B-4 | V | 132.53 | 頁 岩? | 3.9 | 3.7 | 3.4 | 71.22 | 黒色。球状。 |



第68図 早期遺構位置図

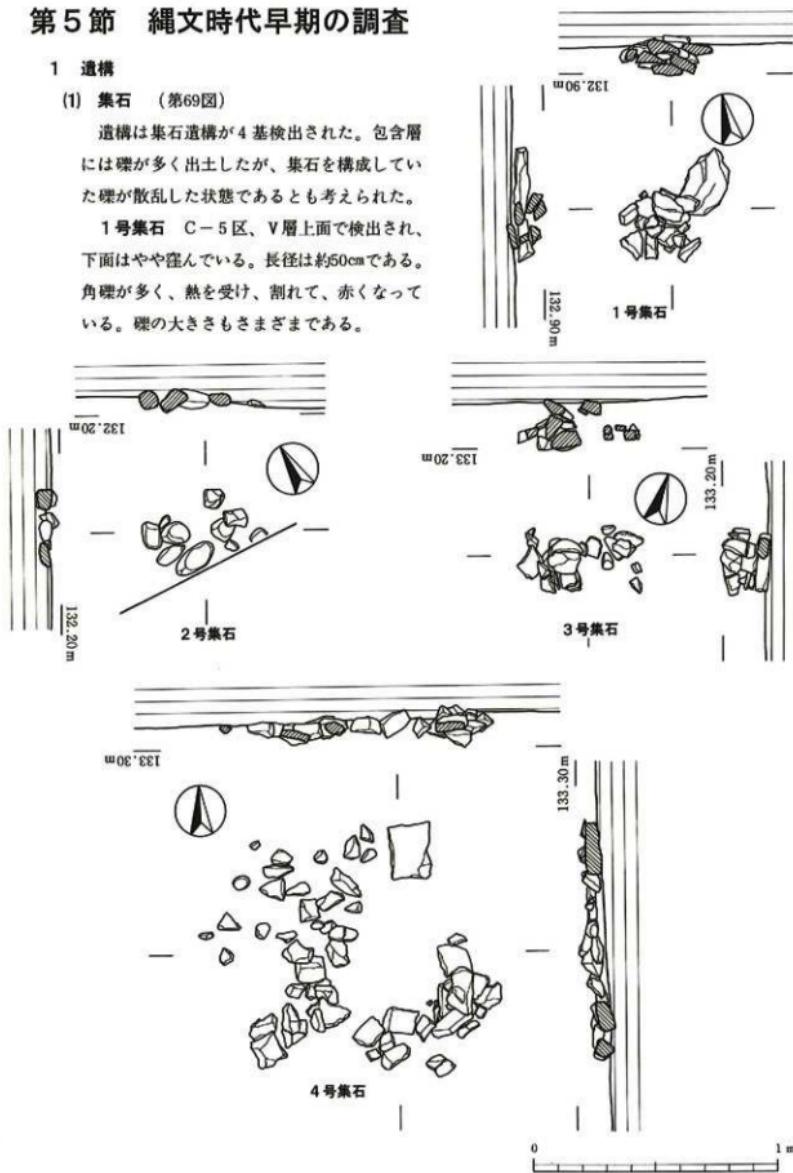
第5節 繩文時代早期の調査

1 遺構

(1) 集石 (第69図)

遺構は集石遺構が4基検出された。包含層には礫が多く出土したが、集石を構成していた礫が散乱した状態であるとも考えられた。

1号集石 C-5区、V層上面で検出され、下面はやや窪んでいる。長径は約50cmである。角礫が多く、熱を受け、割れて、赤くなっている。礫の大きさもさまざまである。



第69図 早期の集石

2号集石 B・C-12区、IV層上位で検出され、掘り込みはない。削平された畠の方に延びるものと思われるが、礫は約50cmの範囲内に集中する。円礫を多く使用している。円礫は直径10cm前後のものが多いが、大きいものでは直径20cm程度のものも見られる。

3号集石 C-11区から検出された。IV層中から礫が散乱し、V層上面が集石の下面で、掘り込みはない。長径は50cm強である。砂岩の円礫を多く用いているが、熱を受け破碎し、赤もししくは黒に変色している。中央に土器を咬んでいる。礫の大きさはさまざまである。

4号集石 C-11区から検出された。IV層中から検出され、掘り込みはない。角礫を中心で、150cm四方の範囲にばらけている。礫の中には磨石が2点みられる。礫は熱を受け破碎し、大きいものでは20cm強のものがみられる。

2 出土遺物

(1) 土器

1類 (第71図～第74図・465～491)

口縁部がやや聞く円筒形平底土器である。色調は赤茶褐色が基本である。465～470は口縁部である。484・485は底部で、底面付近には横方向の削りを施す。調整はナデ・工具ナデ・ミガキで、極めて丁寧である。口縁外部に貝殻条痕文、または胴部に沈線で紋様を施すものもある。紋様の差異によって細分できる。

(1a類) 465～467は口縁部に波状の貝殻条痕文を施し、口唇部に刻みを施している。

(1b類) 470～473も口縁部に波状の貝殻条痕文を施すが、やや鋭角的で、口唇部に刻みをもたない。

(1c類) 474～479は胴部に斜方向と横方向の沈線文を施すものである。

2類 (第75図 492～498)

胴部から口縁部にかけて丸みを持ちながら直立する形態である。外面は、平行と鋸歯状の沈線によって紋様が構成される。

492・493は同一個体である。口唇部に刻みをもち、やや右下がりで横方向の3条の平行沈線が間隔をおいて2段あり、その間に鋸歯状の沈線文を施す。492には円形の補修孔がみられる。

3類 (第75図 499・500)

紋様が刻目突帯・凹線によって構成されるものである。刻目突帯は横方向と斜方向に貼り付けられ、その間に凹線文が斜方向に施される。

4類 (第76図 501・502)

波状口縁をなし、口唇部に刻みを施すものである。外面の条痕も特徴的である。

5類 (第76図 503・504)

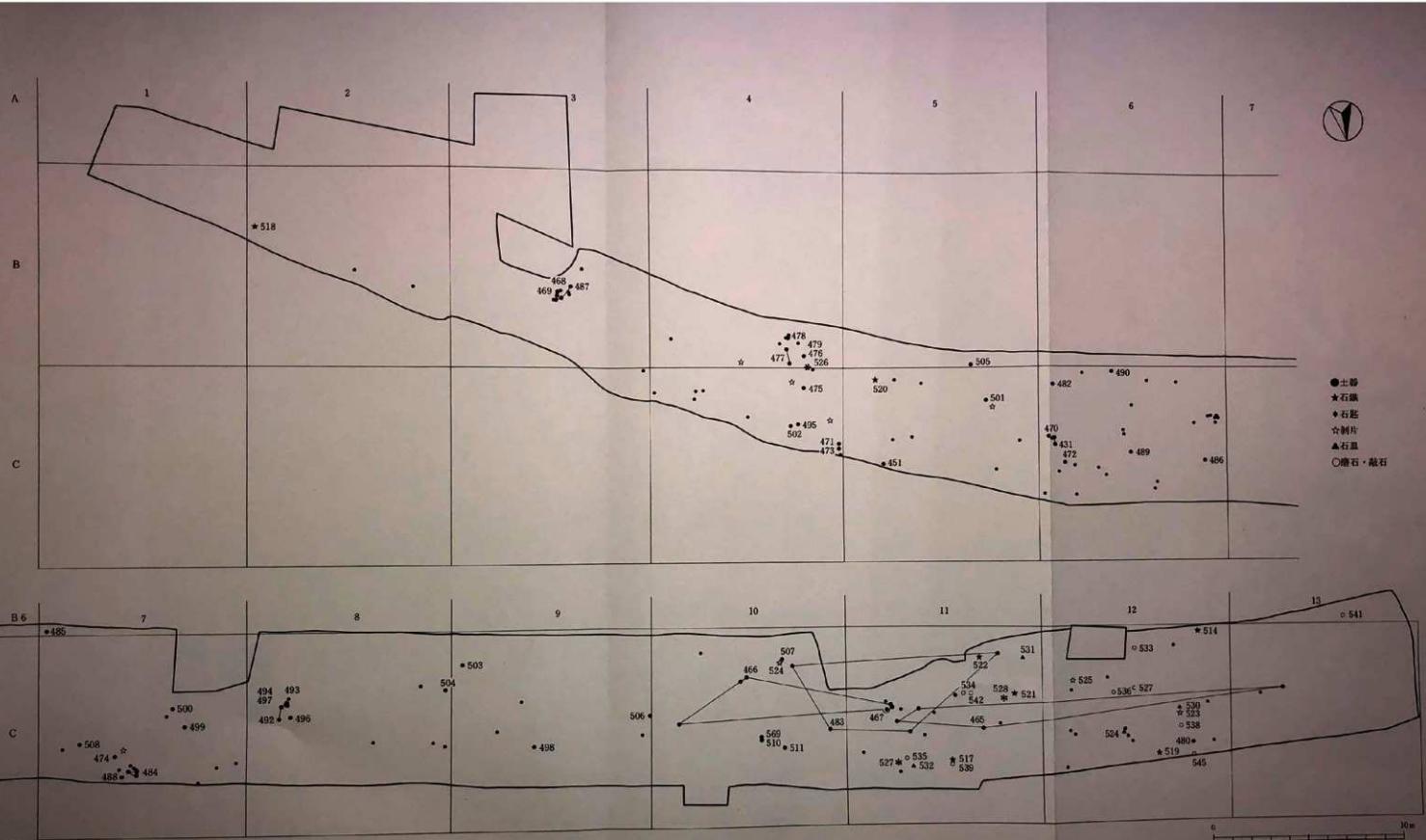
横方向の突帯と沈線によって紋様が構成されるものである。

6類 (第76図 505)

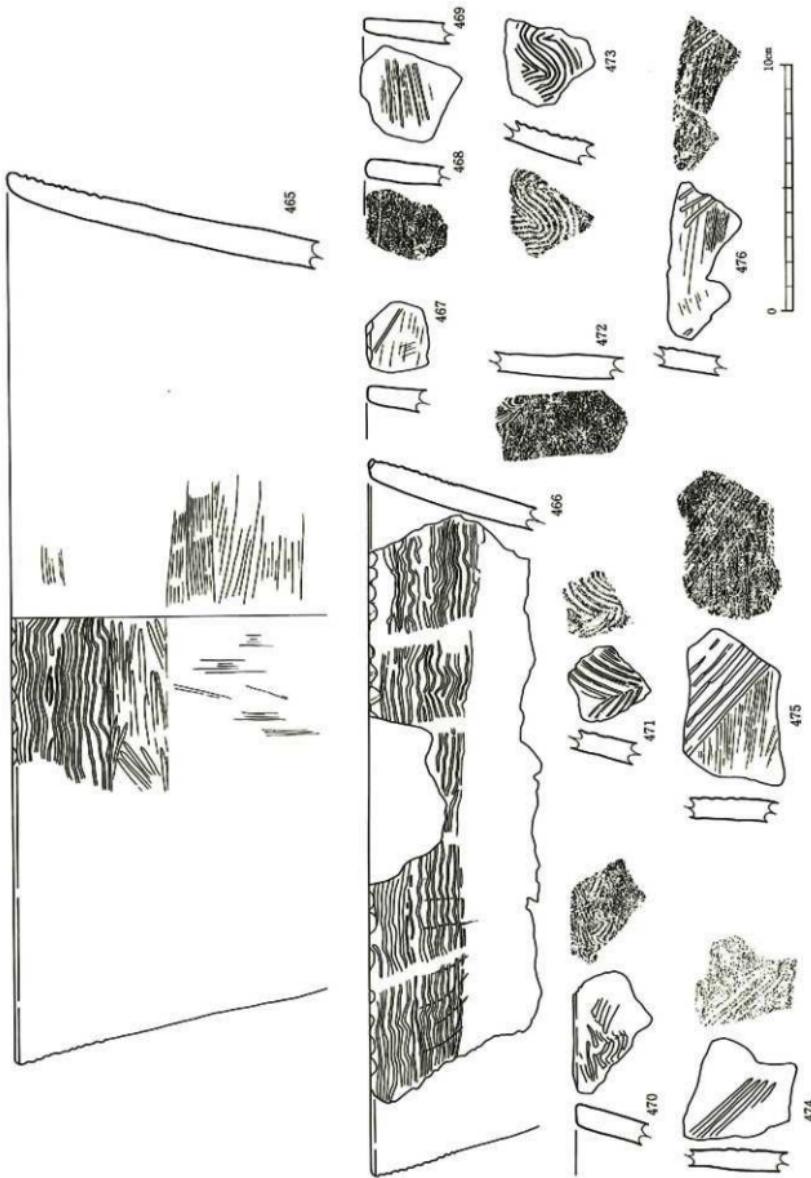
縱方向に微隆突帯をもち、内面に削りを施すものである。

7類 (第76図 506)

外面に明瞭な条痕、内面に横方向の明瞭な条痕を施すものである。



第70圖 早期遺物分布圖



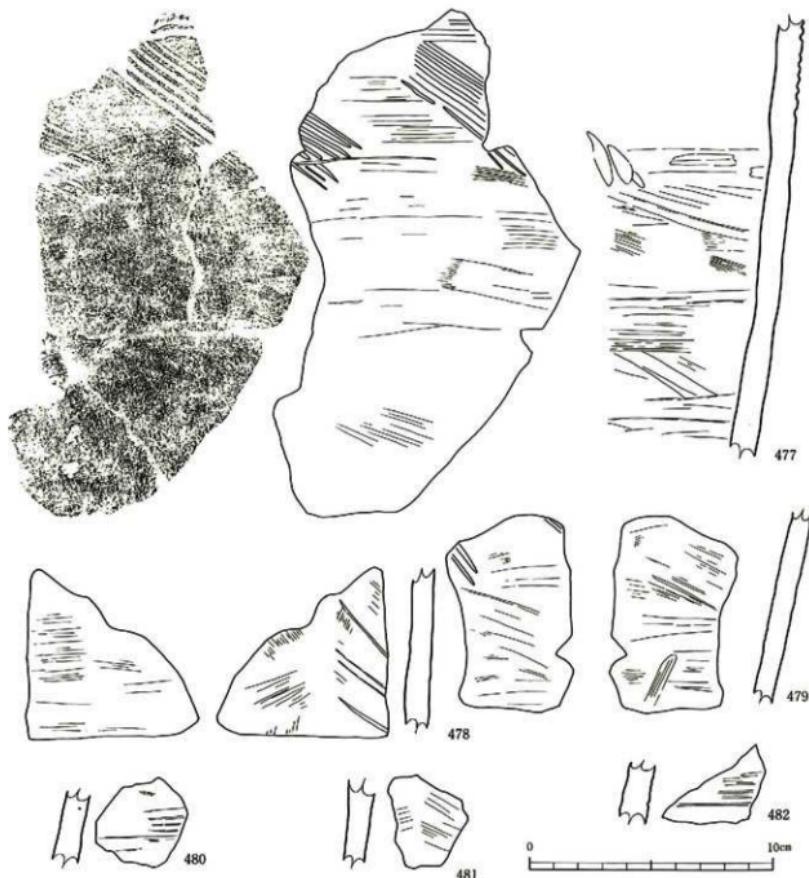
第71図 早期の土器（1）

(2) III層の遺物・表探資料

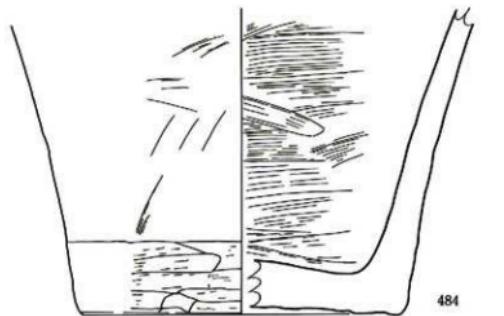
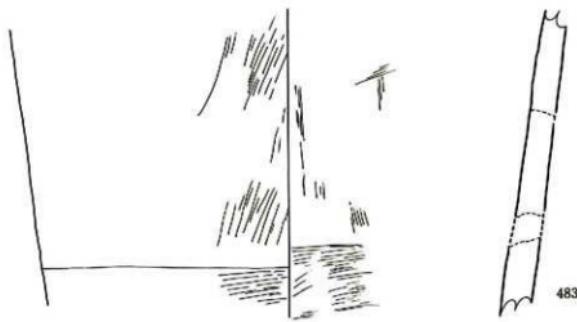
出土土器 (第76図 507~513)

III層はほとんど削平されていたが、樹痕等の自然的な作用により、III層からIV層に落ち込んだ遺物 (507~511) が出土した。507は内外面に荒く不明瞭な条痕を施す。508は条痕で調整した後、沈線文を横・縦・斜方向に施すもので、器壁は比較的薄い。509~511は、外面では縦方向に、内面では横方向に条痕を施すものである。

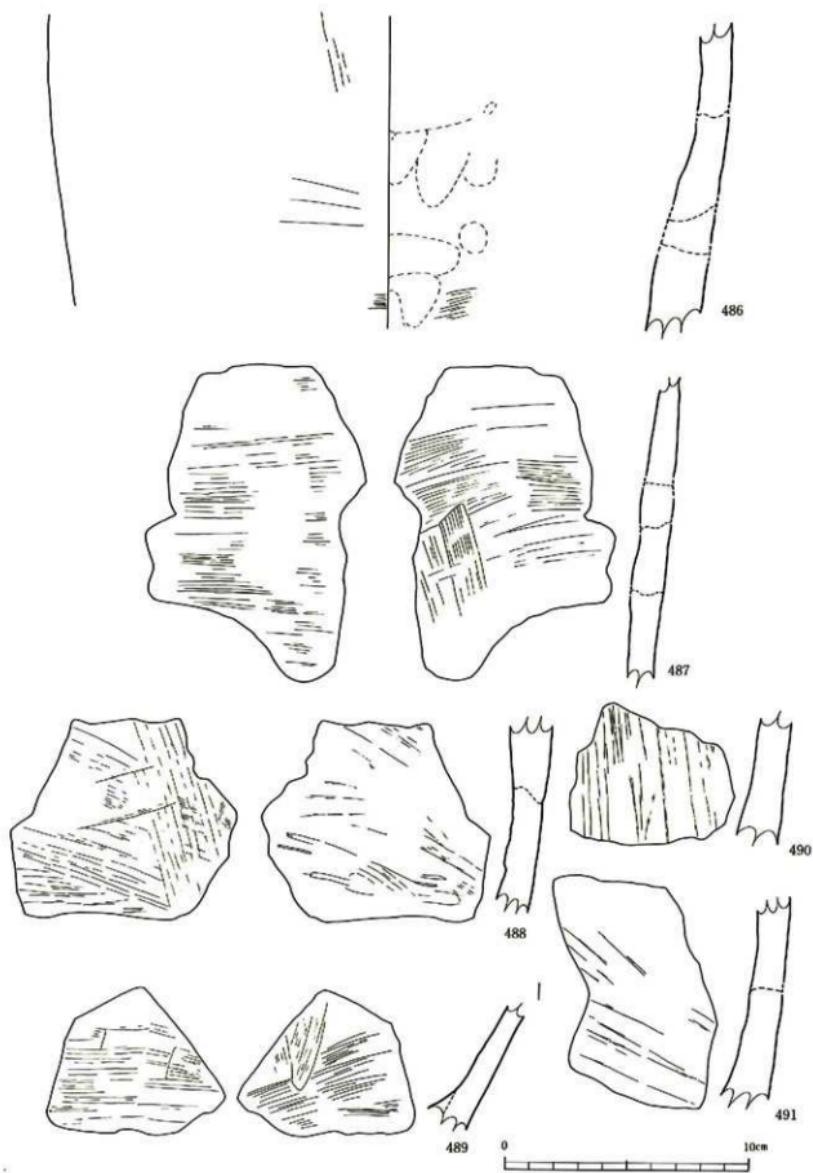
512・513は表面採集資料で、同一個体だと思われる。外面には条痕を、内面には条痕及びみがきを施す。



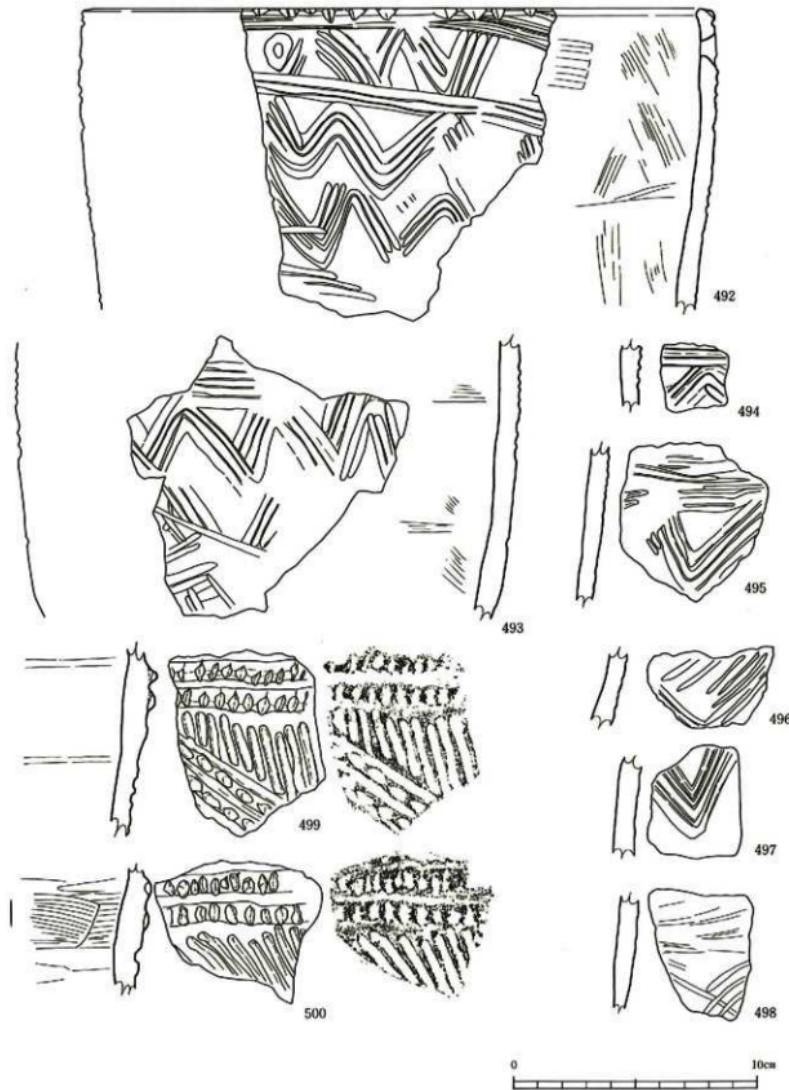
第72図 早期の土器 (2)



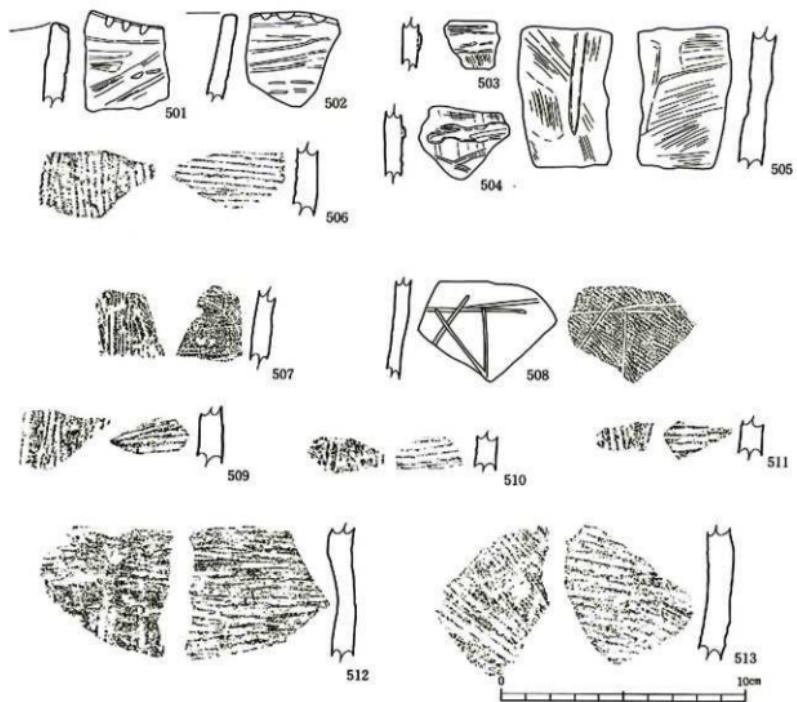
第73図 早期の土器（3）



第74図 早期の土器 (4)



第75図 早期の土器（5）



第76図 早期の土器（6）

第25表 早期土器觀察表

| 被回 | 番号 | 器形 | 層 | 標高m | 預測 | 器種 | 部位 | 法數(径・高・厚)cm | 胎 土 | 調整・文様 | 焼成 | 色 調 | 備 考 |
|--------------|-----|------|-----|---------|----|----|----|---------------------|--------------|-----------------|----|--------|----------|
| 第 71 回 | 465 | | | | 1 | 深鉢 | 口縁 | 口 36.4cm 厚 1.2cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・ヘラミガタ・ナ | 普通 | 赤茶褐色 | 口唇部に刻み目 |
| | 466 | V | | | 1 | 深鉢 | 口縁 | 口 29.2cm 厚 1.1cm | 雲母 | 内・素地・ヘラミガタ・丁寧なナ | 良 | 赤茶褐色 | 口唇部に刻み目 |
| | 467 | 475 | V | 133.6 | 1 | 深鉢 | 口縁 | 厚 0.9cm | 石英・雲母・角閃石 | 内・素地・とさき・波線 | 良 | 赤茶褐色 | 口唇部に刻み目 |
| | 468 | 1453 | V | 132.471 | 1 | 深鉢 | 口縁 | 厚 0.9cm | 石英・雲母 | 内・素地・角閃石のナ | 普通 | 内・淡茶褐色 | 内・淡茶褐色 |
| | 469 | 1454 | V | 132.501 | 1 | 深鉢 | 口縁 | 厚 0.9cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・具ナ | 良 | 赤茶褐色 | |
| | 470 | 1006 | V | 132.656 | 1 | 深鉢 | 口縁 | 厚 0.9cm | 石英・雲母 | 内・素地・角閃石のナ | 良 | 内・淡茶褐色 | 内・淡茶褐色 |
| 第 72 回 | 471 | 1633 | V | 132.704 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.9cm | 雲母・砂粒 | 内・素地 | 普通 | 赤茶褐色 | |
| | 472 | 976 | V | 132.818 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.0cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・波線 | 良 | 内・淡茶褐色 | |
| | 473 | 1634 | V | 132.794 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.0cm | 石英・雲母 | 内・素地・角閃石のナ | 普通 | 内・淡茶褐色 | |
| | 474 | 900 | V | 132.829 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.9cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・ア・波線 | 普通 | 茶褐色 | やや暗い茶褐色 |
| | 475 | 1372 | V | 132.471 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.9cm | 石英・雲母・鐵 | 内・素地・波線 | 普通 | 茶褐色 | 傾き不明 |
| | 476 | 1231 | V | 132.660 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.0cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 普通 | 赤茶褐色 | 内・淡茶褐色 |
| 第 73 回 | 477 | | | | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.1cm | 石英・雲母・長石 | 内・素地・工具 | 普通 | 赤茶褐色 | 内・茶褐色 |
| | 478 | 1244 | V | 132.585 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.0cm | 石英・雲母・長石・鐵 | 内・素地・工具 | 普通 | 赤茶褐色 | 内・茶褐色 |
| | 479 | 1231 | V | 132.560 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.9cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | |
| | 480 | 414 | V | 132.232 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.1cm | 石英・雲母・小砾 | 内・素地・工具 | 普通 | 内・茶褐色 | |
| | 481 | 1068 | V | 132.820 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.1cm | 石英・砂粒 | 内・素地・工具 | 普通 | 内・茶褐色 | |
| | 482 | 1002 | V | 132.825 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.2cm | 石英・金雲母・小砾 | 内・素地・工具 | 普通 | 内・茶褐色 | |
| 第 74 回 | 483 | V | | | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.3cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 普通 | 茶褐色 | |
| | 484 | V | | | 1 | 深鉢 | 底部 | 厚 1.9cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 普通 | 茶褐色 | |
| | 485 | 1656 | V | 132.700 | 1 | 深鉢 | 底部 | 厚 1.7cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 普通 | 茶褐色 | |
| | 486 | 921 | V | 132.006 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 2.2cm | 石英・粘土が多い | 内・素地・工具 | 普通 | 茶褐色 | |
| | 487 | V | | | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.4cm | 石英・雲母・砂礫・長石 | 内・素地・工具 | 普通 | 茶褐色 | |
| | 488 | 902 | V | 132.932 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.8cm | 石英・砂粒 | 内・素地・工具 | 普通 | 茶褐色 | |
| 第 75 回 | 489 | 951 | V | 132.494 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.7cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | |
| | 490 | 999 | V | 132.705 | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.7cm | 石英・砂粒 | 内・素地・工具 | 普通 | 茶褐色 | |
| | 491 | V | | | 1 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.9cm | 石英・砂礫を多く含む | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | |
| | 492 | V | | | 2 | 深鉢 | 口縁 | 口 26.0cm 厚 0.8cm | 石英・金雲母・小砾 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | |
| | 493 | V | | | 2 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.0cm | 石英・雲母・小砾 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | |
| | 494 | 816 | V | 133.129 | 2 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.9cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 普通 | 内・茶褐色 | |
| 第 76 回 | 495 | 1121 | V | 132.708 | 2 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.8cm | 雲母・角閃石・砂粒 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | 内・淡茶褐色 |
| | 496 | 821 | V | 133.151 | 2 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.9cm | 石英・雲母・小砾 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | 内・淡茶褐色 |
| | 497 | 816 | V | 133.129 | 2 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.9cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | 内・淡茶褐色 |
| | 498 | 378 | V | 133.050 | 2 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.8cm | 雲母・角閃石・砂粒 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | 内・淡茶褐色 |
| | 499 | 874 | V | 133.026 | 3 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.4cm | 石英・雲母・角閃石・長石 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 500 | 875 | V | 133.031 | 3 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.3cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | |
| 第 77 回 | 501 | 1032 | V | 132.805 | 4 | 深鉢 | 口縁 | 厚 1.0cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 普通 | 内・茶褐色 | 浅紅色-0号茎形 |
| | 502 | 1122 | V | 133.858 | 4 | 深鉢 | 口縁 | 厚 0.7cm | 雲母・角閃石・石英・小砾 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | 口唇部に刻み目 |
| | 503 | 1685 | V | 133.056 | 5 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.8cm | 長石・石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 504 | 1706 | V | 133.404 | 5 | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.9cm | 雲母・角閃石・石英・砂粒 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 505 | 1339 | V | 132.634 | 6 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.0cm | 雲母・石英・長石・砂粒 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | |
| | 506 | 351 | V | 132.809 | 7 | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.0cm | 石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 507 | 178 | IV | 133.655 | - | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.8cm | 長石・石英・雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 良 | 茶褐色 | |
| | 508 | 896 | III | 133.001 | - | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.6cm | 雲母・石英 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 509 | 534 | III | 133.076 | - | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.0cm | 石英・長石・砂粒 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 510 | 701 | III | 132.906 | - | 深鉢 | 胴部 | 厚 0.9cm | 雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | 浅紅色-0号茎形 |
| | 511 | 214 | - | 132.920 | - | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.0cm | 雲母・砂粒 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | 浅紅色-0号茎形 |
| | 512 | - | 表採 | - | - | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.1cm | 砂粒・金雲母・石英 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 513 | - | 表採 | - | - | 深鉢 | 胴部 | 厚 1.1cm | 砂粒・石英 | 内・素地・工具 | 良好 | 茶褐色 | |

(3) 石器

確認調査時の遺物と表採資料を含めて、約40点の石器が出土した。石器の器種としては、石鎌6点、石鎌未製品3点、石匙3点、石斧1点、石皿4点、磨石・敲石10点、剥片10点が見られる。これらの石器は4・5区と11・12区を中心に出土し、土器の集中する部分とはば重なっている。

磨石・敲石、石皿の石材には、島内で産する砂岩が使用されている。石鎌、石匙などの小型剥片石器には、島外から移入された黒曜石や安山岩などの火成岩が使用されている。

① 石鎌 (第77図514~519)

表採資料を含めて6点の石鎌を図示した。石材には、黒曜石、安山岩、粘板岩の3種類が見られる。黒曜石の産地は不明である。514は、C-12区で出土した黒曜石の剥片を素材とする打製石鎌で、脚部を両側とも欠損している。515は、C-5区で出土した安山岩の剥片を素材とする打製石鎌で、514と同様に両側の脚部を欠損する。516は遺跡に隣接する畑で採集した資料である。安山岩の剥片が素材で、左右の脚の長さが異なっている。脚に近い両側縁部は、鋸歯状に整形される。517は、C-11区で出土した安山岩の剥片を素材とする打製石鎌である。先端部を欠損する。両側縁部は緩やかに内湾しながら先端部にいたる。基部の抉りも緩やかで、曲線的である。518は、B-2区で出土した黒曜石の剥片を素材とする打製石鎌である。長さ3.6cmの大型石鎌で、両側縁部は鋸歯状に整形されている。519は、C-12区で出土した粘板岩剥片が素材の打製石鎌である。基部の抉りは浅く、短い脚は内側に屈曲する。裏面には素材剥片剥離時の主要剥離面が大きく残り、表面には横方向の研磨痕が観察される。表面の研磨作業は、刃部作出のための両側縁部からの剥離作業に先行して行なわれている。このことから、研磨作業は磨製石鎌を目指したものではなく、素材剥片を薄くするという目的のために行なわれたものと捉えられる。

② 模形石器 (第77図520)

安山岩の剥片が素材で、C-5区で出土した。表面には素材剥片剥離に先行する剥離面が大きく残され、裏面にも主要剥離面が大きく残されている。基部に浅い抉りが認められるので、石鎌未製品の可能性もある。

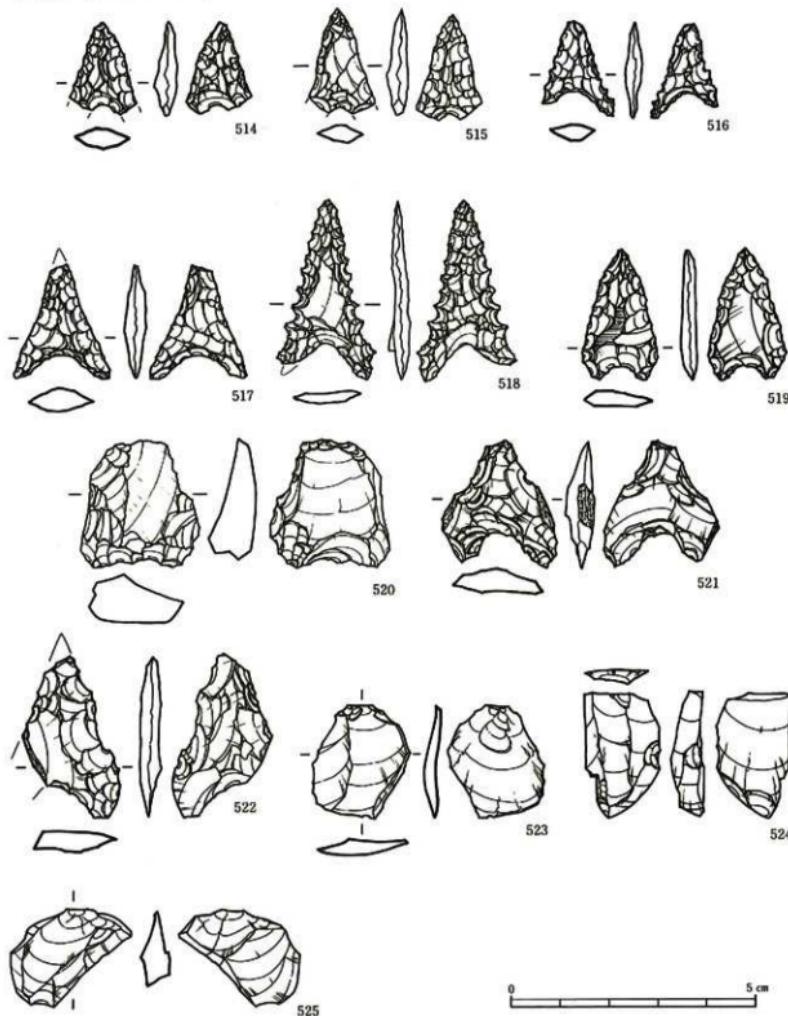
③ 石鎌未製品 (第77図521・522)

521・522は、淡緑色のシルト質頁岩の剥片が素材である。いずれもC-11区で出土し、同質の石材であることから、同一母岩から得られた剥片だと思われる。521は基部の抉りも明瞭で、形状調整がほぼ終了した段階の資料である。両側縁部には節理面が残されたままで、刃部の調整は行なわれていない。522は、形状調整が終了し、刃部の再調整前の段階の未製品である。左の脚が節理面で折損したために、未製品のまま放棄されたものと考えられる。

④ 剥片 (第77図523~525)

小型の剥片は図示した3点を含め、10点出土した。石材には黒曜石、安山岩、粘板岩が見られる。これらの剥片を剥離した石核は出土していない。黒曜石には、灰色を呈する大分県姫島産と思われるもの(2点)と、黒色で不純物を含まない佐賀県腰岳産と思われるもの(2点)の2種類がある。523は、腰岳産と思われる黒曜石の剥片で、二次的な加工痕や使用痕は観察さ

れない。524は、安山岩のやや縦長の剥片である。剥片の頭部は折断され、裏面には主要剥離面以外に2枚の二次的な剥離面が観察される。525は、姫島産と思われる不定型の黒曜石剥片である。剥片剥離の際に予想外の方向に力が加わり、主要剥離面のほとんどを欠失する。同質の剥片を素材とする製品は出土していない。



第77図 早期の石器 石鏃・剥片

⑤ 石匙 (第78図526~528)

石匙は3点出土した。

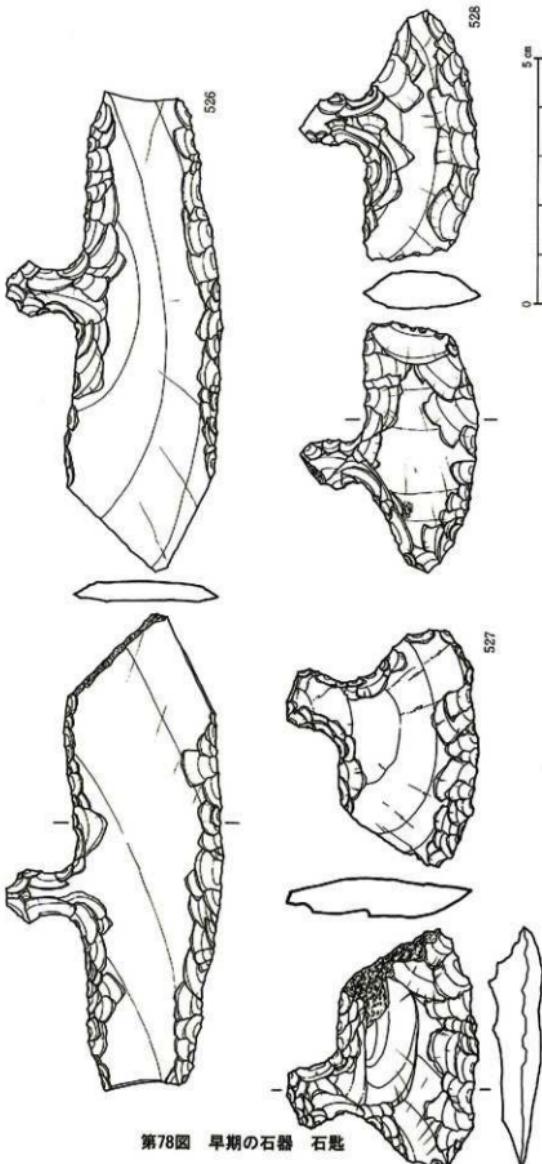
いずれもきめの細かい安山岩の横長剥片を素材とする。3点の間には大きさや刃部の長短の差があるものの、同一のシステムにより製品化されている。

つまみは、素材剥片の一番厚い部分であるバルブ部分に作出される。一方、刃部は、剥片の打点と対向する剥片端部に作出される。素材剥片が横長であることから、製品は横型の石匙となる。

526はB-4区で出土した。素材剥片の厚さは約0.5cmと薄く、刃部の長さは約7.7cmである。527と528はC-11区で出土した。527の表面右側縁部には、自然面が残される。528のつまみの上端には素材剥片剥離時の打面となった自然面が残っている。

⑥ 石皿 (第79図 529~532)

4点出土した。いずれも砂岩が素材である。529と530はC-12区で、531と532はC-11区で出土した。形状の調整は行なわれず、使用面のくぼみもさほど顕著ではない。



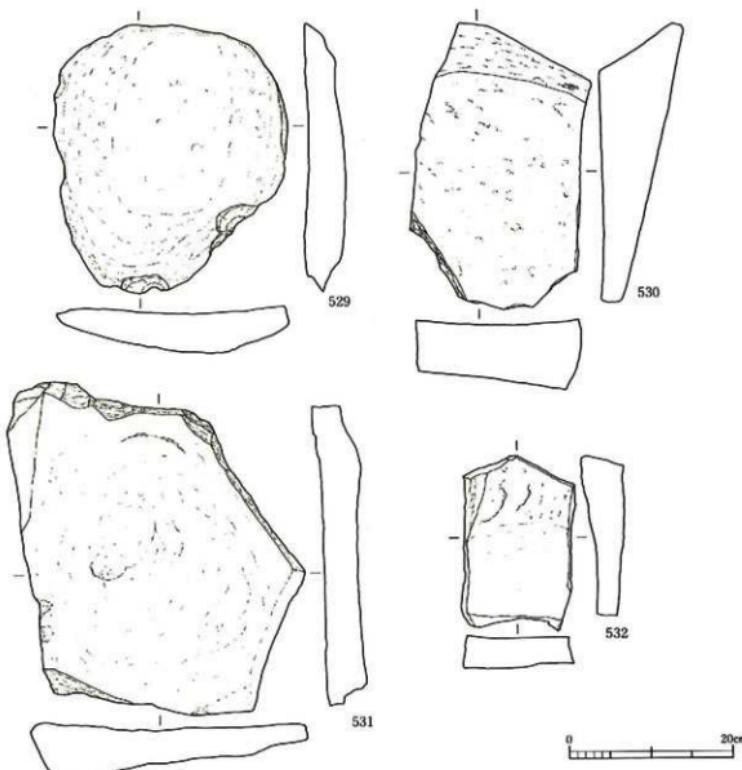
第78図 早期の石器 石匙

⑦ 磨石・敲石 (第80図533~540)

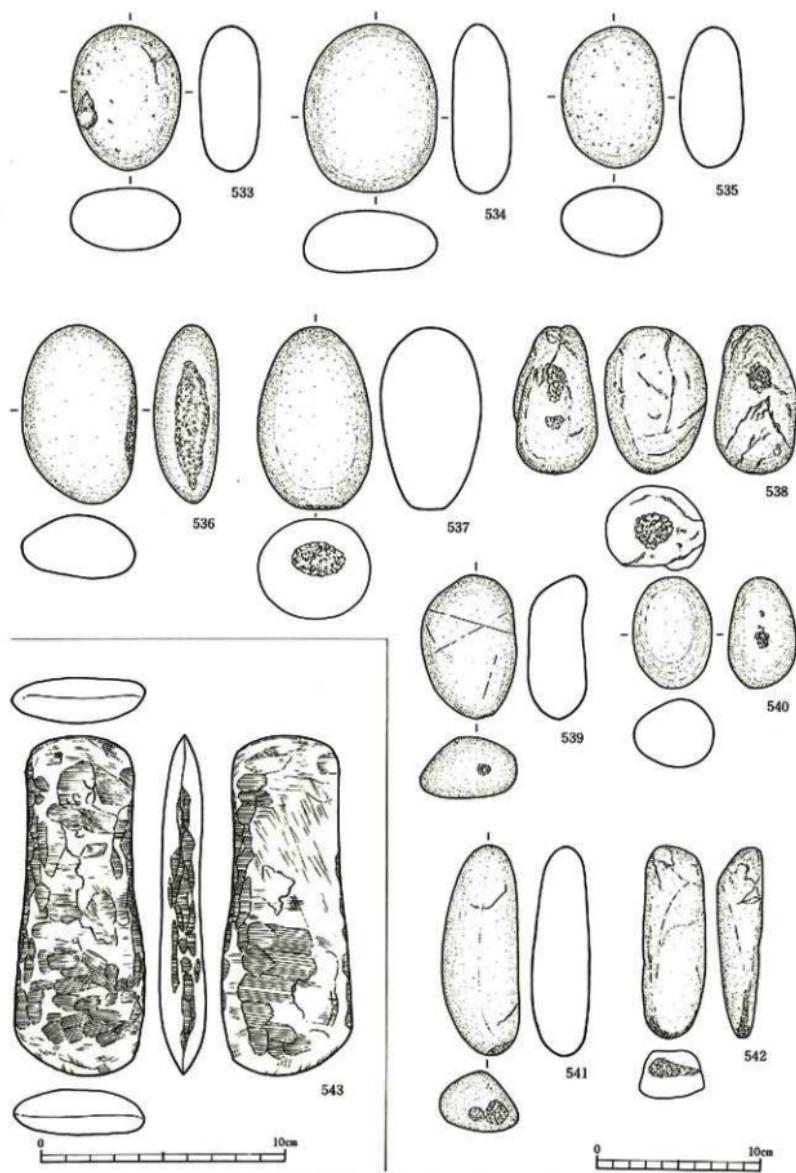
磨石・敲石類は8点出土した。単独の機能だけでなく、磨石と敲石の機能を併せ持つものが見られる。これらはC-11・12区に集中して出土し、いずれも砂岩の自然礫が素材となっている。533~536は磨石である。裏と表の2面が使用面となっている。536の右側面部には敲打に類似する剥落痕が観察される。537~540は敲石である。537の下端には敲打痕が観察され、裏と表は磨面となっている。538の両側面と下端には敲打痕が観察される。539は下端のみにわずかな敲打痕が観察される。540は表と裏の2面が磨面となり、右側面に敲打痕が観察される。

⑧ 棒状敲石 (第80図541・542)

草創期の包含層からも多数出土したが、早期の包含層からは2点出土した。いずれも砂岩の棒状の自然礫が素材である。541は、下端のみに敲打痕が観察される。542は下端を中心に敲打痕が観察され、一部は両側面の下部にまで及んでいる。



第79図 早期の石器 石皿



第80図 早期の石器 磨石・敲石・石斧

⑨ 磨製石斧 (第80図543)

遺物包含層から石斧は出土していない。543は遺跡近くの畠で採集された粘板岩製の磨製石斧である。採集資料のために、時代は明確でないが一応早期の遺物として取り扱った。上端と下端の2箇所に刃部が作出された両頭の石斧である。刃部は両方ともに曲線的に形成され、下端の刃は右側に偏っている。中央より上位が緩くくびれ、斧柄は斧身を挟み込むように装着されたものと思われる。器面は全面研磨により調整される。器面の研磨痕は幅7~10mmで、中央部分がいくぶんくぼんでいる。研磨作業には地面に据え付けられた広い砥面を持つ砥石だけではなく、先端がやや丸く、幅1cm程度の手持ちの小型砥石が使用されたものと考えられる。

第26表 石器計測表(10)

| 編 番号 | 器種 | 出 土 地 点 | 層 位 | 標高m | 石 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 重量g | 観察所見 |
|--------------|------------------|------------------|----------|-----|--------|--------|---------|------|------|---------------------------------|
| 第 77 回 | 石 斧 | 514 | 29 C-12 | IV | 132.85 | 黒曜石 | 1.85 | 1.3 | 0.5 | 0.70 両脚とも欠損。 |
| | | 515 | C-5 | V上 | | 安山岩 | 2.1 | 1.3 | 0.35 | 0.87 両脚とも欠損。 |
| | | 516 | 採集品 | | | 安山岩 | 1.9 | 1.5 | 0.3 | 0.56 左右で脚の長さが異なる。 |
| | | 517 | 83 C-11 | V上 | 132.80 | 安山岩 | 2.25 | 2.0 | 0.5 | 1.11 先端部欠損。 |
| | | 518 | 1565 B-2 | V上 | 132.76 | 黒曜石 | 3.6 | 2.1 | 0.2 | 1.33 据曲状の側縁を持つ。 |
| | | 519 | 60 C-12 | V上 | 132.88 | 粘板岩 | 2.65 | 1.6 | 0.3 | 1.41 表面に研磨痕があり、裏面には主要剥離面が大きく残る。 |
| 第 78 回 | 磨 形 石 器 | 520 | 1090 C-5 | V上 | 132.86 | 安山岩 | 2.6 | 2.4 | 1.0 | 6.27 石盤未製品の可能性が残る。 |
| | | 521 | 95 C-11 | IV | 132.81 | シルト質頁岩 | 2.55 | 2.3 | 0.55 | 2.29 両側縁部に節理面が残る。 |
| | | 522 | 101 C-11 | V上 | 132.85 | シルト質頁岩 | 3.3 | 1.6 | 0.5 | 2.28 左脚が節理面で欠損する。 |
| | | 523 | 57 C-12 | V上 | 132.88 | 黒曜石 | 2.3 | 1.9 | 0.35 | 1.37 不純物を含まない良質の黒曜石。 |
| | | 524 | 178 C-10 | V上 | 132.83 | 安山岩 | 2.5 | 1.5 | 0.6 | 2.82 頭部を折断する。 |
| | | 525 | 46 C-12 | V上 | 132.79 | 黒曜石 | 2.0 | 2.5 | 0.6 | 1.91 灰色の黒曜石。 |
| 第 79 回 | 石 點 | 526 | 1230 B-4 | V上 | 132.81 | 安山岩 | 4.5 | 0.4 | 9.7 | 21.96 右端に自然面が残る。刃部長7.7cm |
| | | 527 | 88 C-11 | V上 | 132.83 | 安山岩 | 3.8 | 4.8 | 0.8 | 14.41 右端に自然面が残る。 |
| | | 528 | 454 C-11 | V上 | 132.89 | 安山岩 | 4.1 | 0.75 | 5.1 | 11.71 打面は、自然面である。 |
| 第 80 回 | 石 墨 | 529 | 72 C-12 | V上 | 132.78 | 砂岩 | 32.8 | 26.0 | 5.8 | 5,500 |
| | | 530 | 415 C-12 | IV | 132.85 | 砂岩 | 34.6 | 22.4 | 10.4 | 7,500 |
| | | 531 | 457 C-11 | IV | 132.97 | 砂岩 | 41.2 | 36.4 | 6.5 | 11,000 |
| | | 532 | 86 C-11 | IV | 133.01 | 砂岩 | 21.2 | 14 | 5.2 | 2,000 |
| | | 533 | 35 C-12 | V上 | 132.91 | 砂岩 | 8.7 | 6.6 | 3.7 | 295.0 両面とも使用。 |
| 第 81 回 | 磨 石 | 534 | 109 C-11 | V上 | 133.08 | 砂岩 | 10.2 | 8.1 | 3.7 | 415.0 両面とも使用。 |
| | | 535 | 87 C-11 | V上 | 132.88 | 砂岩 | 8.5 | 6.2 | 4.2 | 272.0 両面とも使用。 |
| | | 536 | 40 C-12 | V上 | 132.95 | 砂岩 | 10.7 | 7 | 3.9 | 425.0 両面とも使用。 |
| | | 537 | 39 C-12 | V上 | 132.88 | 砂岩 | 11.1 | 6.9 | 6.1 | 646.0 両面とも磨面があり、下端に敲打痕。 |
| 第 82 回 | 敲 打 石 | 538 | 58 C-12 | IV | 132.77 | 砂岩 | 6.0 | 6.2 | 5.2 | 378.0 両側面を下端に敲打痕。 |
| | | 539 | 82 C-11 | V上 | 132.80 | 砂岩 | 8.7 | 5.9 | 3.7 | 256.0 下端に敲打痕。 |
| | | 540 | 59 C-12 | V上 | 132.79 | 砂岩 | 6.7 | 4.8 | 4.1 | 185.0 両面に磨面と、下端に敲打痕。 |
| | | 541 | 3 C-3 | IV | 132.82 | 砂岩 | 12.7 | 4.8 | 3.6 | 274.0 下端に敲打痕。 |
| 第 83 回 | 石 斧 | 542 | 108 C-11 | IV | 132.85 | 砂岩 | 11.6 | 4.0 | 3.0 | 155.0 下端に敲打痕。 |
| | | 543 | 採集品 | | | 粘板岩 | 18.5 | 5.5 | 1.85 | 212.0 両頭の石斧。 |

第IV章 奥嵐遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

奥嵐遺跡は奥ノ仁田遺跡と小さな谷を隔てた台地上に位置する。この台地は標高約120mで、北側に傾斜している。現況は荒地・畑地・道路である。

平成4年度に実施された奥ノ仁田遺跡の確認調査の際に、同遺跡の一部として調査されたが、奥ノ仁田遺跡とは遺跡の性格が異なることから、小字名を用いて奥嵐遺跡と名称がつけられた。

平成4年度の過疎基幹農道整備事業に伴う確認調査と、遺跡の一部を対象に緊急発掘調査が行われ、平成5年度に残存部分の緊急発掘調査が実施された。

道路や畑地の耕作などにより包含層の残りが悪く、部分的にしか遺物包含層は残存していない。縄文時代早期・後期・晩期の土器・石器が出土しているが、遺構はみられない。

第2節 調査の概要

平成4年度の確認調査では1～6トレンチを設定した。このうち1・3・6トレンチから遺物が出土した。遺物はアカホヤ火山灰に比定される火山灰の二次堆積層の上位の腐植土層と、アカホヤ火山灰の下層の2枚から出土している。上位の包含層が縄文時代後期～晩期、下位が縄文時代早期に比定される。

平成4年度は確認調査に引き続き、農道建設計画に従い、1・3トレンチの周囲を拡張して緊急発掘調査を行なった。また、平成5年度は、6トレンチを同様に拡張して緊急発掘調査を実施した。

1トレンチ及びその拡張区

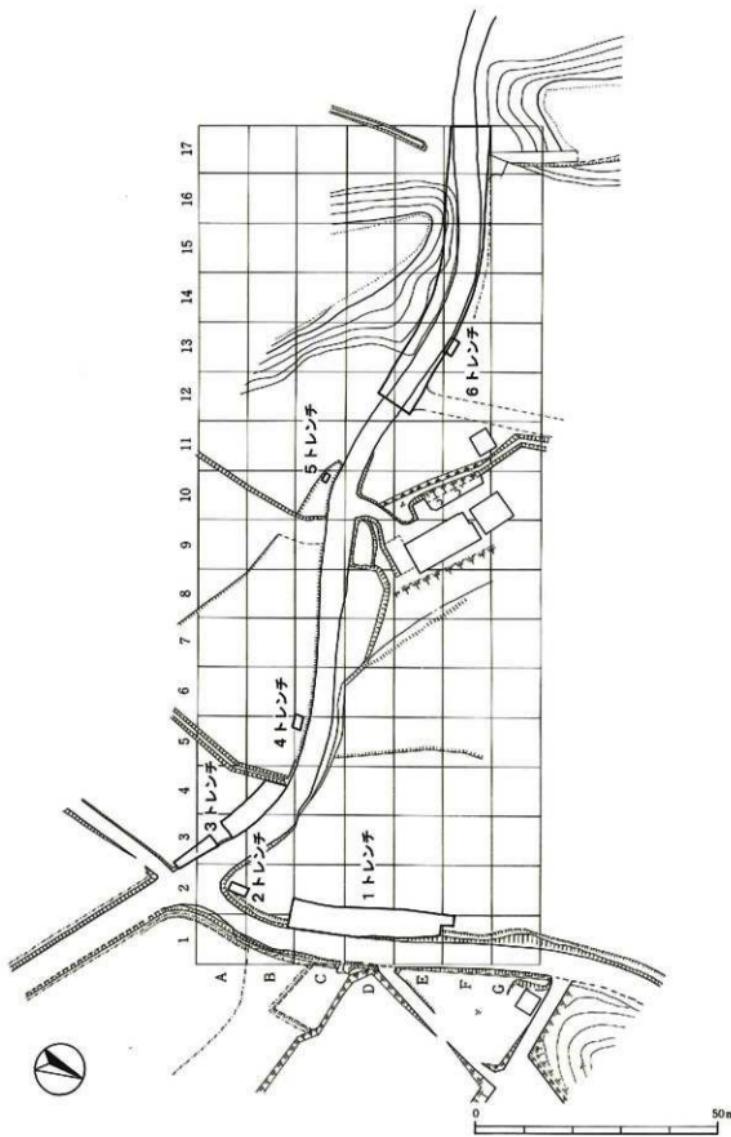
B～F-1・2区にあたり、平成4年度に1トレンチの調査の後、道路拡幅部分にまで拡張して調査を行なった。遺物は土器を中心に、トレンチとその拡張区のほぼ中央に集中して出土した。縄文時代早期に相当するⅣ層の遺物はトレンチ側に集中し、縄文時代後期・晩期に相当するⅢ層の遺物は、拡張区に集中して出土した。遺構は検出されなかった。

3トレンチ及びその拡張区

A・B-3・4区にあたり、平成4年度に3トレンチを拡張して調査を行なった。遺物は調査区全体で均一に出土している。Ⅲ層（縄文後期・晩期）・Ⅳ層（縄文早期）から土器・石器などの遺物が出土している。遺構は検出されていない。

6トレンチ及びその拡張区

E-12区、E・F-13区にあたり、平成4年度に6トレンチを、平成5年度に拡張区を調査した。遺物は土器・石器がⅢ層（縄文後期・晩期）・Ⅳ層（縄文早期）からほぼ均一に出土している。遺構は検出されなかった。



第81図 奥嵐遺跡 トレンチ・グリッド設定図

第3節 遺跡の層位

- I層 現表土層 土地の利用状況によって耕作土または砂利道になっている。
- II層 黒色土層
- III層 アカホヤ火山灰 火山灰の二次堆積層。上位は腐植しており、縄文時代後期・晚期の遺物
包含層である。
- IV層 乳白色粘質土層 縄文時代早期の遺物包含層。
- V層 明乳褐色粘質土層
- VI層 明黄褐色土 A T層に比定される。

第4節 出土遺物

(1) 1トレンチ

IV層出土土器 (第84図 1・2)

1はやや波状の口縁部で、口唇部に刻みがあり、外面には沈線を縦横（籠状）に施している。
2は同部で、外面は貝殻条痕、内面は工具ナデ調整である。これらは縄文時代早期に位置付けられる。

III層出土土器 (第84図 3~12)

3は肥厚した口縁部である。外面は工具を利用し、丁寧な横方向のナデを施している。市来式土器系のものである。

4・5は一溝式土器に比定されるものである。4は口縁端部内外面にへラ状の工具を用いて、二段の刺突を施し、口唇部には刻み目を入れる。5は口縁端部内外面に串状の工具を用いて、一段の刺突を施し、口唇部にはへラ状の工具による刻み目を入れる。

6は口縁部で、比較的丁寧なナデ調整を行なった後、やや細目の平行な沈線文を施している。

7は鉢形土器で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。

8は小型の鉢形土器である。口縁部が外反し、復元口径は約13cmである。内外面とも工具ナデ調整である。

9は鉢の胴部で、下半から上部にかけて屈曲する。

10~12は底部である。10・11は胴部に向けて開きながら立ち上がっていくものである。ナデ調整を行なう。12は底部の端部が、大きく張り出すものである。底面に圧痕が観察されるが、何の圧痕かは不明である。

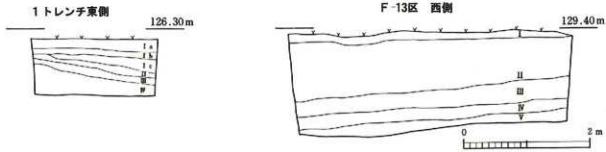
出土石器 (第89図 49)

49は磨石である。全面的に磨かれている。

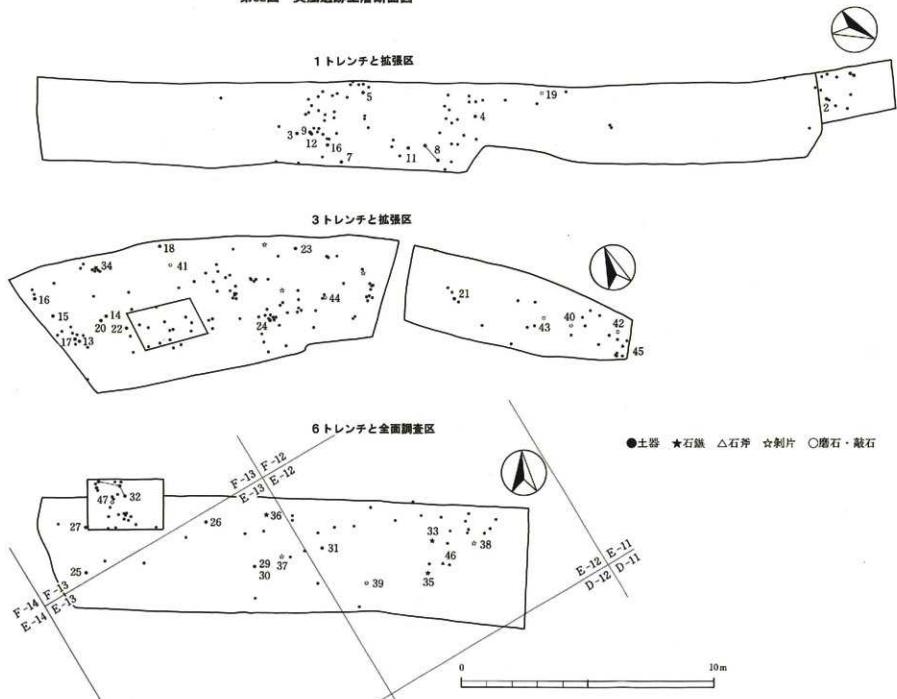
(2) 3トレンチ

IV層出土土器 (第85図 13~19)

13~19は外面に貝殻条痕文を施すものである。13は口縁部で、他は胴部である。素地土は細かく、焼成が悪いために器壁は脆い。

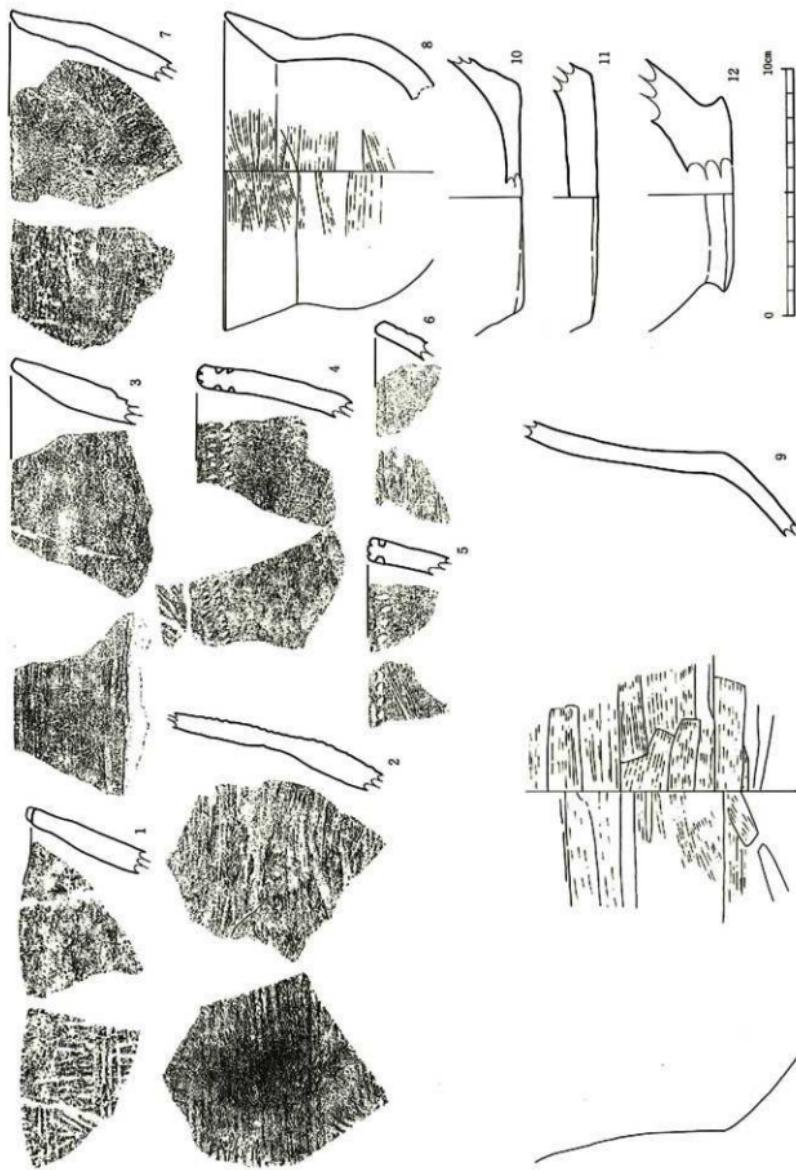


第82図 奥嵐遺跡土層断面図



第83図 奥嵐遺跡遺物分布図

第34図 土器(1)



III層出土土器（第85図 20~24）

20は一済式土器である。ナデ調整後、ヘラ状工具を上に押し上げるようにして施文した刺突文が口縁端部付近に一段施される。

23は口縁部である。口唇部に粘土を貼りつける。貼り付けの際の指頭圧痕が残り、工具ナデ調整されている。

21・22にも23と同様な技法が見られるが、形態が少しずつ異なっている。21は丸みをもった鉢である。22は胴部との接合部分で「く」の字状に屈曲する。

24は口縁部で、器壁は比較的薄い。外面は黒色で、研磨を施す。

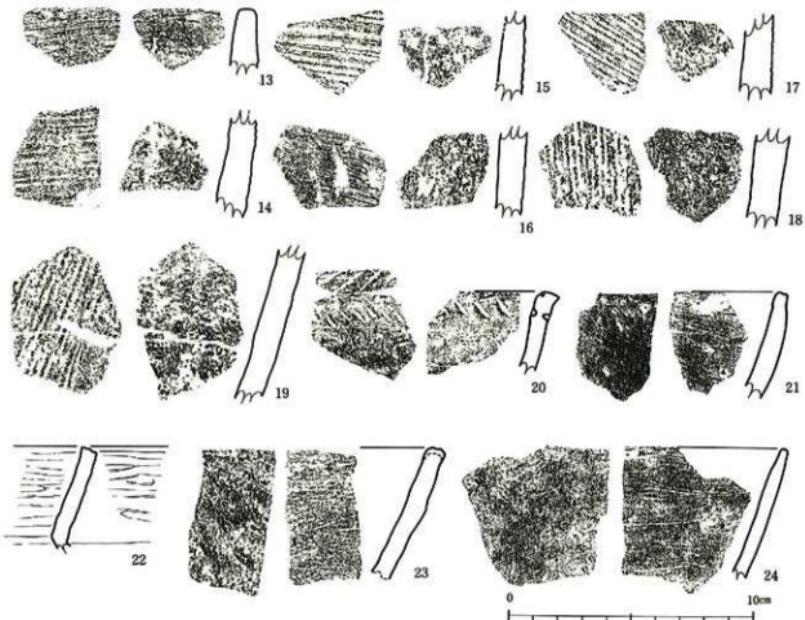
出土石器（第87図 34・第88図 40~45）

34は石鎌で逆刺の片方は欠損している。

40・41・42・44は磨石と敲石の機能を併せ持つものである。40は裏表で敲きと磨りを使い分けしていることが窺える。41は側面を敲きに使用し、欠損している。42はわずかに長円形を成しており、その長軸の両端が敲きに使用され、平坦面の一部に磨痕が残っている。44は不定型な蝶であるが、これも使い分けが窺える。

44は敲石で、平坦面と一側面に敲打痕がみられる。

45は扁平打製石斧の刃部から側辺にかけての破片である。縁は細かい加工を施し、裏面には磨痕がみられる。石材は堆積岩で、砂岩と頁岩の境界部分を素材に用いている。



第85図 土器（2）

(3) 6 トレンチ

IV層出土土器 (第86図 25~31)

25~28はいわゆる苦浜式土器に比定されるものである。25は口縁部で、波状口縁となる。断面三角形の突帯を巡らし、貝殻状の工具で刺突する。突帯より上位には波状の貝殻条痕を施す。26は口縁端部に刻目突帯を巡らし、また、縱方向にも同様に刻目突帯を貼りつける。外面の調整は貝殻条痕調整である。27は口縁端部に突帯を巡らすが、刻みはみられない。28の外面は貝殻条痕調整である。いずれも胎土に砂礫を多く含み、焼成が悪いために器壁が脆い。

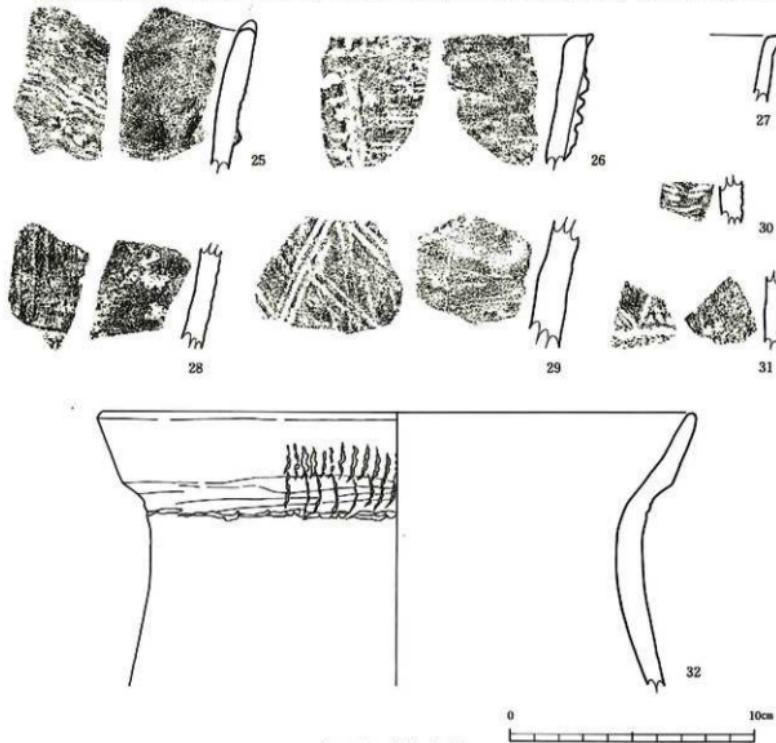
29は胴部で、貝殻条痕を綾杉状に施す。

30は胴部で、外面に貝殻条痕を施すが、焼成は普通である。

31は胴部で、外面に沈線文と刺突文を施し、焼成が悪いために器壁は脆い。

III層出土土器 (第86図 32)

32は口縁部から胴部にかけた破片で、口縁部は断面三角形に肥厚する。肥厚部分に二枚貝の貝殻腹縁を縱方向に二段刺突し、また、口縁部から胴部にかけての屈曲部分に、横方向に連続して



第86図 土器 (3)

刺突して一条の沈線状をなす。この刺突を施す前にヘラ状の工具を使用し、横方向にナデている。外面は比較的丁寧なナデで、内面は横方向の荒い工具ナデを施している。丸尾式に比定される。

出土石器 (第87図 33・35~38・第88図39・46・47)

33・35・36は石鎌である。33は長く鋭い逆刺をもつが、33・36はやや小さめで逆刺も短い。35は逆刺が一部欠損している。

37・38は剥片である。37が縦長であり、38が横長である。

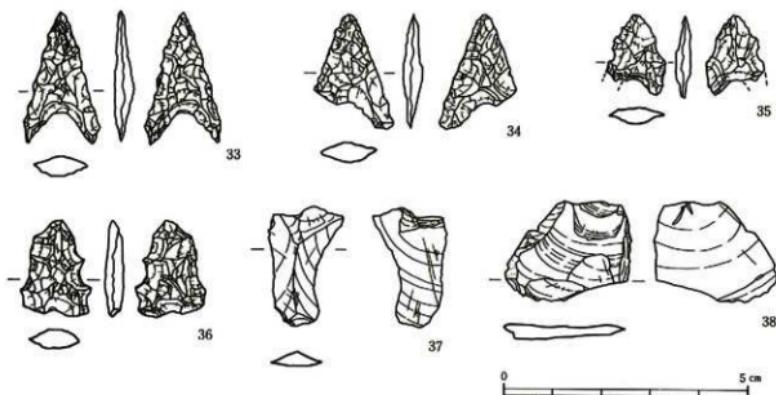
39は敲石である。やや大きめの扁平な円礫を素材にして、側縁の半分に敲打痕がみられる。

46は石斧の刃部片である。片面と、もう片面の刃部付近に磨痕がみられる。

47は磨石と敲石の機能を併せもつものである。不定形で扁平な礫を素材とする。敲打痕と磨痕が重複している。

その他の表掲資料 (第89図 48)

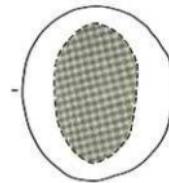
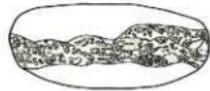
48は磨石である。やや長円形の礫を素材にし、全面的に磨っている。



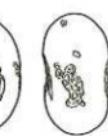
第87図 石器 石鎌・剥片

第27表 奥嵐遺跡土器觀察表

| 編 號 | 鉢 番 | 縦 幅 | 横 幅 | 高さ | 類別 | 器種 | 部位 | 剖面(高さ)cm | 胎 土 | 調整・文様 | | 施成 | 色 調 | 備 考 |
|--------------|----------|--------|---------|----|----|----|----|----------------|-----------------|-----------------|---------------|-------------------------|-------------------|--------|
| | | | | | | | | | | 口縁 | 厚 | 骨・土 灰・砂 粒 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| 第 84 回 | 1 t 10 | IV | 125.022 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 0.9cm | 長石・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | アラスカ 口縁に沿る | 良好 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 2 t 7 | IV | 125.692 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 0.9cm | 石英・長石・雲母・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 良好 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 3 t 33 | III | 127.125 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 0.9cm | 金雲母・石英 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | 市米式系 |
| | 4 t 66 | III | 126.635 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 1.0cm | 金雲母・石英 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 良好 | 茶褐色 | 一漸式 |
| | 5 t 57 | III | 127.04 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 1.0cm | 金雲母・石英・長石 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 良好 | 茶褐色 | 一漸式 |
| | 6 t 1 | III | | | 鉢 | 口縁 | 厚 | 0.7cm | 雲母・石英 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 黒褐色 | |
| | 7 t 50 | III | 126.905 | | 鉢 | 口縁 | 厚 | 0.9cm | 金雲母・石英 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 8 t 15 | III | 126.758 | | 鉢 | 口縁 | 厚 | 1.3cm 1.1cm | 雲母 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 9 t 39 | III | 127.026 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 0.8cm | 石英・雲母・細砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 10 t 48 | III | 126.995 | | 深鉢 | 底部 | 底径 | 9.0cm | 石英・長石・金雲母・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 淡い赤茶褐色 | |
| | 11 t 14 | III | 126.862 | | 深鉢 | 底部 | 底径 | 10.0cm | 石英・金雲母 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 12 t 38 | III | 127.115 | | 深鉢 | 底部 | 底径 | 8.0cm | 石英・雲母 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| 第 85 回 | 13 t 10 | IV | 127.82 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 1.2cm | 石英・角閃石・雲母・細かい | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | やや青い赤茶褐色 | |
| | 14 t 16 | IV | 127.83 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 1.2cm | 雲母・さめが細かい | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 赤茶褐色 | |
| | 15 t 2 | IV | 127.8 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 1.0cm | 雲母・さめが細かい | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 赤茶褐色 | |
| | 16 t 58 | IV | 127.755 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 1.2cm | 石英・角閃石・雲母・細かい | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 赤茶褐色 | |
| | 17 t 8 | IV | 127.82 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 1.3cm | 金雲母・石英・きめ細かい | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 赤茶褐色 | |
| | 18 t 97 | IV | 127.66 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 1.3cm | 長石・金雲母・石英 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 淡茶褐色 | |
| | 19 t 1 | IV | 127.93 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 1.1cm | 長石・金雲母・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 20 t 13 | III | 128.12 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 0.8cm | 石英・金雲母・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | 一漸式 |
| | 21 t 132 | III | 127.41 | | 鉢 | 口縁 | 厚 | 0.5cm | 石英・金雲母 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 黒褐色 | |
| | 22 t 18 | III | 128.11 | | 鉢 | 口縁 | 厚 | 0.7cm | 石英・金雲母・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 黒褐色 | |
| | 23 t 75 | III | 128.12 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 0.8cm | 雲母を多く含む | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 24 t 36 | III | 128.06 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 0.5cm | 雲母多し・精良 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 良好 | 黒褐色 | |
| 第 86 回 | F1341 | IV | 127.91 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 1.0cm | 石英・雲母・砂粒が多い | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 赤茶褐色 | 苦浜式 |
| | E1337 | IV | 128.13 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 1.1cm | 石英・雲母・砂粒が多い | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 赤茶褐色 | 苦浜式 |
| | F1342 | IV | 128.12 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 0.7cm | 雲母・石英・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 28 t 24 | IV | 129.317 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 0.9cm | 雲母・石英・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | E1330 | IV | 128.06 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 1.3cm | 雲母・石英・長石・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | E1330 | IV | 128.06 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 1.0cm | 石英・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 脆い | 乳褐色 | |
| | E1224 | IV | 128.06 | | 深鉢 | 胴部 | 厚 | 0.6cm | 角閃石・雲母・石英・長石・砂粒 | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | やや弱い 骨・土 灰・砂 粒 | 内・外 茶褐色 茶褐色 | |
| | 32 t 1 | III | 128.06 | | 深鉢 | 口縁 | 厚 | 1.0cm | 石英粒を多く含む | 骨・土 灰・砂 粒 | ナガサ | 普通 | 赤茶褐色 | 丸尾式 |



39



42



40



43



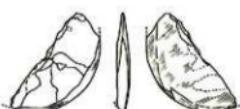
44



41

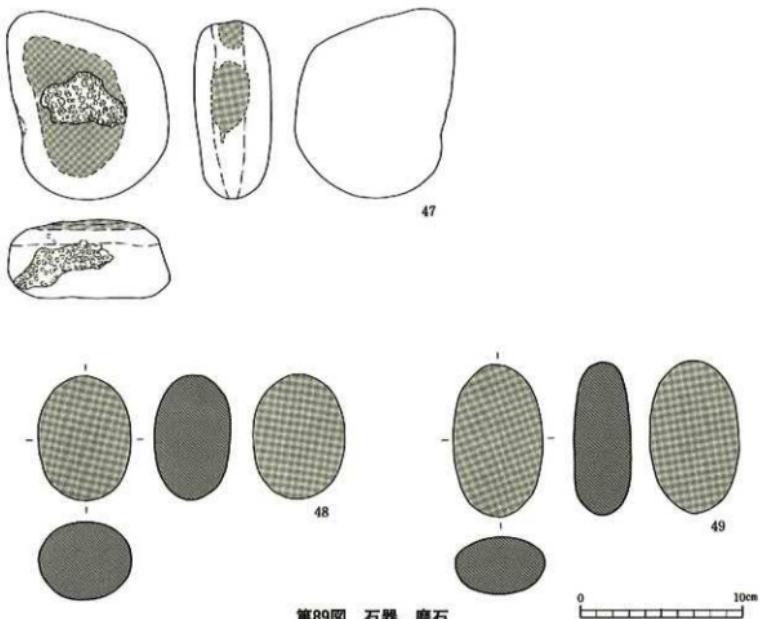


45



46

第88図 石器 磨石・敲石・石斧



第89図 石器 磨石

第28表 奥嵐遺跡石器計測表

| 持因 | 番号 | 登録番号 | 層 | 標高m | 器種 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) |
|----------|----|---------|-----|---------|-------|-------|--------|-------|--------|--------|
| 第87 団 | 33 | E 12・10 | IV | 128.18 | 石 鋸 | 安山岩 | 2.7 | 2.1 | 0.4 | 0.9 |
| | 34 | 3T・102 | | 127.80 | 石 鋸 | 安山岩 | 2.3 | 1.4 | 0.4 | 0.9 |
| | 35 | E 12・19 | IV | 128.14 | 石 鋸 | 黒曜石 | 1.8 | 1.2 | 0.3 | 0.4 |
| | 36 | E 12・35 | IV | 128.10 | 石 鋸 | 黒曜石 | 1.9 | 1.5 | 0.4 | 1.0 |
| | 37 | E 12・19 | IV | 128.05 | 剥 片 | 黒曜石 | 2.4 | 1.4 | 0.3 | 0.7 |
| | 38 | E 12・4 | IV | 128.32 | 剥 片 | 黒曜石 | 2.0 | 2.5 | 0.3 | 1.8 |
| 第88 団 | 39 | E 12・20 | V | 128.09 | 敲 石 | 砂岩 | 13.3 | 12.2 | 5.2 | 1220.0 |
| | 40 | 3T・122 | | 127.44 | 磨石+敲石 | 砂岩 | 9.7 | 7.9 | 8.3 | 831.0 |
| | 41 | 3T・56 | III | 127.905 | 磨石+敲石 | 砂岩 | 10.6 | 9.3 | 6.0 | 780.0 |
| | 42 | 3T・115 | | 127.40 | 磨石+敲石 | 花崗岩 | 6.1 | 5.8 | 3.7 | 182.0 |
| | 43 | 3T・124 | | 127.54 | 敲 石 | 砂岩 | 7.4 | 5.9 | 3.4 | 234.0 |
| | 44 | 3T・80 | | 128.05 | 磨石+敲石 | 砂岩 | 5.4 | 6.7 | 5.0 | 235.0 |
| 第89 団 | 45 | 3T・109 | | 127.45 | 石 斧 | 砂岩+頁岩 | (7.2) | (3.7) | (0.9) | (35.6) |
| | 46 | E 12・17 | IV | 128.24 | 石 斧 | 砂岩 | (6.0) | (5.5) | (0.8) | (20.7) |
| | 47 | 6t・8 | III | 128.64 | 磨石+敲石 | 砂岩 | 10.9 | 9.4 | 4.8 | 790.0 |
| | 48 | 3T・130 | | 127.70 | 磨 石 | 砂岩 | 7.6 | 5.6 | 4.8 | 288.0 |
| | 49 | 1T・26 | | 126.662 | 磨 石 | 砂岩 | 9.4 | 5.5 | 3.5 | 274.0 |

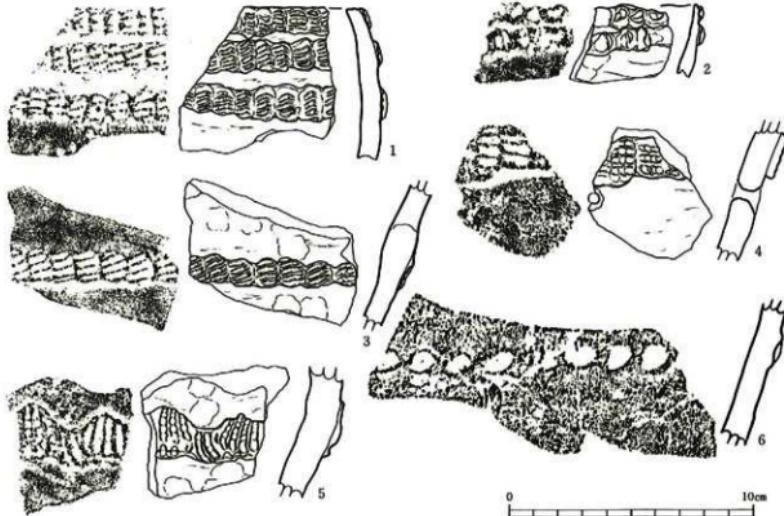
第V章 調査のまとめ

第1節 奥ノ仁田遺跡

1 縄文時代草創期

奥ノ仁田遺跡は約1,000m²という狭い調査面積にもかかわらず、1,600点を超える遺物が出土した。遺物の分布密度も、これまで発掘調査された県内の草創期の遺跡に比較すれば極めて高いものといえよう。今回の調査では、土手状に残された道路部分が調査対象で、断面観察から道路部分のみに遺物包含層が残存していることが明らかとなった。両脇の畠地では地下げが行なわれ、工事の際には、焼けた石、石斧などが出土したと聞いた。これらのことから遺跡は4,000m²を超す広がりをもつていたと推定される。地下げにより遺物包含層が削平され、遺跡の全容を明らかにする機会が永久に失われてしまったことが惜しまれる。

ともあれ、今回の調査により本土と大隅海峡を隔てた種子島で、草創期の遺跡が発見されたことに大きな意義がある。これまで、早期より古い時期の大隅諸島の様相は不明とされてきたが、南種子町の横峯C遺跡¹¹における旧石器時代の礫群発見を皮切りに、大隅諸島でも旧石器時代に遡る遺跡が確実に存在することが明らかとなった。種子島はAT層の堆積が薄く、その下位にいくつかのテフラの堆積が見られることから、後期旧石器より古い時期の文化が発見される可能性も大きい。草創期に限定すれば、奥ノ仁田遺跡の発掘により、これまで所属不明とされてきた表探資料と発掘資料が草創期の遺物であることが判明した。第90図1～5は種子島開発総合センター一所蔵の資料で、西之表市の（二本松）屋久川遺跡で採集された。1・3・5は「南種子町郷土



第90図 屋久川遺跡・宮田遺跡の縄文草創期土器

誌²⁾の中で、西之表市古田二本松遺跡出土の型式不明土器として報告されている。1は内溝する口縁部の破片で、口唇部は平坦に調整される。焼成は良好で、堅緻な土器である。器面は内外面とも指ナデ調整され、外面に貼り付けられた3条の隆帯上には貝殻腹縁による施文が見られる。2も口縁部破片である。口縁端部にいくほど器壁は薄く、端部は丸く納まる。外面に貼り付けられた2条の隆帯は密接しており、上位の隆帯にはヘラ状の工具による刺突、下位の隆帯にはヘラあるいは爪による刺突が観察される。器面調整は指ナデである。3は胴部破片で、器面調整は丁寧な指ナデである。隆帯は比較的丁寧に貼り付けられ、貝殻腹縁により施文される。4も胴部破片である。器面調整や隆帯への施文は他の貝殻施文の土器と同様である。破片の左端に焼成後の穿孔が観察される貴重な資料である。穿孔は補修孔と推定され、孔の形態は円形に復元できる。奥ノ仁田遺跡の資料には、穿孔中途のものと思われる胴部破片資料が1点（256）出土しているだけで、完全な補修孔を持った資料は確認されていない。5も胴部破片である。器面はやや粗雑な指ナデ調整で、隆帯は貝殻の背面で押し潰したように貼り付けられている。

6は昭和63年に発掘調査された中種子町宮田遺跡³⁾の資料である。報告書では「アカホヤ下位層から出土した土器である。(略) 隆帯に刻目を施す。型式は不明である。胎土はよく精選され礫を含まない。(略) 非常に脆い。」とされている。図面と写真からは隆帯上に指頭押圧を施した隆帶文土器と判断される。

第91図には三遺跡の位置を示した。奥ノ仁田遺跡は東海岸、屋久川遺跡は中央部、宮田遺跡は西海岸に位置する。屋久川遺跡の標高は190m前後、海岸に近い奥ノ仁田遺跡と屋久川遺跡でも標高はそれぞれ133m、108mと比較的高い位置にある。草創期の海岸線は現在よりかなり低かったと推定されることから、生活地としては海岸からいくぶん離れた台地が選ばれていたことを示している。このことは漁労活動が未熟な段階にあり、海産食料よりも森林地帯における狩猟や採集活動に生業の中心が置かれていたことを示しているかもしれない。しかし、土器の施文具に二枚貝の貝殻が多用されていることが、海と完全には無縁ではなかったことを示している。

遺跡立地の偏在性という観点から三遺跡を見てみると、第91図に示したとおり、種子島の特定の地域に草創期の遺跡が立地するという偏在性は認められない。標高100mを超すような台地上であれば、島内のいかなるところであっても遺跡が存在する可能性があるといえるだろう。これから調査によって、新たな遺跡が発見され、種子島における草創期の状況が明らかとなることが期待される。

(1) 遺構

南九州の草創期の遺跡で確認された遺構として、住居址、集石、煙道付炉穴、舟形（o r 円形）配石遺構が挙げられる。



第91図種子島の草創期遺跡(60万分の1)

住居址はこれまでのところ鹿児島市掃除山遺跡⁴⁾の2基の検出例のみである。

集石は掃除山遺跡で2基、加世田市椿ノ原遺跡⁵⁾で19基、宮崎県串間市大平遺跡⁶⁾、串間市三幸ヶ野第2遺跡⁷⁾で2基の検出例が報告されている。集石は石蒸し料理を行なった調理施設とされ、旧石器時代（縄群）から早期全般を通じて検出例が多い遺構である。

煙道付炉穴は掃除山遺跡で1基、椿ノ原遺跡で1+a基の報告例があり、草創期段階で出現した遺構として注目されている。県内の早期における同様の遺構の検出例は古く、鹿児島市加栗山遺跡⁸⁾で26基が検出され、二基の土坑をトンネルで繋ぐことから「連穴土坑」と呼ばれた。その後、県内では志布志町倉園B遺跡⁹⁾、栗野町木場A遺跡¹⁰⁾、末吉町地蔵免遺跡¹¹⁾、松元町前原遺跡¹²⁾などで早期の検出例が報告されている。熊本県、宮崎県、大分県でも検出例が報告されている。現在のところ、早期前半より下る時期の検出例は知られていない。

舟形（o r 円形）配石遺構は屋外炉としての機能が想定される遺構で、県内では志布志町東黒土田遺跡¹³⁾、掃除山遺跡、川辺町鷹爪野遺跡¹⁴⁾、椿ノ原遺跡で検出例が報告されており、現在のところ南九州独特の遺構であると考えられている。

本遺跡の遺構としては、集石19基、配石遺構2基、土坑1基が検出され、住居址、煙道付炉穴、舟形（o r 円形）配石遺構は検出されていない。

集石は掘り込みを持つものと持たないものの2種類が見られた。集石として取り扱ったもの以外に、焼けた礫が散在している部分もあったが、集石として取り上げるまでに至らなかった。集石を構成する礫は、島内に普遍的に存在する砂岩であった。円礫や亜角礫を中心に構成されているものが多い中で、板状の砂岩や砥石を配する4号・5号・7号集石の存在は注目される。

配石遺構は2基検出されたものの、配石内部に掘り込みや焼土は検出されず、炉址であろうとされる舟形配石遺構や円形配石遺構とは異なる状況であった。

② 遺物

① 土器

ア 器種と器形

土器の器種は、深鉢形土器と浅鉢形土器に大別できる。

深鉢形土器は、胴部が底部から緩やかに立ち上がり、胴部上位で屈曲する。底部からの緩やかな立ち上がりは、ほぼすべての土器に共通する特徴であり、熱を効率的に利用できる器形といえよう。底部から胴部への立ち上がりが急角度で直立気味となる資料は、107の1点だけである。資料中には小破片もあり、傾きが適正でない恐れもあるが、口縁部が内湾するタイプ（21・124・136・137・185・204・205）と、口縁部がほぼ直行するタイプ（17・33・34・110・187）と、口縁部が外側に開くタイプ（22・35・109・113）の三タイプが見られる。1類～3類において、縁帶上の施文具と口縁部の傾きの間には、特別な相関関係を認められないが、4類（縁帶下部に爪痕）は内湾する口縁部のみである。ただし、3類と4類の資料数は少ないため、その類全体の特徴でない可能性も考慮すべきであろう。また、9類（無文の口縁部）とした資料は、口縁部が外側に開く器形がほとんどであるが、小破片が多いために、傾きが適正でないものが含まれている可能性もある。

深鉢形土器の底部は図示した19点のうち、1点の尖底（279）を除き、他はすべて平底である。尖底の底部が何類の底部にあたるか不明だが、106・107・266は確実に隆帯文土器の底部であることから、本遺跡における隆帯文土器の底部形態は安定した平底であるといえよう。底部径は器形から推測して、口縁部径の3分の1～4分の1程度しかないものと思われ、内湾あるいは直行する口縁部や、胴部に比較して厚くなる底部の器壁は、土器の安定性に配慮したものかもしれない。また、底部内面に刺突を施した例（277・278）は縄文時代全般を通じ、県内では初出であり、類例からその機能を推測することは不可能である。実用的な側面から、あえてその機能を追求するならば、厚く作られた底部を刺突し、器壁の薄い部分を作ることによって、熱効率の向上を図ったといえなくもない。しかし、278の深い刺突に比べて、277の刺突は浅く、いかにも中途半端である。実用的な機能以外の特別な意味を持つのかも知れない。

深鉢形土器では、外面に煤が付着する資料や、内面に焦げた炭化物が付着した資料が見られ、これらの土器が煮炊きに使用されたことを示している。

浅鉢形土器としては、底部を含めて10点を提示した。深鉢形土器に比較して、点数的には、はるかに少ない資料数である。器形の全容がわかる資料は皆無だが、口縁部の傾きと器壁の厚さを観点に、浅鉢形土器を分離した。隆帯を持つものと、持たないものがある。隆帯は口唇部よりやや下がった位置に貼付され、底部付近に貼付される資料も見られる。口唇部は平坦でなく、丸みを帯びるか尖っている。底部は287の上げ底の形態しか見いだし得なかったが、深鉢形土器の底部とした267・268のように、他資料に比較して器壁が薄く、立ち上がりがより緩やかなものは浅鉢形土器の底部に相当するのかも知れない。

深鉢形土器の口縁部内面に貼付された隆帯（張り出し）の機能を蓋受けと考え、浅鉢形土器は深鉢形土器の蓋と捉える見方もあるが、次のような点から浅鉢形土器は深鉢形土器とは独立した器種だと考える。まず、浅鉢形土器と深鉢形土器では、口径が大きく異なる。完形に復元できなくても、浅鉢形土器の口縁部の描く小さなカーブに対して、深鉢形土器のそれは大きすぎるのは明らかであり、ふたつを対で使用したとは考えにくい。次に、深鉢形土器の資料数に対して、蓋とされる浅鉢形土器の資料数がはるかに少なく、対で使用したと考えるには数量的に非常にアンバランスである。最後に、蓋受けが気密性を求めるものだとすれば、本遺跡の資料の口縁部内面の隆帯の状態は気密性を欠如している。口縁部内面の隆帯は貝殻や指頭により施された結果、上面は平坦でなく、でこぼこになっている。

縄文土器の器種分化が本格的に進むのは後期以降だとされている。南九州の草創期の浅鉢形土器は、土器製作の初期において出現した生命の短い器種で、早期には消滅し、器種は円筒形深鉢形土器のみとなる。草創期の浅鉢形土器と深鉢形土器をセットとして捉えるには、数量的なバランスを欠いており、器種による機能分化が存在していたとは言い難い。多くの深鉢形土器に混じってわずかな浅鉢形土器が存在することをもって、ただちに機能分化を伴う器種分化に結びつけるのは早計といえよう。

イ 土器製作技術

土器の胎土を観察すると、一部の土器（209・210）に種子島では珍しい石英粒を多く含む

ものが見られるが、他の土器には大きな砂粒や小礫は混入されていない。鉄分が凝着した径2~3mmの粒子を含む土器も見られる。鉄分の凝着は水田などの低湿地の土壤で観察される現象である。素地土は低湿地に堆積したものが採取され、崖面などの露頭や、地表面から深く採掘坑を掘って採取したのではないかと推測される。胎土の粒子は細かく、素地土をそのまま使用しているものと思われ、砂粒等の各種の混合材の混入によって乾燥・焼成時の収縮やひび割れを防止するという技術は確立していなかったものと思われる。

平底土器では、まず粘土で円盤状の底部が製作される。円盤の整形はおそらく掌の上で行なわれたものと思われる。底部外面には、木の葉や編物等の敷物の圧痕は観察されない。266・269では、底部円盤の周縁部は断面が台形になるように整形され、胴部の粘土は斜めに接合されている。106・261・270では、底部円盤の上面に粘土を接合し、胴部を立ち上げている。

尖底土器は1点だけである。279ではてくてくねで尖底部分が作成され、その上に粘土を積み上げている状況が観察される。尖底土器も底部から先に製作するという実例である。

胴部以上は、粘土紐あるいは粘土帯の積み上げにより製作されたものと思われる。粘土紐の接合状況を観察できる資料としては、22・105・106・185・247・249が挙げられる。

105・106・247は同一個体と思われる資料である。断面観察から、上段の粘土で下段の粘土を、裏と表の両方から挟み込むような接合方法が取られていることがわかる。下段の粘土の上面は丸みを帯び、その面にはより強固な接合を図るためのヘラキザミ等の痕跡は観察されない。粘土の接合部分で3~4cmの間隔をおいて剥離しており、粘土帯を積み上げて製作されたようと思われる。一方、22では幅2cm程度の接合痕も見られ、こちらは粘土帯というよりは粘土紐の積み上げといったほうがよさそうである。

土器が粘土の接合部分で剥離するのは、粘土の接合が不十分なことが原因である。接合が不十分となる原因としては、接合部分の撫で付けが雑なことや、上段と下段の粘土の乾燥度が異なることが挙げられる。106では接合部分の撫で付けは丁寧で、剥離していない部分での表面観察では、接合痕を確認できない。したがって、粘土の撫で付けが不十分なことが原因でなく、上段と下段の粘土の乾燥度が違うことが原因となって、剥離を生じたものと思われる。上段と下段の粘土の乾燥度の違いは、一気加勢に底部から口縁部までを作り上げたのではなく、下段の粘土が少し乾いて、ある程度の強度を持った時点で、次の段の粘土を積み上げるといった作業を繰り返したためであろう。このように間隔をおいた積み上げ作業を行なわざるを得なかつたのは、ひとえに底部から緩やかに立ち上がり、胴部で屈曲して口縁部に至るという器形に由来する。このような器形では、下段の粘土がある程度の強度を持たないと、上段では粘土の重みで土器が崩れてしまうであろう。土器製作にあたっては、胴部上位の屈曲部分までは粘土の乾燥を待ちながら3~4cmのスパンで積み上げられ、屈曲部分から口縁部までは一気に作り上げたものと考えられる。

249では、上段の粘土が下段の粘土の外側に接合される「外傾接合」という手法が取られており、粘土の接合方法に変化が見られる。

器形の整形が終了すると、器面調整が行なわれる。器面調整はほとんど指ナデである。何らかの器具を使用したものとしては、58・124(ヘラ状工具?)、185(板状工具?)、

276（貝殻？）だけである。指ナデ調整によって器面は滑らかに調整されるが、貝殻やヘラを使用した器壁のケズリ調整が行なわれていないため、器壁の厚さは均一に仕上がってない。早期以降に見られる貝殻条痕調整、ミガキ、ケズリ、工具ナデという手法は、まだ確立していないといえる。

器面調整後には隆帯が貼り付けられ、隆帶上に文様が施される。隆帯の貼付は丁寧なものと粗雑なものが見られる。貼り付けの丁寧なものは、隆帯を親指と人差し指で挟んで撫で付けて器壁に密着させている。124に見られるような隆帶上部の条痕は、隆帶貼り付け作業に伴って移動した指の爪によるものだと思われる。貼り付けの粗雑なものは、隆帯を施文具で器壁に押し漬すように貼り付けている。106の隆帶断面を見ると、上端と下端は丸みを帯び、粘土紐をそのまま押し漬したような状態である。

隆帶貼り付け後に器面を再調整した資料が見られる。106の隆帶と器壁の間の窪みには粘土の溜りが観察される。水で濡らした指で器壁を再度なでるという作業を行なったものと思われる。

ウ 隆帯の貼付部位と条数

隆帶の貼付部位と条数の関係については、第92図・第93図に示した。本遺跡では完形品が出土していないため、各部位の破片資料がそれぞれどのように対応するのか明確にできなかった。また、隆帶の貼付方法についても同様である。破片資料の隆帶が斜行することをもって、螺旋状貼り付けか、環状貼り付けの部分的な蛇行かは判断し得ない。したがって、破片資料が完形品の様相を必ずしもそのまま反映していないということを十分考慮すべきであろう。出土資料から判明したことを、1類～4類について順次述べていく。

1類（貝殻施文・第92図）では、口縁部外面、口縁部内面、胴部上位の屈曲部分、胴部下位に横位の隆帯が貼付される。底部に近い胴部下位に隆帯を貼付する資料は、同一個体と考えられる105と106だけである。この他に、底部まで縱方向の隆帯を貼付した小型土器の底部資料（107）も出土している。

口縁部隆帯は環状貼り付けであり、螺旋状貼り付けの資料は見られない。胴部隆帯も基本的には環状貼り付けと思われるが、螺旋状貼り付けと思われる資料（105・106・101）も見られる。隆帯を螺旋状に貼り付けると、隆帯の始点と終点が必ず存在するはずであるが、隆帯の始点が認められる資料は胴部資料の105だけである。106の裏側には縱方向の隆帯が貼付されている。これが垂下する隆帯の終点なのか、螺旋状貼り付け隆帯の終点なのか不明である。始点あるいは終点を認めることができる資料が少ないとから、胴部隆帯も環状貼り付けが多いものと推定される。

1類における隆帶貼付部位と条数との関係を、出土資料をもとに整理すると次のようになる。

①口縁部隆帯1条に対しては胴部上位隆帯1条が対応している資料が2点（20・21）出土している。胴部下位の隆帶条数は不明である。口縁部隆帯1条に対して胴部隆帶多条が対応するかどうか不明である。

②口縁部隆帶多条に対して、胴部隆帶多条が対応するのか、胴部隆帶1条が対応するのか

不明である。ただし、胴部隆帯多条の資料数に比較して、胴部隆帯1条の資料数が多いので、口縁部隆帯多条に対して胴部隆帯は1条となる個体が多いものと思われる。

③横位の隆帯に、垂下隆帯が付加される資料は口縁部隆帯1条の資料(17・18?)と口縁部隆帯2(多)条の資料(33・34)のいずれにも見られる。

④垂下隆帯は、口縁部隆帯とは別に貼付される。口縁部隆帯の端部を直角に曲げて、垂下隆帯とする資料は見出だせない。

⑤垂下隆帯を複数箇所に貼付する資料(96)が見られ、口縁部隆帯と胴部隆帯を繋ぐ垂下隆帯とで、方形の区画をなすものと考えられる。

⑥口縁部隆帯が1条の場合は垂下隆帯は1条(17)、口縁部隆帯が2条の場合は垂下隆帯も2条(33・34)がセットとなり、口縁部隆帯条数と垂下隆帯条数は対応する。

⑦口縁部に2条の隆帯が密接して貼付されることによって、あたかも1条の幅広い隆帯のように見える資料(25・34)が存在する。3条の隆帯を貼付した22の隆帯もかなり密接している。また、胴部資料とした104も口縁部付近の資料である可能性が高い。

⑧確実な胴部資料中には2条の隆帯を密接して貼付するものは見られず、1条の隆帯を施文具で押し演して、幅広い隆帯とした資料が2点(44・104)見られるだけである。

⑨口縁部内面に隆帯(張り出し)を貼付する資料は少ないが、いずれも1条の貼り付けである。

⑩口縁部内面に隆帯を持つ資料は、口縁部外面隆帯1条の資料(16・21)、口縁部外面隆帯2条の資料(32)のいずれにも見られる。

⑪口縁部内面の隆帯は施文されるもの(16・21)と無文のもの(32)の両方が見られる。

⑫口縁部隆帯が貼付されない貝殻施文土器(35)も存在する。

2類(指頭圧痕文・第93図)では、口縁部内面、口縁部外面、胴部に横位の隆帯が貼付される。

口縁部隆帯は環状貼り付けであり、螺旋状貼り付けの資料は見られない。胴部隆帯も基本的には環状貼り付けだとと思われる。同一個体だと考えられる120~128では、126に螺旋状貼り付け隆帯の始点が観察される。126以外に隆帯の始点あるいは終点と思われる資料は出土していない。

2類における隆帯貼付部位と条数との関係を、出土資料をもとに整理すると次のようになる。

①口縁部隆帯の条数と胴部隆帯の条数の関係は必ずしも明確でない。

②口縁部隆帯2(多)条に対しては、胴部隆帯1条が対応している資料(124)が出土している。124では胴部隆帯の貼り付けは螺旋状である。

③横位の隆帯に、垂下隆帯が付加される資料は、口縁部に2条の隆帯を貼付した資料2点(136・137)と胴部資料1点(169)だけである。

④垂下隆帯は口縁部隆帯とは別に貼付され、口縁部隆帯端部を直角に曲げて垂下隆帯とする資料は見出だせない。

⑤垂下隆帯は、口縁部隆帯と胴部屈曲部の隆帯を繋ぐように貼付される。

⑥垂下降带を持つ資料（136・137・169）では、口縁部隆帶は2条、胴部隆帶は1条となるものと思われる。

⑦口縁部に2条の隆帶が密接して貼付されることによって、あたかも1条の幅広い隆帶のように見える資料は2点（136・137）である。

⑧口縁部内面に隆帶（張り出し）を貼付する資料は2点だけ（136・137）出土し、いずれも1条の貼り付けで、隆帶上に指頭圧痕文が施される。

| 横位隆帶の貼付方法 | | | 口縁部隆帶と胴部隆帶の条数 | | | 口縁部隆帶と垂下する隆帶の条数 | | | |
|-----------|-----|----|---------------|-----|----|-----------------|-------|--------|-------|
| | 口縁部 | 胴部 | | 口縁部 | 胴部 | | 口縁部隆帶 | 垂下する隆帶 | 資料 |
| 1類 | 環状 | 1条 | 105 | 1条 | 1条 | 20・21 | 1条 | 1条 | 17 |
| | 螺旋状 | 多条 | | 多条 | 1条 | | 2条 | 2条 | 33・34 |
| 2類 | 環状 | 1条 | 124・126 | 多条 | 1条 | 136・137 | 2条 | 1条 | |
| | 螺旋状 | 多条 | | | 多条 | | | 多条 | |

→ 出土資料で確認できるもの
----> 出土資料で確認できないもの

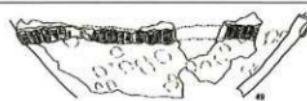
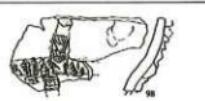
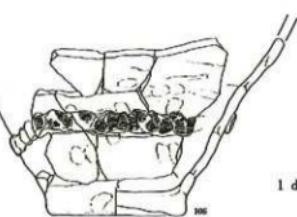
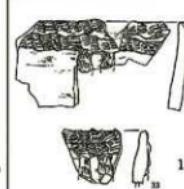
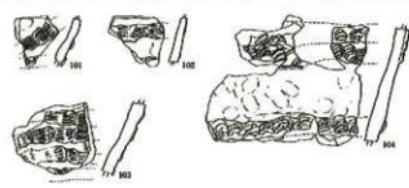
3類（指頭圧痕文+爪痕・第93図）では、口縁部と胴部に隆帶が貼付される。口縁部隆帶のみで、胴部隆帶が貼付されないとと思われる資料も1点（185）出土している。

口縁部隆帶と胴部隆帶は環状貼り付けと思われ、螺旋状貼り付けと思われる資料は見られない。

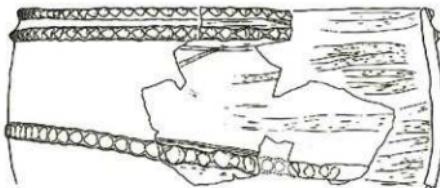
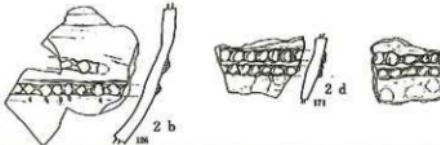
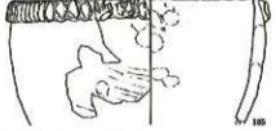
3類における隆帶貼付部位と条数との関係を、出土資料をもとに整理すると次のようになる。

- ①口縁部隆帶の条数と胴部隆帶の条数の関係は必ずしも明確でない。
- ②口縁部隆帶が1条だけで、胴部隆帶を持たないと思われる資料（185）がある。
- ③胴部隆帶が多条の資料は見られない。
- ④口縁部内面に隆帶を貼付する資料は見られない。
- ⑤口縁部隆帶から垂下する隆帶を貼付する資料は見られない。
- ⑥口縁部に2条の隆帶を貼付することによって、幅広の1条の隆帶に見える資料が1点（187）出土している。

4類（隆帶下部に爪痕・第93図）では、口縁部に環状の隆帶が1条貼付され、胴部では短い隆帶が間隔をおいて左下がりに貼付される。

| 横位の隆帶 | | 横位の隆帶+垂下する隆帶 | |
|-----------------------|--|---|-----|
| 口 縦部 |  |  | 1 a |
| 1 肩 部 |  |  | 1 a |
| 類 部 |  |  | 1 d |
| 1 | | | |
| 条 底 部 |  | | 1 d |
| 1 縦 部 類 部 |  |  | 1 b |
| 多 肩 条 部 |  | | 1 d |
| 1 類 そ の 他 | |  | 1 c |

第92図 1類土器の部位と隆帶の条数

| 横位の隆帶 | | 横位の隆帶+垂下する隆帶 |
|----------------------------|---|--------------|
| 2 縁部 |  | 2 a |
| 1 副 条 部 |  | 2 d |
| 口 部 |  | 2 b |
| 2 縁 部 多 条 部 |  | 2 c |
| 口 部 |  | 2 b |
| 3 縁 部 |  | 3 a |
| 1 副 条 部 |  | 3 c |
| 3 口 縁 多 条 部 |  | 3 b |
| | | 4 |
| | | 4 |

第93図 2類～4類土器の部位と隆帶の条数

才 施文具と施文方法

資料数の少ない浅鉢形土器については割愛した。深鉢形土器は施文具により、1類～9類に分類した。無文土器である9類を除いて、1類～8類について述べたい。

1類は貝殻施文土器である。放射状の肋を持つアナグラ属と思われる貝殻の腹縁部から背面を用いて施文している資料が多く見られる。このほか、放射状の肋と小さな突起を持つ貝殻によって施文される資料（26～28・37～39・41～44・54・103・105・106等）や二枚貝の殻頂部付近を押圧した資料が1点（108）出土しているが、貝種の特定はできなかった。

腹縁部から背面を施文に用いる場合、背面を隆帯側に、腹面を手前（施文者側）に保持する。貝殻を垂直よりやや寝かせ、腹縁部を刺突気味に施文する資料と、貝殻を極端に寝かせ、腹縁部から背面にかけた部分を押圧気味に施文する資料に大別できる。

腹縁部を刺突気味に施文する資料は、17・25・32～34・49などである。貝殻を殻頂部が左、腹縁部が右になるように保持し、隆帶上を右から左に施文したものがほとんどである。

腹縁部から背面を押圧気味に施文する資料は、1・4・7・22・26～28・36・103・105・106などである。貝殻を殻頂部が左、腹縁部が右になるように保持し、隆帶上を右から左に施文した資料がほとんどである。

隆帶に対して貝殻腹縁部を直角に保持して施文する資料が多いが、13は隆帶と腹縁部が平行になるように保持し、27・28・92は斜めに保持して施文される。

口縁部に2～3条の隆帶を密接して貼付する資料（22・25～34）では、それぞれの隆帶ごとに施文作業がなされる。施文によって隆帶は幅広に潰れて、あたかも幅広の1条の隆帶のように見えることとなる。

胴部資料44は貝殻腹縁部から背面にかけた部分を用いて、不定の方向から施文し、108は殻頂部を左上方に位置させ、右から左の順に施文作業を行なっている。これらの資料では、1条の隆帶上で位置を変えて複数回施文した結果、隆帶は潰れて幅広となっている。

縦位の隆帶（垂下降帶）を持つ資料は、17・18・33・34・95～100の9点である。垂下降帶へは、上から下の順に施文される。

2類は指頭圧痕文土器である。指頭圧痕内に爪痕が観察される資料も含まれるが、爪は施文具として意識されていないようである。また、平行な葉脈を持つ稻科植物の葉を指頭に卷いて施文したと思われる資料（113・153）も見られる。破片資料のために、胴部資料中には上下の捉え方が誤っているものが含まれる可能性もあるが、指を隆帶と平行に動かし、隆帶に右から左の順に施文する資料が多く、その逆の施文順となる資料は少ない。右から左の順に施文する場合、手指を右側に向け、指を左方向に後退させながら施文作業を行なったものと思われる。指を隆帶と平行に位置させて施文する資料のほかに、指あるいは棒状の工具を、隆帶と直交あるいは斜めに位置させ、連続したキザミ状の押圧を施す資料（175～179）も見られる。

縦位の隆帶（垂下降帶）を貼付した資料は136・137・169の3点である。垂下降帶へは、1類と同様に上から下の順に施文される。口縁部資料の136と137は口縁部内面にも隆帶が貼付され、口縁部外面隆帶と同様に、右から左の順に施文される。

また、口縁部に2条の隆帯が密接して貼付され、幅広の1条の隆帯のように見える資料は136と137の2点だけである。胴部資料165は、1条の隆帯に上下2段の施文がなされ、それらの施文方向は異なるものと思われる。

3類は指頭圧痕内に意識的な爪痕を残す土器である。これらの資料中には、ヘラ状工具により施文された可能性のある資料(184~186)も含まれる。隆帯に対して指頭をほぼ垂直な角度で刺突する資料と、指頭を押圧した後に、指を起こして爪を深く刺突する資料が見られる。

施文順を観察すると、左から右に施文する資料と、右から左に施文する資料の両方が、ほぼ同数見られる。左から右の順に施文する資料は187・190などである。指先を右側に向けるのは、右から左へ施文する場合と同様であるが、指の動きは逆になり、指を右側へ前進させながら施文作業を行なっている。その結果、187に見られるように、先に刺突され、左位置にある爪の刺突痕は、次の施文作業で右位置に施される指頭圧痕によって、変形することとなる。

4類は隆帯下部に爪痕を残す土器である。爪痕は、口縁部隆帯部分では途中で途切れたり、胴部に貼付された左下がりの短隆帯部分では一部に観察されるだけである。爪痕が隆帯下部という文様に不適な位置にあるということと、爪痕に規則性がないことから、爪痕は文様ではなく、隆帯貼り付けに伴う調整痕として捉えたい。右手の指で隆帯貼り付け作業を行なったとすると、爪痕は右手人差し指によるもので、指は右から左に動かしたものと思われる。4類に見られる施文として意識されない「爪痕」と、爪を施文具として意識的に施した「爪形文・爪形施文」とは、厳然と区別すべきであろう。

5類は指頭圧痕文土器であるが、2類とは指の動きが異なるので別類とした。指先を左に向け、指は隆帯と平行に位置させる。指の腹を隆帯に押圧するとともに、指先を前方(左方向)に押し出す動作を、指を後退(右側に移動)させながら連続して行なっている。その結果、圧痕は「C」の字状となる。

6類は隆帯上に刺突文を施す土器である。施文具としては棒状の工具が想定されるが、胎土に石英を多く含んでいるために、刺突部分が不整形となっている。ヘナタリに類する小型巻貝による刺突の可能性もある。

7類は断面三角形の2条の隆帯に、先端の丸いヘラあるいは棒状工具によってキザミを施した資料で、1点だけ出土した。

8類は同一資料の複数の隆帯上に、それぞれ異なる施文具を用いて施文する。貝殻+指頭、貝殻+ヘラ状工具、ヘラ状工具+指頭の組合せが見られるが、資料数はそれぞれ2点程度である。

② 石器

ア 器種構成

石器としては、石鎌、石斧、スクレーパー、石皿、磨石・敲石・凹石類、剝片等が出土している。石匙を欠いているが、既にほぼすべての縄文石器の器種が出揃っていることがわか

る。石錐の出土はなかったが、存在を窺わせる穿孔中途の胴部資料256が出土しており、草創期の石器のセットに含めることができよう。また、南九州でも土器に共伴する例のある細石器や、石槍の出土がないことも注意される。

石器組成を見ると、狩猟具である石鎌に比較し、調理加工具である磨石類や石皿が多く出土している。このような石器組成の在り方は、狩猟よりも植物性食料を中心とする採集活動に生業の重点が置かれていた状況を示唆するが、土掘具と想定できる資料は1点(308)しか出土していない。遺跡内に残された遺物だけで判断することなく、遺跡外への持ち出しや遺物として残存しにくい木器・骨角器が存在した可能性も考慮すべきであろう。とりわけ、木材加工工具と思われる各種の石斧の出土は、木器の存在を示唆しているものといえよう。

イ 石材

種子島で産出する砂岩や粘板岩が多用されている。砂岩は主に石斧、敲石・磨石・凹石類、石皿の素材として使用され、砂岩を素材とする剥片と石核も出土している。粘板岩は主に石斧の素材として使用され、一部は小型剥片石器の素材として使用されている。

小型剥片石器の素材には粘板岩のほか、鉄石英、チャート、シルト質頁岩が見られる。島内にこれらの石材の産地が存在することも考えられる。鉄石英は薩摩半島南部に産地があると言われているが、詳細は不明である。距離的に近い大隅半島だけでなく、薩摩半島との交流も示唆される。また、安山岩や黒曜石などの火成岩を素材とする石器は出土していないことも注意される。

ウ 小型剥片石器

打製石鎌は3点(290~292)出土した。291の基部の抉りはやや深いものの、290・292の抉りは緩く、これまで南九州で出土した草創期の打製石鎌に類似する。

磨製石鎌は1点(293)だけ提示できた。粘板岩の剥片が素材で、全体の形状は早期の遺跡から出土する磨製石鎌に類似するが、裾部が若干広がるという特徴を持つ。一般的な早期の磨製石鎌は、表面と裏面を剥離面が残らないように研磨し、側縁部に研磨による浅い刃部を作り出す。その結果、横断面は扁平な六角形を呈する。293は表面と裏面に未研磨の剥離面が残され、刃部の作り出しが全体的に深くなっている。

スクレーパーとして分類した296は、粘板岩の横長剥片を素材とする。湾曲した剥片の下端部に、浅い剥離を施して刃部を作り出す。注目されるのは、表面と裏面に観察される擦痕の存在とその位置である。通常、刃部付近に観察される擦痕は、使用の結果生じたものとして理解される。ところが、表面では素材剥片の中央下部と両側端部に、裏面では中央部に擦痕が観察され、使用に伴うものとして理解できない部分に位置している。擦痕の位置から、このスクレーパーにはスリットを持った柄が装着されていた可能性が指摘され、擦痕はスリットに密着させるために器面を磨いた研磨痕だと推定される。

エ 石斧

欠損品を含めて、10点の資料が出土した。石材としては、緻密な粒子の青灰色を呈する砂岩と粘板岩が見られる。大きさや刃部形態は多様である。

扁平な石斧が目立ち、分厚い刃部を持った石斧は見られない。伐採具として捉え得るもの

は297・301・302・306の4点で、他はいずれも加工工具と推定される。

298は湾曲した刃部を持つ片刃の磨製石斧である。一般的に「丸のみ形石斧」と呼ばれる石斧に見られる裏面が窪むような加工は施されていない。

301～306の石斧素材には自然礫が用いられており、形態の多様性の要因のひとつとなっている。これらは全体的な加工を要しない扁平な自然礫を、石斧素材として選択した結果、素材の形状をほとんど残したままの製品となっている。多様な中にも、301と302、303と304という類似する石斧が存在することから、素材礫の選択にあたっては、ある程度の規格を念頭においていたことが示されている。自然礫を素材とする石斧は、表面の風化が著しいために明瞭な研磨痕を観察できる資料は少ない。刃部形態には片刃と両刃が見られるが、刃部付近を中心に研磨した局部磨製石斧であると思われる。

298・300・301・303・304・306は側面に抉りを持つ。抉りは基端部に近い両側面に剥離や敲打、あるいは敲打後の研磨によって作出される。これらの抉りは斧身を柄に装着するための加工だと思われる。小型石斧の303・304では、石斧の中心寄りの両側面に敲打によって抉りが作出され、柄を装着した加工工具と考えられる。

オ 剥片・石核

剥片・石核は、粘板岩やシルト質頁岩を使用した小型のものと、砂岩を使用した大型のものに大別できる。

粘板岩の剥片とシルト質頁岩の剥片は石鎚（291・292・293）やスクレーパー（296）といった小型剥片石器の素材として用いられている。粘板岩の石核は出土していないが、剥片資料からは、単一の打面から打点を左右に移動しながら、連続した剥片剥離作業を行い、横長の剥片を剥離したものと推定される。シルト質頁岩で注意されるのは、縦長剥片資料313の存在である。頭部は折断されているが、旧石器時代の刃器に相似する形状で、表面に残された2枚の剥離面と腹面である主要剥離面は、同一の方向からの加激によって形成されている。残念ながら、剥片資料はこの1点だけで、石核も出土していないため、この種の剥片剥離技術が普遍的に存在していたかどうかは明確にし得ない。シルト質頁岩の石核は314の1点だけである。打点を移動しながら、周縁部から求心的な剥片剥離作業を行い、不定型の剥片を剥離した状況が見られる。不定型剥片は石鎚の素材となったものと思われる。

鉄石英の剥片や石核は出土していない。製品である石鎚だけが2点（290・291）出土していることをどのように解釈するか問題である。島外を含めた遺跡外からの搬入品という解釈も可能だが、根拠となる材料に乏しく、現時点では判断が困難である。

砂岩の剥片・石核はその母岩の石質と形状により、さらにふたつに分けられる。ひとつは露頭から採取されたと思われる軟質の砂岩を母岩とするものであり、もうひとつは川原あるいは河口付近で採取されたと思われる硬質の砂岩円礫を母岩とするものである。

軟質の砂岩を母岩とする石核は出土していないが、剥片資料としては326・327・329・331が挙げられる。これらの剥片は平坦な節理面を打面とする石核から剥離されたものである。二次的な加工の痕跡が認められるものも存在するが、同種の剥片を使用し、機能を想定できる定型的な石器は出土していない。なお、これらは石斧に使用された砂岩とは明らかに石質

が異なっている。

硬質の砂岩を母岩とする石核は2点（333・334）出土している。剥片（315～318・320～324・328）には、打面と背面に自然面を残す資料が多く見られ、自然の平坦面を打面とする石核から剝離された状況を示している。石核334では自然面を打面として、周縁部から求心的な剥片剝離作業を行なわれ、剥片資料の有り様と整合している。本文中でも述べたとおり、剥片の周縁部や下縁部は鋭角であるが、石質が粗いため使用痕の有無は明確でない。

硬質砂岩の自然礫を素材とする石核から、自然面を打面として剥片を剝離する例は種子島では後期の遺跡でも知られている。西之表市浅川牧遺跡¹⁵⁾では、市来式土器とともに同種の石核や剥片が出土している。砂岩剥片は粗い剝離により刃部を作出されたスクレーパーとして利用されている。このことから、身近な硬質砂岩の礫を利用した剥片剝離技術は、種子島では縄文時代全般を通じて存在していたものと思われる。

カ 石皿

石皿の素材獲得に際して熱破碎を利用した可能性は本文中に記したとおりである。先に触れた後期の浅川牧遺跡では、扁平で棱線が丸みを帯びた硬質砂岩の転石を石皿の素材とするものが多く見られ、草創期と後期では素材獲得方法が異なっていることが注意されよう。本遺跡の石皿は、使用面の深みが顕著でないことから、一枚の石皿の上で作業が行われたのは、さほど長い時間ではなかったと思われる。かなりの重量を持つ石皿は、人間の移動の都度持ち運ばれたものと考えられにくことから、定住生活を想定する指標遺物のひとつとされている。本例のような使用面の溝みが浅い石皿からはふたつの解釈が可能である。ひとつは周年の生活がこの地で行なわれていたが、極めて短かい年数しかこの地に住まなかつたという捉え方である。もうひとつはこの地が季節的なキャンプ地として、ある一定の年数回帰的に利用されたという捉え方である。現段階では、石皿の使用面だけからの判断は困難といえよう。

キ 棒状敲石・板状敲石・磨石

棒状敲石・板状敲石には、敲打痕の観察される部位にいくつかの相違が見られ、その用途も異なっていたものと思われる。粉碎用の敲石、敲打器、石器製作のハンマーストーン、石器製作のパンチ等の機能が想定される。363・366の側縁部に見られる引っ搔いたような横方向の短条痕は注意されよう。

磨石は多く出土しているが、使用による磨滅はさほど激しくない。そんな中で、片面に二枚の顕著な使用面を持つ1d類（384・385）は注目される。

ク ベットストーン（愛玩石）

出土遺物中に人為的な加工が施されない黄灰色～淡黄褐色の小礫が5点含まれていた。石材は石英質の玉髓と思われる。他に黒色の頁岩質のものが2点見られ、こちらはおそらく人為的な加工により整形されたものであろう。

旧石器時代や縄文時代の遺跡から出土した遺物中には玉髓を素材とする石器が存在する例があるが、本遺跡ではその種の石器は出土していない。また、ここで取り挙げた資料はいずれも剥片石器の石核とするほどの大きさも備えていない。したがって、玉髓の小礫は実用的な目的以外の意図によって遺跡内に持ち込まれたものといえよう。頁岩質の2点にも想定で

きる機能が存在しない。球状あるいは楕円形状に美しく加工し、保持することに意味があつたのであろう。これまでこの種の遺物について触れた報告書を見たことがないので、出土例があつても單なる砾とされてしまったのであろうか。ペットストーンという用語は小林達雄氏のご教示によるが愛玩石という訳が正しかったのかどうかという疑問もある。いずれにしても、今後の発掘調査で注意されるべき遺物であろう。

(3) 遺跡内における時期差

① 遺構

切り合ひを伴う遺構は検出されていない。集石と土坑が検出されたが、時期差を想定できるような分布の偏在性は認められない。

② 遺物

ア 土器

類別した各類土器の分布状況に時期差を想定できる偏在性は認められない。したがって、分布状況を時期差の判定の手がかりとすることは困難である。ただし、胴部に短い隆帯を貼付する4類だけはC-8区にまとまって出土し、他類の土器とは異なる分布状況を示している。隆帯の貼付方法や分布状況から他類の土器とは時期差があるものと思われるが、その後関係については判断し得ない。

先に述べてきたことからわかるように、1類（貝殻施文）と2類（指頭施文）の間には、器面調整を含めた土器製作手法、隆帯の貼付方法、貼付部位、器形に大きな変化は見られないことから、施文具の差は明確な新旧の時期差を判断する指標とはなしえない。しかし、身体に付属する施文具である指頭以外に、身体に付属しない貝殻という施文専用の新しい工具が出現したことは事実である。

また、同一個体に複数の施文具を用いる8類は、1類と2類が同時併存していたことを窺わせる資料として注目される。8類の出土遺物量が少ないという点から見て、これを施文具の移行時期の資料として捉えることは妥当ではないだろう。

したがって、本遺跡においては1類と2類はほぼ同時期の遺物として捉えられるが、1類は2類より後出した土器として位置付けられよう。

隆帯文土器の条数の変化は、間隔をおいた多条（口縁部多条・胴部多条）→条数の減少を伴う密接した多条（口縁部多条・胴部1条？）→口縁部隆帯の一帯化（やや幅広の口縁部隆帯への文様集中・胴部隆帯の消失）→口縁部隆帯の消失という大まかな変遷がたどると考えられる。このような流れを考慮すると、密接した隆帯を貼付する一群（1b類のうち25～34・2c類・3b類）は、同じ類の中でも新しい段階の土器と考えられよう。

資料数の少ない5類～7類については時期差の有無の判断はできない。無文の9類のうち、直線的に口縁部が開く器形である240は、新しい時期に位置付けられよう。

イ 石器

資料数が少なく、時期差の有無を検討することは不可能である。したがって、石器は同一時期の所産と捉えている。打製石錐と磨製石錐も製作技法は異なるものの同一時期の資料と

考えられる。

(4) 繙年の位置付け

隆帶上に貝殻腹線圧痕を施す土器（1類）は大平遺跡で断片的に出土しているに過ぎない。宮崎県宮崎市椎屋形第1遺跡¹⁶⁾では、底部付近の胴部器壁に貝殻殻頂部を押圧した資料が1点出土している。圧痕は隆帶上ではなく、器壁に直接押圧され、横1列に並んでいる。いずれの資料も実見させていただいた。大平遺跡の資料は、施文方法や器面調整から判断して、1類と同じ土器であるという印象を受けた。椎屋形第1遺跡の資料は、器面調整が丁寧で、隆帶上に押圧されないという点で1類土器とは異なっている。

隆帶上に指頭圧痕を施す土器（2類）が出土した鹿児島県の遺跡としては、掃除山遺跡、椿ノ原遺跡、鹿屋市伊敷遺跡¹⁷⁾などが挙げられる。宮崎県ではいくつかの遺跡で出土例はあるものの、資料数としては限られている。

掃除山遺跡の資料と比較すると、底部形態や胴部で屈曲する器形に共通性が見られ、口縁部内面の隆帯（張り出し）、垂下隆帯の類例も存在する。一部が公表された椿ノ原遺跡の資料を見る範囲では、胴部で屈曲する器形に共通性が見られる。

さらに細かく本遺跡の資料と二遺跡の資料を比較すると、いくつかの差異が見られる。

第一は、隆帶の条数の差である。掃除山遺跡の資料では、口縁部隆帯が3条以上となる資料が多く見られる。

第二は、胴部の屈曲度の違いである。掃除山遺跡と椿ノ原遺跡の資料では、胴部の隆帯貼付部分で大きく屈曲するものが見られるのに対し、奥ノ仁田遺跡の資料では胴部の屈曲はそれほど強くなく、緩やかに屈曲するものも見られる。

第三は、底部資料中に占める平底の底部の割合の差である。掃除山遺跡の底部資料には、平底の底部のほかに、かなりの数の丸底・尖底の資料が見られる。一方、奥ノ仁田遺跡では21点の底部資料のうち、1点だけが尖底で残りは平底である。

このように奥ノ仁田遺跡の資料には隆帶条数の減少化、胴部屈曲の緩慢化、底部形態の平底の定着化が見られる。また、1類（貝殻施文）土器の出土や磨製石鎌の共伴など二遺跡に見られない特徴が存在する。以上のような点から奥ノ仁田遺跡は掃除山遺跡や椿ノ原遺跡とはほぼ同時期か若干新しい時期に位置付けられるものと考える。

(5) 今後の課題

① 生業

狩猟具である石鎌に比較して、植物性食料の調理加工工具と思われる石皿や磨石類が卓越していることは、先述したとおりである。東黒土田遺跡では植物性食料であるドングリを貯蔵したピットが検出されており、草創期の生業の一端が窺える。奥ノ仁田遺跡では成し得なかつたが、今後のこの時期の発掘調査では、土壤中の花粉分析などにより古環境を復元することが、生業を探る手がかりとなろう。

また、草創期段階で南九州に出現したとされる煙道付炉穴内の土壤の科学的分析によって、

その機能や調理された食物の種類も推測されるかも知れない。舟形（おる円形）配石炉についても同様なことがいえよう。

東日本の生業が、サケ・マスの捕獲に重点が置かれていたとされるのに対して、南九州では生業の重点がいまひとつはっきりしない。南九州の草創期の様相を明らかにするためには、土器・石器や遺構などのような表象的な事物にとどまらず、今後は周辺科学を援用したデータの提示が不可欠なものとなろう。

② 土器

草創期遺跡の発掘例が増えている中で、これほど多量の貝殻施文土器が出土したのは初めてのことである。先述したように大平遺跡の資料は本遺跡の資料と同一のものと考えられ、深い関連性が窺えるものの、断片的な出土で、資料中の主体とはなっていない。現時点では貝殻施文の隆帶文土器は種子島に発達した地域性の強い土器であると考えざるを得ない。

奥ノ仁田遺跡の1類土器の特徴である、①貝殻施文、②底部の平底の安定化、③磨製石鎌の共伴という観点から見れば、隆帶文土器の中で最も新しい段階とされる鹿児島県指宿市岩本遺跡¹⁰⁾の隆帶を持つ岩本式（タイプ）土器の一群と非常に近いものといえよう。しかし、1類土器と岩本遺跡の資料間には器形や器面調整の差異が大きいため、両者を直接結びつけることは困難といえよう。また、岩本段階よりひとつ古いとされる宮崎県宮崎市堂地西遺跡¹¹⁾の爪形施文土器への変遷系列の中に貝殻施文の土器を組み込むことも困難である。貝殻施文の土器は大平遺跡と椎屋形第1遺跡の資料に断片的に見出だせるものの、その後に展開されるといわれる爪形施文土器の段階では、貝殻は施文具としてはおろか器面調整具としてですら使用されなくなるのである。

爪形施文の段階で断絶した貝殻の使用が、いかなる経緯で岩本式（タイプ）の段階で再び施文具として登場するのかという問題がある。この問題の解決のために、さらに新しい資料の出現が待たれる。

4類土器は分布状況や隆帶の貼付方法に他類土器とは差異が見られ、今後検討をする資料である。

器形に着目すると、口縁部を外側に拡張し、平坦面を形成する資料は8d類218、9b類242～244にも見られ、口縁部が内湾するという類似性も指摘される。

胴部に貼付された短隆帯からは豆粒文土器が連想される。南九州で豆粒文土器として報告された資料は鹿児島県吹上町塚ノ越遺跡¹²⁾の断片的な資料だけであり、南九州における豆粒文土器の存在そのものにも疑問が残る。4類土器の胴部に貼付されたのは短いとはいっても隆帶であり、豆粒文土器との関連はますなさそうである。

4類の口縁部隆帯下部の爪痕を文様として捉えていないことは再三述べてきた。掃除山遺跡の資料中にも隆帯下部に爪痕が認められる資料が存在することが報告されている¹³⁾が、この種の爪痕は、隆帶あるいは凸帯を有するあらゆる時期のあらゆる地域の土器に見出だし得る可能性がある。つまり、指で挟むような隆帯（凸帯）貼付作業を行なえば、意識しなくとも隆帯の上下に偶然に爪痕が押圧されることは十分起こり得ると考えられる。したがって、爪痕があることをもって、同一の系統とはなし得ないのであるまいか。しかも、掃除山資

料は、文様とされる爪痕の規則性の有無すら確認できない小破片資料であり、「つまみ技法」を伴う本州型式の土器と関連付けるのは難しいと考える。

現段階では、4類土器は隆帯文土器という大枠の中で、施文されない隆帯文土器の一群として大きく捉えることが妥当であろう。その出自や展開について論ずるには資料の蓄積が必要とされる。

③ 石器

縄文時代を代表する石器の器種がほぼ出揃っているなかで、石匙だけが出土していない。ほぼ同時期と捉えた掃除山遺跡の資料の中にも見られない。草創期の石匙は隆帯文土器の最終段階とされる岩本式（タイプ）の時期に1点報告されているだけである。奥ノ仁田段階や掃除山段階では器種として確立しておらず、スクレーパー類の使用にとどまっていたと考えられようか。

打製石鎌は、これまで出土している草創期の石鎌の形態内に納まる。ところが、磨製石鎌の形態は岩本式（タイプ）段階の資料に非常に類似している。土器の型式変遷においては、二遺跡間ではある程度の時期差が考えられるのに対して、磨製石鎌の形態においてはさほど時期差を感じることができない。また、これまでのところ貝殻施文の隆帯文土器にのみ共伴するという点も気になる。

石斧は全磨製に近い資料も見られるが、自然礫の一端に刃部を設けた局部磨製石斧が主である。ほぼ同時期と考えられる桙ノ原遺跡の資料を実見し、全磨製に近い資料が多いという印象を受けた。石斧製作技術の差というより、石斧素材の選択の差として捉えるべきかも知れない。打製石斧が存在しないのも、石斧素材選択にあたって石斧に向いた形態の自然礫を素材として選択した結果であろう。桙ノ原遺跡で層位的な発掘により注目された丸ノミ形石斧に類似する石斧が1点だけ出土している。桙ノ原遺跡での出土を契機に、各地で表面採集されていた同種の石斧が再評価されることとなった。この種の石斧が南方圏に広く分布する円筒形の丸ノミ形石斧と関連するという説もあるが、時期的な検証や用途の検証が必要とされるだろう。現段階では、旧石器時代の遺物に散見される片刃の局部磨製石斧からの展開という流れの中で捉えた方が理解できるのではないだろうか。

南九州では、鹿児島県鹿児島市加治屋園遺跡²²・横井竹ノ山遺跡²³、熊本県人吉市白鳥平B遺跡²⁴などで土器と石鎌に細石器が伴う例が報告されている。種子島では横峯遺跡の発掘を契機に旧石器文化の存在が注目され、最近では島内で細石器関連の遺物が採集されたという情報もあり、旧石器文化の存在はほぼ確定なものとなったと言える。種子島においては、土器と細石器とが伴う遺跡の有無とその文化の解明が今後の課題とされよう。 （児玉）

2 繩文時代早期

奥ノ仁田遺跡の第IV層はアカホヤ火山灰層の直下層でありその出土遺物から縄文時代早期に相当する。

(1) 遺構

遺構としては住居ではなく、集石遺構が4基検出されたのみであった。礫はかなり散乱している。IV層はアカホヤ火山灰にバックされているので早期の長い期間の内に、自然にもしくは人為的に擾乱されていると考えられる。

(2) 遺物

① 土器

土器は大きく7類に分類される。これからどの様に理解されるか検討してみる。

1類は出土点数が最も多い。口縁部が開く、円筒形平底土器である。赤茶褐色を呈し、工具を使用しナデまたはミガキを施して丁寧な調整をおこなうが、底部付近で荒い削りもみられる。口縁外部に貝殻条痕文、または胴部に沈線文がみられる。施文法で細分した。

ここで1a・b類とした、口縁付近に二条の貝殻条痕文をもつ類例は、熊本県に出土例が多いとされている。鹿児島県では、栗野町花ノ木遺跡の「貝殻条痕文土器」、横川町中尾田遺跡の「IIa類」、溝辺町石峰遺跡の「円筒形条痕文土器」などがあるが、胴部の形態、条痕の幅、口唇部の刻み、調整法、色調など異なる属性も多く、系譜などについてはまだ検討しなければならない課題である。

1c類は全容ははっきりしない。これは胴部に斜方向または横方向に沈線を施すものであるが、この類例には本県鹿屋市の飯盛ヶ岡遺跡の「IX類土器」の一部がある。飯盛ヶ岡遺跡ではこれを苦浜式土器としているが、種子島の横峯遺跡や奥嵐遺跡の苦浜式にみられるようなもろい胎土ではない。

また、同じ種子島の下剣峯遺跡で出土した「IIa類」土器すなわち「桑ノ丸式土器」も同様の施紋をするが紋様の範囲が大きく異なる。これもまた類例の増加を待ちたい。

2類はやや多く出土しているが、底部が不明である。胴部から口縁部にかけて丸みをもちながら直立する形態で、外面に平行と鋸歯状の沈線で紋様が構成される。これは鹿屋市飯盛ヶ岡遺跡の「IX類土器」の中に類似のものをみることができるが、これは擬位の刻目突帯もち、先述したとおり苦浜式土器としている。また、胴部紋様は下剣峯遺跡「IIa類」すなわち「桑ノ丸式丸」とも類似が認められる。しかし、口唇部の刻みが桑ノ丸式にはみられないし、調整法も大きく異なる。

3類は胴部のみである。紋様が刻目突帯・凹線によって構成されるものである。刻目突帯は横方向と斜方向につけられ、その間に凹線が斜方向に施される。発掘調査中は早期後葉に位置づけられている平底式土器としてきたが、結束縄文がみられない。この種の土器は熊本県天道ヶ尾遺跡に類似したものをみることができる。

4~6類は破片で部分属性しかわからないが、いずれもこれまで苦浜式として考えられてきたものに類例をみることができる。

4類は口縁部で、波状口縁をなし、口唇部に刻みを施すもので、外面の条痕も特徴的である。5類は胴部のみで、横方向の突帯と沈線によって紋様が構成されるものである。6類は胴部のみで、縦方向に微隆突帯をもち、内面に削りを施すものである。

7類は脣部のみで、外面に縦方向の明瞭な条痕、内面に横方向の明確な条痕を施すものである。

以上のように、1・2類は共に位置づけが困難な類である。3類は「天道ヶ尾式」、4~6類は苦浜式に位置づけられる。7類は破片で全容が不明である。

以前、種子・屋久島の縄文早期土器については新東晃一氏によって検討されている²¹。新東氏の研究によれば「桑ノ式丸」は縄文時代早期中葉末、苦浜式は前期初頭に位置づけられている。また「天道ヶ尾式」は手向山式と平脩式の中間に位置する型式であるとされる。苦浜式土器は、從来轟式土器系の土器として縄文時代前期に位置づけられていた²²が、南種子町横峯遺跡の調査の結果、この型式の土器がアカホヤ火山灰直下から出土することが判明し、その年代的位置づけの再検討がなされている²³。現在では早期末に位置づけられている。

これらの土器は出土状況から、すなわち層位やレベル、分布状況から差異をみいだすのは困難であった。この種の土器研究はさらに進めていかなくてはならない課題であろう。

1・2類の位置づけによっては大きく異なるが、土器から縄文早期中葉（末）～後葉（初）と後葉（末）の2時期があると思われる。これは集石の出土層位からも窺える。

遺跡からは住居跡はみられなかった。調査範囲が限定されていることも原因かもしれないが、南九州の縄文早期遺跡からは遺構は集石だけという個所が多い。これはおそらくあるひとつの集落を核とした露営地であると考えられている。奥ノ仁田遺跡も長期にわたっての露営地であったと推測される。

（中村）

② 石器

器種としては、石鎌、楔形石器、石鎌未製品、石匙、小型剥片類、磨石、石皿、磨石・敲石類が出土した。組成としては石斧を欠いている。

石器の分布状況は土器とほぼ重なるが、土器と同様に遺物量は少ない。土器型式に時期差が見られることから、同一の地に複数の時期にわたる生活が営まれていたと推定される。したがって、それぞれの石器がどの土器型式に伴うものかは不明である。

小型剥片石器の石材には、黒曜石、安山岩、シルト質頁岩、粘板岩が用いられている。黒曜石と安山岩は島外から搬入された石材である。黒曜石には佐賀県腰岳産、大分県姫島産、産地が不明ものの3種類が見られる。腰岳産の黒曜石と姫島産の黒曜石は剥片（523・525）だけの出土で、剥片を利用した製品は出土していない。横峯C遺跡でも縄文早期後半に属する苦浜式土器に伴い、姫島産の黒曜石や安山岩の石匙の出土が報告されており、種子島へはこのころから火成岩に属する石材が供給され始めたものと思われる。

磨石・敲石類と石皿の石材には島内に産出する砂岩が用いられており、草創期の石材使用と同様な傾向である。

石鎌は打製石鎌だけである。粘板岩剥片を素材とする519の製作手法は注目される。素材剥片の厚さが適当でなかったため、表面を研磨することによって、目的の厚さの素材剥片を準備している。

3点出土している石匙の製作手法も注目される。安山岩を素材とする剥片のバルブ部分につまみを、対向する剥片末端に刃部を作出するという統一されたシステムによって製作され、素材剥片を効率的に利用する技術が窺える。

表採資料である磨製石斧（543）は両端に刃部を形成する両頭石斧である。器面に形状調整のため

の剥離面が観察されないので、扁平な碟を素材としたものと思われる。刃部付近は平砥石により調整されるが、器面の大部分と側縁部は棒状の砥石か稜線が丸みを帯びた石の稜線部分で研磨されている。早期の出土遺物に石斧が欠如しているため類例の検討はできない。部分的に幅の狭い砥石によって研磨されたと思われる石斧は草創期の資料にみられる。300の石斧には正面右側縁部に着柄のためと推定される抉りが設けられている。敲打後に幅の狭い砥石で研磨して抉り部分を調整している。表採資料であることから早期の遺物として取り扱ったが、県内の早期の遺物には類例がない資料である。扁平な碟を素材としていると思われることや、幅の狭い砥石を使用することなど本遺跡の草創期の資料との類似点が指摘される。

(児玉)

第2節 奥嵐遺跡

1はじめに

調査箇所は大きく3地点に分かれ、アカホヤ火山灰層を境に上と下それぞれ2枚の包含層が存在したが、遺構はなく、出土遺物の内容、出土のあり方も異なっていた。この地点に関しては散布地として認識され得る。したがってここは遺物について述べ、まとめとしたい。ただし、土器は破片がほとんどで、全容がわからないものが多く、遺物についても困難さを抱えている。

2 IV層（縄文時代早期）

2（1トレンチ）、13～19（3トレンチ）、28～30（6トレンチ）は貝殻条痕文をもつものである。破片数としては多い方である。石坂式土器系のものと思われる。

25～27（6トレンチ）は苦浜式土器に比定されるものある、先述したとおり、種子島では横峯遺跡での出土例が代表的であるが、奥嵐遺跡での出土は少量ながら横峯のあり方と同様である。

1と31は1点のみの出土である。1（1トレンチ）は波状口縁で、口唇部に刻みをもち、外面に沈線を縦横に施すものである。31（6トレンチ）は胴部に沈線文と刺突文を施すものである。

石坂式土器は縄文早期中葉に位置づけられ、苦浜式は早期末に位置づけられている。

3 III層（縄文時代後期・晩期）

3（1トレンチ）は施文はみられないが断面形態から市来式系の土器であると考えられる。形態のみでは市来II式²⁰であるが無文であり、検討を要する。

32（6トレンチ）は従来、市来III式²¹として理解されていたものであるが最近、丸尾式と呼ばれるようになった²²型式の土器に比較される。丸尾式はこれまで宮崎県北部から大隅諸島にかけて分布するとされており、奥嵐遺跡での出土はこれと矛盾しない。

4、5（1トレンチ）、20（3トレンチ）は一済式に比定される。一済式のうち口縁付近に刺突文をめぐらし口唇に刻みをもつもので一済III式とよばれる²³もので、縄文晩期前半に位置づけられると考えられている。

7～9（1トレンチ）、21～24（3トレンチ）は黒色磨研土器である。

7、9、22～24、は深鉢に相当する。6は外部沈線がみられる口縁部で、8は鉢（小）であり従来ない形態である。21も鉢である。これらはおむね黒川式に相当するものと思われる。

10～12（1トレンチ）は底部のみで全容は不明であるが、10、11が後期の土器にみられる形態で

あり、12が晩期の土器にみられる形態である。

以上から、奥嵐遺跡のⅢ層では後期の市来式から丸尾式にかけての一時期と晩期の一漆Ⅲ式から黒川式にかけての一時期の遺跡が存在すると判断される。しかしながら、遺跡の主要部分の調査ではなかったと思われるので、今後の調査に期待したい。

(中村)

《参考文献等》

- 1) 南種子町教育委員会 1993「横峯遺跡」南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 2) 南種子町郷土誌編纂委員会 1987「南種子町郷土誌」南種子町
- 3) 中種子町教育委員会 1989「鷹取遺跡・平松B遺跡・宮田遺跡・小牧野C遺跡」中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 4) 鹿児島市教育委員会 1992「掃除山遺跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 5) 加世田市教育委員会 1994「桜ノ原遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査概報
- 6) 河口貞徳 1957「宮崎県串間市大平遺跡」『日本考古学年報』10
- 7) 串間市教育委員会 1991「三幸ヶ野第2遺跡」串間市文化財調査報告書第5集
- 8) 鹿児島県教育委員会 1981「加栗山遺跡・神ノ木遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 9) 志布志町教育委員会 1984「倉園B遺跡」志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 10) 草野町教育委員会 1994「木場A遺跡2」草野町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 11) 末吉町教育委員会 1994「地藏免遺跡」末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 12) 鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査中
- 13) 瀬戸口望 1981「東黒土田発掘調査報告」『鹿児島考古第15号』鹿児島県考古学会
- 14) 上村純一 1993「鷹爪野遺跡」「南九州における縄文草創期の問題」宮崎考古学会 南九州の縄文草創期を考える会
- 15) 鹿児島県立埋蔵文化財センターが報告書作成中
- 16) 菅付和樹 1993「椎屋形第1遺跡」「南九州における縄文草創期の問題」宮崎考古学会 南九州の縄文草創期を考える会
- 17) 鹿児島県教育委員会1984「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 18) 指宿市教育委員会 1978「岩本遺跡」
- 19) 宮崎県教育委員会 1985「堂地西遺跡」「宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書」第2集
- 20) 吹上町教育委員会 1990「塚ノ越遺跡ほか2遺跡」吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 21) 大冢達朗 1993「縄文文化の起源」『南九州における縄文草創期の問題』宮崎考古学会 南九州の縄文草創期を考える会
- 22) 鹿児島県教育委員会 1981「加治屋園遺跡・木の迫遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 23) 鹿児島市教育委員会 1990「横井竹ノ山遺跡」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 24) 熊本県教育委員会 1994「白鳥平B遺跡」熊本県文化財調査報告第142集
- 25) 新東晃一 1992「島嶼の縄文早期土器の様相」『南九州縄文通信』No.6 南九州縄文研究会
- 26) 盛岡尚孝 1953「中種子町の遺跡について」『鹿児島考古学会紀要』第3号 鹿児島県考古学会
- 27) 堂込秀人 1994「熊毛諸島の縄文早期土器の一型式」『考古学ジャーナル』378 ニューサイエンス社
- 28) 本田道輝 1989「市来・一漆式土器様式」『縄文土器大観』第4巻 小学館
- 29) 前追亮一 1992「異系統土器文化の一接点」『南九州縄文通信』No.6 南九州縄文研究会
- 30) 堂込秀人 1991「一漆式土器の再検討」『南九州縄文通信』No.5 南九州縄文研究会

報告書

鹿児島県教育委員会 1976『花ノ木遺跡』

鹿児島県教育委員会 1978『西免・桺場・山神・曲迫・桑ノ丸遺跡』

鹿児島県教育委員会 1980『石峰遺跡』

鹿児島県教育委員会 1981『中尾田遺跡』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993『飯盛ヶ岡遺跡』

熊本県教育委員会 1990『天道ヶ尾遺跡』

西之表市教育委員会 1978『赤木遺跡・下剝峯遺跡・大四郎遺跡・内和遺跡』

南種子町教育委員会 1993『横峯遺跡』

図 版



奥ノ仁田遺跡 表土除去作業



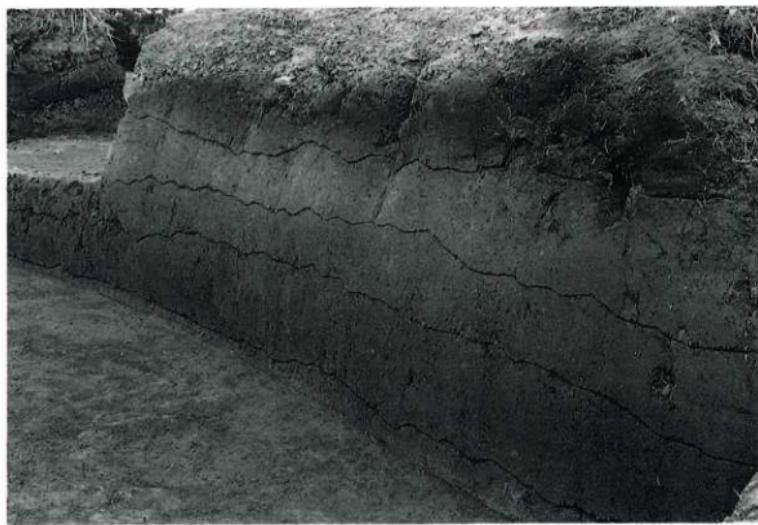
調査風景



調査風景



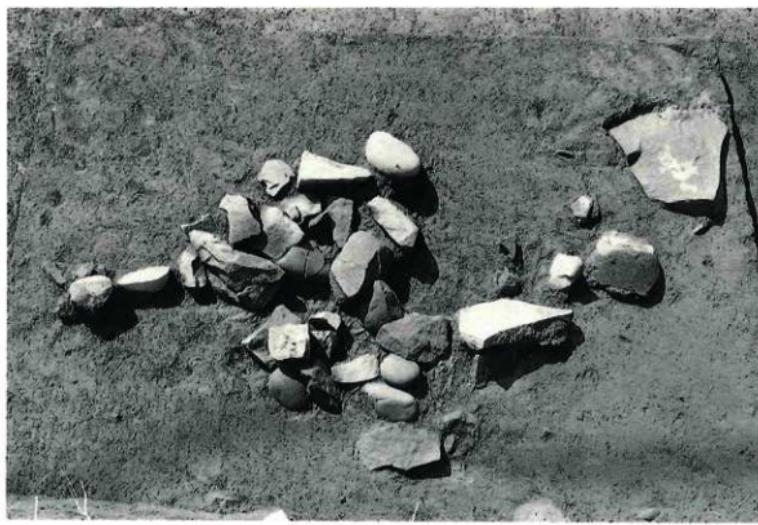
奥崖遺跡 排水作業



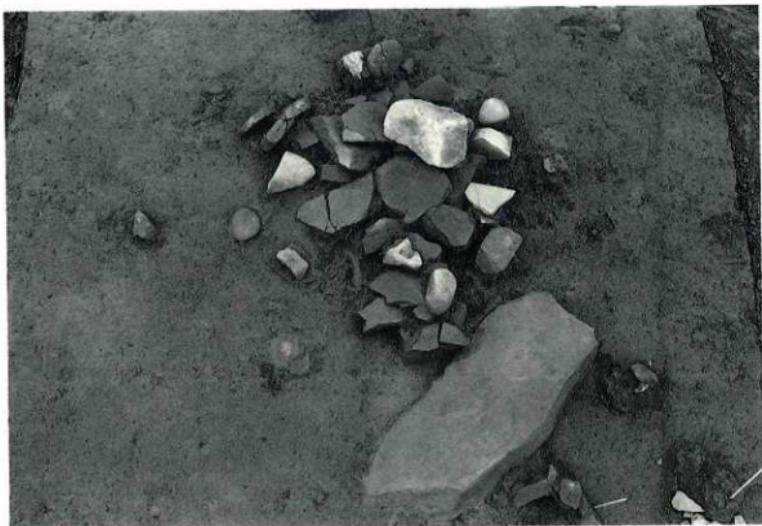
奥ノ仁田遺跡の土層



草创期 2号集石



草创期 4号集石



草創期 5號集石



草創期 7號集石



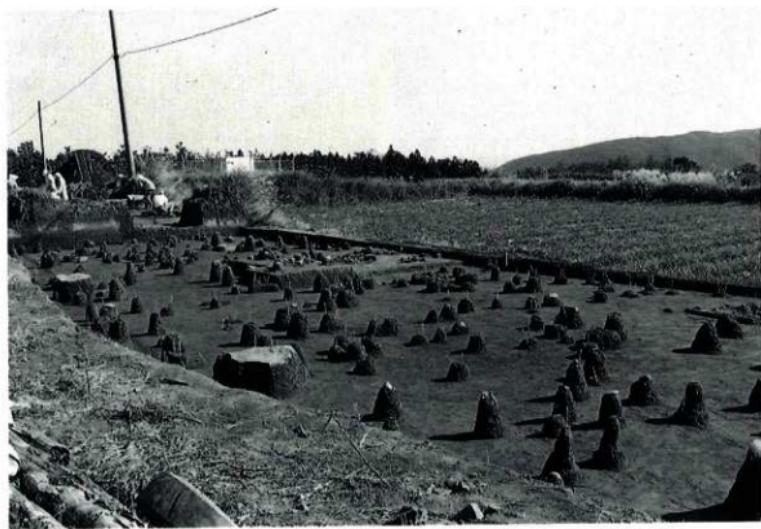
草創期 15号集石



草創期 1号配石



草創期 2号配石



草創期 遺物出土状況（C-10区）



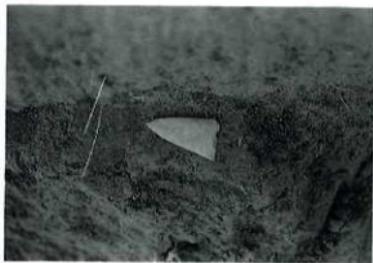
22 出土状况



105 出土状况



167 出土状况



293 出土状况



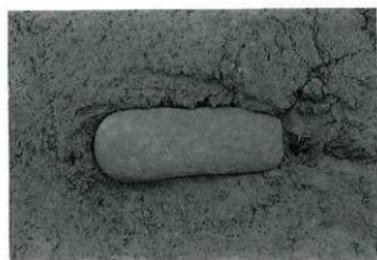
297 出土状况



298 出土状况



301 出土状况



303 出土状况



306 出土状况



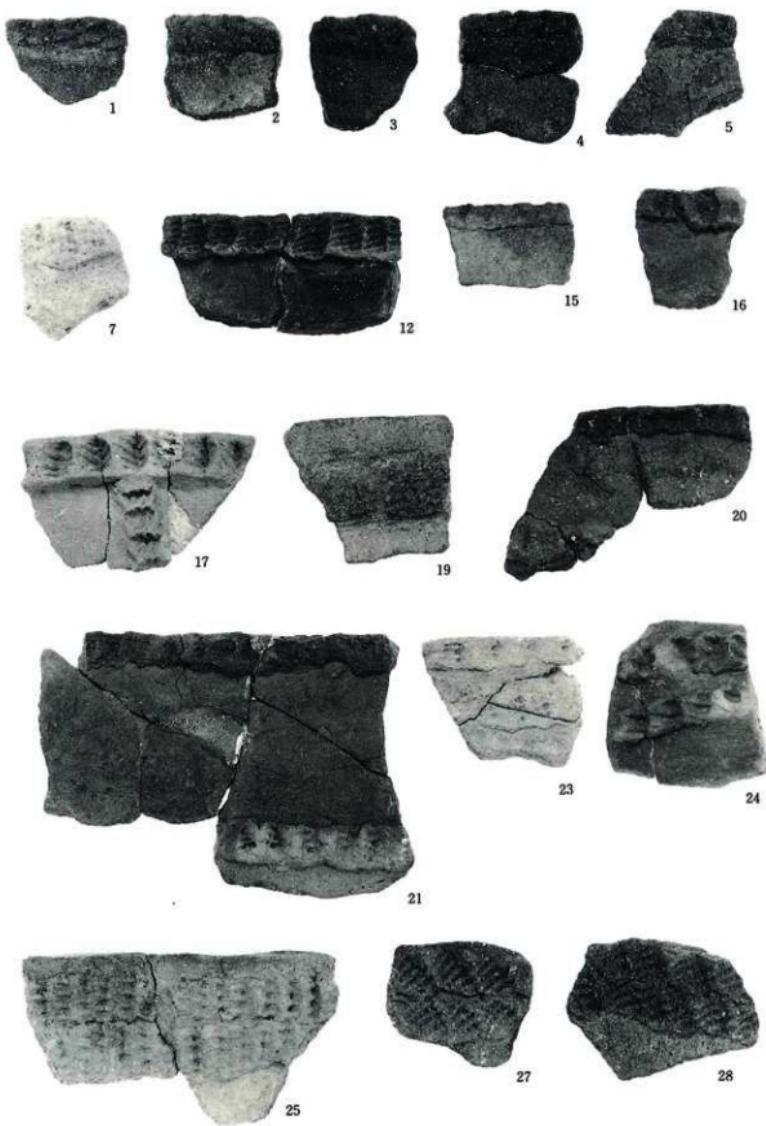
106 (1類)



204 (4類)



205 (4類)



1類土器（1）



1 類土器 (2)



22



49

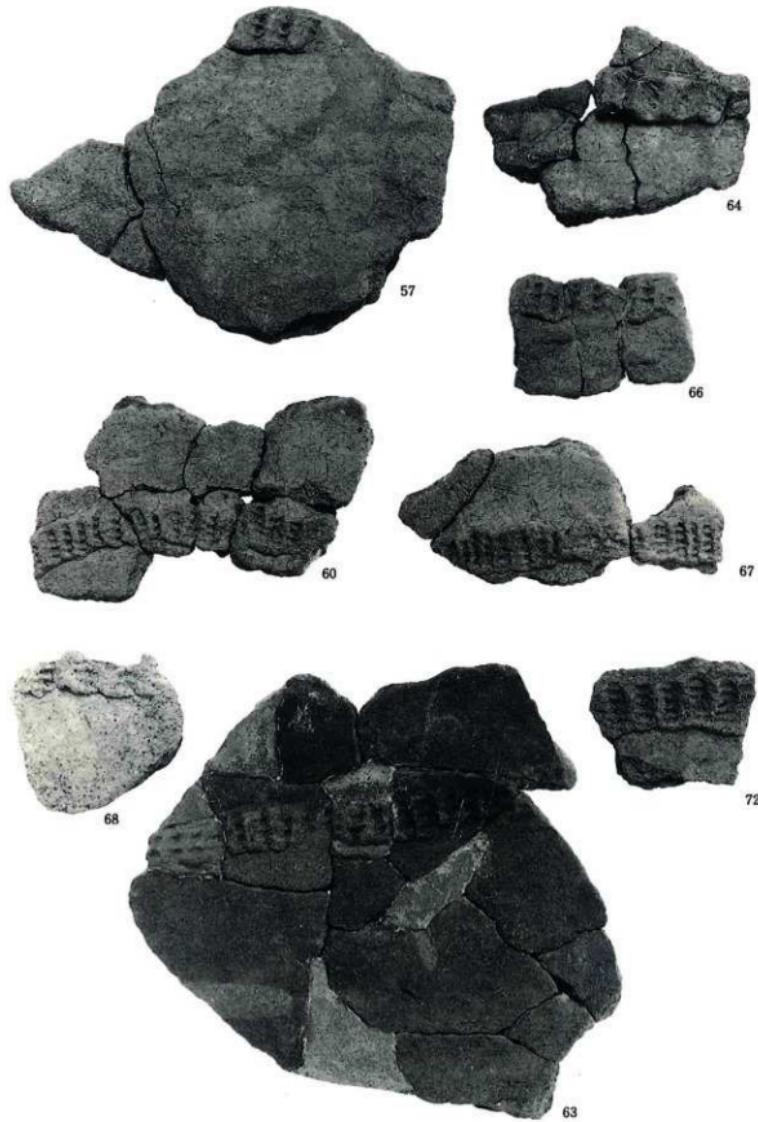


58



59

1類土器（3）



1類土器（4）



77

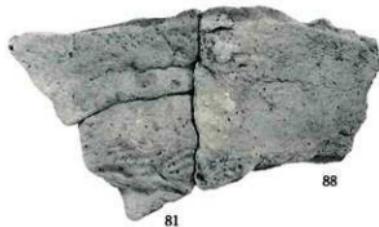
78



80



83



81



84



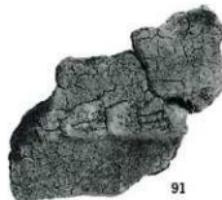
90



87

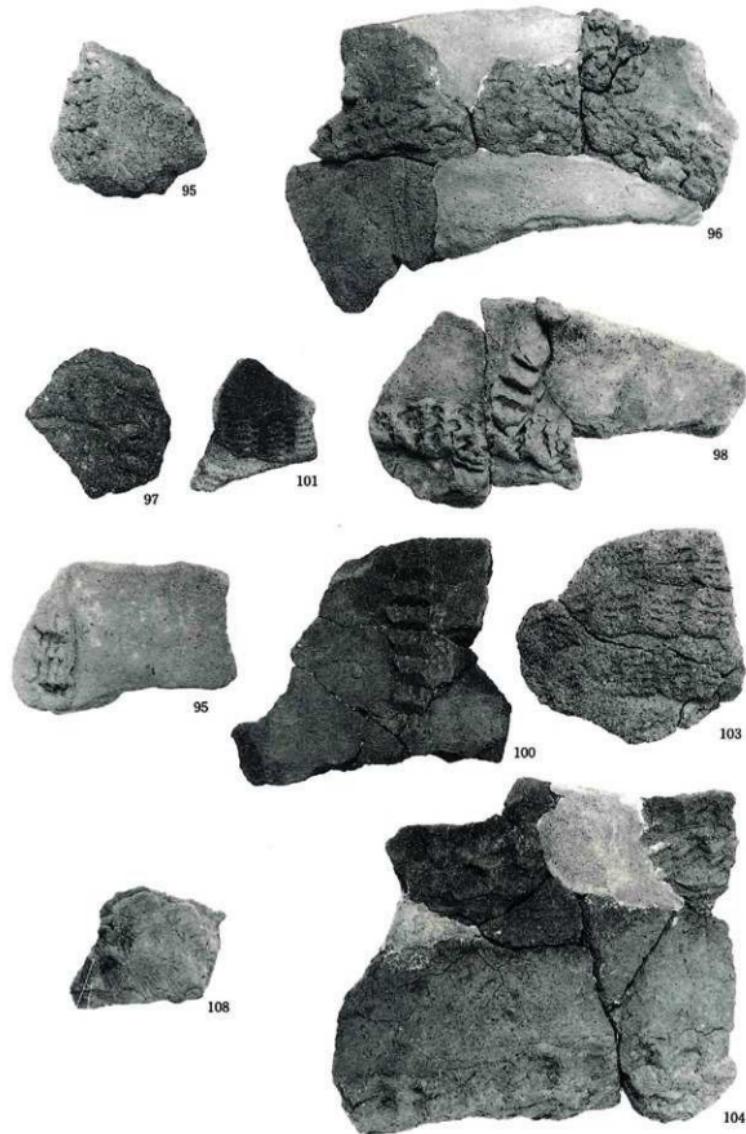


89

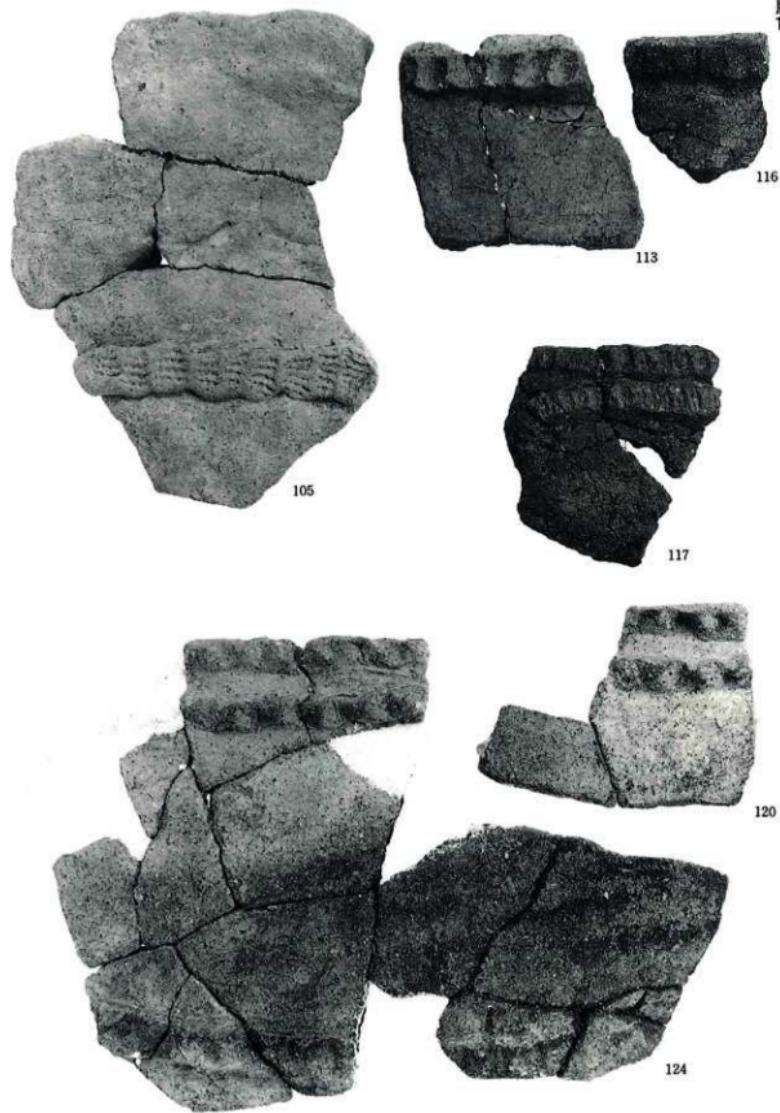


91

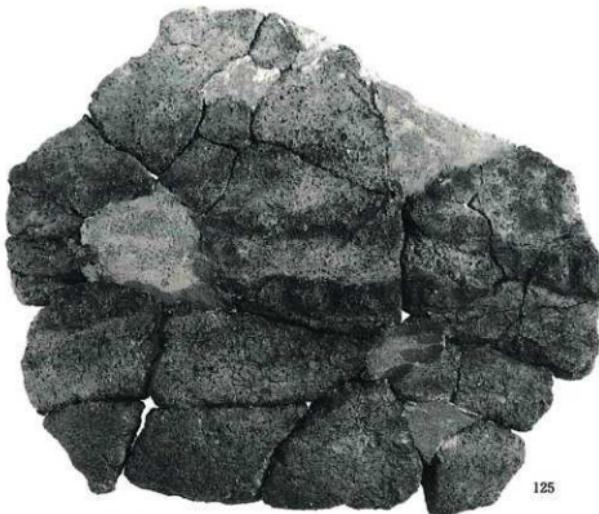
1類土器（5）



1類土器 (6)



1類土器（7）・2類土器（1）



125



129



127



126

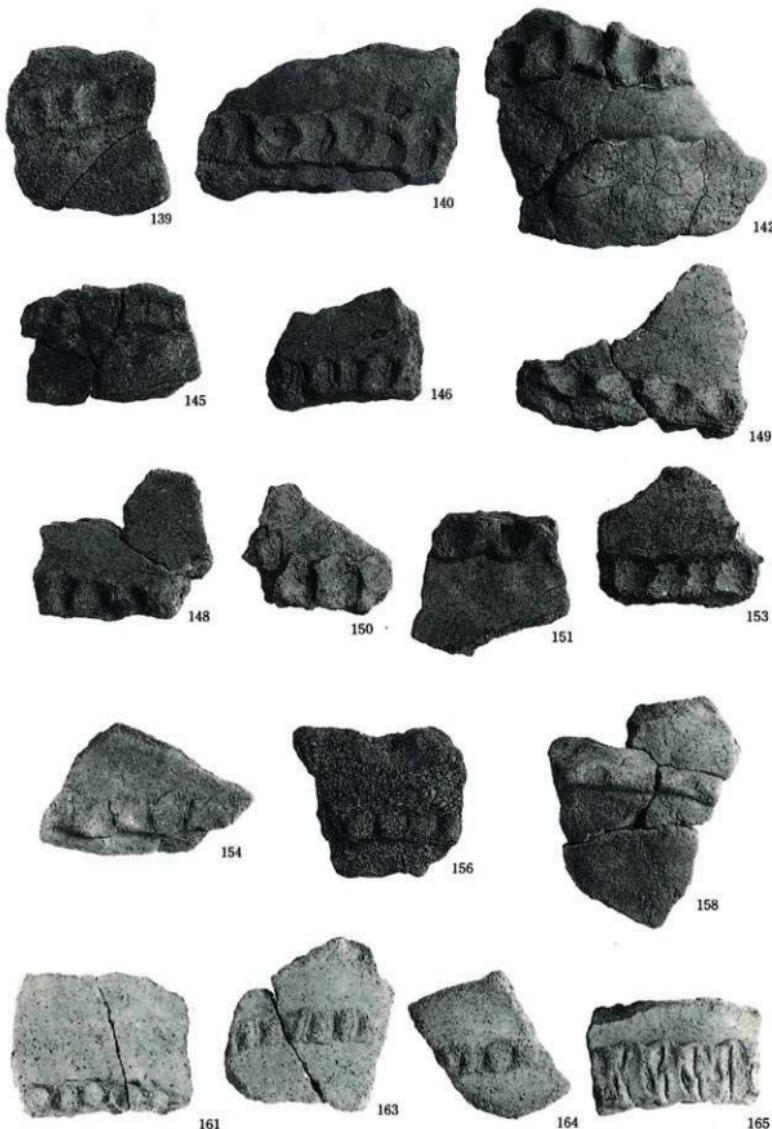


136

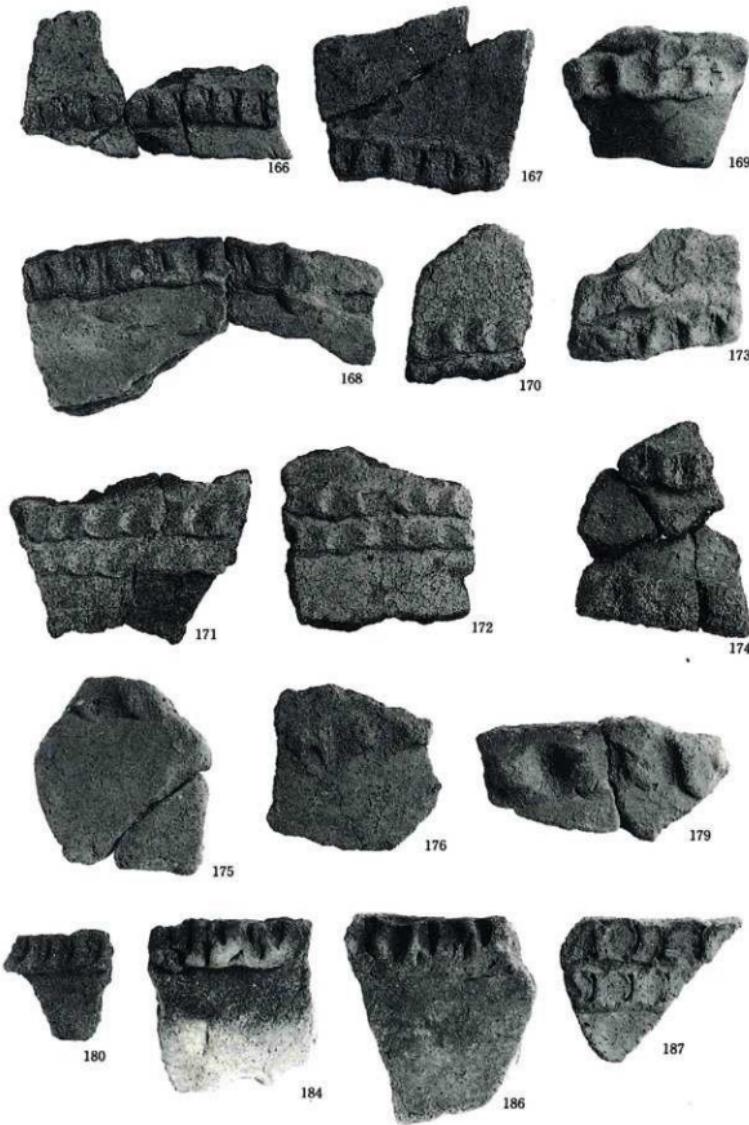


137

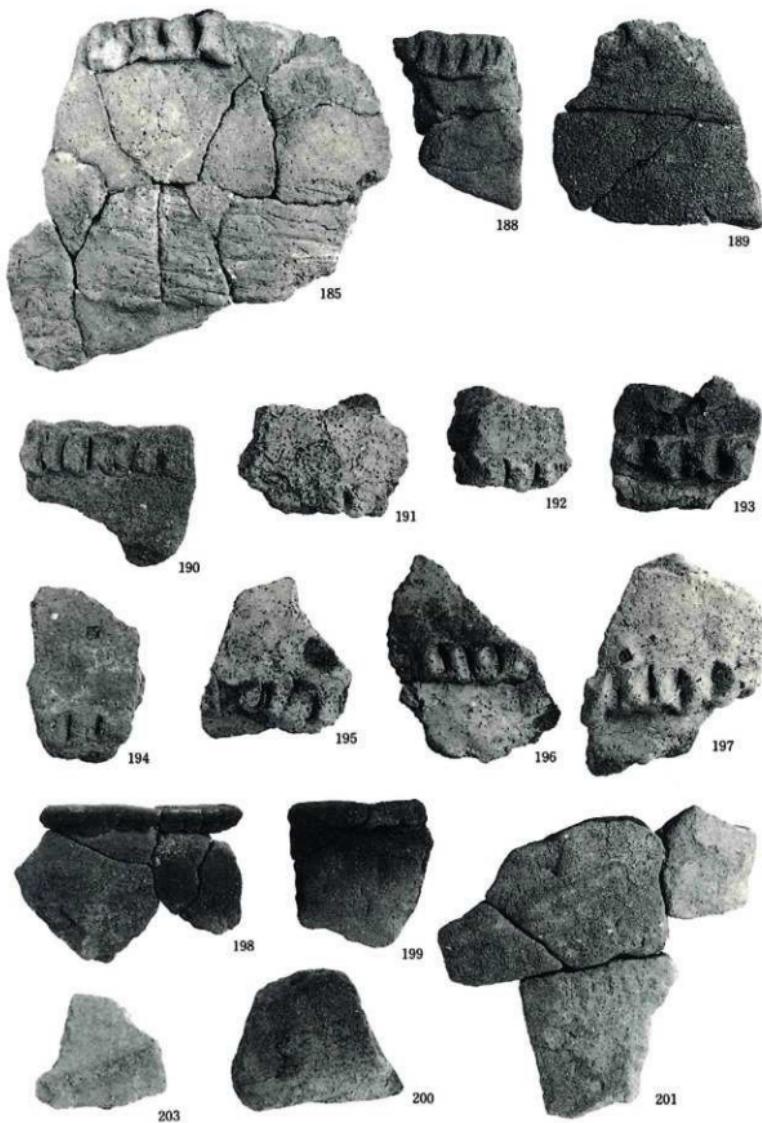
2類土器（2）



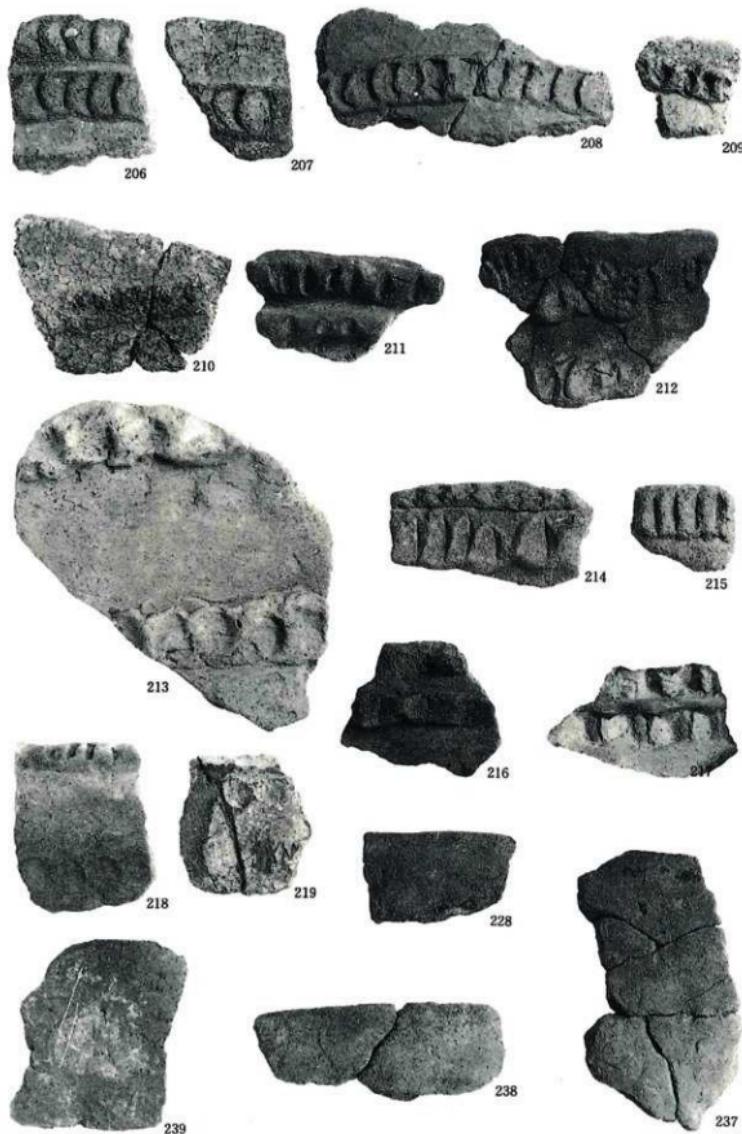
2類土器（3）



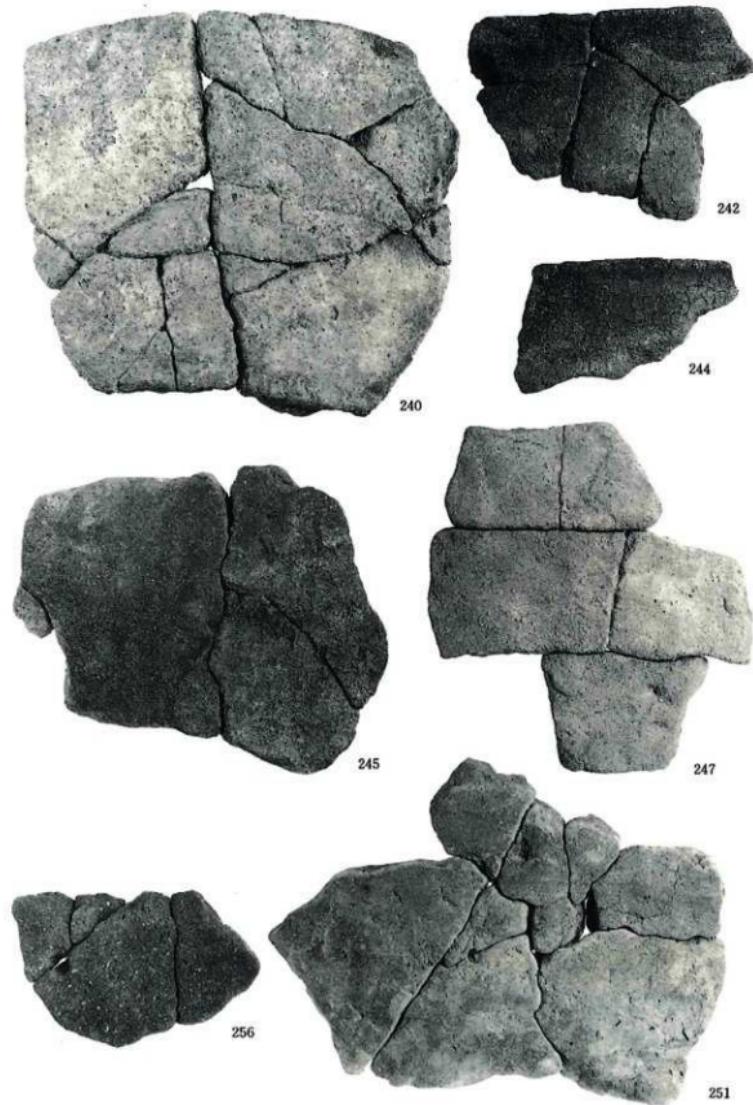
2 類土器 (4) · 3 類土器 (1)



3類土器（2）・4類土器



5 類土器・6 類土器・7 類土器・8 類土器・9 類土器（1）



9類土器（2）・無文の胴部



260



263



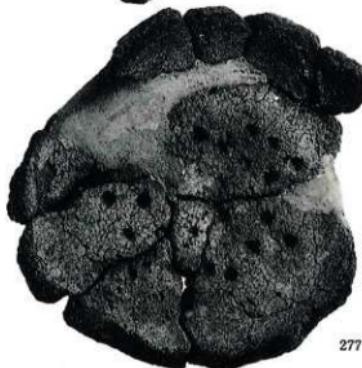
264



265



278



277



269



270



272



276

底 部



107



279

底部



281



282



280



283



284



285



286

浅鉢形土器



290



292



293



294



309



291

295

310



296



313

石錐・スクレーパー



石皿（345）



石皿（345）の使用面



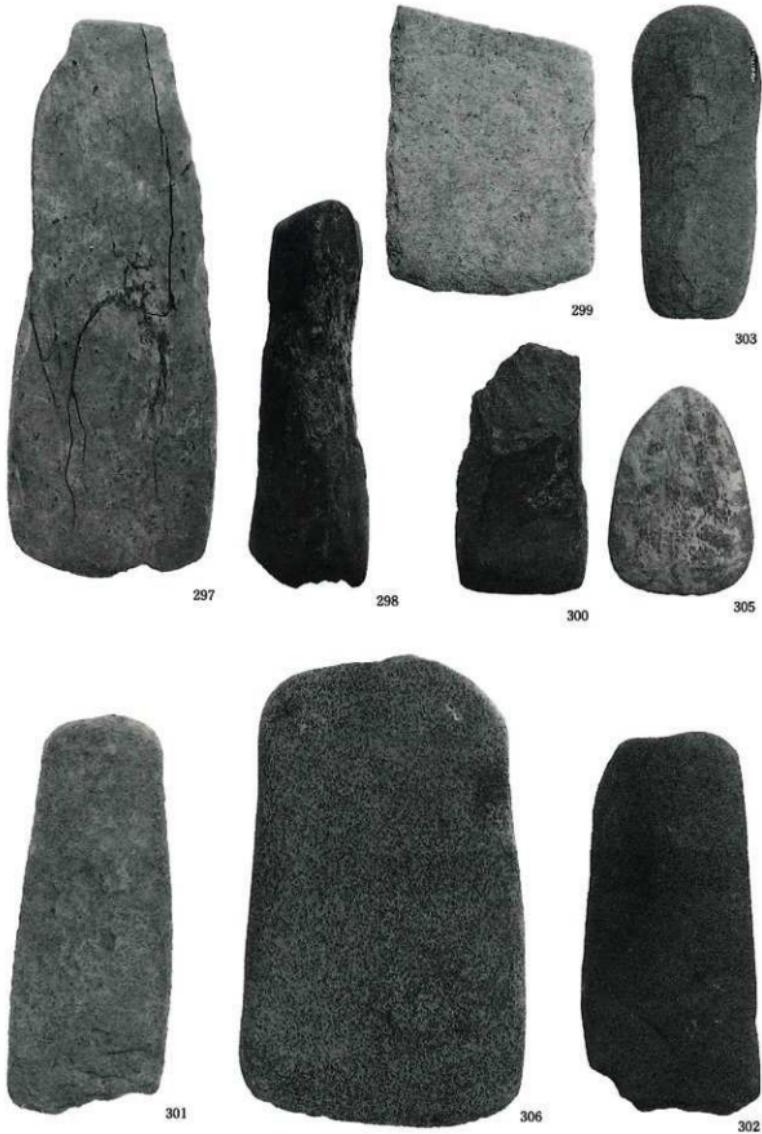
石皿（351）



石皿（351）の使用面



ペットストーン



石 斧



剥片



1類 (12の口縁)



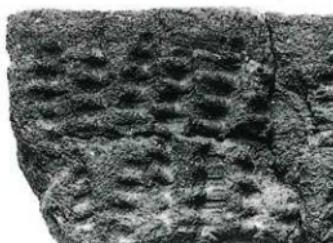
1類 (12の口唇部)



1類 (17)



1類 (22)



1類 (25)



1類 (28)



1類 (34)



1類 (35)

土器施文部の拡大 (1)



1類 (36)



1類 (49)



1類 (54)



1類 (59)



1類 (77)



1類 (78)



1類 (98)

土器施文部の拡大 (2)



1類 (98)の木葉痕



1類 (100)



1類 (106)



1類 (108)



2類 (113)



2類 (124)



2類 (124の爪による条痕)



2類 (136の外面の陸帯)
土器施文部の拡大 (3)



2類 (136の内面の陸帯)



2類 (140)



2類 (160)



2類 (165)



2類 (171)



2類 (179)



3類 (186)



3類 (187)



3類 (197)

土器施文部の拡大 (4)



4類 (204の口縁部)



4類 (204の胸部)



5類 (206)



8類 (212)



8類 (214)



8類 (217)



3類 (818)

土器施文部の拡大 (5)



胸部 (256の補修孔)



底部 (277の内面の刺突)



浅鉢形土器 (285)



洞部 (247の接合部下面)



洞部 (247の接合部上面)



1類 (22の内面調整)



1類 (90の内面の炭化物)



スクレーバー (97の裏面中央の擦痕)



石斧 (98の裏面の研磨痕)



早期土器（465）の出土状況



早期土器（466）の出土状況



早期土器（492）の出土状況



石匙（526）の出土状況



514



515



516



517



518



519



520



521



522



523



524



526

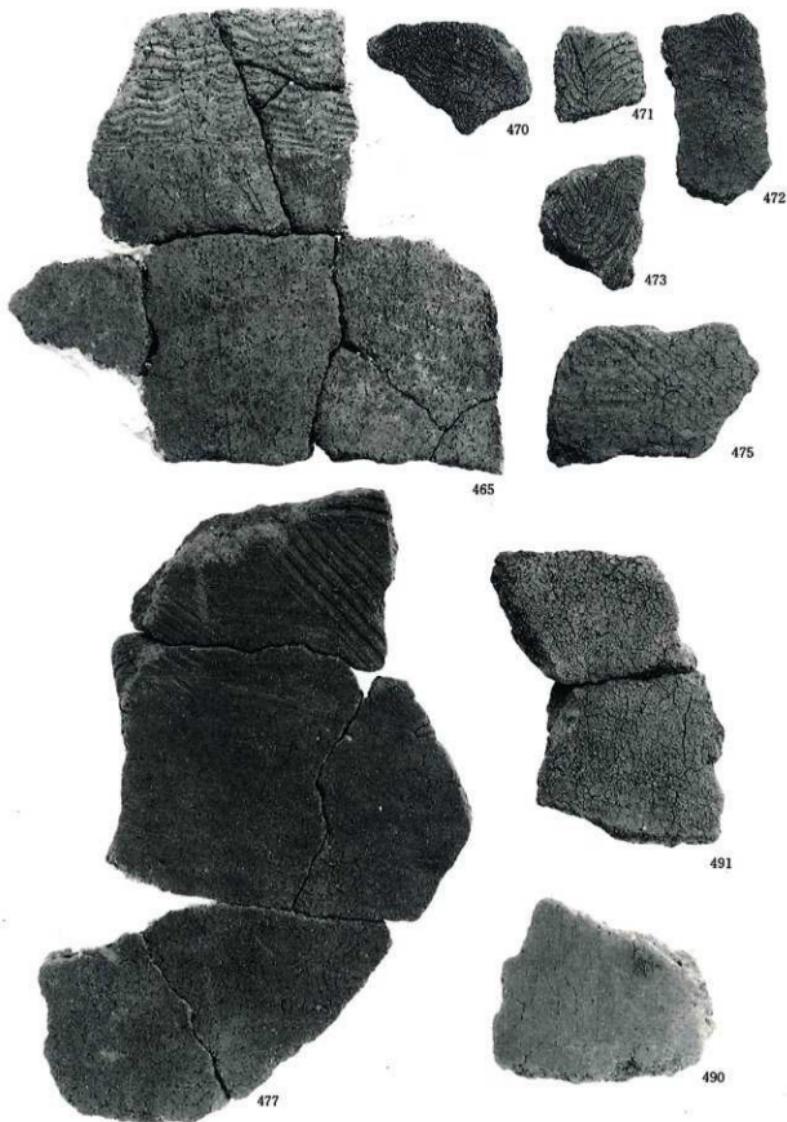


527



528

早期の石器



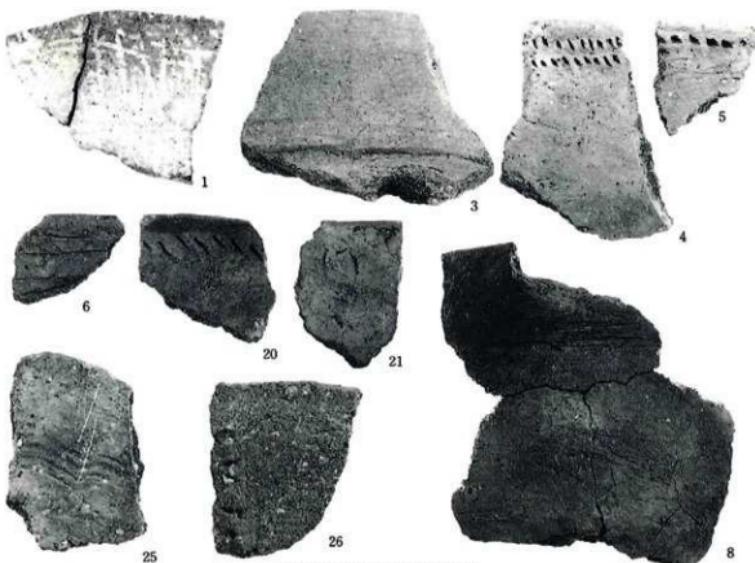
早期の土器（1）



早期の土器（2）・表採石斧



奥崖遺跡 遺物出土状況（全面調査区）

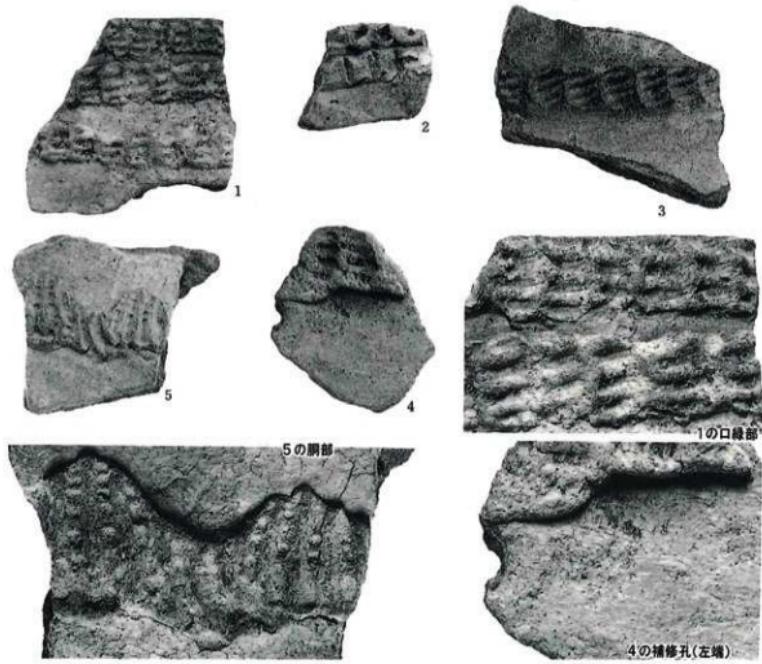


奥崖遺跡の出土遺物（1）



奥嵐遺跡の出土遺物（2）

32



屢久川遺跡の採集資料

あとがき

熊毛諸島以南では草創期遺跡が確認されていないなかで、アカホヤ層の下から出土した縄文晚期の刻み目突帶文土器、あるいは古墳時代の成川式土器を思わせる奇妙な土器群。その半数近くを占める貝殻施文の土器は、瞥見したことのある掃除山遺跡の資料にも見られないもので、遺物の位置付けに困惑したのを思い出す。報告書では可能なかぎり、客観的な報告となるように努めたつもりである。調査者自身未消化の部分が多くあり、資料がどのように評価されるか不安もあるが、本報告書が草創期文化を解明するための一助となることを願いたい。

調査は残暑の9月中旬から晩秋の11月上旬にかけて実施された。9月下旬になると島内のいたるところに芙蓉の花が見られようになる。とりわけ、東海岸の道路沿いには多く自生しており、現場から宿舎までの行き帰りに美しい花を楽しむことができた。芙蓉の一輪の花は、朝開いて夕方にはしぶんてしまう「一日花」である。ところが、一枝にたくさんの蕾を持ち、毎日新しい花が次々と咲くので花期がとても長い花である。日々新たな花を咲かせることによって、毎日変わらない装いができる芙蓉に、一瞬羨望に近い感情を抱いたことが思い出される。

10月中旬からはカライモ（=サツマイモ）の収穫が始まった。現道を発掘調査しているために、澱粉工場の収集車が入ってこれないので、作業員の皆さんとカライモ袋を担いで、車が入る場所まで運ぶという場面もあった。調査区の隣の畑では芋虫が収穫前のカライモの葉を一夜にして骨だらけに食べ尽くし、発掘現場の中にも侵入して来た。芋虫は這い回るだけでなく、集石を実測するために張った水糸にぶら下ったり、油断していると背中にも這い上がって来る。実測の手を休めて、芋虫を観察するとお尻のところに、一本の角が付いているのは同じだが、体の模様や色がそれぞれ異なっていることに気付いた。角や体色は敵を威嚇するためと思われるが、体色の違う芋虫が全部同じ種類の蛾になるのかどうかはとうとうわからずじまいのままだった。

発掘作業員の方々のはとんどが初体験の人たちばかりで、作業の手順や要領を教える苦労はあったが、掘り出した遺物に一喜一憂される様子を見るのがうれしく、またその姿は新鮮に感じられた。そのような作業員さん同士の会話の中で「ゴキ」という言葉が耳に留まった。「ゴキ」とは「茶碗」のこと、「飯ゴキ、汁ゴキ」という使い方をすると聞いた。「ゴキ」は「御器」と書き、「ゴキブリ」の名前の由来となったほど古い言葉である。「御器」を「齧る（かぶる=かじる）」虫が「御器齧り（ごきかぶり）」で、それが縮まって「ゴキブリ」となったといわれている。ゴキブリは人類が誕生するよりも遙か昔に出現し、強靭な生命力と優れた環境適応能力を持っているために現代まで生き残った昆虫だといわれている。当然縄文人にとってもゴキブリは身近な昆虫であったに違いない。もちろん、縄文人が土器を齧る虫を「ドキブリ」などと呼んだはずはないのだが、草創期に発明された土器は後世の様々な種類の器に発展し、「ゴキブリ」という言葉の語源となった「御器」が出現したのである。出土遺物もさることながら、「御器」という古い言葉を耳にし、さまざまな想像を楽しめた印象深い発掘調査であった。

最後に、発掘から報告書作成までの作業に従事された作業員の方々に深く感謝申しあげる。奥風遺跡は調査終了を目前にして、夜中の大雨で水没してしまった。水没した遺跡を前にして、なす術もない調査員のためにカライモ畠から駆け付け、消防ポンプで排水作業をしてくださった武田総吉氏と中村和弘氏には、特に名前を挙げて感謝の意を表したい。

(K)

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）

奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡

発 行 1995年3月

鹿児島県西之表市教育委員会

鹿児島県西之表市西之表7612番地

編 集 鹿児島県立埋蔵文化財センター

印 刷 株式会社 秀巧社印刷

鹿児島市新栄町25-7

☎ 099-257-3300

